
東方幻創録 永人行雲譚

鳥語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻創録 永人行雲譚

【Nコード】

N9957L

【作者名】

鳥語

【あらすじ】

一応人間。けれど、ただの人間ではない。
人を踏み出して、それでも人の境界を外れない。
渡り行き、流れ生き、漂うようにいきている。

遠い過去を抱えながら、今を見つめ、未来を捨てず。
ただ飄々と

訪れ 始まり 事始（前書き）

どうも初めまして。

こつこつ連載ものを投稿するのは初めてのことで、どうぞ宜しくお願いします。

注意として

- 作者は東方 project の原作ゲームをしたことはありません。内容は、書籍・二次創作などからのものです。
- 原作にそつてはいいない可能性があります。
- 更新頻度は安定しません。
- まだルールを理解しきっていないので、色々と至らない点があると思います。ご忠告、注意をいただければ幸いです。

訪れ 始まり 事始

名は体を表すというのが
確かにそれはそうなのかもしれない。

人と呼ぶには、あまりにずれていたし、
妖怪というほど、人から離れてもいなかった。

神や仏と呼ぶには、神々しさの欠片もない。
魔法使いとするほど、知識を求めてもない。
悪魔というにも、化け物というにも、らしくない。
仙人だとか解脱者としては、俗にまみれている。

人に近い、妖怪に近い、神にも仙人にも近い。
重ならないもの。

それは正しく分類不能
型にするにも計測不可能
正に名無しといえる存在。
ある意味『ファンタジー
幻想』といった存在そのもの
夢の体現者。

自称は人間。

言いえで微妙。

型なく

ただただ歩く者。

そんな一つの物語。

「また、独りか」
そう呟いた。

盛られた土と簡単な木組み。
そこに眠ったのはかつての友、家族、仲間。
幾度目かの居場所。
少しの黙祷の後、立ち上がる。

「今までありがとう。いい夢見てくれよ。」

それは本当の、心からの感謝の念。
けれど、すっかり慣れきってしまった言葉。

本当に軽く足は動き出す。
何十年もの月日を重ねた場所から

「ちてちて、どうしますか」

はるか先の方まで続いている道を、のんびりと見据えながら呟く。

考え事をするのに腕を組むのは、長年の間にすっかり染み付き、癖となってしまうものだ。

「東に行くか、西に行くか」

ここ数十年、あまり決まった範囲以外に出向くことがなかったので、すっかり世情に疎くなってしまうた。

昔ならば、西の方に大きな都が、東からは北方の方に抜けられる道があったはずだが、そんなものは権力や物流の動きなどはすぐ変わる。

1人の人間が亡くなるだけで、この島全体の動きが変わることだつてあるのだ。

昔の情報など、あまり当てにならない。

「まあ、地形自体は変わってないだろうから、多少動きやすくはあ
る、か」

そう独りごちる。

どちらにいくか、という答えにはまるで関係がない。

「ふう」と軽くため息をついた。

なんだか調子が出ない。

久しぶりの旅だからか、体調がいまいちなのか。

もしかしたら、久しく独りという状況になっていなかったせいかもしれない。

「居心地良かったからなあ」

きつと、彼らがまだ生きていたなら、自分はまだあそこに居続けたのだろう。

そう思えるほど、居心地が良かった。

変わらぬ自分に変わらずに接してくれた人々。そんな場所が、いくらもあるはずがない。

だからこそ、指針がとれないかもしれない。

らしくない、まったくらしくない。

そう感じる。

根無し草で、綿毛のように風の向くまま進んでいく。

留まらず、逆らわず、流れのまま、気の向くままに、それが自分の性分だったはずだ。

人々に愛着を持ちつつも、心は置いていかない。

感謝はすれど、依存はしない。

そんな線が自分の中にはあるはずだった。

居過ぎた、かな

頭を抱えると、そこに残る記憶が蘇る。

温かさあたたかみと名残惜なごみしさ

少しの後悔と、残念な気持ちと……軽はずみなことをした自分への反省

変わらないもの、移ろわないものはない。

永遠の居場所、そんなものがあるとするのは幻想以外のなにものでもない。

せめて、変わらないうちに通り過ぎるのが、最善、最良の策だ。

もう一度

今度は大きく息を吐いて、うずまいたものを追いついてしまおうように胸を上下する。

「さてさて、どうしますか」

口癖のようにまた呟いて、頭を切り替える。

こういう時は、歩き出すのが一番だ。

ただ、気の向くままに

行き先も決めぬまま

目的もないままに

名もない存在は歩き出す

幻想への一歩目を

訪れ 始まり 事始（後書き）

東方projectのキャラクター、設定が面白く。

なんとなく書いていたものです。

前書きの注意どおり色々と至らない部分、未熟な部分もあると思いますが、どうかご忠告くだされば光栄です。

始まりの名を問う

「囲まれた、か」

木を背にしなから、周りの音に耳を澄ます。

数は 三、四、多くて六といったところ。

動き自体は素人に毛の生えた程度と中の下といったところのものが二人ほど、そちらは気配が分かりづらいのではつきりはしない。

通りすがりの物取りか、ここらを根城にした盗賊の一派か、どちらにしても面倒な相手である。

多少統率が取れている分、余計にやりづらい。

逃げるとうつにしても、向こうが地理に明るければ追い詰められる可能性が高く、もし相手に弓持ちがいた場合、背中を見せるのはぞつとしない。

仕方ない

「応戦といきますか」

面倒臭さに頭を抱えながら、小さく呟いた。

辺りを見渡し、地面に落ちていた自分の身長的一半という程度の長さの木の枝を拾う。

太さは手のひらに丁度収まる程度、握り締めて強度を調べる。

多少湿って柔らかくはなっているが、腐っているようではない

まあ、十分だろう。

それを肩に担ぎ、他に二本、適当な枝を拾い上げ、手ごろな石をい

くつか懐へといれた。

そして

まずは相手を探るとする、そう考えて

「っ！」

適当に拾った方の一本を気配のある方に投げこんだ。

「おい、お前ら。逃がすんじゃねえぞ」

左右に展開する手下へと激をとばす。
久しぶりの獲物だ。逃す余地はない。

「にしても、こんな旧道にあんな馬鹿がいるなんてねえ」
「本当いい獲物ですよ」と手下の一人が笑っている。
それを多少諫めように肩を叩き、気を引き締めさせた。

そして、考える。

確かに、こんな荒れた旧道に独りで、しかも武器も持たずに簡単な
軽装で。

何か訳ありなのか、偶然なのか、どちらにしても 本当に、いい獲物だ。

お上に目を付けられ、盗賊討伐から逃げ出しての不幸続き。こんな獣道と変わらないような旧道を抜けなければならぬ中でのたった一つの幸運。

地獄に仏つてのはこのことだな。

金や食料などはあまり持っていないさそうではあるが。

殺して楽しむには丁度イイ。

慣れていない逃走劇、長旅による鬱憤、それを晴らす相手としては丁度

追い詰めて、追い詰めて

痛ぶって、苦しめて

楽しんで殺す。

思わず口元に笑みが浮かぶ。

部下を諫めた手前、すぐに表情を引き締めるが、皆同じような表情を浮かべていた。

生きるため、食うための盗賊業

しかしそれ以上に

自分たちは殺すこと自体を好んでいる。

無抵抗の相手を、必死で抗う相手を、泣いて縋る相手を。殺す、殺し尽くす。

これは力を持つている側の権利だ。弱者を好きにする権利。

どうやって殺してやろうか。

全員が相手を囲むように散開したのを確認し、右腕を上げる。

これを振り下ろした瞬間、一斉に攻撃する。

まずは足、それさえ止めればもう逃げられない。

堪えきれない笑いが顔全体に広がって

振り下ろされる右腕と共に「やれっ」という怒号が口から飛び出す瞬間。

その瞬間

手下の一人から悲鳴が上がった。

狙いのあまい投擲は命中こそしなかったが、相手の近くを掠めたのだらう。

微かな悲鳴が聞こえた。それとともに僅かに木々の葉が揺れる。

その揺れと声に全力で耳を澄まして

把握完了、と

感じる気配と揺れた木々の位置から相手の位置を算出する。

そして

もう一本の枝を今度は本気で投げた。

先程の倍以上の速度、矢のような速度で進むそれは、身を隠すほどの林をそのままの勢いで突き抜ける。

「がああ！」

潜む様子もなく上がった鋭い悲鳴を聞き、よし、と軽く呟いた。

それとほぼ同時に、目の前の木に足をかけ、そのままの真っ直ぐに駆け上がる。

「なんだ。おい、どうした？」

目の前に何かが通り抜けたのを見て、仲間が声を上げた。それを手で制して、それが飛んでいった方向を指差した。そこにあるのは、何の変哲もない木の枝。

気づかれたのに対しては驚いたが、木の枝を投げるといふ幼稚な抵

抗。

思わず笑みを浮かべ、近くにいた手下の一人と視線を交わした瞬間。

その手下が吹っ飛んだ。

「ぎゃああー！」

一拍遅れた声に攻撃を受けたのだと理解する。

「な、何だ！どうしたー！」

吹っ飛んだ手下を確認すると、額に何かが命中したように、首が伸びきった状態で仰向きに倒れている。

隣には、その衝撃の犯人であると思われる折れた木の枝が転がっており、命中した箇所がひしゃげているというその状態に威力の大きさを悟った。。

手下は気絶しているようにも見えるが、下手すれば死んでいたとしてもおかしくもない。

そう考えて、背筋に寒気が走った。

いつたいなんだ。この状況は。

俺たちは一方的に殺す側のはず、なんでこちらが攻撃を

「ぎゃあー！」

「があっ！」

混乱する思考へのさらなる追い討ち

仲間の悲鳴を響いた。

夏でよかった、葉っぱがなけりゃあ丸見えだったところだ。

隠れる場所もなく狙い撃ちされる自分を想像し、笑いが浮かぶ。

正面から相手取ってもやられる気はしないが、手傷を負わずに終われるという保障もない。

自分は無傷でも、ただでさえ心持ちの少ない荷や服を、これ以上減らすわけにはいかないのだ。

木々の微かな勾配と凹凸に体重をかけ、勢いのまま天辺付近まで登りきった。

一人がやられたのに対して僅かに慌しくなった気配を感じながら、思考をめぐらせる。

結構な統制はあるようだが、訓練を受けたというほどじゃない。

上がしつかりしてる盗賊の群れってところか。

味方がやられた驚きでバラバラにならないのはしっかりしたものだ
が、中途半端な分、余計に狙いやすい。

「っ！」

陣形を保った（・・・）まま（・・・）で混乱している盗賊の群れに

対して、

その場所への投擲、今度は石の礮。

「ぎゃあー！」

「がっ！」

どの部位に命中したかの判別はつかないが、予想通り、その場で固まっていた者たちへと礮が命中し、野太い悲鳴が上がる。

そこでやっと自分たちが攻撃を受けている、と完全に理解した盗賊達が騒ぎ出し、混乱が全体へと浸透した。

よし。

陣形も何もなくなる程に相手が混乱したのを確認し、足場にしていた太い枝から隣の木へと飛び移った。

そしてそのまま同じように、ぴよんぴよんと猿のように木々の枝を渡っていく。

「な、なんだ？」

「一体どうなってやが…っが！」

混乱する盗賊を木々の間から視認しては、礮や枝を投げつけながら移動を続ける。

狙いが適当な分命中精度は微妙だが、相手を怯ませ、混乱に拍車をかけるのには十分。

連中の身体への伝達は乱した

あとは、頭を刈れば終いだ。

猫のように身体を丸めて衝撃を殺し、枝への着地音のほとんどを消しながら木々の間を移動していく。

「お、お頭ああ！」

情けない声を上げて手下の一人がこちらへと走りこんでくる。

「うるせえ……落ち着け！全員集めてずらかるぞ！」

自分も混乱しながらも、頭かしらとしての意地で逃げという指示の声をあげた。

必死で錯乱しかける手下たちに号令を出し、ここから逃げ出そうとする。

こいつらを集めれば弾除けぐらいにはなる。そうすりゃ逃げられる確率が上がるはず

そう考えて、自分が中心となるように手下を集め、そのまま向こうへ走れと声を張り上げる。

何かに狙われているという恐怖に駆られた手下たちは、混乱している分余計にだろう、盲目にその命令へと従っている。

このまま上手くいけば逃げられる

そう思った瞬間、頭上から葉が揺れる音が響いた。

!!

反射的に自分の後ろを走っていた手下を引つつかみ、倒れこむようにしながら、そいつを自分の上へと覆いかぶらせる。

「ぎゃああー！」

「うああー！」

「ああああー！」

ザガツという破裂するような音と共に、散弾のように細かい石の礫がばら撒かれた。

周りにいた五人ほどの手下がそれを受けて蹲り、盾にした一人の身体から鋭い衝撃が伝わる。

ううう

うめき声を上げる、ボロボロになったそれを放り捨てて、すぐさま立ち上がり走り出す。

その眼前に、着地する微かな音さえ立てず一人の男が降りたった。

「な、なんなんだお前はああー！」

搾り出すように叫ばれた声に眉を顰めながら相手を睨みつける。

「何もかんも、あんたらが襲おうとしていた、ただの旅人だよ」

なるべく平坦な声を出して落ち着かせるように言い放った。

「あんたが頭だな？」

顔を青くしたまま、どうにかして逃れようしている様子の男をまっすぐに見据えた。

「み、見逃してくれ。頼む、死にたくない！」

その声が震えきっていて、心の底から怯えきっているように感じた。これが演技なのだとしたらなかなかのものだ。

「こつちとしても、そんな面倒なことは御免だ。のしたやつらも死なない程度に加減してある。傷は酷いだろうがな」

動けなくはしたが、死ぬほどの攻撃はしていない、と告げる。

本気で投げたのは木の枝のみで強度はあまり高くない分、衝撃だけだろうし、礫を投げるときは加減していた。多少皮膚が裂けたり、骨折はあるだろうが、命には別状がない程度であるはずだ。

「だから、さっさと味方さんの手当てして、とっとと行ってくれな
いか」

そうすれば逃がしてやる、と少しの脅しを込めていった。

相手は怯えながらも「本当に見逃してくれるんだな」と念を押す。

それに頷き返すと、男は少し安心したように肩を落として後ろを向いた。

油断しないようにとびくつきながら、倒れた部下のほうへと近づいていく。

その姿は、ただの盗賊といった印象。本当に小物なのだろう。

まあ、こんなもんか。

「見逃してやる」
その男は言った。

細身の背の高い男で、腕っ節はそれほど強いようには見えない。着古された服を着ていて、妙に鋭い目つきでこちらを見ている。

正直、部下のことはどうでも良かったが、一応相手の言つとおり倒れている手下たちの法へと向かった。

「痛い、痛い」と呻いている者や気絶しているものがいたが、確かに死んでいる様子はない。

一番ひどいので自分が盾にした手下が、体中に打ち身や切り傷がある程度のものであった。

蹲る手下たちの様子を確認しながら、辺りを見渡す。

その時、逃げてきた方向、木々の間にチカツと光るものが見えた。

そして、それをはつきりと確認した瞬間に、思わず口の端が持ち上がる。

後ろにいる男の方からは見えていない。

まだ、負けていない……ここからが、逆転の勝負どころだ。

逃げを決めこんだ思考を建て直し、ここからの策略を練る。上手くことをすすめれば、あいつを殺せる。

希望を見出し、跳ね回る動悸を抑えながら、怯えた声を出した。

「す、すまない。手当てするのにも薬も何もないんだ。あんた、何かもってないか？」

そういうと、男はめんどくさそうに腕を組んだのままで答える。

「ここらに生えてる草が薬草になる。煎じて傷口に貼ればいい」

こちらを睨みつける目。

まだだ、まだ気を逸らせないと。

「や、薬草の知識なんかないんだ。良かったらどれなのか教えてくれ」

一か八かの瀬戸際だからだろう、自分でも思った以上に情けない声

が出せた。

男は目を細めてながら、微妙に視線を下げて、近くに生える大きな葉を持つ草を指した。

「すまねえ」

そういいながらすつとそちらの方向へと移動する。

そして、指された草を摘み、男へそれを向けた。

「これでいいのかい？」

そういつて男が僅かにこちらに振り向いた瞬間。

木立の向こうから、先ほど光を反射させた

キラッダ
矢が飛んだ。

殺った。

そう思った。

放たれた矢に、男は瞬間的に反応し、それを避ける位置へと移動している。

化け物じみたこの男ならもしかしたら、とそれを予想していた自分を褒め讃えたい。

振り向いたと同時に、懐からとり出していた短剣が、矢を避けた男の腹へと向かっていく。

これは避けられない。

男は素早い動きで手のひらを盾のように突き出したが、そんなものでこの勢いはとまらない。
体ごと相手に押し込むように一突き、これでほとんどの人間は殺せる。

腕一本を盾にした程度じゃ抑えられないと、今までの殺しの経験が語っている。

自分がくびり殺してきた弱者たち……それにまた一人。

男に刃が吸い込まれいくのを見ながら、口には笑みが浮かんだ。

けれど、予想していた感触は何時までたっても、手に入らなかった。

肉を突き破る感触どころか、何もないところに手を突き出したようなそんな感覚。

勢い余ってつんのめった、そんな感じに似ているかもしれない。

気づけば、空が下にあって、地面が上にあった。

そして、目の前に木の棒が迫ってきていた。

「仲間を盾にする奴が、薬を欲しがるか」

そんな声が聞こえた気がした

ああ、そうか…こんなに強い奴を…殺したことなんてなかった…
そんなことに気づいた。

ひゅんと風を切る音をたてて、木の棒を振るう。
ぱんつと軽い音たてて、空中に逆さまに浮かんだ男の顔面へとそれは吸い込まれるように叩きつけられた。

どしゃつという地面への落下音。

それを聞きながら、矢の飛んできた方向を睨みつけた。

さらに撃つてくるなら面倒だ、と考えていたが、頭かしらの様子をみて怯えきったようで、一目散に走っていく後姿が見えた。

それをしばらく眺めてから構えをとき、ふつと一息をつく。

「終わり終わり」

そう呟いて、軽く体を伸ばして、一端感覚を元に戻した。
そして、手に持った木の棒をまた握り締める。

「ただし第一段階がってところか」

後ろから漏れるクスクスという笑い声を意識して

「あらあら、人にしては随分いい勘と腕をもっているようね」

後ろを振り向き、ふわふわと目の前に浮かぶ姿を見据えた。

「さっきからの妙な気配はあんたか」

土の色よいももつと明るく、光を跳ね返すような髪と、ひらひらとした見たこともない高級そうな衣装　異装。

口元に浮かぶ笑みは美麗ではあるが、ひどく妖しいものにも感じられる。

それが危険かどうかも確信はできないような、そんな曖昧な存在。

「ついでるのは、これを人間ではない、ということだろう。」

「気づいていたのかしら」

「ああ、出たり消えたりする、何処からか覗かれているようなそんな微かな気配だったけどな」

隙間から覗かれているようなそんな気分。

あまりいい気持ちではないことは確かだ。

いつ後ろから攻撃されてもおかしくくないという感覚がずっと続いていた。

「本当に、いい勘をしているわ」

相手はますます笑みを深くし、値踏みするようにならぬを観察する。

「ただの年の甲さ」

「そんなに年寄りには見えないようだけれど」

若作りなのだ、と軽口で答える。

それは羨ましい、と相手もそれに返した。

狸と狐の化かしあいのような感覚、話は平行線を辿っていく。
相手の正体も掴めず、相手もこちらを探って、意味の無い会話。

天気、機嫌、目的、

嫌気がさす

こちらから腹を割るべきか、と同じく腹を決めて一歩踏み込んだ。

「で、何のようなんだい。綺麗な妖怪さん？」

「お褒め頂き光栄だわ。なかなか知識も深い方のように」

微塵の動揺も見せず、笑みを浮かべたままに答える妖怪の少女。

「まあ、何千年以上も生きていますからね。無駄に経験は積んでいきますよ」

「人間の気配しか感じないのだけどね」

反応、というほどでもないが、こちらの台詞に少しの興味を覚えたように踏み込む少女。

「たまたま寿命が長かった、ただの人間ですから」

さらに一步踏み込んだ会話は、その先の泥沼に足を突っ込み、ますます嵌っていく。お互いに笑みを浮かべたまま見つめあい、まったく前には進めていない。

本当に泥仕合の模様だ。

相手もこれではきりが無い思ったのか、「はあ」とため息を一つついた。

「そろそろ尻尾を出してくれないかしら、狐さん」

「どっちかってとあんたが狐で俺のほうが狸って感じだろうよ。だが まあ、そうさね。このやりとりもそろそろ不毛だ」

狸と狐というのは向こうも考えていたことらしい。

こんなに性質の悪そうな相手と同じ思考を持っているということ、少し自分の性格の悪さを考えたくなる。

「それじゃ、腹を見せあう前に。一つだけ質問だ」

「いいわよ。こちらもいくつかさせてもらうことになるのだから」

薄笑みを浮かべながらこちらを見透かしたようにこちらを見据える姿。

やはり胡散臭い気がする。

こちらは一つで、相手はいくつかと言っている時点で。

はあ、とまた一つため息つきながら続きを話す。

「まあ、いいや。それじゃ一つ目としますか」

なかなか骨の折れる相手だ。

本当に骨の折れる相手。

頭の中でそう呟く。

これまでのはぐらかし、はぐらかされという会話。

情報を小出しにすることで余計にこちらを混乱させようとする手口。

本当に嫌な相手だ。

上手くこちらのペースに持っていくことが出来ない。

相手は、ただの人の形をしたもの。

けれど、微かにだを感じる

のつりよくのけはい
力の片鱗

それは人間が持つものとしては不相応のもの。

ただの人間と人間らしくない力。

そのどうしようもない違和感には、どうも妙な感覚がする。

「何をしにきたんだ？」

一つ目の質問。

一つ目といったからには二つ目、三つ目と続くのだろう。

こちらの思惑に対して、とことん抜け目のない男だ。

しかし、あまりにそこをつついては本当に話が進まないの、そのまま答えることとする。

「ただ、興味を覚えただけよ」

これは本当のこと

自分の縄張りの近くで妙な気配と争いの様子を感じ、それを見物にきただけのことだ。

もつとも、その中の一人にさらなる大きな興味を抱くことになったが。

それを聞いて相手は、まあそんなことだろうな、と呟いた。

「別に敵意はないのよ。お強い人がいたから、少しお話を聞きたかっただけ」

どこにいても可憐なお姫様、といったふうに微笑んでみせる。相手はまったく信用しないといった印象でこちらを見ている。

失礼な

しばらく考えるように男は腕組みをしながらこちらを見ていたが、すっと切り出すように平坦な声でこういった。
鋭く、こちらの懐に踏み込むように

「それじゃ　あの盗賊どもは何処にやった？」

面白い。

先ほどまでと違い、今度は本当の意味で笑みが浮かぶ。

確かに、近くにいた盗賊達が消えているさまにはすぐに気づいてもらう。

けれど、この男の言葉には、他の盗賊たちのことも勘定に入っている。

この男は面白い。変わった、珍しい人間だ。

久しく失っていた人間に対しての興味、それが大きく沸きあがる。

「目覚めて、貴方を恐れて逃げだしたのではないの、というのは通じないのかしらね」

「当たり前だ。逃げ出した弓兵の奴らの気配まで、すぐに消えたんだからな」

気づいていて黙っていたのだろう。

上手い具合に牽制の札を使う。

「邪魔だから移動してもらっただけよ」

「殺しちゃいないってか」

「ええ」

これも本当のこと

話をするのに邪魔だったから、どこか遠くに放り出しただけ。

お腹も減っていないし、あんな下種な人間。 喰べる気もしない

「「どつやって」

「少し穴を開けただけよ」

そういつて、謎めかすように笑う。

相手の力がわからない以上、こちらの能力は明かす義理もない。

まあそれはいいか、と興味なさ気に男は呟く。

別に盗賊の生死を心配したわけでもなく、ただの興味だったのだから。

その言葉端には何の感慨も感じられない。

「今度はこちらから質問させてもらってよろしいかしら」

相手の質問が途切れたところでこちらの話題へと切り替えた。

「どーぞ、お好きに」

ふざけるように笑いながら彼はいう。

誤魔化す気が満々といったところか。

舐めてくれる。

「私は 妖怪の八雲紫、あなたは一体何者かしら」

こちらが先に名乗ることによって相手に名乗りを誘う。

ここまで対等に会話をしている分、相手も答える可能性が高い。

男は少し考えるようにした後、こちらを探るように見ながら口を開いた。

「ただの人間 　　ただし、もう何千年生きてたかも忘れちゃった人間だがね」

下手をすれば何万年以上かね、微笑みながら付け加えられた言葉に少し呆然とした。表情には出していないが、結構な驚きである。

嘘ではない。

ここで嘘をつく必要もなく、また、自分の勘が嘘ではないと告げている。

探りあいで嘘を見抜けないほど、自分は錆びついてはいない。

そして、その意味に強い思いがわきあがる。

もしかすると、私よりも長く。

「あら、そんなに長く生きている時点ですべての人間とはいえないのではないかしら　不老不死といったところなのかしらね？」

「確かに途中から姿形は変わってないって感じだが、本当に不老で不死なのかは俺も知らないよ。今まで生きてきた分だけしか生きていないし　死んでみたことはないんでね」

致命傷はギリギリ避けて生きてきたもんでね、と男は語る。

「お強いよね」

「しぶとく生きてきたらこうなったってだけだね。時間なら腐るほどにあった」

自嘲するような笑みを浮かべる男。

そこに自分の力を誇るような様子は見受けられない。

生き残るすべを手に入れてきたただ、と男はとってつけたように

語る。

ただの人間が長く生きてだけ、そういう話。

途方もなくうそ臭い話ではある。

けれど、この男の妙な気配は、それが真実であるとも感じさせる。

人間ではあるが、

妖怪じみて、化け物じみて、人らしくなく。

神めいて、仙人めいて、それでも人間に近い。

極めて曖昧な存在。

人間離れた人間。人の枠の遙か上に、もしくは下にはみ出しているような感覚。

境界がはっきりしていない。

曖昧な区分、完璧なようで綻びているような存在。

そして、なぜか思った。

少し、少しだけ、私に似ている。

属さず、区分されない、唯一種存在である自分と

この人間もどきが。

「名前は？」

急かすようにそれを尋ねた。

「名前は？」

思考を整理しているのか、しばらく黙っていたかと思うとふいに尋ねられた。

そこで名前をいっていなかったことに気づく。

そして 答えに詰まった。

名前、誰かに呼ばれるためのもの、他との区分。その体を表すもの。

今まで呼ばれてきた名はあった。

けれどそれは、その家族の中での記号。

今の自分はその共同体から出て行った、すでに部外者。関係者以外になったもの。

いくつか住む場所、暮らす町、住む家を変えるたびに、

自分の居場所が変わるたび、その呼び方も変わっていたはず。

旅立ったばかりの自分には、まだ呼ばれ方がない。

今の自分には名前がない。

「どっつかしたのかしら」

沈黙したこちらに対して疑問の声を上げる少女。

こんなとき、自分はいつもどうしていただろう。
どうやって名前を決めていただろう。

これまでの自分の名前を思い出し、記憶を探る。
何度も何度も繰り返したやりとり。
新たな自分を刻み付ける年輪。

『あなた 名は？』

そう聞かれたときに答えたのは。
繰り返したその場面は。

「ああ、そうだった」

その言葉を思い出す。自らの名を決める方法を
思わず呟いた言葉に少女は首をかしげている。

それを見て少し笑みが浮かんだ。
そして、思い出した言葉を放つ。

「なんて名だと思えます。 ヤクモユカリさん」

始まりの名を問う(後書き)

とりあえずの導入部。

とりあえずの始まり。

ご批評・ご感想お待ちしております。

境界に触れる（前書き）

とりあえずの幕開け。

始まりへの布石。

お友達から始めましょう。

境界に触れる

「八重の雲に紫、か」

「字は解るのね」

「長年生きていますから」

定型のように使い慣れた言葉。

確かに字を読み書きできる者は少ない。

自分もこれだけ長く生きていなければ、日々の生活に関わりのないそんなものを覚えようとしなかっただろう。

「本当、信じられないわね」

そついいながら、少女は丸い小さな陶磁に入れ物を傾け、その中身を口にする。

その中身、半透明の少し濁りのあるその液体は、あまり良くない見た目に比べ、味は透き通るようにすっきりとしている。湯気の出るうちならば、それに使用した野草の香りが漂い、いい具合の落ち着きをもたらす。

さて、もうすぐだな。

予定の時間を考えながら、自分の分の器を傾け、同じ液体を口にする。

「うむ、上手くできたもんだ……この器もなかなかいい」

「大陸の方から流れてきたものよ」
借りた椀の持ち主は、そう答えた。

なるほど、確かに見ない造りだ。

粘土　固まる前に型を造り、それに高温で焼きを入れるという感じか。色づけなどはどうしているのだろう。

その器の材質を考えながら、その製造工程を想像する…が、火の中で薪が音を立て、会話相手がいるという状況を思い出す。

こういうのは後で考えればいいな。

黙り込んで考え込むのも失礼だ、そう思って気を取り直す。
火の世話もしなければならぬ。

「少し大きめだから、飲料用とすればもうちょっと小さなのがあればいいのにな」

誤魔化すようにそう呟きながら、集めておいた木の枝を焚き火にくべる。

「確かに少し持ちづらいかしらね」

黙り込んでいたこちらを見つめていた少女は、ふっと一息は吐いて、呟きながら、こちらもまた一口と湯をすすった。

「……本当に美味しいわね」

「滋養もあるんだ。これも長年の成果だね」
少し自慢げに鼻を鳴らす。

この野草の煎じ汁は自信作だ。

長年の間、食料用の草を組み合わせを試行錯誤し、やっと美味しく健康にもいいというものが出来上がった。その分少し手に入りづらくなったが。

この森に材料があつて良かった、と先程盗賊に教えた薬草を思い出す。

「…と、そろそろか」

パチパチと燃え盛る焚き火の音を聞き、前に突き立てた木の棒に手を伸ばした。

そこには先ほど採った魚が中心を貫くようにして枝に差し込んであり、いい具合に火が通つて食欲を誘う香りを放っている。少し齧り、うん、と頷いた。

「いい具合だ」

他に焼いていた分を焚き火から少し離して、焦げてしまわようにしてから、そのうち一本を少女に手渡した。

「あら、ありがとう」

そういつて少女がそれを受け取り、こちらと同じように少し齧る。すぐに、美味しいと呟いて目を輝かせた。

「そいつは重畳」

相槌を打ちながら、丸底の小さな土器から湯気を出す液体を掬う。息を吹きかけて少し冷ましてから、喉に通した。

うん、やっぱり魚はこの組み合わせだな。

魚の微かな生臭さを香草が美味く消して、食が進む。

「もう一匹もらっつていいかしら」

「いいよ。二匹ほどは保存食にするからおいとして」

焚き火に枝を追加しながら答えた。

気に入ってもらえて何よりだ、少し微笑みながらいうと
くくく、となぜか笑い声を上げられる。

怪訝に思っつてそちらを見たが、相手そのまま魚を齧っている。

まあいいか

枝に刺した魚を煙に翳して、燻しあげていった。

このある意味ほのぼのとした食事風景は、先ほどまで盗賊と戦闘していた場所のすぐ近く。

流れていた小さな川の傍で行われている。

さつき魚を捕まえて、焚き木と野草を集め、持ち合わせていた土器に川の水を掬つて薬草汁をつくつたのはほとんどが自分。

横でそれをすする少女は何処からか、この陶磁の器を取り出しただけだ。

自分の分も差し出されたのでありがたくそれを借りている。

大陸製か、一つ欲しいもんだな。

器を眺めながらそんなことを考えた。

「慣れているのね」

不意に声をかけられて、そちらを振り向いた。

目線で燻して燻製にした魚を指される。

丁度、大き目の葉っぱに香草と纏めるようにして包んだところだった。

「ああ、村じゃあよく弁当にしてたからな」

畑仕事の後に食うのがまた美味いんだ、とちょっと前のことを懐かしく思い出した。

ああでも、やっぱり野菜と米がないのは残念だな。

村での食卓を思い出し、その残念さを噛み締めていると、不思議そうな表情で呟かれた。

「村……あなたは人間の共同体にいたのね」

その声音に少し疑問を感じたが、一瞬後に、ああなるほど、とその理由に行き当たった。

不老の者が共同体の中に生きていた。

これはおかしいことだ。

特に村なんて閉鎖的な場所に。

変化のしない不自然なものがある。

それは受け入れられるはずのないこと。

在るはずのないもの。

それが発覚すれば
それだけで異端は迫害の対象となる。

「爺さんとかが喜んでたなあ。弁当が美味いと力が出るって」
燻製にした魚を葉で包み込みながら話す。

彼の表情は懐かしそうで。
それが本当に楽しかったという表情で

「村　　あなたは人間の共同体にいたのね」
思わず声に出してしまった。

彼は私の方を振り向いて、しばらくきよとんとした表情をしていた
が、得心したような表情を浮かべ、魚を包む作業に戻った。
焚き火の前に座っている彼の姿は、こちらからは後姿しか見えない。

「ああ、ちよつと前まで近くの村にいたよ」

畑仕事やら薬師やらいろんなことをしていた、と静かに語る。
彼の表情は見えないが、その声には少しの憂いを含まれているよう
に思えた。

「あなたのような存在にとって　それは無駄なことではないの」
その様子を感じながら、さらに問いを重ねる。

彼のその不可思議な存在を知るには、そこに鍵があるかもしれない。

そんな建前

それが建前だとすぐに理解できた。

本当は、純粹に、この男に興味があるのだ。

死なない、妖怪のような人間が、死んでいく人間の社会の中にいる理由。

孤高の道を歩まない理由^{わけ}。

力があるもの、能力があるもの、特別であることが迫害の理由になる共同体において、彼のような存在が生活することは苦痛以外のなんでもない　最初は良くても、いずれはそうになっていく。なぜ、彼はそうしたのか、それに強い興味を持っている。

無駄ね、と彼は小さく呟いた。

葉に包んだ燻製を荷物の中にまとめると、焚き火に翳していた土器から薬草汁を掬った。

そして、私の方に片手を向けて「入れ物」と低くいう。
空になっていた自分の器を渡すと、同じようにそれに液体をそそいだ。

「楽しかったからな、無駄じゃないよ」
器をこちらに渡しながら、彼はそういった。

その表情は
寂しそうで、悲しそうで、
儂さが覗き見えた。

けれど

それと同時に

懐かしそうで、楽しそうで
とても満足しているようだった

何かを悟っているようで

何かを引きずったままの表情。

考え付かないほどの時間と別れの数
その重さ

そんなものを背負ったままで

『なぜ笑えるのだろうか』

私はそう思った。

ひどく苦しい生き方だと

通り過ぎた風景を思う。
過ぎ去った時間を想う。

失い、崩れ、滅び、
造り、直し、願い、

誰かに殺されそうになったこともあった。

誰かに恨まれたこともあった。

苦しんで、悲しんで、

表情を忘れた百年もあった。

絶望に浸った百年もあった。

狂い、壊れ、

傷つき、泣き叫び、

それでも

捨てられなかったもの。

自分の芯として残るもの。

「楽しかったから、無駄じゃない」

それは本心。

どれだけ絶望しようとも、その楽しさは消えない。

どれだけ過去のことでも、それはなかったことにはならない。

器から温かい液体を啜る。

「確かに、いつか化け物扱いされるかもしてない。いつか憎まれ、

蔑まれるかもしれない。けど、最初に会った笑顔や楽しさ、仲間と

してそこいたことは嘘じゃないんだ。 どれだけ変わっても、友

達だった。家族だった。仲間だったことに変わりない 俺がそれ

を知っているなら、それで十分」

割り切れているわけじゃない。

悟りきっているわけじゃない。

けれど、そこにいたい。

そう思う自分がいるから、そうしてきた。

理由ともいえない程度の、そんな『なんとなく』の感覚。
ほんの一時でも、共に歩むこと。

思った以上に落ち着いた声が出て、自分でも少し驚いた。

こんな話をしたのはいつ以来だろう。
覚えていないほど昔かもしれない。

けれど、ずっと自分は変わっていないのだとも思う。

遠い昔から、誰かを好きになってしまうことはやめられない。
温かい食事を一緒に囲む楽しさが忘れられない。

「ただ、一緒に温かい薬草汁を囲む相手が欲しかっただけ。ほんの
一時、ほんの一瞬だけでも、それが楽しかったんだ」
なら、それで十分。

そこまでいったところで、はっとした。

「美味いって褒めてくれたら、もっと最高だがね」

浸りすぎている自分に気づき、茶化すようにそう加えた。
「だからまあ、食事は楽しく、ね」

あんまりしみりするのは、柄じゃない。

手から伝わる温かみを感じながら、また一口それを啜った。

「なら、私は最高の客なのかしら。光栄な話ね」

茶化す言葉にこちらも乗ることにする。

「楽しんでくれてるなら、重畳だね」

子どものように、大人のように笑いながら彼は言う。
こちらにもいつの間にか笑みが浮かんでいた。

こんな自己満足の塊に。

こんな馬鹿な人間に。

なぜだか

妙に心が安らいだ。

喉を潤す温かさが心地いい。

「ええ、本当に興味深い人間だね。貴方は」
本音を、今度は正直に語る。

そんなに面白いやつかねえ俺は、そういいながら彼は空になった器
を持ち上げた。

「さて、そろそろ俺は行きますよ」

日が暮れる前に森を抜けたいんでね、と彼は立ち上がる。

移動するのは小川の前、その水で使った器をきれいに濯いでいる。いつの間にか自分の持っていた器も一緒に持っていていて、そんなところにも笑いがこみ上げた。

「まめなものね」

そういつて笑うと、彼は恥ずかしがるように頭を掻いて、性分なんだよ、とぶっきらぼうな声でいった。

「はい、ありがとうございます」

きれいに洗われた器が差し出される。

少し考えて、片一方だけを受け取った。

手に残された一方の茶碗を見て、彼は怪訝そうな顔をする。

「それはあげるわ」

言いながら、隣の空間にスキマを開いた。

「また一緒にお話するときにも使いましょう」

一方的な契約を押し付けながらスキマに体を滑り込ませた。

音もなく開かれた何かに身を躍らせ、優雅に微笑みながら消えた少

女。

そして、その何かもすつと閉じて消える。
手にはなぜか残された、陶磁の入れ物。

「また、ね」

ポリポリと頭を掻きながら、少し逡巡した後、荷物から布を取り出して、丁寧に器を包んだ。

「さてさて、どうしますか」

それが割れないように荷物を調整して片付けて、そう呟いた。
まあ、いいか。

「知り合いが出来たんだ」

重畳重畳、そんなふうに関心しながら、荒れた獣道の先へと足を踏み出す。

飄々と、揚々と、

森の奥へと姿が消える。

それは

境界へ触れた一幕。

境界に触れる（後書き）

ご感想・ご批評ともにお待ちしております。

しばらくは単発的な話が続くと思います。

道中案内（前書き）

少し急ぎだったので文章が安定していないかもしれませんが何か変だと思いの方はご指摘お願いします。
では

道中案内

打つ。
払う。
薙ぐ。
流す。

右手を前へと打ち出し、そのまま腕を内へと曲げ、肘を正面へと押し出す。

そしてそのまま、前へと進む力を殺さぬように、足を踏み換え、左手での掌底。

それから一拍置いて、右手での打ち上げから蹴り込み、体重移動、軸の取り方を確認しながら、相手を浮かべ、想像し、仮定しながら繰り返す。

幾度も、何度も。

身体に染み付いた動きを思い出すように。

川の水を頭からかぶり、汗でべたつく身体を流した。
季節としてまだまだ暑くなっていないが、火照った身体に冷たい山の清水は気持ちがいい。

にしても、なまってるな。

先に熾しておいた焚き火で身体を乾かしながら思った。

長年、かなりの年月を平和に過ごしてきた分、身体がかなりの割合でなまってる。

一応、村での仕事のほとんど肉体労働であつたため筋力の衰えこそ少ないのが、これは精神的なものだろう。

戦うという状況に頭が回っていない。

巻き込まれやすい自分としては、少し不安かもしれない。

今現在においても

「さて、その兎さん」

「なに」

いつの間にか隣に座る少女が一人。

頭には長い兎の耳がついている。

「まあ、深くは聞かないが 後ろのあれはなんだ」

「か弱い女の子に襲い掛かろうとする悪漢だよ」

てへつと愛らしく微笑む少女。

確かに、隣に座る少女は自分よりも大分小さい。

子どもといつてもいいくらいの体軀をしている。

けれど、なぜだろう。どこか自分と似た感覚を感じる。

「その割に仇がどうとかいつてるようだが」

「ええーあんなごついのに私が悪いことできるわけないじゃんー」
「もおやだーといいながら両手と体をくねらせる兎耳の少女。」

それすらも計算のうちなのかどうかもわからないが、妙にわざとらしい。

相手が睨みつけると、震えながらこちらの肩に掴まり、背中の後ろへと隠れた。

助けを求めているようなその姿に、他称悪漢さん方はこちらを少女の味方だと判断したようで、あきらかにこちらも獲物として狙っている気がする。

「……………」

「あれ、ごめん。巻き込んだみたいー」

えへへごめんねー、と謝る表情は心底楽しそうに笑っている。

あきらかに、上手いこと利用してやるうといった表情が見え隠れしている。

表情にでていなくとも、そう思う。

「なんだ人間……そやつ仲間か？ 邪魔をするならキサマも……」

「悪いが、俺のいない所でやってくれるか」

相手が話さきらないうちに言葉を放つ。

経験上、このまま巻き込まれていったならば必ず面倒なことになる。さっさとお引取り願った方がいい。

「それなら邪魔はしないが……………」

「…ウルサイ。さっさと消えなければ喰ろつてしまっぞ人間」

さっさと去ね。

こちらの言葉を遮って、冷たい声でこちらを見下す妖怪。

身の丈はこちらの倍近く、濃い紺の肌と青白い肌。体の割に小さい眼は何の感情も感じさせないような、光を吸い込んでしまうような暗さを持っている。

「ワレラはソヤツに思い知らせてやるだけだ。ジブンが何に手を出したのかを」

大きく裂けた口には、残忍な牙が並ぶ。

これは話を聞いてくれるタイプじゃないな。そう思った。

妖怪として、陸に適応した鮫。

獰猛なその気性は良く知られており、特に血の匂いに反応するといわれる海の恐怖。

案外その恐怖自体が、妖怪となった理由なのかもしれない。元来存在しないはずの不恰好な手足が、その異形さを語る。

水場で出会うよりはマシなもの、あまり相手にしたくないことは確かだ。

だが

さっさと逃げてしまおうにも、後ろに隠れる少女は、それとは判らぬようにこっちの体を押さえつけている。向こうから見れば、自分が少女をかばっているように見えるが、実は動けないように掴まえられているだけだ。

「放してくれないか」

「助けて……」

怯えた声をあげ、恐ろし気に顔を歪めている少女。

けれど、その裏側で笑っているようにも感じるのは気のせいじゃないだろう。

上手く利用されている。

「何をグズグズやっている？そんなに喰われないか」

荒々しくなり声を上げながら、牙をむき出しにするサメの妖怪。

「だ、そうだが、逃げてもいいか？」

「そんな！助けてくれないの？荷物は預かってるよ」

信じられないというふうに見える悲痛な声と、後半にぼそつと呟かれた脅しの文句。

ああ、やっぱりその両手に抱え込んでいるのはこっちの荷物か。

別に代わりがきくものばかりだが……それには前に貰った茶の器が入っている。

あれだけは替えがきかない……お茶の約束がある。

そう思い至って、ため息を一つついた。

すっかり流れに乗せられている。

「……取り引きだ」

向こうには聞こえないように、囁くように話した。

「……いってみな」

にやりと、こっちの背中に隠れた側で笑う少女。

「道案内と情報」

「のった」

まあ、明らかに不当労働ではあるのだが……ただ働きよりはましだろう。

「ナニをしているとっている。まさかソイツを庇うつもりか？」

馬鹿にしたような笑いあう妖怪たち、こちらも馬鹿になったような気分だが 仕方ない。

「釣られるのはどっちかってえと、そっちの方だと思っただけどね」

諦観の想いで呟いた言葉に、相手は怪訝な顔をする。それを眺めながら、頭を切り換えていく。

なまった体を動かすには丁度いい。そういつこととしておっつ。

「悪いが、邪魔をすることになりましたよ。お客さん」

上手くさばけた。

凶暴なサメたちの前へと立つ男を眺めながら思う。
これで逃げ切れる、と。

この森は海に近い地域だ。

しかし、だからといって基本的に水中が生活の場であるサメが、いくら妖怪だからといっても、地上で自分よりも早く動けるはずがない。

そんな計算で、ちよいと昔の意趣返しといこうかと考え、少しの悪戯を実行した。

けれど、それが間違いだった。

確かに、地上での移動速度は自分のほうが速く、絶対に逃げ切れるはずだった。

まさかまさかだよ。

この身に降りかかった不幸を思いながら、自らの脚に手をやる。

もしかすると、サメという生物自体、徹底的に相性が悪いのかもしれない。

昔のことを思い出しながらそう思った。

それでもまあ。

適当に隠れた草むらから、男が武術か何かの訓練をしている姿を見つけ、これは利用できると思った。

ああいう武者修行とかいうのに明け暮れる人間というのは、大概が頭の回転が鈍く。

恐ろしい化け物を打ち倒してやろうという意識が高い。

自分が捕まりそうになっている原因であることだし、上手く利用してやる。

そういうことで、今の状況である。

考えていたよりは頭が回るようで、なんとかここから逃げ出そうとしている様子だったが、なんとか上手くいった。

相手にも少しの条件を突きつけられたが、こちらに不利はない、十分許容範囲だ。

元々、時間稼ぎの障害造り、こいつらが暴れだすと同時に逃げ出してしまえば関係がない。

ただ

少しだけ心配なのが、この男の様子。

交渉自体は上手くいったはずだが、妙に飄々として掴み所のない様子だった。

目の前に迫る危険よりも、今不安要素を呼び込んでしまったような、そんな油断のならない印象を　自分の長年の勘が告げている。

「邪魔？キサマがワレワレに敵うとも思っているのか」

馬鹿にした響きを持たせながら嘲るサメたち。

男はそれに胡散臭く笑いながら答える。

「いえいえ、まあ、邪魔というか　お仕事をとっちゃおうかと思
いましてね」

低く、笑いと共に呟かれた言葉。

なんとなくだが、この男からは、自分と同じ匂いがする。

そう考えていた瞬間、男の片手が動き、首の後ろに軽い衝撃が走った。

ふらりと、視界が地面に近づく中でちらりと見えた、男のにやっとした笑いに。

そういつことが。

そう思った。

「さて、これを引き取ってさっさといつてくれませんか」
「むじ……」

地面に倒れこんだ兎の少女を指して、サメの妖怪たちに告げる。
相手はこちらの豹変振りに驚き、困惑している様子だ。

「まあ、皆さんのお仕事をとっちゃったのは謝りますが、さっさと終わらせてお引取りいただきたいのでね」

お願いしますよ、と殊勝な声で言っただけのける。

なにやら、「えげつない」やら「さすが人間だ」とか聞こえている

気がするが気にしないこととする。

まだまだ序の口だ。

「まあ、いいだろう。ワレラはソイツを連れて行ければいい」
「では、どうぞ」

こちらの言葉に頷いて、少女に近づいていく妖怪たち。
それが少女に手の届く所まで近づいたところで

「ああ、そういえば」

声を上げた。

少女の方へ手を伸ばしていた妖怪が反応してこちらを向く。

「やっぱり、釣られるのはそっちの方が似合いだろう」

言葉と共に、長く前へと伸びた顔の下、人間でいう首の辺り（体と太さは変わらないが）に向かい、掌底を叩き込んだ。

「げはあっ!」

口から何やら液体を吐き出しながら倒れこむ妖怪。

「な、なにを!」

後ろに居た一匹が驚きの声を上げる瞬間には、もう目の前へと移動して、今度はその顎を思い切り跳ね上げる。

かはっという声を上げ、息が吐き出しながら浮かび上がるその身体、

その一部を掴んで、そのまま地面へと叩きつけた。
空中へと軽く浮き上がり、そのまま重力と共に引きずり落とされた
妖怪は、地面に軽い陥没をつくり、小さなつめきと共に動きを止め
る。

「と……！」

悪寒を感じて、そのまま後ろへと跳んだ。

一瞬前まで自分の身体があった場所へと、おぞましい獰猛な顎が噛み合わされ
る。

「うち…外したか」

カキン、と音をたてて閉じられた牙がこちらを向いた。

残りの一匹。

「やってくれたな人間。ワレラを騙すとはいい度胸だ」

願いどおりに食い殺してくれよう。

そういつて、うなり声を上げながらカチカチと歯を打ち鳴らす妖怪。

「そりゃ御免だ。謝ったら許してくれますかね？」

先に倒した二匹が立ち上がってこないのを横目で確認しながら、相
手を挑発するように言葉を連ねる。

「もう遅い！」

激昂とともにこちらに飛び掛る妖怪。

水中ではないものの、その姿はサメが真っ直ぐに獲物に突進する様とよく似ている。

「っー」

軽く息を吐きながら、横っ飛びに回避する。
位置は最初の場所に近い、焚き火の近くへ

「あまいつー！」

叫びを上げて、真っ直ぐと進んでいた妖怪が、勢いをそのままに方向を変えた。

普通、全力で相手に突っ込んだ者がそんなに急激に向きを変えることができないはずがない。
けれど、水中の浮力のなかで生きる彼らには、方向転換のための部位がある。

「尻尾か」

地面には、何かか叩きつけられたような跡が見えた。

こちらに突っ込んできていた妖怪は、その尻尾を地面に叩きつけることでその方向を変えたいらしい。

そして、叩きつけた勢いによって、身体は浮かび、飛びかかるようにしてこちらへとその上下の牙が迫っている。

このままでは、その牙に食いちぎられることになるだろう。

けれど

その上下に開けられた口の中に向かって右腕を突き出した。

腕を犠牲にするのか、そう思ったのだろう。

相手の目には、少しの笑みが浮かんでいるのが見える。

「そんなわけないでしょうよ」

勝ち誇った表情の相手に対して、そういつて、にっこりと笑った。

こちらの右腕を食いちぎろうとするその口が、こちらの右腕を食いちぎろうとして、閉じ　　きらなかった。

「アガッ、ギャー！」

声にならない声を上げて、妖怪が痛みの叫びを上げる。

　　歯のない位置で木の枝を思い切り噛んだのだから、それは当然のことだ。

その口に縦に挟まった木の棒を見ながら思う。

「口内炎には気をつけてください」

苦しみの声を上げる妖怪に向けて構えを取る。

「大丈夫、それに返しはついてませんから」

言いながら、その枝が折れる勢いで脳天へと踵を振り下ろした。

「うわあ」

えげつないな、薄目を開けて覗いた惨状に、思わずそう呟いた。

最後の一匹が倒れたところで、服にまとわりついてしまった砂を払いながら立ち上がる。

思った以上の掘り出し物だったね。こりゃ

油断なく相手を確認している男を眺めた。

完全に相手が気絶しているのを確認した後、「疲れた疲れた」といって腰を叩いてるその姿からは、先程の戦闘中のような覇気は感じられない。

ああいう奴が一番怖い。

逃げる時間を稼ぐどころか、逃げる必要をなくしてしまった。

「やっ」

そういつて振り向く男。

「わー凄いんだねー。ありがとー」

「うるせえ詐欺鬼。さつさと人質を解放しろ」

可愛子ぶったこちらの言葉は、にべもなく無視される。

まあ、こちらも期待していない。

「おやおや、こちらとしても　そんな強い相手に素直に交渉権を渡すと思う？」

「こっちは、基本約束は守るたちだ」

「さつき攻撃してきたのに？」

「とつさに作戦を飲み込んで、ずっと寝た振りしてた奴が何いってんだ」

えーわかんないー、ととぼけてみせるこちらに、男は嘆息する。

小声だが、何で俺はこんなやつばかりと知り合っただろうな、とか聞こえてきた。

なんとなく、そういう星の下に生まれたから、とそう思った。
なんか、そんな感じだ。

はあ、ともう一度ため息をついてから、男が口を開く。

「いいから、さつさと荷物を返せ　そうしたら足の傷も見てやる」

深い息と共に吐き出された言葉に、思わず眼が丸くなった。

「お人好しっ*おにちくしよ*っていわれない？」

「鬼畜生*おにちくしよ*といわれたこともあるな」

薬草を染ました薄布を私の足に巻きつけながら男は答える。

まあ確かに。

先程の戦闘と今の状態には大きなずれがある。

敵からすれば恐ろしく、味方からしてもよくわからない。

「切り傷ねえ。あいつらにやられたのかい」

「そんなにドジじゃないよ。ただ、木の間に人間の罠があっただけ」

とっさに反応して深手ではなかったが、足に切り傷を負ってしまった。

血の匂いに敏感な奴らからは逃げるのに、この傷は辛い。

だからこそその時間稼ぎだった。

「人間の所為で傷を負って、人間に助けられるとはね」

「まあ、そんなもんだらう」

これでよし、と呟いて男が立ち上がった。

布が巻かれた足は、確かに、先程よりもずっと痛みが引いている

「無理をしなけりゃ二日、三日で治るだらう　　にしても罠ねえ」

ここに人間は住んでなさそうだけどな、と男が呟く。

「最近の色々ときな臭いよ」

脚の様子を確認するように立ち上がり、軽く足踏みをした。

多少の痛みは感じるが、全力で走ったりしなければ大丈夫なようだ。

「大陸の方からごちゃごちゃと妙な連中が流れ込んでくるからね。色んなところで揉め事ばかりだよ」

「なるほど」

男は納得したように頷いて、なにやら考え込む様子を見せる。

「ま、考え事はおいといて、ここを移動しようよ」

あいつらが目を覚ますと困る。

そう促すと、荷物をよこせといわれた。

やっと荷物を返してもらい、森の道を少女の先導に従って歩いている。

一応確認したが、無くなっているものはないようだ。

「それで、どこに案内すればいいの？」

前を歩いていた少女が後ろを振り向いていった。
心なしか友好的な様子に、少し疑問が浮かぶ。

「おや、素直に案内してくれんのかい？」

「まあ、取引だしね。それに、少し昔のことを思い出したか

ら

少し、懐かし気なものが含まれた声。

少女から感じる共感も併せて、なんとなく信用できるように思えた。

けれど

「さて、そういえば目的地なんて決めてなかったな」

そんなことを思い出した。

今はまだ、すすんで人里の方へ向かおうとも思わないし、旅を続けたいとも思っている。

しばらく、ふらふらと放浪していたい気分だ。

「最近で何か噂とか、ここらで見物できるものでもないか？」

少し悩んで、そう聞いた。

どうせなら、名所巡りでもしていこう。

しばらくは、あの場所にいたことは薄れそうにない。

「うーん……そうだね。最近は蛇のやつかなー……」

少し考えながら、少女は目ぼしい情報を語りはじめる。

……

「じゃ、ありがとうございます」

「こっちはこそ」

一通り話を聞いた後、森の真ん中辺りで別れることとなった。少女も、あの妖怪たちに悪戯がばれてしまったので住処を変えるらしい。

すぐに戻って、引越しの準備と傷の療養をとるようだ。

「妙に素直だねえ　何か裏がありそうだ」

「失礼な話ね。まあ、なるべく借りを作っていたほうがいいとも思ってるけどね」

そういつてのける兎に、こちらも肩の力が抜ける。

そんなこんなで、手を振って分かれる寸前、少女が振り向いていった。

「あ、もう一つだけ、森をあっちに抜けると面白いものがあるらしいよ」

「面白いもの？」

野良兎からの情報、と付け加える。

自分で確認したわけではないらしい。

「それも借りの一つかい？」

「まあ、長生きのよしみってことにしとくよ。幸運の兎、因幡ておちゃんからのね」

そういつて悪戯兎らしく笑う表情に少しの不安を覚えるが　これといった指針もない。

「ま、折角だから行ってみるよ」

「そう。じゃあね　ええと……」

こちらをみながら、悩む表情を見せる少女。
それを見て、少し困りながらいった。

「すまないね。今は名のる名がない　ただの長生きの人間だ」
「そう。じゃあ、またね長生きさん、ってことで」

何か察してくれたのか、明るく笑って少女はいった。
こちらにも笑って返す。

「ああ、また。悪戯兎の因幡てゑさん」

お互いに悪戯っぽく笑いあい
そして、あっさりと振り返る事もなく別れる。

互いに、飄々と。

何もなかったかのように。

長く生き、長く生き過ぎたものたちの邂逅なんて、そんなものだろう。

縁があればまた出会う。

縁がなければすれ違う。

そんなもの

ただ

少しだけ

いつかの楽しみの種を得る。

咲くかもわからず。

芽吹くかもわからず。

長い道の少し光明に

うーんと一つ伸びをして
少女が指した方向へと歩き出した。

長き日々を生きた者の
一時の出会い。

道中案内（後書き）

キャラを掴みきれていないような。

それとも長生き同士で少し思うところがあつたのか。
ただ、悪戯だけは忘れていないかもしれません。

ご感想・ご批評をいただけたら光栄です。
読了ありがとうございました。

陽に向く花（前書き）

昔語り

昔語りすぎた気がします。

年寄りの長話といふことで

陽に向く花

向日葵と呼ばれる植物。

日に向く、で向日葵と呼ばれるが、実際には太陽の向きへと花が回るわけでもなく。

多くの場合、開花後は東へと向きが固定される。

全体の部位が様々な薬効を持ち、食用としても扱いが可能であり、花卉は染色に、種は絞って油、絞りかすは蠟燭や石鹼の材料とすることもできる。

非常に価値の高い植物といえるだろう。

原産は北アメリカの西部とされ、ヨーロッパから中国、日本には江戸時代初期にやっと紹介されたという。当時は『しきゅう文菊』と呼ばれたそうだ。

そう

伝わったのはずっと先。

名前がついたのはもっと先。

けれど

それよりずっと昔、まだその存在すら知られていないもの。

名も知られず、誰にも気づかれず、その花がそこに持ち込まれていたら

そして、奇しくもそれが芽吹き一つの園となっていたとしたら。

誰に気づかれても、誰に知られても、

その花の名は知らず、ただの景色として、ただの花として眺められて場所。

いつの間にかなくなつたとしても

誰もその名を知らないのなら

誰もその花を知らないのなら
それは幻想といつてしまってもいいのかもしれない。
幻想の向日葵畑
在るはずのない。
在ったことすら忘れられた場所。

それは一面の輝きだった。
緑の世界が広がる中に、ポツンと広がった。
鮮やか色。

強く香る匂いは、その生命力を表しているような。

突っ切ろうとした森の中、急に現れた黄色の色に目が眩む。
大きく、丸く、明るい。

鮮やかで、強く、真っ直ぐで。

「 眩しいな……」

少しの間、その色に見惚れ、魅入られていた。
自分とは180度違っているような、その姿に。
今だけを、短いときの中を精一杯生きる光。

「何て、名前の花なんだろうな」
自分にはないものを持つ花。

「名前なんて人間が勝手に呼ぶものよ」

魅入られたままに、思わず呟いた言葉は、誰かによって訂正される。

「人のいない場所では意味を成さないもの」
堂々と、力強い。

その花と同じ強さを持つ声。

少しはっとしてそちらを振り向く。

そこには、花畑の中に立つ女性が一人。
翠色の髪と赤色の衣装。

幽然とした姿と背筋が凍るほどに美しく笑う。
そんな女性。

「そりゃそうか」

突然現れた女性に驚き、少し呆けてしまった。
すぐに気を取り直して、軽い調子でそう返す。

何かを誤魔化すように。

「そう　それに、花の美しさに言葉は要らないでしょう?」

周りに広がるその姿をいとおしむように語る声。

優雅に微笑むその姿は、どこか威厳を発しているのようにも感じる。
その視線の先、咲き誇る黄色の花林を眺めた。

名前のない美しさ、か。

その通りだと、そう思う。

この姿は、言葉では言い表せないほどの美しさを保っている。

人では作り上げられない、長い時間をかけて一つの世界としてできたもの。

生きてきた、そのままの姿。

ただ、少しだけ

「それを眺めるものがあるなら、言葉にしてもいいとも思うけど、
な」

それは意図せずに出た呟きだった。

自然に、というわけではなく、積み重ねた人間としてのものから、
染み出した言葉。

泉に投げ入れられた小石の波紋によって、僅かに浮かび上がった考
え。

「どういう　意味かしら」

その瞬間、少し、女性の気配が濃くなった気がした。

美しさを保っていた姿にひび割れがはしり、その間から先程までは

感じられなかった圧力が覗く。

この世界が乱れるのを嫌うように、異物を排除するように、空気自体が敵意に塗り替えられる。

外敵は 雑音は許さない、そういつているように。

けれど、なんとなく言葉は止めなかった。

「そこに形が出来て、そこに場所が出来て、そこに世界が出来る」
流れるように言葉をつむぐ。

考えてはいない 考えてきたことではあるのかもしれない。

「その世界を眺めるものが出て、その世界を愛するものが出て、その世界を守るうとするものがある」

何度も何度も繰り返してきたことで、何度も何度も生まれて 死んだもので。

「自分の好きなもの、愛しいものに名前をつけるのは その世界と繋がるうとする証拠だろう」

それでも一緒にいようと想ったもの。
失っても残ったもの。

「自分のことを伝えたい。相手のことを知りたい。たとえ勝手に押し付けた名前だとしても それは触れようとする一歩目」

自分勝手なものだとしても

「自分勝手なものだとしても 誰かを、何かを好きになるのは自分の気持ちだろう。自分がもったものだろう。最初は押し付けあって、自分勝手に触れようとしていくもの」

それでも

「それでも」

いつかきつと

「いつかきつと その名を呼ばれるのが嬉しく思うときがくる」
その名を大事に思える時が来る。
いつかの自分を想い出すように。

「これは俺の持論だが、ね」

ふっと

我に返ったようにこちらをみて、照れくさそうに頭を掻きながら彼はいった。

何かを思い出していたような表情は消え、最初に浮かべていた少し面倒くさそうな、やる気のない表情に戻っている。

「名前、ね」

親子のような、姉妹のような、そんな愛しさを抱える花の園に目を向ける。

巡るたび、時が流れるたびに、顔を会わせてきたものたち。

全てを知っていると思っていた。

全てを知られていると思っていた。

呼び合うことなど必要ないと思っていた。

季節ごとに訪れた花々の里。

何度も出会い、別れてきた四季の巡り。

それぞれの性格を持ち、それぞれの美しさを持っていた花々たち。

「名前」

もう一度呟いた。

「名前は記号、けど、家族や友達、恋人つてのも一種の記号」

彼はまた語る。

「なら、特別なものをつくってもいい」

そう思う、と楽しそうに、それでいてどこか寂しそうな眼で一面の色を眺めながら彼は呟く。

おそらく、自らの大切だったもの、特別な名前をもっていたもの、思い返しているのだろう。

懐かしく、美しく胸に残り、もう絶対に届かない過去の記憶。

その名を思い出すたびに巡る、追憶の旅。

私は忘れていくのだろうか。

忘れていたのだろうか。

季節が巡るたびに足を踏み入れた友人たちのことを。

季節が巡るたびに散っていく家族たちのことを。

巡るのが自然なことだとして。

四季それぞれに咲く花たちを、同じ花として同じものとして扱って
いなかっただろうか。

「ふふふ」

なぜだか、笑いがこみ上げた。

「人を嫌って、名前など意味がないものとして 結局のところ、

一番それに縛られている」

自分の滑稽さに、自分の愚かさ。

「この子達をまっすぐに眺めていたつもりで、自分の気持ちを押し
付けた」

人間への対抗心から、この子達を守るべきものとして

この子達に近づこうとしていなかった。

「私が一番、この子達を」

「その先は違うんじゃないか」

次々と流れでた自嘲の言葉が、せき止められる。

その留め金を揺らした当人によって。

「その先は、あんたにとっても こいつらにとっても失礼だ」
否定を否定する。

強い言葉。

笑い顔が泣きそうに見えた。

何かに触れてしまった。

そうなのだと思う。

信念だったのか、矜持だったのか。

悩みだったのか、痛みだったのか。

それはわからない。

けれど、少しだけ

自分の言葉が何かに触れてしまったのだと思う。

蓋が外れて、溢れ出す。

そこに仕舞われていたもの。

それは

ずっと抱えてきた引っ掛かり。

抱えたまま、考えないようにした、押し込めたきたもの。

けれど

「あなたがしてきたことも真実だろう」

何かに気づき、自分が間違っていたと思っても、今までしてきたことが

「今まで、こいつらを大事に想って、大切にして」

そんな気持ちをずっと抱えていたのだとしても

「それを特別にしてきたことは」

ずっと持っていた気持ちも

「真実だろう」

それは真実だ。

守ろうとした。大事にしようとした。対等であろうとした。

そのまま、その美しさを見ようとした。

友人として

家族として

「間違いじゃない　もう一つ、違う方法を見つけたというだけだ」
『これでもいいんだし、あれでもいいんだよ。そう思う気持ちがあれば、なんでも真実になる』
昔、教えてもらった言葉。

遠い昔に亡くなった友人の言葉。

その名前は確かに自分の中に残っている。

それが自分なりの大切にする方法。

「それがいいと思ったなら、今までに重ねていけばいい」
自分なりの形に、着こなせていくように。

「大切にするつてのは、そういうもんでもいいだろう」

そこまでいってしまったから、柄にもなく語ってしまったことに気づき、誤魔化すように笑う。

それまでの真剣な雰囲気が崩れ、急に適當になった言葉に驚いたのだろう。

女性は虚を突かれたような表情になった。

「ま、俺はそうしてるだけってことだ」

参考程度に、いつもの表情へと切り換える。

真剣さの欠片もない、ふざけているような顔。

こういう適当なほうが、自分らしい　今の、自分らしい。

「ツク、フフツ」

こちらの様子がおかしかったのか、女性は笑い出した。

「ここまですべておいて、それはないのじゃないの」

先程までの、何かが崩れてしまったような、今までの自分を否定してしまいそうな表情はなく。

ただ、おかしそうに笑っている。

「あんまりかつこよく言いきすぎたんでね。期待させちゃ悪いだろう」
責任もてませんからね、とこちらにも笑い返す。

そうして、その色を眺める。

まだ名前もない花たち。
特別にされてきた特別なものたちを。

なぜだか愉快だった。

なぜだか楽しく思えた。

間違っていたと、歪んでいたのだと、そう思って揺らぎ
全てを後悔してしまいそうになったのに
今、笑っている。

間違っではない、また新しい発見があっただけ。

それをまた私の形に加えていけばいい。

押しつけてきたと思うなら、今度は相手を知ろうと思えばいい。

押しつけてきた時があるからこそ、気づけなかったことを。

だからこそ、わかることがあるのかもしてない。

近づいて、離れて、また近づいて、遠ざかる。

関係というのはそういうもの。

少しずつ、特別になっていくものなのかもしれない。

負の方向に傾きすぎていた針が少しもどり、混乱したままでは思い
浮かばなかっただろう考えに辿りつく。

針が揺れなければ知らなかった想い、揺れなければ想えなかった距
離。

退化か、成長か、それはわからない。

けれど、気分は悪くない。

私は今笑っている。

私の中に生まれたものを　楽しんでる。

「あなた　名前は？」

針を揺らした存在に問いかける。

今は、軽薄で、のらりくらりといった印象しか持つことのできない表情で

なぜか時折、途方もない寂しさを、闇を抱えているような表情をもつ男に。

「今は　」

男は、答えようとして少し思案気な顔となった。

答えたいのだが、答えが見つからないといった表情。

「答えられないのかしら？」

「いや、そうしたいんだが　俺も今は名無しのようなもんだから名前募集も保留中だしね、とよくわからないことをいう。

その困ったままの表情を見て

「なら、自己紹介も保留ということにしましょうか」

そんな提案をした。

「それまでに、この子達の　この場所の名を決めておくわ」

そして、自らの名も　自分という存在の記号を

「おや、もうここにはこないかもしれないぜ？」

腰を下ろしていた草原から立ち上がり、こちらに向き直りながら男はいった。

その表情を正面から眺める。

「来ないつもりなのかしら、こんなに美しい景色を一度だけで満足できるの？」

花畑を背にするように立ち、両手を広げていった　その姿達を誇つて。

少し、きよとんとした表情をした後、男は口角を上げる。

「くくつ、そりゃ確かに勿体ない」

我慢しきれなくなつたように、頭を抱えるようにしながら笑い声を上げて、心底楽しそうな表情を浮かべる男。

「このたくさんの太陽を眺めになら、遠い道のりも吝かじゃない」

太陽

この花々の姿を指したものだろう。

たしかに、この強く雄大で、美しい姿は空に浮かぶ日輪のようにも見える。

悪くない表現だ。

こんな話をしていなかった自分が聞くと、他のものに例えた時点で怒っていたような気もするが 本当に、悪くない。

そんな自分に可笑しさがこみ上げて、同じように笑い声が漏れた。

風が吹いて

黄色い、太陽を模した様な姿が揺れる。

大事に、特別にされた花々が揺れる。

ふむ、少し危なかつたかな。

荷物を背負い流しながら考える。

ずっと受け流していた。

上手く誤魔化してはいたが、一つ間違えば、それが合図となっていたかもしれない。

それほどの殺気。

問答無用で、踏み入ったものを狩る。

妖怪らしい感情。

けれど、こちらは人間で、そんな感情は持ち合わせていない。それに

殺し合いなど、とつくの昔に飽いている。

向けられる殺気を上手く流し、花について話しを始めると気が逸れたので、そのまま戦の雰囲気徐徐になくしていく方向に語り続けた。

まあ、途中で懐かしいことを思い出して、当初の目的など忘れて話していたが……

語るに落ちるとはこのことだろうか。

人生観や昔語りは年寄りの悪い癖だ。

まあ　なんとかなったから良かった。

向こうも何か感じるものがあつたようだし

「　に、しても、あの悪戯兎が」

確かに面白いものが見れたが、一歩間違えば面白いものにされるところだった。

剣呑なことをさせてくれる。

まあ、それでも殺し合いなんてものにならなかったのは、あの兎の幸運のおかげだったのかもしれない　　ってことで

「一応、重畳ってことだろう」

そういうことにしておこう。

一つ呟いて

一つ区切りをつける。

木々の葉が揺れる音がして、背中側から風が通り抜けた。

微かにだが、あの花の香りがした気がして、少し微笑む。

名前は、いつ聞きにくるかな

それまでに自分の名も決めておこうか。

そんなことを考えながら適当な方向へと足を踏み出す。

また一つ

関わりを得て

陽に向く花（後書き）

感想・ご批評お待ちしております。

評価 p t お気に入り登録の方、ありがとうございました。

眠る居場所（前書き）

間の話。

結局のところ、始めと終わりを語っておきたかっただけのような気がします。

眠る居場所

流れ込む場所。

確かにそうだったのだろう。

その場所は丁度いい場所だった。

湧き出る水が川となり、やがて海に流れるように。

水は高きところから低きところへ流れる。

ならばこの世界に流れる力にも、やがて流れ着く場所があるのだろう。

龍脈、龍穴

生門、鬼門

生命の流れ、星の命脈

気、霊、妖、体という力

この世界を創るもの

巡り、巡り、

やがて何処かへと

そんな場所なのかもしれない

世界に還る前の一時

それが眠る場所

幻想が至る

天然の場

また、知らない場所か。

周りの木々を見渡しながら考える。

「何か……おかしいな」

呟いた言葉は鬱蒼とした木々の間へと消えていく。

おかしい。

長年の経験が告げている。

確かに、随分旅をしていない分、道や景色・人里の位置などが変わることはあるだろう。けれど、何百年・何千年という時間がかからなければ地形が変わるということは滅多なことではありえない。

天変地異 地割れや噴火・洪水など、しかも余程の大規模のものが起きない限り、だ。

けれど、それほどの規模のものならば自分の村への余震、余波ぐらいは来てもいいはずだ。自分の知っている限りそんなものを感じたことも聞いたこともなかった。

「なのに」

目の前にあるのは、限りなく続く緑と 勾配高く続く坂道。

「山……か」

何十、何百年前かの記憶ではあるが、ここここまでの高さの山はなかったはずだ。

先程通り抜けた竹林、それはまだ理解できる。

植物の生態が早期に入れ替わるということは、時には起こることもある。けれど、平地が山地に変わることなど、長い年月を過ごしてきた中でも 数度あったかどうか。しかも、余程特別なときのみ。

天上の奴らが関わっているようにも思えないが。

昔見た光景を想い出す 滅びた世界の中で新たに創造される世界。

「 まあ、今は関係ない話だろう」

その時に感じた神々しさや力強さは感じない。

どちらかというところ、自然現象やそれに近い何かという感覚だ。意図があつてというよりも勝手にそうなったという印象を受ける。

それに

濃い

この土地を包む力というものが強い。

龍脈や霊地、力の焦点そんな場所なのかもしれない。

空気中に流れる力、世界を構成している一部とでもいうべきもの、そんな空気と同じように存在するようなもの。それが、濃い。

いつもはただの湯に浸かっているという感じだが、ここでは温泉に使っている感じというか。

俗にいうと 何か起きやすそうな土地だ。

ここでなら、何かが起こってもおかしくない気がする場所。

早く抜けたほうがいいな。

そう思いながら、足を速める。
経験上、こういう場所では

「ケキヤケー」

「………こういうのが出るんだよな」

沈んだ声でため息をついた。

奇声と共に現れたのは獣のような姿。

爬虫類のような皮膚と犬のような体を併せ持つ異型の形を持つ異形のもの。

そう

「何のようだい…妖怪さん？」

変化というよりも獣に近い、そんな獣型の妖怪。

林をかきわけて飛び出してきた姿を見据えながら、なるべく刺激しないように言葉を口にする。

なるべく、ここで騒ぎを大きくはしたくない。 おそらく限り
がなくなる。

「………ラヘッタ」

一応、言葉を話す以上の能力を持っているのか、微かな返事が返る。
しかし、微か過ぎてうまくききとれない

まあ、予想はできているが

人間の臭いを嗅ぎつけて飛び出してきた。
いかにも食べてませんというような痩せた姿。

「ハラヘッタ……クウ！」

「まあ、そりゃそうか」

妖怪として、化け物として、襲い掛かってこないほうがおかしい。
特に、獣としての姿を残す小妖。

それは本能に従って生きる獣に近い。

餌を目の前にすれば、喰らいにくるのは当然のこと。

「っ」

軽く息を吐きながら、襲い掛かってきた爪を後ろに飛びのくことで
避ける。

見かけ通りになかなか

「っ……っ」と

速い

第二撃、第三撃が追いかけるように、飛びのいた先へと襲い掛かっ
てくる。

一つ目を上体を逸らすことで、二つ目をそのまま後ろに倒れこむよ
うにして避ける。

飛び掛ってきた相手は目標を見失い、こちらの上方で無防備な腹を
晒すことになる。

ちよつと眠つてもらう。

そう心に呟いて、そこへ掌底を叩き込む。

その一瞬手前

獣の頭部が爆ぜた。

こちらの手の触れる直前、気絶させる程度の力を込めた一撃の、その直前に。

「……！」

力を失い、崩れ落ちるようにこちらにのしかかる妖怪の体。

「いやいや、危なかったね。若い人」

落ち着いた、静かな声がした。

妖怪の血に塗れたこちらの姿を見つめながら、初老の男がゆっくりと姿を表す。

人の良さそうな笑みを浮かべながら、こちらへと近づいて、大丈夫か、と声をかけた。

妖怪の頭が砕ける寸前に感じたのは、僅かな霊力と白い札。

文字に力をこめて放てるということとは、この男は法師なのだろうと見当をつけた。

そして、目の前に崩れ落ちた妖怪の成れの果てに、視線を下ろした。

「ほんに危なかったのう若いの」

碗をかつ込みながら話す老人。

食べながら話すので、米粒やらつばやらが周りに飛んで少し汚く感じる。

「まったく、法師様がおらんかったらどうなってたことやら。今にも食われる寸前じゃったんじゃぞ」

こちらに箸を向けて、周りに集まる他の者たちに説明する老人。

どうやらあの時、法師の後ろいたらしい。身振り手振りで大げさに妖怪がやられる様を説明している。

周りのものは驚嘆したり、感心したり、その話に熱心に聞き入っている。

「まったく、あの森に踏み入るなんて自殺行為も甚だしい。法師様にはよう感謝せえよ」

現場にいた他の連中は侮蔑の視線をこちらへと向けて、高圧的な態度をとっていた。

どうやら、村人たちの何かの行事を邪魔することになってしまったらしい。

そのせいで、あまりいい印象がもたれていないようだが　あの法師様の手をわずらわせてしまったことが、その連中の怒りの原因のような気もする。

「まあまあ、そんなとこにしておいてやんなさい」

奥の畳、一段上の位置から低い、穏やかな声がした。その声で、ざわざわと騒ぎながら話していた人々がぴたりと黙る。

「何も知らない旅人さんだ。あの森のことも知らなかったのだろう」それじゃあ仕方ない、穏やかな表情で全員を見渡し、他のものよりも少し良品に見える椀から水をすすする。

広間からは「さすが法師様」「お心が広い」などの感嘆の声が上がった。

ここは、村の集会場。

人里の皆が集まり、これからのことや新しいことを相談していく場所。

今回は、行事の進行をとめた、事の原因である自分のことを調べるために使われている。

「法師様の温情に感謝しろよ」

若い男が吐き捨てられるようにそういつて、こちらから離れていった。

その後ろ姿を少し眺めてから、上座に座る法師の方へと目を向ける。どうやら、行事が中止になってしまわないか不安になっている村人たちに、何か話し地得るようだ。

「さてさて、皆の衆。あれは明日行えばいいこと。今回は予行ということでいいじゃないか」

いい練習になった、と法師が笑い、他の村人たちも安心したように笑う。

法師様がいったことであるなら、それでいいのだろう。そんな安心感に満ちている。

本当に、慕われている。

あの法師のいうことを、村の人々たちは素直に受け入れ、信じきっている。

確かに、あの妖怪を滅した手並みといい、先程までのふるまいをとつても、十分な力と、その人柄のよさが伺える。

けれど

「なあ、兄さん。あの法師さんは何者なんだい」

近くに座っていた男へと声をかけた。

先程の男と違い、あまり敵意を感じられないのんびりとした様子の男だ。

「ああ、法師さまのことかい」

こちらを振り向いた男は、のんびりとした口調でこちらの質問に答える。

「まあ、元々はあんたと同じ旅人だったんだがねえ。丁度この村にいるときに、森で女の子が妖怪に襲われたときいたら、ぱっと飛び出してってそれをやっつけてくれたんだ」

あれはすごかったねえ、と思いつくように目を細める男。

「ええとねえ、あとは……」

「なんだ、法師様の話か。なら、俺にもさせろ！」

話を聞いていたのか、隣に座っていた男が割り込んでくる。

「法師様はすごいんだ。村のすぐ近くに縄張りをつくってた妖怪たちを追い払ってくれたし、森で妖怪に出会わない呪いまじないも教えてくれた」

「おかげで美味しい山菜も採りにいけるようになったねえ」

「毒虫の退治方法も教えてくれたし、病よけのお祓いもやってくれるんだ」

「おかげでぐっすり眠れるよ」

強く法師を讃える男とのんびりと褒める男。

なんだか妙な感じの二人に話を振ってしまったようだが、一応、法師がなかなかの腕だということは伝わってくる。

呪いにお祓い、効き目は人によってまちまちなものだが、結構な効果を発揮しているらしい。

札にして飛ばした霊力といい、力だけでなく、なかなかの技術も持っているようだ。

男二人は他にも様々な法師様の逸話を述べ、勝手に盛り上がり続けている。

にしても

妖怪を追い払った、か。

それを話半分に聞きながら、一箇所引つかかった部分について頭を巡らした。

縄張りにしていた妖怪。

感じからして、一種で群れをつくって暮らす獣型の妖怪だろう。

人型の妖怪ならば、余程の力を持たない限り、村の近くへと縄張りなどつくらないだろうし、そういう妖怪は、人のように自らの家

住居といった感じのものを持つことが多い。

多分、この村に脅威を感じなかった森の妖怪が徐々に行動範囲を広げていた、そんなところだろう。

一度痛い目を見れば、そういう妖怪は森へと戻る　　獣と同じだ。

「それで、今日の行列は一体なんだったんだ？」

話を続けていた二人を止めて、違う質問をした。

「ああ、追いついた妖怪はまだ森にいるようだからねえ」

「また村にやってこないように……」

「旅人さん、さっきはすまなかつたね」

その言葉を遮って、柔らかな声が間に差し込まれた。

見ると、先程まで村人たちと談笑していたはずの法師が目の前でやつてきていた。

「おや、話の邪魔をしてしまったかな、と告げられた言葉に慌てて否定する村人二人。」

「すまないが、旅人さんに話をしたいんだが」

ン。

獣の鳴き声のような微かな音が響いた。

なぜだか妙な顔をして、男の顔が歪む。

「すまんね。こんなところまで来てもらって」

気を悪くしたのだろうかと思っただけで、なんでもないと否定された。

「で、なんです。話つてのは……法師さん」
「いや、ただ元旅人として話を聞いてみたくてね」

自分も旅をしていた身だ。

同じように旅をしている者の話をきいてみたかった。

「あそこではあまり自由に話せないだろう」
慕ってくれるのはわかるが、村人たちは少し自分を持ち上げすぎる。

男もあそこで話すのは、居心地が悪いだろう。

そのために集会所の外、村の入り口辺りまで移動してもらった。
ここなら、あまり人は来ないし、村の見張りにもなる。

なるほど、男は納得したように呟いた。

そういつてから、旅人が通ってきた森の方を眺める。

なんだか、不思議な男だ。

夜の森を眺める男の表情を見ながら、そう思った。

自分よりずっと若く見えるのに、その表情は妙に達観しているような趣きがある。

枯れてしまっているというほどではない。けれど、何かを超越しているような、そんな人間らしくない雰囲気。

ずっと長い時を過ごしてきた老人に似た表情、そういつてはいい過ぎな気もするが、それが一番近いように思える。
助けたときは気づかなかった気配。

妙に 胸がざわついた。

「といつてもこっちも最近村から出たばかりでね。できる話なんてしれてるよ」

「あ、ああ　そうだったのかい。旅慣れているようだからつきり随分旅してきたのかと思ったが」

少々思考に浸りすぎていたようで、男の言葉に一瞬驚いた。
なんだか、妙な雰囲気にもまれていた。

「それより、法師さんの話を聞かせてくれませんか。結構なお力をお持ちなのに、なんでこんなところにいるのか　　なんで旅人をやっていたのか、なんてのをね」

男は、にこりと人当たりが良さそうに笑う。

「私の話しなんぞ、つまらないものだよ」

「いえいえ、こちらの旅の参考にもね。見聞を広げる旅なんぞと洒落込んでいるもので」

慈善に向かう法師様の話を、とニコニコと笑う男。

その表情に後ろ暗いところは見当たらないが、少しだけ、なぜか薄ら寒いものを感じた。

多分、気のせいだろう。

「　　村の人たちに話せないことも、通り過ぎる旅人になら話せるかもしれないよ」

付け加えられた言葉。

　　なぜだか、少しだけ心が揺れる。

「そんな良い話ではないよ」

そう一言断って、始める話。

もしかしたら

自分は、誰かに話してみたかったのかもしれない。
自らの話を

誰かを見捨てたくなくて

誰かを守りたくて

誰かを喜ばせたくて

誰かを悲しませたくなくて

それが嬉しくて

そんな単純な話。

人間が守りたくて、妖怪が敵だった。

それだけの話。

「ただ、嫌だったから、守りたかった、か」

「つまらない話だろう」

そういつて笑う法師。

「私は、自分の好きなようにしていただけだ」

その姿に、村人たちの前で見せていたような強さは感じられない。
ただ、自分勝手に生きてきた姿、我を通してきた姿がある。

「なるほど、ね」

納得するように呟く。

人として、悩む者を眺めながら

「村人たちは、こんな自分勝手な者に騙されておるのさ」

自嘲するようにいった言葉は、すこし寂しげでもあった。

慕われ、崇められるからこそ、感じる歪み。

自分が思う自分と、他人が考える自分とのずれ。

それは、重くなる。

自分が背負える以上に、重くなる。

それでも

「後悔はしてないんだろう」

その言葉に、法師は微笑む。

「ああ、私は後悔しとらんな　重くとも、辛くとも、自分のやり

たいことをしていることにはかわりない」

どこまでも自分勝手に仕方ないな、そう呟く法師。

けれど、そんな自嘲を含みながらも、その表情は穏やかだった。

それで納得している、それを背負う覚悟はできている。

たとえ、それに潰げんそつされることになろうとも、覚悟はできている。

なら　それでいいのだろう。

自分勝手に人を救う、村を守る。

高尚な理想を持たずとも、崇高な目的を持たずとも、それで救われ
ている者たちがいることは確かなこと。

騙しているのかもしれない、勘違いされているのかもしれない。

それでも、そうしたい。

そんな勝手さ。

懐かしい。

少しだけ、そう思った。

ン

先程よりも近くなった声に、意識を切り換える。

「きたか」

低く呟いて、村の入り口の正面、鬱蒼と茂る森の方へと向き直る。

「なんだ？」

法師がこちらの様子が変わったことに気づき、疑問の声を上げた。しかし、すぐにその様子に気づいて、視線を森へと向ける。

静かな夜。

村の入り口に掲げられた松明と月明かり一つの明るさの中。

その見渡せぬ森が　ざわめいている。

何かが近づいてくるような気配。

たくさんのものが蠢く感覚。

草むらが揺れ、一つの影が躍り出る。

一つ、一つ、また一つ。

まるで森全体が動いているかのように、

草が揺れ、木々が揺れ、葉が揺れて

獣の影が躍り出る。

「な……こ、これは…」

うめき声を上げるように、声を上げる法師。

「なるほど、思った以上に多いな」

周りを取り囲むのは、獣の群れ。

爬虫類のような皮膚と犬のような体を持つ妖怪。

森で出会った妖怪と同種のもの。

「こ、これは一体……」

「縄張り争い」

疑問の声を上げる法師に、低い声で答えた。

「な、縄張り？」

「ああ」

相手はこちらの様子を伺い、まだ襲ってくる様子は見せない。その様子をじっくり観察しながら、法師に説明する。

「あんたらは、あいつらを縄張りを侵したからだろう」
村人の二人の話を思い出す。

多分、最初はいづらの方が人間の縄張りに入ってきていた。そこを追い出され、住処である森の方へと戻っていった。それはまだいい。

妖怪も、新しい狩場を失っただけですむ話だ。

元の居場所さえあれば、今まで通りに生きていける。けれど

「なあ、法師さん。あの行列は 妖怪退治のためのものだな？」
自分がであった行列の様子を考えながら問う。

あの村人達が持っていたのは、札や竹やりなど、あきらかに戦うための武器を持っていた。

なら 意味することは、妖怪退治。そのための行列。

「あいつらの生活圏に攻撃を仕掛けたなら 当然、戦争しにきたんだろう」

うなり声を上げる獣たち。

その目は、獣の目ではない。

ただ、生きようとする目をしている。

生きる場所を守るため、か。

もし、自分たちの居場所が失おうというとき、それが獣なら、さらなる場所に逃げるだろう。彼らは、死に挑むような真似はしない、自分達が生き残ることを優先する。

けれど、いくら獣に近くとも、妖怪は違う。

恐れられなければ、ただ狩られる立場になってしまっっては、生きてはいけない 存在してられない。

なら、挑むしかないのだ。

自らたちが滅ぶかどうかの賭けでも、戦うしかない。

居場所を失えば、自らたちは消えるのだから

「　　！」

言葉にならぬ声でほえる獣たち。

それは存在をかけた叫び。

「なあ、法師さん　あの行列は、妖怪退治のためのものだな」
そんな絶望的な状況の中、問われた声は落ち着いていた。

まるで、この獣の群れを気にしていないような　妖怪を恐れて
いないような。

「あいつらの生活圏に攻撃を仕掛けたなら　当然、戦争しにきた
んだろう」

続いて呟かれた声も、落ち着いたものだった。

けれど、その言葉端には、なぜだか少し棘があるように感じられた。
まるで、私達にんげんが悪いといっているような、微かな棘。

「　　！」

獣が発した声に身が竦む。

余計なことを考えている暇はない。

懐からあるだけの札を取り出し、指に構えた。

「　村の皆に逃げると伝えてくれ」

ここは私が抑える。命に代えても、守り通す。

そんな死を覚悟した想い

「逃げてもいいんじゃないのか」
その決意に罅を入れるように、男が呟いた。

「な、なにを……」
こんなときに、と続けようとした言葉は、男の言葉によって遮られる。

「どうせ勝手にやってきたのなら、別に逃げてもいいんじゃないか」
そんな誘い。

どうせ、自分勝手にやってきたことなら、自分勝手にやめてしまえばいい。

微かな誘惑。
自分一人ならば、逃げられるかもしれない。村人たちさえ見捨ててしまえば。その間に逃げることができる。生き残ることができる。

自分勝手に、逃げてしまえば

「逃げられるかも 生き残れるかもしれない」
こちらに背中を向けたまま、ささやかれる言葉。
生存本能への 自我への直接的誘い。

心が揺れる。

生きたいという気持ちが覗いてしまう。

内に押し込めたものが

勝手に祀り上げられ、勝手に慕われて、
勝手な自分を創り上げた村人たち。
背負わされた重荷を捨てたとしても、それは自業自得

なら、逃げてしまっても

「それはできん」

しばらくの沈黙の後、絞りだすように口にされた言葉。

「逃げたくないのかい？ 多分、生き残れないが」

「逃げたいよ、逃げて生き延びたい」

声には力がなく。

指先は、僅かに震えている。

村人に頼られた 慕われる法師の姿、そんなものは微塵も残って
いない。

そこにあるのは、怯える人間の姿
妖怪に怯える、ただの人間の姿

「それでも、逃げたくない」

矛盾する言葉。

「逃げたいけれど、逃げてしまっても構わないと思うのだけれど
逃げたくない」

理屈の通らない考え。

「生きたい　でも、死なせたくない」

それは叶うはずのない、都合のいい答え。
身勝手な、どうしようもなくわがままな
とても人間らしい想い

「くくっ」
思わず笑いがこみ上げる。

ただ、揺らすだけのつもりだった。
どちらにしても、することは同じだったが、なんとなく試してみた
かった。
その重さを

自分勝手な考えによって成り立った勝手な関係。
それだけなら
いつか、間違いとなってしまうかもしれない。

けれど

「迷わなくても、悩まなくても、それはそれで心配だったん
だが」

背中を向けたまま、獣の群れを見せたままに呟いた。

自分を犠牲にする尊さ

生きようとする貪欲さ

過ぎてても、足りずとも、どこかで歪みができる。

「 いい答えだ」

間違っけていても

理屈は通っけていなくても
だからこそ

「面白い」

錆びついていた歯車が回りだすように、
久しい気分が満ちる。
永い時を生きる中で、
少しずつ擦れて、
見えづらくなるものが
共振するように

これだから、人との会話は面白い

忘れてしまひそうな

薄れて消えてしまひそうな

そんな火に油が注がれて

また、“人間”を思い出す

「 さて」

久々に味わった気分、
笑みを浮かべながら正面を見る。

「妖怪さん方、悪いが一宿一飯を受けていてね」

こちらを睨みつけ、
周りを取り囲むように広がる獣に告げる。

「法師さんの答え

実現させてみようか」

圧巻、だった。

妖怪たちが牙をむき、男に飛び掛った獣たち。

数十にもなるその数が今、全て地面に臥せられ、そこから中に転がっている。

「な、こんな……こと……」

ありえるのだろうか。

あれだけいた獣たちのほとんどが壊滅し、まだ動けるものも怯えて動かない。

それほど、圧倒されてしまうほどの強さ

「なあ、法師さん」

そんな円の中心で、男が口を開いた。

「あんたが妖怪を退治しにいこうっていったのか？」

倒れた妖怪を見下ろしながら話す男。

「ああー疲れた」と呟きながら肩を回しているその姿は、本当にただの人間といったもの。

妖怪すら恐れさせている者の姿とは思えない。

「い、いや、違う」

そんな違和感を感じながら答えた。

「村人たちからの提案だ。この森から妖怪たちを一掃すれば、この前のようなことは起こらない。この辺りは安全になると」
そういう計算だった。

この辺りの森に巣くう妖怪の群れ、それさえ退治すれば、この辺りずっと住みやすくなる。

そんな単純な考え。

「多分、こいつらを全滅させても意味がない」
けれど、男は言った。

「この辺りは霊穴　龍脈とか呼ばれるような力の集まりやすい場所だ」

地面を指すように、軽く片足を上下させる。

「そんな場所には妖怪　怪異めいたものが集まりやすい。この妖怪を全滅させても、また違う妖怪が現れるだけで、結局のところ終わりがない」

言いながら、しゃがみこんで妖怪の体に手を触れる。

何かを確認するように

「確かにこいつらは人間の縄張りに踏み入った。けれど、妖怪の縄張りに人間が踏み込めば、また今日のようなことが起きる」

静かに呟かれた言葉。

「なら　どうすればいい！このまま妖怪に怯えて暮らせと？」
理不尽な話に、思わず声が大きくなった。

それは村人たちの願いだ。
そんな簡単に諦めきれることではない。

「ああ、その通りだ」

「な……」

それに対して、男が淡々と言い放った言葉に、呆然とした。

「ただ」

絶望するこちらに対して、男が表情を崩す。

「近づかなければ害はない」

微笑みながら告げられた言葉に、また違う意味で呆然とする。

「お互いの縄張りに入り込むから襲われ、殺しあう羽目になる。なら、お互いの縄張りに入らなければいい」

両手を広げて、男は獣たちを示す。

「し、しかし、森に入れなければ村の生活が……」

「今まではどうしてた？」

反論しようとした言葉が遮られる。

確かに、妖怪が森から出てくるようになるずっと前から、村の人々はここで生活をしてきたと聞いている。その頃も、妖怪によって多少の被害は出ていたが、森の奥の方まで近づかなければ襲われることもごく稀なことだった。

村人たちも、群れに対してならともかく、妖怪一匹一匹に対しての対策は心得ている。

「けれど、また妖怪たちが村を襲ってきたらどうする」

こちらが人間の縄張りを守っても、相手がそれを守るとは限らない。

攻め込まれば、負けるのはこちらだ。

「だ、そうだが、妖怪さん」

そういつて男は倒れ臥す妖怪の一匹に視線を向ける。
すると、その体が動き

「キズイテイタカ」

声を上げた。

「な!？」

「見たところ、あんたが群れの頭か」

動揺した様子も見せず、正面に立つ獣を見つめる男。

よく見ると、その妖怪は傷一つ負わず、他の個体よりも多少大きな
体躯をしている。

「油断シタトコロヲ嚙ミ殺シテクレヨウト思ッテイタノダガナ」

「そりゃ怖い」

犬歯をむき出しにして睨みつける妖怪に対して、男が飄々と返す。

妙な光景。

死んだ振りをしていたらしい妖怪とそれを見抜いた男が互いに正面
に立って話をしている。

「で、もし人間側があんたらの縄張りを荒らさないとするならどう
する?」

「ワレラノ居場所ガ失ワレナイナラバ、コノ村ヲ襲ウ理由ハナ
イ」

妖怪の頭が静かに返答する。

「タダ、人間ヲ襲ワナイ訳デハナイ、森デ人間ヲ見ツケレバ狩

ルノ八当然ノコトダ」

付け加えられた言葉に、思わず札を構えたが、男が手を上げてそれを制した。

「その時は、返り討ちにあっても文句はないな」

「アア、我ラ八獣。弱肉強食ノ掟ニ従オウ」

威厳を持って放たれた言に嘘はないと感じる。

し、しかし

頭が混乱する。

「だ、そうだが法師さん。妖怪一匹程度なら、素人でもあんたの札があれば遠ざけられる。もし、運悪く命を落とすことになっても、それは森の獣に襲われる可能性と大差ない」

語られる言葉、それに嘘はない。

魔よけの札や呪いさえしていれば、村人たちが襲われることはほとんどないだろう。

むしろ、熊や狼に襲われる可能性の方が高いかもしれない。

けれど、けれど

相手は

「妖怪」

人を襲い、人を食らい、人に害をもたらすもの。

そんなものを 信用できるのだろうか。

正面には、獠猛な牙を持つ姿。

恐ろしい力と歪んだ姿をもつ獣。

混乱が巡り

逡巡が襲い掛かる頭の中に

「 なら、全て殺し尽くすまで戦うのか」
冷たい言葉が囁かれた。

光りを通さない暗く閉じた森を抜け、やっとのことで先の見渡せる高原へと出た。
薄い月の明かりの道は、森の闇に慣れた目にとっては十分な光源となる。
が、

やはり夜の出立は無茶だったかもしれないな

一刻ほど前の自分を思い浮かべて、少しの後悔がこみ上げた。

でもまあ、あそこで村に泊めてもらおうのも……な

獣の頭が吼え声を上げ、それに反応するようにして倒れていた妖怪たちが次々と立ち上がった。動けないものも、他のものが二匹がかりで抱えるようにして移動していく。

そして、全員が森の中へと消えていくのを確認すると、その一際大きい獣はこちらを一睨みするようにしてから、自分も闇の中へ消えていった。

暗に　　違いぬように、という念を込めて

それを見送る法師は、複雑な顔をしていた。

間違っているのか、正しかったのか、わからずに選ばなければならなかった選択。

「これでよかったのだろうか」と法師はこぼし

「さてね。　　あとは、自分たち次第だろうよ」と自分は告げた。

そんなやり取りの後、すぐに村を出た。

これ以上は村の中での話しになるだろうし、あれだけのことをやってしまったあとに、自分はただの旅人ですとは通せないだろう。この先旅を続ける以上、あまり目立ちたくはない。それに

「あら、奇遇ですわね」

そんな夜道を歩く道に、不意に声がかけられた。
同じ高さの地面ではなく、星の浮かぶ中空の中から

「ああ、奇遇だな。八雲紫、さん」

互いに、まったくそう感じていない口調で告げた言葉に、どちらともなく微笑んだ。

相も変わらず、互いに性格が悪い。

「今日はお茶は用意してないが」と軽口を叩くと

「まあ、残念。それじゃあ、お話のお相手でもしてくれないかしら」と返された。

そうして、適当な岩の上へと腰を下ろすこととなる。

向こうは何やら空間の裂け目のようなものから上半身だけを出した状態で、こちらの少し前辺りに浮かんで、こちらを見下ろす。

「で、何の話だい？」

「あらあら、せっかちな」

急かすようにいった言葉に、少女は笑って返す。

「まあ、こっちも寝床を見つけないといけないんでね」

夜行性の妖怪と違って、こちらは夜眠る方だ、と告げると、少女も

「じゃあ単刀直入にきくわ」と切り出した。

「人妖の共生関係、あなたは本当に成り立つと思うの？」

興味深げに告げられたのはそんな質問。

多分、というよりもやはり、先程のやりとりを聞いていたのだろう。先程のやり取りに対する疑問。

それに対して
さあね、と欠伸をしながら答えた。

保障なんてできるはずがない。

その様子に「あらあら」と微笑む少女。
それを眺めながら、目じりにこみ上げた涙を指で拭う。

「少なくとも、お互いの邪魔をしなければ、お互いの場所に踏み込まなければ、それなりにやっていけるんじゃないか」

あとはそれを守れるかどうか、それだけ
やる気なさ気についてた言葉に対して、少女が笑う。

「無責任なのね」
「一つ提案をしただけ、それを選ぶのはあいつら自身」

偶然、居合わせただけ
そんな小石が当たった程度で崩れてしまうなら、どのみちあの村は
もっていなかっただろう。

集まりやすい場所、溜まりやすい場所であるからこそ

「あんな場所にあるんだ。なら、工夫して生きるしかない」
そう思う。

あの場所に居続けるなら、隣人はずっといることになるだから

「厳しいわね」
「生きるってのは厳しいものだろう」

どうにかして間に合わせながら、ぎりぎりやっていくしかない。
それがあある意味、一番楽な生き方だ。

「時代に、状況に、気分に合わせてながら　　なんとか自分なりに
やっていく」
そういうものだ。

「それは貴方の人生観？」
「いいや、ただの経験譚　　ただ、今の気分でしゃべってるだけ
のね」

そんな適当な答えに、眉を顰める少女。

けれど、そんなものだと思う。

記憶の中にあるのは

「経験やしきたりに縛られないなら、新しいものをつくっていくし
かない」

それに囚われて抜け出せなくなった人々

「新しいものをつくるなら、それに対する覚悟を持たないといけな
い」

前へと進み、失敗に絶望してしまった人々

「そうやって、手探りで作り上げていくものだろう」

それでも、生きる人々。

「生きる方法なんて、そんなもんだ」

空を眺めながら、一人ごとのように呟いた。

「それも、今の気まぐれも言葉なのかしら」
少女は微笑みながら問う。

「ああ、その場限りの生き方論」

保障はしません、とこちらも笑って返す。

通り過ぎるのは、夜の風とどこか遠くで聞こえる獣の声。

月の位置は西へと沈み、後数時間ほどで夜が明けることがわかる。

「むづ……もう寝ぐらを探す時間もなさそうだな」

それを見ながらため息をついた。

やはり村に泊めてもらえばよかった。

「どうするの？」

「ま、仕方ない」

言いながら、適当な草むらに寝転がった。

季節柄、風はそこまで冷たいというほどでもない。
数時間だけなら大丈夫だろう。

「そんなところでぐっすり眠れるのかしら」

「それなりには眠れるだろう」

くすくす笑っている少女に対して、空を見上げながら話す。

「居場所がないなら、自分で作ればいい」

風の音も

草の感触も

「そうしよつと思えば、そういう場所になる」

目を瞑る。

感じるのは草の香りと薄い月明かり

「眠ろうとすれば、眠る場所に？」

「そうしようよと、工夫していけば 多分ね」

そういつて荷物を枕にしているとところを見せた。

少女は何かを考えているようにも見えたが、そろそろ、本当に瞼が重い。

微かな虫の声と草花のざわめき。

そんな自然の音を聞きながら、意識を閉じていく。

浮かぶのは、今日出会った人と獣
薄れてはまた取り戻す人の面白さ

まだまだ、生きていようと思う世界の面白さ

眠る居場所（後書き）

読了ありがとうございました。

話と話を繋ぐ話というのは難しいと感じます。

ご感想、ご批評お待ちしております。

評価して下された方々にも感謝しております。

神の細道 前編 行きは容易く(前書き)

色々と手が塞がって更新できませんでした。申し訳ありません。
今回は

自分なりの解釈をしている部分がありますので、妙な点や間違いがあればご指摘ください。

思う以上に長くなったので前、後編で失礼します。

神の細道 前編 行きは容易く

「いやいや面白いね。きみは」

黄色の髪をした女性が笑う。

「軽いなーあんたは」

困ったように笑いながら、男が答える。

そこは神聖な場所

けがれなき場所

「まあ、いつも気を張ってても疲れるからね
長い髪が揺れる。

「そりゃ、もつともだ」

風が通り抜ける。

清浄な世界

純粹な世界

「こんなに笑ったのは久しぶりだよ」

とても静かな

「何百年ぶりだろうね」

寂しい場所

神

人が祀り、讃え、願う。

信仰するもの

それは

強大な自然に対してであることもあれば
恩恵をもたらすものに祈ることもある。

幸福・不運・恐怖・繁栄など

その体現、具現の形

総じて

人ではどうにもならないもの

畏怖すべき対象である。

目が覚める。

突き刺すように眩しい陽光に眼を細め、
目頭を押さえた。

少しずつ、眠っていた身体に血が巡り、ぼやけていた思考が形を取り始める。

朝

寝転がったまま、凝り固まっていた腕や脚をほぐすように伸びをし、欠伸をしながら立ち上がった。

「さて、行きますか。」

涌出した涙を拭いながら、枕にしていた荷物を背負い直し　　枝の下へと飛び降りた。

数秒の浮遊感の後、脚にかかる軽い衝撃と共に着地する。周りに広がるのは、朝靄に包まれた木々の姿。

獣の気配もなし、今のうちにさっさと森を抜けるか

「と、その前に」

進みかけた足を止め、後ろを振り向いた。

「お世話になりました」

そびえ立つ樹木。

長い年月をかけて成長したであろう巨大な姿。

一夜の寝床を提供してくれた存在に一礼して
今度こそ歩き始める。

「ふーむ」

どうしたことだろう。

神殿に訪れる人々を見下ろしながら考える。

本殿の前へと立つ人々は、様々な供物を差し出し、色々な願いを口にしては去っていく。

そこから伝わるのは様々な形の想い。

豊作祈願、一族繁栄、戦勝祈願。

そのために、神を崇め、祈り、供物を差し出す。

その信仰によって神々は力を得て、人々にその恩恵を与える。

そういう循環、持ちつ持たれつの関係。

自らが統制するミシヤクジも、元来の性質は『崇り神』としてのものが強い。

それを蔑ろにするものに対して神罰を下す恐怖からなる力である。しかし、それを治めるための信仰によって、その荒神の力を逆に鎮守の力へと変換し、守神へとその姿を変えた。そして、その信仰が広まっていくうちに、様々な土着の神々を取り込み、今ほどの大所帯、“土着神の頂点”ともいえるような地位へと上りつめたのである。

けれど

現在 日に日に参拝者の数が減っている。

正確にいうと、ある地域を境として、そこからの参拝者が現れなくなっているのだ。

そして、その境とは、この国の政治をつかさどる大国、中央政府である。

何かあったかな

何か不安を感じる状況に、中央に近い分社や訪れる旅人などから情報を集めてみようかと思案する。
そこへ

あれは

妙な人間が目に入った。

格好自体は普通の参拝者とほとんどかわらない、普通の庶民の旅衣装である。

長旅を経たのか、他より少し古びているぐらいだ。貧乏旅を続ける物好きな旅人、それと変わらない。

しかし、その姿は、なぜか目にとまる。

微かな違和感。

多くの神々を治める自分だからこそ感じる “何かありそうな感じ” という予感めいたものはっきりした根拠はないが

試してみようか。

そんな考えが浮かんだ。

「
」

小さく呟いた言葉は、ある種の崇りのほんの一部分
微かな不快感　小さな不運、その程度の“罰”^{ばち}が当たる程度のも
の。
さして人に影響を与えるものではない。
けれど

一普通・・・の人間では気づきようもないもの。
それに　その旅人は微かにこちらを見た。

蛇か

目の前をによろよろと這いずりながら進む姿を眺める。

白い蛇

俗にいう神の使い。

優雅にその首を持ち上げて、よどみなく道を進んでいく姿。

すれ違う人々が気にしていない様子を見ると、どうやら自分にしか見えていないらしい。

案内役って感じかね

時折、こちらを振り向きながら先導する白蛇。
多分、先程の一件が関係しているのだろう。

微かに感じた悪意　嫌な感覚に思わず反応してしまった。
見返すと、そこには妖しげな笑みを浮かべた姿
神々しい神気を発する一柱

「　　はあ」

自分の迂闊さのため息が出る。
あの程度の力、ただの様子見、確認であったことぐらい予想できることだろう。

本当になまっている。

そういえば、ここ数十年は能力も使っていない。
いくつか小競り合いこそあったが、自らの能力を使う事態までには陥っていない。

正直、あまり自分では好いていない能力だが、肝心なときに扱えなければ意味がない。

勘を取り戻す訓練が必要かもしれない　後悔する前に

そんなことを考えている間に、どうやら目的地についたらしく。
白蛇はこちらへ振り向いて一礼すると、すっと消えていった。
目の前にあるのは、本殿の奥に存在する建物の扉、関係者以外立ち入り禁止の場所。

やっぱり、ここのお偉いさんか。

自分の目のつけられた相手を確信して、また嘆息する。
面倒なことになりそうな予感に、頭を抱えてしまう。

「でもまあ」

こちらとしてもある意味都合がいい。
そういうことにしておこう。

「このような下賤の者に何か御用でしょうか 神さま」

扉を潜った先にいた巫女さんに案内され、辿りついたのは屋敷の奥深く。

真新しい、清潔な板張りの間。

「なに、少し話でもと思ってね。そう硬くなるでないよ 変わり種の人間よ」

眼前に現れたのは、優雅な笑みを浮かべ、慈しむような笑みを浮かべる女性。
少し小柄な体軀からは、そうは考えられないほどの力が発せられている。

なるほど、これが今世の神の頂点、ミシヤクジの統制者、か。

土に根付き、土地を守り、畏れられ敬われる神。

自然から生まれたその力は、風雨を操り、地に命を巡らせる。

加えて、この信仰。

神殿から見下ろして見えたのは、たくさんの人。

途切れることのない人の列は、それだけで、その神の力となる。

天地創造の神々、流石にそれには及ばないまでも、それに近い力を有する女性の神。

「そう仰られましても、こちらはただの凡庸な人間。ただ、長生きしてきただけの人間です」

神のお言葉を拝聴するなど、恐れ多いことだと、必要以上に畏まった礼を返す。

あまり目をつけられたくはない。

その姿を目の前にして、余計にそう思う。

「へえ、それほど歳を重ねているようには思えないが」

こちらを探るように目を細め、笑みを深くする神と

「若作りでして……年相応に見られず、苦労しております」
薄い笑みを浮かべて返すこちら

正直、あまり心地よいやり取りではない。

嘘ではないが、本当のところを煙に巻く作業。

途方もなく胡散臭く、意地悪く　自分でも嫌になる。
けれど

「何の面白みもない人間ですよ」
状況が状況。

まあ、そうはいつでも

最近はこのなやりとりばかりしているような気がしてもある。

これは知り合う相手が相手だからか、それとも自分の性格自体がそんなのか……案外両方な気も……

「あの力に気づくほどの者がよく言う」

くくく、と低い笑いと共に上げられた言葉に思考を中断する。

そう、きつとここで止めておいたほうがいい。

あまり深く考えると、きつと傷つくのは自分だ。

そんな自分の困った一面なんて見つけたくない。

「根が臆病なもので ついつい過敏な反応になってしまつのですよ」

すらすらと口から放たれる言葉。嘘ではないが、全てが真実とは言い難いもの。

そんな自分の性質が悪いことは着々と自覚してきている。

癖になつても困るので、あまり続けていたくはないが

「だから 先ほどからこちらを探ろうとしている皆さんの視線が怖くて怖くて」

こんな状況で手の内を晒すのもぞつとしない。

放たれた言葉に、微かに漂っていた気配にはつきりとした敵意が含まれる。

警戒すべき対象、そういう存在へと変えられている。

「そうか」

気づいていたか、そんな言葉と共に 身体に巻き付いてくるよう
などろりとした力。

「なら単刀直入に聞こう」

獲物を狙うように

眼光鋭くこちらを見据える目。

「何用だ。力ある人間よ」

蛇、ね。

纏わりつく圧力は、見目麗しい姿からは考えられないほどに強く
畏怖すべき力。

下手な動きをすれば、一瞬で握りつぶされる、そんな感覚。

「 ただの行き掛けの観光ですよ。なかなか良い社ですからね
そんな気分の中で、冷静に言葉を返す。

偽りは通じない。

そんな鋭い目でこちらを見据える神視線。

こちらの内を探り、その真贋を見極める目。

数秒ほど、沈黙が続く。

「……嘘じゃないが、それが全てでもないといったところか」

「そりゃあね。一つや二つ、相手が神といえども隠したいこともあ
りますよ」

それが人間でしょう、とその沈黙を破った言葉に対して、軽い調子で返す。
また数瞬、視線をぶつけ合った後、相手の表情からふっと力が抜ける。

「そりゃそうだね」と小さく呟いて、笑みを浮かべる女性。

自らの発していた力を引つ込めると、一拍、軽く手を打った。

「みんな、この者から悪意は感じられない。下がっていいよ」

それと同時に、こちらを取り巻いていた圧迫感が消える。
部屋全体へとかけられたその言葉。

少しの躊躇があつたようだが、しばらくして、向けられていた殺気が消えた。

部屋の周りから何かが蠢く気配がして、少しずつ離れていく。

「…………ふっー」

その気配が完全に消えるのを確認すると、今まで張っていた力を抜くように一息ついた。

固まった肩をほぐすように二、三度軽く叩く。

面倒くさいことがやっと終わったというよく見る仕草だ。
けれど

「まったく堅苦しいったらないよねえ」

神さまの方が、である。

「ああ、肩が凝る」

足を放り出すように姿勢を崩し、片手で肩を叩く姿。
先程まで感じられていた威厳などは完全に吹き飛び、見る影もない。

「きみも楽にしていよ」

「はあ……」

自分が出会う相手はどうしてこう癖が強いのだろう、そう思った。
悪いことではないが、なんだか、な、という感じである。

諦観に似た思いが込み上げて、ため息がでる。

「こうやってため息ばかりついているのが原因だろうか。」

「驚かないね？」

微妙に反応が薄いのが気になったのだろう。

姿勢を崩したままの格好でつまらなそうな表情を見せる神。

ほんとに……なんだか、な

「こういう展開には慣れているとはいえ、微妙に釈然としない。」

もう一度、軽いため息をついてから、こちらも格好を崩して相手に
向き直った。

「そりゃ、参拝客を放っておいて鳥居の上に座ってる神さまが
仕事熱心だと思っただけお人よし気取ってますからね」

「違う違う、さぼっちゃいないよ。あれくらいなら下位の連中でも
十分だっただけ判断しただけ」

どうせ私の力は信仰者には伝わるんだからさ、と微笑む表情は先程
までのものと違い、もっと親しみやすいものへと変わっている。

先程までののが偽物ともいえないが、こちらの方が素の状態なのだろ
う、自然な感じを受ける。

しかし、なんというか…

「そんな簡単に私を信用しても宜しいんで」

「まあ、多分いいでしょ」

何かあったらあった。暇つぶしにはなるよ、そういつてカラカラと笑う女神さま。

その様子に思わず頭を抱えて、本音が漏れる。

「かるいな、あんたは」

「ずっと気を張っても疲れるだけ」

たまには力を抜かないと、といって毒気のない表情を浮かべる相手。

「見たところ、あんたは神さまを敬うなんてこともなさそうだしね」

偉ぶる必要もないでしょう、と続けられて言葉に「失礼な」と返す。

「神さまの力は信じてるよ　まあ、確かに信仰はしていない、か

ね」

神さまといってもほとんどが年下。

一桁二桁も年齢が下の者に頼りきりというのも何だかな、という感じだ。

それを聞いて「ほらね」と女性は笑う。

「なら、わざわざ肩がこるようなこととしてまで偉く見せる必要はないってね」

まるで少女のように笑う姿に　　少しだけ危うさを感じた。

ここに来た目的。

訪れた理由。

それは

確かに必要なことだったのかもしれない。

いくら力が強かろうと

いくら信仰を得ようとも

いくら時を経て

いくら年を重ねようとも

独りでは

足りないものもある。

使い分けられるからこそ
器用だからこそ

空いた隙間は大きくなって
生まれた歪みは広がって

埋まらなくなる。

親しみ深い

気安い

人に愛される

そんな感情を見せる神だからこそ
休める場所も必要なのだと思う。

話が弾む。

少し怪しげなこの男は、こちらの欲しい情報自体は持っていないかったが、ものを良く知っていた。

数百年、数千年、そんな単位で繰り広げられる会話。

人間とこんな話をできるとは思っていなかった。

自分がまだ小さな神だったころのこと。

信仰を得る前、生まれる前のことまでも、この男は知っている。

天地創造、大陸分裂、はるか昔に生きていた人々

神秘である私が、神秘に魅せられる。

嘘か真かも妖しい話。

けれど、なんとなく信じてしまうような話。

「いやー面白いね。きみは」

太古の神々の滑稽譚。

男の旅向きの珍道中。

不可思議に巡る不思議な語り。

この男の妙な雰囲気はそんな、積み重ねられた年月からできているのかもしれない。

「まあ、長く生きてますから」

身の上話も増えますよ、と男は笑う。

「なぜか変なことによく巻き込まれることも多いですねー」
まったく、と少し不満気に呟かれた言葉にも、思わず笑んでしまう。

「いやいや、楽しませてもらったよ」

一刻、二刻と流れた時間。
意義のない有意義な時間。

「こんなに笑ったのは久しぶりだよ」

本当に 何百年ぶりだろう。

「楽しい時間だった」

ありがとうと、告げる。

男は「勿体無いお言葉です」と大仰に頭を下げ、冗談っぽく笑った。

とても神と人間とのやり取りとは思えない。

けれど 悪くない。

「さて、ではそろそろ」

そういつて身支度を整える男。

確かに、結構な時間が流れてしまった。

そろそろ出立するということらしい。

もし必要ならと寢床を用意するかと尋ねたが、それは丁寧に断られた。

まだ十分に日が高いので次の宿場まで足を伸ばしておくらしい。

しかし、そういえば

「用事は終わったの？」

男が語らなかつた理由。

ここを訪れた目的は果たしたのか、という疑問が浮かんだ。

男は荷物を肩に担ぎ、やる気なさ気に頭を掻きながら答える。

「一応、ね　まあ、半分は手に負えないってことで」

こんなもんでしよう、とそっぽを向いた。

微妙に何か誤魔化しているような感じだが、まあいいだろう。
きつと　話したくないことなのだ。

「そう。では、またいつか　息災でな」

神としての姿での言葉に

「ありがたきお言葉。光栄の極みです」

人として返す言葉

一瞬の沈黙の後に、顔を見合わせて笑いあった。

「じゃあ、また来てね。楽しみにしてるよ」

「こちらこそ、お元気で、ね」

軽口を叩き合うようにして別れを告げる。

久しぶりに得た

友人に。

その
ほんの半時ほど後

扉を叩く音がした。

「どうした？」

そこにいたのは、ひどく憔悴した配下の者

「い、一大事です」

その上ずった焦りの声を聞ききった後

深く溜め息をついて立ち上がる。

「　　そういうことか」

男を呼んだ最初の理由。

この国に起きている事件。

それが明らかとなった。

神の細道 前編 行きは容易く(後書き)

蛙となる前

ただ一柱の神、独りとして

まだしばらくは忙しいので、更新が遅めになります。
ご容赦ください。

ご感想、ご批評、共にお待ちしております。

神の細道 後編 帰りは怖く(前書き)

半月ほどPCに触れない状況になっていました。
低速更新、返信遅れ申し訳ありませんでした。

神の細道 後編 帰りは怖く

神様が
いる
仏様が
いる
信仰され
帰依され

人の
拠り所となる
人の
頼みとなる

崇めて
祀られ
掲げて
畏怖する

そんな
形
遠い
存在

けれど

そんな
神様にも
願いは
ないの
だろうか
救いは
ないの
だろうか

何処かに
寄る
辺は
あるの
だろうか

人は
流れ
星に
願いを
託すの
だけ
けれど
その
願い
抱えて
星は
流れ
落ちて
しま
うの
か
もし
ね
ない

その重さに耐え切れないで
その重荷に潰されて

「怖ろしいこつて」

土が隆起し、岩が乱れ飛び、地が揺れる。
風が吹き荒れ、水流が暴れ、雷鳴が鳴る。

二柱の神の戦争
神力のぶつかりあい

天と地の潰しあい

いい迷惑だ。

流れ弾のように降り注ぐ神の力の塊を眺めながら思う。

一応、社に被害が及ばないように湖の真ん中辺りで戦いを行っているようだが、神々同士の争いが少し距離をとった程度で、その余波が見せないわけがない。

たかが人間という存在は、そんな神にとってのほんの小さな風や地震で被害を受ける　傷を負う。

その残り滓であろうが、その威力は強大なもの
堪えきれぬものではない

こつというのはあんまり得意じゃないんだがな

神殿の境内自体は強い結界、多分傘下の神々のものであるう力によって守られている。

しかし、それは大社内のみ。そこにたどり着くまでの街道や民家など全てを覆っているわけではない。

この辺りの人間には、一応の知識が伝得られているのか、神々の姿は見えずとも、災害・天災から身を守る対策として境内に避難するという素早い対応を見せている、が

逃げ遅れたもの、旅の途中だったものなどに関しては、神社にも辿りつけず、集会所のような場所に避難する程度。
当然、その場所には、流れの術士はいようとも、神の守りなど存在しない。

地震一つ

神にとつてのそよ風一つで、それは崩れ落ちる。

呆れるほど簡単に

「ふう……」

小さく息を吐いた。

まったく、研ぎなおしておかないとな、って考えた矢先にこれだ。

小さな不満。

だが、何もしないのは気分が悪い。

自分にはその力があり　　震える者たちと変わらない人間なのだ。

少なくとも

目の前で何かがただ死んでいくのを好まない程度には

だから

埃を払って火をつける。

錆びきった鉄に油を注し込んで

紡ぐのは

一つの言霊

自らの能力を呼び起こす鍵

「さてさて」

上手くいけますかねえ

そんなことを呟きながら、それを想像する。

描くのは壁。

漏れ出る力を隔絶する境界。

「久しぶりの相手が神の力とはきついが」

まあ、流れ弾の処理くらいならなんとかなるだろう。

そんな樂觀に身を任せ、その言葉を紡ぐ。

我、幻を想い描く。

一能力 ちから の宣言を

「こりゃあ、いささかまずいね。

新たな呪い、崇り神の力を込めた弾幕を撃ち出しながら考える。

並の者なら消滅。

それなりの神格をもつ者でも数発で悶絶するようなその力は、相手から撃ち出された強大な一撃によって、簡単にかき消されていく。

「っ!」

無残に霧散する力たち。

そして、その巨大な一撃はそのままの勢いで自分へと向かってくる。

「なんて力業!」

神の祝福を受けた木の柱

髪の象徴的力の具現による重撃。

その太い射線から逃れるために宙を飛び回る。
無論、合間合間にこちらの攻撃も打ち出すが、その柱から発せられる強大な神力に影響されてか、上手く届かない。

「まだまだ！」

不適な笑みを浮かべたままの相手は、力強い叫びと共に、さらに数十の柱撃ち出す。

神力が込められたその重い攻撃を一撃でもくらえば、いかに自分であつてもかなりの痛手を負つたろう。

だが

「なめるな！」

こちらもただでやられているわけにはいかない。

力を集中させた両腕から、神力で編まれた蛇を模した弾幕を撃ち出す。

しゅると絹連れのような音をたてながら宙を這い進む弾丸。

細長い紐状のそれは幾つかの御柱をまとめて巻きつけ、そのまま締め壊す。

「むっ！」

そのまま相手へと向かう蛇。

鋭く牙剥くように伸びたそれに、相手の表情から一瞬笑みが消え、眼前に迫ったそれがその体を貫くまでに迫る。

が

駄目か。

力を集中させた御柱を振り回すという一撃でそれはかき消された。蛇は寸断され、宙へと溶け消える。

多少、表情を引き締めた相手から、さらなる弾丸がこちらへと向かい、舌打ちをうちながらそれを回避した。

きりがない

絶え間なく放たれる御柱を避け、弾き飛ばしながら考える。

この国での信仰はこちらの方が上、ただ、あちらには大陸で培った力と突き進む勢いがある。

それは、変革を望み、新たな生活を望む人々に対しては魅力的なもの、進化しようとするものに対しては、新たな力こそ素晴らしく思えるだろう。

つまり、人から得られる力はほとんど同格、下手すれば向こうの方が上になる可能性もある。

そして、相手は多分軍神の性質を持ちあわせている。

戦いならお手の物、本領発揮の場だ。こちらも軍事の力は持ち合わせているとはいえ、攻撃・侵略に関しては、多分、相手に一日の長がある。

つまり

また数発の攻撃が打ち出され、こちらが作り出した防御壁が、御柱の一撃によって突き破られる。

単純な力なら向こうの方が上だ。

このままのせめぎ合いでは、いつか押し負ける。

目の前には、莫大な神力を發揮する大和の神。
眼下には、荒れすさぶ湖の波が揺れる。
そんな神々の戦場

力では敵わない相手

なら、こちらは知恵と経験で凌駕するしかない。

隆起し、壁となるように現れる岩壁
その合間合間から打ち出される弾幕はこちらに届きこそしないが、
巧妙に配置され、こちらの気を散らす。

時折混ぜられる力ある弾丸は、油断すれば自らでも悶絶するような一撃だ。

もし怯んだとすればそのまま畳み込まれる。

手数なら向こうの方が上だ。

音もなく頭上に出現した巨大な木の柱。

自らの神力で作りに出した神具である御柱、それを射抜くように撃ち出す。

射線上に存在する相手の弾幕を破壊しながら進むそれは、強大な矢のようなもの。

標的に衝突する寸前、滑るように相手が滑空したことで回避される。

そしてそのまま、湖の水面をなぞるように飛行し、こちらに近づく相手。

合間に放たれた弾丸を回避しながら、進路を塞ぐように再び御柱を撃ち出すことでそれを防いだ。

後退した相手は牽制の弾幕を撃ち出しながら、こちらに相對するよ
うに正面へと
位置どる。

その繰り返し。

しつこい…

実力が拮抗しているとはいえ、戦いに関していえば、多分こちらの

方が上だろう。

真正面からの力のぶつけ合いは、相手の本領の場ではない。こつという戦場なら、こちらのお手の物だ。

しかし、仕留められない。

押しているのはこちら

確かに、こちらが相手を上回っている。

相手の攻撃はもはや、牽制や威嚇程度にしか役に立たず。

こちらの攻撃も、今は避け続けるとはいえ、いつかはジリ貧となるだろう。

もはや打つ手はない。

油断さえしなければ、押し勝てる。

そんな状況である。

しかしそれでも

強い

こちらの弾幕の間を潜り抜け、時に叩き落とす。

防御の壁が崩れた瞬間、それを目眩ましとして弾幕を張る。

威力こそ自分に及ばないが、それは絶妙な間で撃ち出され、自らの眼前にまで迫る攻撃。

要所要所でこちらの攻めの勢いを削ぐ牽制の間。

一進一退の状況

それを生み出しているのは、力もさることながら、その知恵と経験。土着の神として積み重ねてきた年月の重み。

地の利を得ているとはいえ

「ふふっ……」

微かに漏れ出たのは、自分でも思っても見なかったことに笑みだった。

自分に匹敵するほどの力を持つ者

自らと一戦える・・・ほどの者

この国にそれ程の神が存在するとは、まったく想像もしていなかった。

ただただ

蹂躪し、侵略し、打ち砕く。

圧倒し、圧殺し、叩き潰す。

相手の力を飲み込みながら

相手の全てを奪い取る。

それは

一方的な略奪といってもかまわないほどのもの。戦争とさえいえないものだっただろう。

それほどまでに圧倒的な差だった。

それが

今、戦える相手が目の前にいる。

自分と、対等といってしまっても差し支えないような相手が

口元には自然と笑みが広がる。

「やるわね。ミシヤクジの統制者」

突然かけられた声に相手は少し驚いたようだが、空中で動きを止め、真っ直ぐにこちらを見つめ返す。

「正直、ここまで戦えるとは思わなかった」

それは、敵にかけるにはいささか友好的過ぎるような声音だった。けれど、なぜだか嬉しかったのだ。自らと対等な者がいることが

「舐めてもらっちゃ困るよ。これでもここを治めて云百年と経ってるんだ。ぼつとでの新参者に」

そう簡単にやられてたまりますか、そんな言葉と共に発せられる神力の波。

空気を震わせ、地を揺らす力の奔流。

浮かべる笑みは不遜なもの。

けれど、何処かそれは楽しそうにも見えた。

全力で、遊べる相手

孤高を生きる神

頂に立つ者

肩を並べられる相手

同じ荷を背負う相手

それでも

「こつちも負けるわけにはいかない」

負けてしまえば、自分に居場所はない。

認められなければ、移ろい消えてしまう。

それが、新しさという摂理。

その信仰

その力

神としての存在ごと

「呑みこませてもらう！」

人間の作った稲の穂、その実を媒介として神力を込める。

膨大な力がこもったそれは、一つ一つが威力を持つ光球としてばら

撒かれる。

「……！」

一度も見せていない弾幕。

今までの直線的なものとは違い、無作為的に相手を包み込むもの。

しかし、対して動じた様子も見せず、すぐに反応し、その弾幕の合間をすり抜けるように動き回る。

右に、左に、その数少ない空間

そこしかないという回避場所を潜り抜ける。

そう　限定された道筋を通って

「　なっ！」

たった一つの逃げ道

そこに逃げ込むしかない場所

それは、攻撃した自分が一番理解している。

「はああ！」

その一点へと向けての弾丸。

数発の御柱を跳ばす。

「つくう…！」

咄嗟に力を収束し、防御障壁を張られるが、そんなものは付け焼刃にも足りない。

一発の威力でさえ、こちらの方が上なのだ。

真正面からのぶつかり合いで、相手が勝てるはずがない。

一つ、二つと御柱が弾かれ、障壁がギリギリと音をたてて
三
つ目ではじけ飛ぶ。

「！？」

続けざまになだれ込んだ弾幕。

声も上げられぬままに弾け飛ぶ土着神。

「あああ…！」

叫び声を上げながら、雷のような速度で吹き飛ぶ相手。

上位の神でも耐え切れないほどのものが数発分、そんな威力の攻撃を食らった相手は巨大な水しぶきを上げて水面を割る。

やったか……？

上空まで弾け跳んだ水滴が降り注ぎ、濡れた髪が頬に張り付く。うっとうしいそれを指で掃いながら、波立つ水面を見つめる。

白くざわめく波、落ちた雫のざわめきが少しずつ収まっていく。

「……」

どんな些細な変化も見逃さぬように広い水面を睨みつけるように見つめるが、そこからは何の気配も感じられない。

流石の統制者もあの攻撃にも耐えれずに消えてしまったのか、それとも力を使いすぎて動けなくなったのか。

どちらにしても、その存在自体の力が感じられない。

あれほどの神格を持つ神だ。

その神力の気配自体を完全に消し去ることはできないだろう　　押
さえ込むには、その力は大きすぎるものだ。

ならば

「　　終わった…?」

そう

独りごちた瞬間。

水底からの大きな力の盛り上がりを感じた。

「……っ！」

突き上げる膨大な神の力。

水しぶきを上げながら飛び出した塊を咄嗟に回避する。

「これは…！？」

湖から撃ち出されたのは、無数の岩石群。

しかも一つ一つが神力によっての強化が施され、それなり威力を誇っているもの。

それが、まるで落石のように 重力が逆転したかのように降り注ぐ。

「く……」

入り混じった細かな礫を障壁によって弾きながら、特に威力の高そうなものを回避していく。

元がただの岩や小石であるため、一発食らった程度でどうにかなるものではない。

が、いかにせん数が多い。

数十、細かなものも合わせれば百にも昇る数の弾幕。

けれど

これほどの規模の攻撃…いくら力があるうとも並みの消費では

すまない。

こちらもそうだが、長い戦いで相手も消耗し続けている状態だ、余剰の力など残っているはずがない。

ならば、これは最後の 死力を尽くした攻撃。

これさえ凌げば。

「はあああ!」

舞い上がる礫を弾き飛ばすようにして、身を守る障壁へと力を注ぎ込む。

範囲は自らの周囲から軽く手を伸ばした程度のもの、それだけで視界は保たれる。

あとは、残りを回避しきつてしまえば 私の勝ちだ

右へ、左へ

左右へと身体を揺らしながら、岩と岩の間をすり抜けるようにして飛び回る。

それはまるで、先程までの相手と同じような動きだった。

攻守逆転、そのままこちらの攻撃と相手の攻撃が入れ替わったようなもの。

相手と同じように、弾幕のぎりぎり そのたった一つしかないよ

うな間隙を潜り抜け……先へと抜ける。

そう、ほとんど同じ動き。

まさか

嫌な予感が頭をよぎる。

そう、先程までと同じなら

逃げた兎を待っているのは……！

「いけえ……！」

響く声と共に表れたのは 巨大な岩。
地の底から噴出した間欠泉によって勢いを増したそれは真っ直ぐに
こちらへと迫ってくる。

「くうっ……！」

まったくに瓜二つな状況。
やられる側とやられて側が入れ替わった状態。

まるで、時間が巻き戻ったように同じ。

だが、一つだけ。決定的に違うものがあった。

「りゃあああ！」

それは、攻撃能力の違い。
手数と威力の差。

眼前に迫る巨岩に向けて、ぎりぎりのところで完成させた御柱を打ち込む。

どがしゃっという派手な音をたててぶつかったそれにより、その速度が落ちる。

その間にさらに御柱を具現化し、一点を打ち抜くようにして集中させる。

「はあああ！」

残りの力を絞りつくすかのように、息をつく間もないほどに弾幕を放つ。

そのたびに地響きのような音をたてて、軋んでいく巨岩。

相手にはなかった力。

大規模な火力。

その重い一撃によって 弾幕は打ち碎かれる。

「 やった…!?!? 」

飛び散った岩石の破片、礫となって降り注ぐ瓦礫の雨。互いの神力がぶつかり合い、弾けとんだその中で

「 もらった! 」

「 つ!?!? 」

その最後の最後の土壇場で

目の前に迫るのは鈍く輝く銀色の輪。

それが、真っ直ぐにこちらへと向かって跳んだ。

神に捧げられ、神の装具の一つとなった人の造りし物。
崇めしものへの最上級の贈り物
いつしか、それ自体が神の一部として祀られしモノ。

神気を発するのは、その鉄の輪自体。
最後の最後、切り札の奥の手

投げられたそれは真っ直ぐに、吸い込まれるように相手へと向かっていく。

その刃を鈍く光らせて

神の細道 後編 帰りは怖く(後書き)

本編ですが、今回は前後編とプラス1話といった感じになってしまいました。

きりが悪くて申し訳ありません。

ご感想・ご批評お待ちしております。

それでも道を行くのなら（前書き）

相変わらずの遅い更新です

また、少し長くなりました。

上手く書き分けられているか心配ですし

もう少し、話のバランス感覚をつけたほうが良かったかもしれない。

とりあえず

これで神の細道、終端です。

それでも道を行くのなら

独りで行くのは怖くない。

失うものがないから

得るためにいくのだから

そこには希望が満ちている。

けれど

独りで帰るのは少し怖い。

そこに何かあるかを知っている。

そこに何がないのかを知っている。

自らが通ってきた道なのだから

新しいもの

古いもの

未来

過去

進むなら

先を知らないのは当たり前。

戻ることは

何が変わってしまったのかを知るのだから。

何をしてしまったのかを見るのだから。

けれど
独りでなければ
誰かと一緒に行くのなら

どうだろう

最後の一撃を食らい、上空に浮かんでいた影の片割れが落ちていく。

見下ろす神と落ちていく神
象徴的な光景。

栄華を誇っていた王が落ち、新たな王が立つ。

神としての格付けがそこで決まる。

「
おいしいとこだった、って感じか」

作り出していた術式。

結果として込めていた力を解きながら、その情景を眺めた。

最後の最後

相手の虚をついた一撃

避けられるはずのない攻撃

あれがもし、鉄の輪でさえなければ、結果は変わっていたのかも
れない。

確かに、あれはこの国の先端の技術を使った道具であり、神具とし
ても最高級品といってもいいものだ。

けれど、その材質は鉄であり、その技術は伝わったもの 渡来
した文化の産物である。

それはこの国では最新であっても、それを伝えた国にとってはもっ
と古くから存在していたものなのだ むしろ、新しいものである
からこそ、まったく知らない部分を多く含んでいる。

相手は大和の神、新しく伝えられたものの中心点に位置する者たち
ならば、その扱いには一日の長がある。

もし、古来より伝わる武器を使っていれば 違う攻撃方法をと
っていれば

まあ、考えても仕方がない、か。

それを選んだのは自分、それを信じたのは自分だ。

一番良いと思う方法を選んだ。

それに、後悔も反省もあれども 結果は覆らない。

そういう巡りあわせだった。
負けは負け、だ。

ギリギリだろうと、偶然だろうと、それを語り継ぐのは 勝者。
歴史を作る権利は勝者にある。

信仰を 畏怖を力と変える神にとって、それは致命的。
より強大なものに靡くのが、人の性。

しかし、まあ割り切れないのも人間ってものなんだが、ね。

人の世の習いを想いながら、その先に待つものを思う。
強さに憧れながら、弱さに拘るのも人間というものだ。

とくに 昔を忘れるというのは難しい。

幸福であれ、恐怖であれ、それは深く刻まれている。
ある意味、新たなものを得たからこそ、その対比として強く残るだ
ろう。

さてさて、あの神さまはどうするのか。

諏訪の神が落ちた方へと飛んでいく大和の神。
おそらく、その力 信仰を奪うために何かをするつもりなのだろ
う。

「まったく 相変わらず、間の悪いときに居合わせるもんだ」

ただ、様子を見るだけ そのためを訪れた。

そして、そのほんの数刻程度の恩返しによつて事件に巻き込まれている。

ほんとに、何か悪いことでもしたかね。

思い当たる節は あるな……

…しかし、まあ長い年月にほんの数ひゃ…千程度だ、許容範囲だろう。

そもそも、そういうことに巻き込まれるからこそ、そんなことを繰り返しているような気もしている。

「はあぁ……」

中途半端に思い起こした過去の事件の数々に少し肩を落としながら、地面に放り出していた荷を肩にしっかりと結びつけた。

さてさて

「そうはいつでも」

放っておく気にはなれない。

「 頼まれごともあることだし、な」

友人をただ見捨てるほど 人間を捨ててもいない

ぎりぎりのところだった。

気を失い、地の落ちた神を見下ろしながらそう思った。

もしあれが、鉄の武器でなければ、倒れていたのは私の方だったかもしれない。

眼前にまで迫っていた鉄の刃を思い起こす。

咄嗟に発した力 植物の力によって赤く錆びつき、落ちていった鉄の輪。

もし、その鉄の概念を知らなければ それが鉄でなければ

けれど

そうはいつでも、勝ったのは自分。

古の土着の神が負け、新たな大和の神が立ったのである。

「ぶっ……」

息を吐く。

何はともあれ、これで自らの存在を確立させることができるのである。

ここに訪れた目的のほとんどは達したといってもいい。

あとは

目の前に倒れた神。

その力を奪い取るだけである。

「……。」

正直、あまり気は進まない。

自分たちは侵略者であり　　今ある平和を乱しにきた側なのである。

いわば、盗人と変わらない。

けれど

これが神というものであり　　信仰を得るということだ。
新たな為政神として認められるに、その強さを示さなければならぬ。

今、この強き神を下し、私は新たな強き神となった。

それだけでも、私は崇められる神となれるだろう。
今度は

「恐れられる神にならなければならない、って感じが」

その身体に手が届く、そこまで近づいたところで声がした。

「強きものとして認められ、崇められる理由を得た。今度は　それを崇めなければならぬ」という理由をつくらなければならぬ」

後ろ。

先程越えてきた湖側から響く低い声。

「望み、願う　それと同時に、恐れ、怖がり、畏怖する」

今の今まで感じすらできなかった気配。

通常の間人としての気配すら殺しきっていた存在。

「それが、神を崇めるといふことであり、信仰するといふこと」

静かに、呟くように発せられた声は、不思議とよく聞こえた。

「だから、それを示す　そんな感じ、かね」

面倒くさそうに　まるで、呆れているかのように、やる気なく締めくくられた声。

そこに立っていたのは、ボロボロの姿をした人間。

「まあ、正しいっちゃ正しい方法か」

纏わりついた土を軽く払いながら、こちらを見据える人間。
多少、その汚れは消えたが、すでにボロボロとなった着物のせいで
ほとんど変わったようには見えない。

「何者だ 人間……」

気配も察せなかった存在に、多少警戒を抱きながら睨みつける。
普通の人間なら威圧されるような眼光 それにまったく怯んだ様
子も見せないままに男は答えた。

「何の変哲もない人間ですよ 　ただ、長生きしてきただけのね」

カサカサと木の葉が音を立て、風が通り抜ける。
後ろからは湖が波立ち、空気を飲み込む音がする。

先程の戦によって荒れていた波もどうやら治まってきたらしい。
多少の余韻はあれど、ほとんど今朝と変わらない静けさが戻ってき
ている。

そんな関係ないことを考えながら、こちらを観察する大和の神を見
つめる。

赤い衣装に青の髪……諏訪の方よりも背が高いな…

神といつてもやはり、一人一人…一柱一柱違うものだな。

どちらかという少女に近い諏訪の神と大人の女性といった様子の
大和の神。

これは神としての性質の違いからくるのだろうか。
それとも、その性格がその姿に影響を与えているのか……

「ただの人間が何の用」

ととつ、と……

不意にかけられた声に、なんともなしに続けていた思考をとめ、相
手に向き直った。

また、馬鹿なことを考えていた。

「いえ、まあ そちらの神さんに少し縁がありましたね」
どうする気なのか、とね。

そっぴいながら、気を失っている様子の諏訪の神へと視線を向ける。

かなりの神力を消費し、傷を負ってはいるが、その存在に支障が出
るほどではないようだ。

このまま暫く眠っていれば回復するだろう。

「ただの人間と神が どうやって縁を結ぶと」

疑うように放たれる声。

訝しげな視線が、こちらと後ろ往復する。

まあ確かに、余程のことがなければ、神宮関係者以外の人間が神と関わることなどありえないだろう。

今の自分の姿を見ても、決してそういう者には見えない。

「色々と妙縁重なりまして」
ただの偶然ですよ、と笑って返すが、相手は信用がならないという表情である。

確かに、そういつている自分であっても胡散臭く感じている。

「で、そちらさんをどうするつもりでしょうか」
これ以上、証明ができない話を続ける意味も無い。
そう考えて、話を先へと進める。

相手は少し不満気な様子だったが、自分でもそう思ったのだろう、素直にその答えをいった。

「貴方のいった通り　力を奪い取って消えてもらう」

低く、呟かれた言葉。

「まあ、そうでしょうねえ」

答えは、予想通りのもの。

己の恐怖を示すための『見せしめ』。

それは、正しく神の行いであり　勝者の行い。

決して間違ったことではない。

「神話 歴史つてのはそういうもの、か」

敗者が力を失い、その利益と恐怖を失くすからこそ、信仰は失われる。

そして、その積み上げた力の歴史は、そのまま新たな勝者に奪われる。

そのための、下地作り。

「そう そしてこれは、神同士の決め事みたいなもの。この国の神として、この子にもその覚悟はあつたはずよ」

「神としての 覚悟、ね」

確かに、神さまとはそんな存在だ。

力あるものがその頂点に立ち、力がなければとって変わられる。

それが、戦神 人間と密接に関わるものならばなおのこと。

諏訪の神は力を持ち その頂きに君臨した。

得たからこそ、それを奪われる覚悟も持たなければならぬ。

それが

力あるものの宿命

決まり事

今まで、山になるほどに見てきたこと

けれど

「あんまり好きじゃない、な」
そういうのは。

ぼつりと突然呟いた言葉に、相手は怪訝な顔となった。
警戒、というよりも意味が分からないといった表情。

そう

この言葉に意味なんてない。
分からなくて当然のことだ。

これは

ただの自分にとっての好き嫌い

「いえねえ…大和の神さまよ」

気に入らない答えを塗りつぶすための我がままであり、誰に頼まれ
たものでもない勝手な提案。
嫌なことに首を振る子供の駄々のようなもの。

「一つ年寄りの戯言を聞いてみませんか？」

ますます意味の分からない表情をする大和の神。
それを真っ直ぐに見据えながら、言葉を紡ぐ。

「一足す一を、そのまま二にする方法なんてものを、ね」

自分勝手な自己満足を

「……むづむづ……」

温かい風を感じて、暗くなっていた視界に少し光が差し込んだ。

散り散りになっていった意識が一つとなって、やっと、自らの状態を理解し始める。

「むづむづ……」

体中の骨が軋みを上げるような感覚に、思わずつめき声を上げた。

「体中がだるい……」

腕一つ、指一本動かすだけでも多大な精神力を必要とするような状態に陥っている自分。

徐々に身体感覚がはつきりし始めたことで、余計にそれを実感していく。

ええと……一体何をしたんだっけ……

身体の疲労と共に朦朧としていた記憶が少しずつ焦点を結び、微か

にだが、自らがこんな状況に陥った経緯が浮かび上がってくる。

ええと、確か…

朝一番に妙な人間にちよつかいをかけて…ホントにみょうちくりんな人間で

その後、大和の神だとかいう女が現れて……国を寄越せだとかなんとか…

激しい戦闘。

明滅する弾幕。

荒れ狂う雲。

最後の情景は　錆びつき、赤く変色した円形の刃。

ああ……負けちゃったのか。

その光景　落ちいく自らの神具が思い浮かんだとき、それを理解した。

自分は負けたのだ。

「あーあ……」

折角つけた力も　負けてしまえば、そこでおしまい。
全て奪われて、白紙に戻される。

私の神話も、ここで御終い。
後は、敗者として名を残すだけ

「ふう……」

あっけないもんだね……

栄華を誇り、力を振るっていたのはつい先程まで
崩れ落ちるのに、時間はいらぬ。
ほんの数年も立たないうちに、私の名前も埋もれてしまふ。

これまで、繰り返されてきたことと同じ。

いつか滅びるもの、か。

永遠に続くと思っていたわけではないけれど、こんなにも簡単に壊
れてしまうとは思っていなかった。

砂で作った造形が、風で解けてしまふような　そんな呆気なさ

こうして意識を保っていられるのもいつまでだろう。

きつとすぐに、自分は堕ちていく。

敗者として、落ちぶれた神として、その存在を変えていく。

今の自分を保てないほどに、八百万の一つにも数えられないほどに

下手すれば、そのまま忘れられて
消えてしまつかもしれない。
その歴史 記憶ごと

少なくとも、今のままではいられない。

走馬灯のように巡るのは

神としての日々。

重ねてきた時間。

自ら望んだこともあった。

望まずそうになったこともあった。

それは

いつの間にか築いていた場所。

けれど、

確かな、自分の時間。

それも、消えてしまつかもしれない。

「……………」

薄く開いた瞼から差し込む光。
前髪を揺らす優しい風。

折角、面白いやつも見つけたのになあ。

つい先程まで、笑いあっていた相手を思い出す。

変り種のおかしな人間。

久々に出会った新しいもの。

こんな人間もいるのかと

神と人の関係でしかなかったものへ

新たな興味が生まれた。

少し、勿体無いなあ。

ここで終わりつてのは。

そんな名残惜しさがこみ上げる。

けれど、仕方がない。

今まで自分が下してきたもの達だって、そう思っていたのに違いなのだから。

だから、仕方ない。

「そろそろ、目を覚ましてくれませんかねえ」

そんな思考を遮るように、気の抜けた声が落ちてきた。

「折角の焼き魚が冷めちまう」

丁度、思い返していた声が。

「それとも、お魚は口に合いませんかね」

「あ…れ？何で…」

あんたが、そう続けようとした言葉は、視界に入ってきた妙な光景によって塞がれる。

「お、お目覚めですかね」

諏訪の神さん、と気軽に声を上げたのは、確かに、あの妙な人間だった。

その隣には焚き火がたかれ、木の棒に刺された魚が置かれている。先程から話しているのはそのことだろう。

そして、その焚き火を挟んだ向こう側にいるのは、先程まで自分と戦っていた存在。

大和の神…？

上手く理解できない光景に、思考が停まる。

え？あれ…？

「そっちは…まだ少し。こっちが焼けてますよ」

「おや、ありがとう」

差し出された焼き魚を受け取る神と「いえいえ」と笑いながら答える人間。

状況についていけず、ますます混乱が増していく。

「にしても、本当においしいわね。何かコツでもあるの？」

「まあ、ここの魚がいいのと…あとは海で採ってきた塩がね」

美味しそうに焼き魚を頬張る大和の神。
それに対して普通に受け答えする人間。

決して飲み込めない違和感に満ちているが、本人達はあくまで普通。
一体どういう変遷を経てこういう状況に陥ったのか、疑問ばかりが
あふれていく。

「さて、お嬢さん　混乱するのも解りますが…とりあえず、ここ
に座って飯でもくいませんか？」

人　神をも食ったような悪戯っぽい笑みを浮かべて笑う男。
大和の神は、少し複雑そうな表情をしているが、こちらに敵意をも
っている様子ではなかった。

ああ、もう。

よくわからない。

わからないが

痛む身体を押し立て立ち上がり、焚き火を囲むように男の隣へと腰を
下した。

どうせこの先は相手次第なんだ。

殺到する混乱を無理やり押し込めて、言葉を発した。

「それじゃあ、ただただかせてもらおうよ」

伊達に長い年月を生きていない。
こうなりやなりゆきまかせだ。

そう開き直って、男が手渡した魚を頬張った。

おいしかった。

「つまり、こういうこと？」

残りの魚を食べ尽くし、食後の一服をいれてから、それまでの経緯を多少要約しながら説明した。
それを聞き、しばらく黙り込んだ後、諏訪の神は確認するように尋ねる。

「信仰を少しずつ変化させ、それに大和の神の力を加えていくことで、今ある信仰を保ったままでその力を取り込む」

「ああ、そのために、信仰の対象が少しずつずれていくように細工をする。社の改名とか、新たな形としての御神体をつくっておくとか……あとは、神としての格付けを何かで示しておくとか、ね」
「上手くいけば、現在の信仰を保ったままで、土着と大和、両方の信仰を得ることができる。」

過去から続く伝統ごと、その信仰を呑みこんでしまえるのだ。

しかも、対面と矜持さえ考えなければ、実際として諏訪の側にもほとんど損がない。
実質的な利益としては、新たに大和の力が得られる分、その針は利の方へと傾く。

「なるほど、ね」

諏訪の神は、納得したように頷いた。

「確かに、こちらとしても益が多い　何より、負けた側のこちらとしては願ったり叶ったりだ　……だけだ」

そこでふと、その表情が曇ったものとなる。

「　あなたはそれでいいの？」

黙り込んでいた大和の神へと向けた問い。

それは当然のものだろう。

今まで語ったのは、全てが上手くいった時の話。

もし、諏訪の神が反旗を翻せば、人々がやはり過去の伝統を変えようとしなければ、それが上手くいかなければ成り立たないものもあるのだ。

大和の側にとっては、その獅子身中に虫を飼うにも等しい行為だ。わざわざ、自分達が失脚する可能性を抱え込むこととなる。

だから、これは都合の良い幻想　絵空事のようなものだ。

諏訪の神の真つ直ぐとした視線を受け止めて、大和の神は口を開いた。

「私としては構わないわ。ミシヤクジに対する人々の畏怖は根強いし、その力も強い。それをそのまま取り込めるのなら、こんな願ってもないことはない。それに」

その目には、強い光が灯っている。

新たなものを得るために、どんな苦難も乗り越えていくような

「この国を統一する神なら　その程度の困難は望むところよ」

そんな強さが、宿っている。

ああ、こりゃ

こっちも心配だ。

強く、真つ直ぐな強さ。

折れずに、信じた道を突き進む勇猛さ。

強いねえ……

その強さは感心すべきものであり、そんな強さを持つからこそ、この神はここまでの力をつけてきたのだろう。
それが、この神の強さであり、力ともいえる。

それでも

これで国を治めるってのには、少し怖くなるな。

治世を保ち、信仰を維持するには、ある程度の知恵と経験、そして周到さを必要とする。

新たなものを根付かせ、それを広げていくならなさらだ。

知性は高い分、土地神として経験を重ねれば何とかかなりそんなものだが…

今現在においては器用さが足りないようにも感じられる。

「　　つくく…」

そんなことを思っていると、隣から小さな声が聞こえた。漏れ出たような、小さな声。

「確かにね。この国を統一するなんて息巻いてるんだ。私くらいの力なんて簡単に操っちゃわないとね」

不適に笑う諏訪の神。

その表情は新しい玩具を見つけたように、楽しげに見える。

まあ、そういう意味でも得になる。

長く、この土地を治めてきた土着神であり、一癖も二癖もあるミシヤクジを統制してきた能力を持つ神。

その経験は、この国でも有数のものだろう。

その二つが合わされば、確かに、この国全体に及ぶほどの信仰を得ることができるかもしれない。

「望むところよ」

微笑み返しながら、不遜に返した大和の神。

互いに勝気な笑いを浮かべながら、力強く手を合わせた。
これで契約成立、といったところだろう。

にしても

対峙する二柱の神　　女性を見て思った。

案外、いい組み合わせなのかもしれない。

「さてさて、お話もまとまったようで」

そのように話がまとまり、丁度一段落したところで、今まで閉じていた口を開いた。

すぐ横に置いておいた荷を探り、この間手に入れたとおきの商品を取り出す。

「新たな門出を祝って、宴会とでも参りましょうか」

「ぶはー！」

注がれた杯を一気に傾け、その中身を飲み干した。

とろりとした液体が喉を通り抜け、内腑が熱くなる感覚がこみ上げ
る。

「折角の上品なんだ。ゆっくり味わってくださいよ？」

「ああ、ごめんごめん」

ちびちびと器を傾けながら、じつくりとその味を楽しんでいる男。

そうはいいながらも、こちらの空いた器へと新たな酒と注いでく
れている。

「にしても、本当においしいねこのお酒」

注がれた酒　男がその荷から取り出した一品は、神である自分

にとっても飲んだことのないようなすつきりとした味わいで

呑むたびに、身体に力が戻ってくるような、滋養の効果も感じられ
る。

「まあ、秘伝の薬草酒ですからね」

熟成させた十年物ですよ、と自慢げに酒の器を揺らしながら答える
男。

「十年…？よく腐っちゃわないわね」

少し驚いたように八坂の神が声をあげ、自分の器に注がれた液体を
不思議そうに眺めた。

「保存状態さえしっかり管理すればね。長年の成果ですよ」

まあ、それだけ暇な時間が多かったってことですがねえ、と笑いながら答える男。

その様子からは、神への畏敬など全くといっていいほど感じられない。

そして、神である私達も、それに対してなんの嫌味も感じていない。

お互いに、全くの自然体。

それでいいのだと、自然とそう思えてしまう雰囲気。

男からは、そんな不思議な感覚を受ける。

本当に、妙な状況だ。

ほんの少し前まで、

お互いに力をぶつけ合っていた相手。

侵略する側とされる側。

それが手を取り合って、酒を酌み交す。

「杯、空いてますよ？」

「ああ、ありがとう」

それも、こんな人間の男と一緒に

「不思議なもんだねえ」

「まったくよ」

感慨深く呟いた言葉に、いつの間にか隣に来ていた大和の神が相槌を打った。

「最初は、力なんて奪い取ってしまえばいいと思っていたんだけどね」

それは、本音なのだろう。

自分がその立場であっても、同じ選択をする。そういうものはず、当たり前のこと。

「まったく 神に意見するなんて、生意気な人間もいたものよ」
その表情は、何処かすつきりしたような なんとなく楽しげに見えた。

そして

「同感だね」

自分も同じような顔をしているのだろうと、なんとなく思えた。

知らないものを 新しいものを知らされて
違う可能性を知ってしまった。

私達の常識が、1人の人間によって煙に撒かれてしまったように曖昧になってしまったのだ。

それが、なんともなしに面白く感じている。
新鮮な感覚だ。

「俺は意見をいっただけですよ」

話が聞こえていたのか、男が声を発した。

「結局のところ、答えを出すのは 選ぶのは自分次第、俺は自分の都合のいい提案をしただけですよ」
「ここでの仕事を終わらせるためにも、ね。」
そういつて胡散臭く笑う男。

「そういえば、何か用事があるっていつてたね」
何だったの、と尋ねると、男は曖昧に笑って返した。
秘密、ということなのだろう。

なら、それでもいい。

「それでも、一応いつとくよ」

助けられたのは、確かなことだ。

「ありがとう」

「ふうう」

息をついた拍子にずり下がった荷物を背負いなおした。西の方に大分傾いてきた太陽の光に照らされて、影が随分と長く伸びている。

失敗したなあ…

もう半時もしないうちに日は完全に落ちてしまう。そうなれば、また夜の道を進むことになるだろう。また野宿ということもありえるかもしれない。

宿を借りておけばよかったと思うのも、これが二度目だ。自分の情けなさに少し笑いがこみ上げる。

酒もなくなっちまったしなあ。

幾分軽くなった荷物、それに、神様に振舞ってしまった秘蔵の酒を思い起こした。

村を出立するときに荷物に詰めてきたものの最後の一つ。それが、あれだった。

眠る時分にちびちび飲みながら楽しんでいたのだが、それも最後まで。少しずつ気温が下がり始めたこの季節に、夜の友がないというのなかなか辛い話ではある。

ふう、と一声ため息をついた。

「でもまあ…」

こちらの出発を見送りながら笑っていた二柱の神。

恩は返せた、かね。

そんなことを思いながら、ここまで来た道を振り向いた。

広がるのは大きな湖といくつかの建物。

—その・・・ずっと向こうまで広がる森を見据えて呟いた。

「お知り合いの娘さんは、お元気でしたよ」

深い深い森の奥。

その中でも一際大きい、古い大樹へ向けて

一宿の恩は果たした、と

「重畳重畳、ってことで」

自分に言い聞かせるようにそう呟いて、

「はっ…くしよい！」

砂埃を巻き上げながら吹いた風に思わずくしゃみをした。

むずむずとする鼻を擦りながら、これから進む方向へと向き直る。

しまんねえな…

そんな格好の悪い自分を引きずって歩き出す。
知らない場所に行く道を

帰る場所のない道を

二人で歩くのは難しい。

上手くいかなくてすれ違ってしまったり
些細なことで喧嘩してしまったり

食費も二倍になるし

苦労も二倍抱えることになってしまつかもしれない。

二人いればぶつかるし

二人いれば狭くなる。

必要なものが多くなって

unnecessaryなものも多くなって

口争って、喧嘩して

たまに笑いあって

そんなことに夢中になっている間に

怖さを忘れ
帰り着く。

それでも道を行くのなら（後書き）

少しくどいようになってしまったようにも思えます。

もう少し、登場人物の書き分けや把握を頑張らなければならぬかもしれないかもしれませんね。なんだか、ほとんどオリジナルになってしまった気がします。

拙い文章ですが、上手く読み取っていただけたら幸いです。

ご感想・ご批評お待ちしております。

ありがとうございました。

永月が縁（前書き）

上手く描けているか心配ですが、ある意味、偶然が主題の話です。まだまだ、語っていない部分も多くありますが、お楽しみいただければ幸いです。

永月が縁

この世に起こりうる様々な事象

万象に彩られている世界

数え切れないほどのことが世界には溢れ
そして、消えていく。

様々な原因を基に

様々な要因を基に

何かが起こり、何かが消える

では

その世界に起きる様々な事象

その最も多い原因とは何なのだろう。

自然現象

天変地異

人為的

超自然的

連鎖的

蝶の羽ばたきで世界が揺れるように、この世界には様々な事象が在り、原因が存在する。

ほんのわずかな、どんな大きな物事にも
発生条件 生まれた理由が存在する

望んでも
望まずとも

そこにあるのだから

「むうう…」

久方ぶりに浴びた朝の光に瞼を瞬かせながら呻き声を上げた。
多少の睡眠をとったとはいえ、長時間にわたって酷使し続けた目に、
太陽は鋭い刃物のようにも感じられる。

「おや、ご出立ですか」

光に順応するために立ち止まっていたこちらへと、一人の女性が声をかけてきた。

片手に箒を抱えているところを見ると、どうやら庭掃除をしていたらしい。

「ええ、お世話になりました」

そついいながら軽く頭を下げると、「いえいえ」と丁寧に戻される。

「こちらこそ。往来物の翻訳をしてくださったそうで、主人が喜ん

「でございました」
まるで子どもみたいに、そういつてくすくすと笑う女性。

確かに、子どもの様な人だった。

古今東西の書籍。物語、神仏書、どんなものかをも問わずに収集し、貿易品に紛れ込んでいた落書きのような冊子までに喜悦を上げる。
そんな物好き、好事家。

まあ、でも…

だからこそ、気が合ったのかもしれない。
変わり者 変人ともいつてしまえるような人間。

様々な知識を差別することなく集め、それを知ること喜びを得る。
知らないことを、素直に知ろうとする 世界には、知らないこと
とがあるのだと、知っている人間。

多少、偏った所はあったが

「それは良かった」

子供のように自らの好きなことに打ち込む姿。
何かに懸命になる姿を眺めているのは、楽しいものだ。

それは

生きているということなのだから
望んだ場所で
願う場所で

自分らしくいられる場所で

「 ……つとに、計画性がないな。俺は」

そんなことを思いながら、屋敷を出たのが、ほんの半日前といったところ。

現在、太陽は西の山々の向こうへと姿を隠し、頭上には数え切れないほどの星の群れが、月の明かりを中心として舞っている。

申し訳程度に整えられた緑の間に走る土の線は、視線の先を何処までも進んでおり、その先には、一つの灯火も見えない。

つまり

「 ……また、野宿か」

小さく吐き出した息は夜の闇へと溶け、近くからは何の気配も感じられない。

精々、鳥と虫の声が響くのみだ。

少し、のんびりしすぎたか。

そんなことを思いながら、途中で食った道草を思い出す。

薬草採取、むやみな獣道の散策、昼寝、貰った本の歩き読み…
…そりゃ、道も進まないはずだ。

あまりに適當すぎる道行に、思わず苦笑いがこみ上げる。
流石に、気を抜きすぎだ。

とはいっても

目的地もない道楽遊行、急ぐわけでもなく、ただ、風任せに進むだけ。そんな旅に、速度も何もあつたものではない。
その時々、何かを見つけ、何かを探し、何かをする。
暇を潰す、それ以外のなんでもないのだ。
気分任せの道のりに、計画も何もあつたものではない。
なら、寄り道ばかりで足が進まないのも良くわかるだろう。
それも、旅の目的なのだから。

とはいっても

ここ数日は、屋根のある場所で寝泊りしていた分、いささか気分が乗らないのも確かなことだ。
途中で睡眠をとった分、眠気も感じない。

どうせなら、このまま進んでしまおうか。

幸いなことに、今夜は月が明るい。
これなら、道を外れることもないだろう。

そう考えて、その夜の空を見上げた。

「……む？」

一瞬

見間違いかと思ってしまうような
それほどに微かな光の反射
星の合間に紛れた別種の煌めき

あれは

それに思い至った瞬間

目の前に迫るのは、一筋の銀光

「…っ！！」

月光を反射しながら飛ぶそれは、鏃。

此方の中心線 致命となる部位へと向かい真っ直ぐと進む凶器

その群れ。

見た瞬間に理解する。

避けきれない

絶妙な位置に配置されたその矢群、たとえその内のいく本かを避けようとも、何処かしらに傷を負う、そんな計算された攻撃。

「くっ！」

「これは……」

当たった……？

射線の先。

矢を射ち放った標的の気配を探りながら思う。

掠りだけでもすれば動けなくなるはずだけれど……

一撃で仕留めるよりも、手傷を負わせるため攻撃。

本命は、鏃自体に仕込まれた薬の作用。

避けられないように放たれた矢群は、相手の薄皮一つを貫くだけで鯨をも昏倒させる毒の刃。

気配は消えた……けれど……

妙な違和感が残る。

確かにこれほどの遠距離射撃なら、相手を仕留めたという手応えも

感じられない

というのは理解している。気配で探るしか方法がない。

そして、確かに今、気配は消えた。

それは標的の命中、死亡か、もしくは戦闘不能を意味する。そのはずである。

ただ

数瞬、ほんの瞬き二つ分程の時間だけ、計算していたよりも矢の命中が早い。

そんな気がした。

ただの計算違い、そうともいえるはずだ。けれど

そんなことが有り得るだろうか。

重力、大気、相手の動作、反応・・・不確定要素までも含めて、その総てを計算した。

自らの力も把握しきった上での、不完全さえ視差に入れた予測。

それが

誤差範囲からさえずれるなんて・・・

そんなことが有り得るだろうか。

予想外の自体に、警戒と並列した思考が駆け巡る。

私のことを範疇に入れた追っ手・・・事態を把握してのものなら、明らかに早すぎる。報告する側は全滅しているのだから、ま

ずはその確認のはず　生き残り・・・無くもないだろうが、それでも月を行き来するだけの時間はなかった筈だ。

では、これを予測していた・・・それこそありえない。

そんなこと

「・・・っ・・・」

牛車の後ろ、微かな寝息をたてながら眠る優麗な少女。

私はこの子を見るまで、微塵も思っていなかったのだから。

正直、今でも不思議で仕方がないのだ。

なぜ自分がこんな行動をとっているのか、こんな馬鹿なことをしているのか。

少し、おかしくなっているのかもしれない。

長い時、永遠にも思える時間の中で起きた、ほんの小さな事件。

それでも

なぜだか、放っておけなかった。

今まで、何度だって経験してきたこと、通りすぎたはずのものだったのに、なぜか。

私はあの時

この少女の中に

何を見たのだろう。

そんな思考を遮るように、一陣の風が通り過ぎた。
懐かしい 幾時振りかもわからない空気の匂い。

私は酔っているのかもしれない。

この星の大気に
懐かしい、故郷の世界に

だって

「これはこれは」

こんなものが見えている。

「懐かしい気配だと思ったら」

予想、予測、理解、計算・・・そんなものの範疇を超えている。

「こんな縁も、あるのかね」

永い時の中では、そんなことを呟く男の姿は、ひどく歪んで見えた。

まるで

「
」

幻のように

「
」
口にした言葉は、ひどく遠い言葉だった。

とつくの昔に置いてきてしまった言葉。
懐かしい・・・そういうには、あまりにも、遠くなり過ぎてしまっ
た言葉。

「こんなところで会うなんて、思っても見なかった」

有り得るはずがないと思っていたもの。

永遠の時間にすら存在しないと思っていた。

それは、自らの過去と対面したような、そんな感覚。

まるで

普通の人間にでもなった気分だ。

久方振り　数百年振りかに感じる大きな驚き。

忘れていたようなその感覚に、少しの間、言葉を失った。

風が止み、木の葉の擦れる音が消える。
残るのは、夜空に浮かぶ星と月、そして、ほの明るく輝く牛と車。

郷愁

その静けさに名をつけるなら、そう呼ぶのだろうか。
少なくとも、自らにとってはそうだった。

遠い・・・過去に呑まれた時間だった。

「あなたは」

口を開いたのは、向こうが先だった。

声こそ落ち着いていたが、言葉を探しながら話すその様子に、まだ
混乱が治まっていないということが容易に理解できた。

記憶の中でも、見られなかった光景。
妙な感慨を覚える。

「あなたは生きていたの？」

あの時間から
ずっと

そう聞こえた気がする。

事実、本当に聞きたかったことはそれなのだろう。

ずっと生きていたのか。

この世界で、この場所で、たった一人で

言外にそんな想いが込められた言葉。

「
」

その問いへの答えは 決まっている。

「
生きていた」

ぎりぎりの処で
その境目で

何かが消えてしまいそうな そんな中で

生きていた

全てを
喪ったこの場所で
失くしたこの場所で

少なくとも

「今、こうしてられる分には、生きている」

微かに残った自分を抱いて
僅かな

幻のような人間らしさを抱いて

それでも

怖い、違う。

嬉しい、違う。

驚き、確かにそれもあるが多分違う。

わからない。

それが一番近い。

別に大切なものではなかった。

ただ、興味深かっただけ、良い研究材料だっただけ

あれの完成に必要な、一番根幹の情報を持っていただけの存在。
だからこそ、一番最初にその役割を終えていた。

その後のことは、私は関係していない。

情報として、その男が死んだはずだということは知っていた。
生きられるはずがないと、自らも判断を下した。

そして
消えるべき存在だった。

自分にとってはどうでもいい、ほんの些細なこと。
けれど、人々にとっては、彼は否定すべき存在　許してはなら
ない存在だった。

ほんの偶然であっても、ただの事故的発生のものであったとしても、
彼の存在は、特別を特別でなくしてしまうものだった。

だからこそ、あそこで抹消してしまう。
なかったことにしてしまう。
その筈だった。

そう
聞いている。

けれど

生きていた。

無いはずのもの。
消えてしまったはずのもの。

忘れてすらいたもの。

そんなものを目の前にして

「生きていた」

そこにはもう、おかしなことだという考えしか浮かばない。
驚きを通り越して、疑問にしか　不思議だという感覚しか沸か
ないのだ。

気を抜くと、なぜだか笑ってしまいそうなほどに
不思議さしか感じない。

なるほど…

どうやら私は、彼の気配を追っ手と勘違いしたのだろう。
その気配は、紛う方無き知ったものであり、それと似たものだ。
ほんの少しの違いはあれど、そのほとんどは変わらない。
ならば、解らずとも無理はない。

少しずつ落ち着いてきた頭が、そう考えをまとめる。

けれど

安心はできない。

彼が　敵でないとは限らない。
それに関わりがあるとなかろうと、こちらは彼らを見捨てた側で
あり、彼は見捨てられた側の人間なのだから

沈黙が続く中、再び風が通り抜け、草木を揺らす。
重苦しい　肩に重荷を背負っているような、そんな感覚。

「ふむ」

口を開いたのは、今度は向こうから何かを考えこむように腕を組みながら、男は軽く息をもらした。

「さてさて、どうしますか」

独り言のように呟かれたその言葉には、少しの重苦しさも感じられない。

まるで、久しぶりに出会った友人との距離を測っているといったようないな

男は、こちらとの距離を少し縮めると、近くにあった両手で抱えるほどの岩を指差した。

そして、顔をこちらへ向けて、一言、こういった。

「とりあえず、座って話しますか」

そんな気軽さがあった。

「へええ、そんなことが・・・」

月明かりに照らされた下、手ごろな岩を腰掛にして、さして雅もな
い話しをしていた。

星空の下、月明りが灯り、隣には、ぼんやりと輝く牛車。
そんな中で話す、男と女。

人が聞けば、邪推しても仕方がないようなそんな雰囲気の中、話題
に上がるのは、ただの日常の話。
なんの赴きもない日常譚。

ただし

「変わらないな、月の都も」

「顔ぶれが変わらないのだから。大きな変化はないわ」

交わされるのは、空に浮かぶ対の一つ 届かぬ月の話。

「そりゃ、退屈もするな。姫さんの気持ちもわかるよ」

「月にとっては一大事だったのだけれどね」

不可思議な会話。

けれど、ある意味自分たちにとってはその方が正しく
普通の
はずのもの。

交わされるのは、数万 憶振りの世間話。

「じゃあ 完成したのか」

「ええ、やっと完成品が」

永遠の中でこそ、交わされる会話。

隔てた時の継ぎ合わせ。

懐かしい、のかね・・・？

そんな会話を続ける中、胸中に渦巻くのは微かな違和感。
まるで、物語を読んでいるかのような、実感の伴わない世界の話。
それは

今までの仮宿と同じ　置いてきた名前たちと同じもの。
すでに、過ぎてきたものと等しいもの。

ああ、そうか。

響く言葉は理解できても、その内側へは響かない。

とっくの昔に、失くしていたのだった。

それは、何度も繰り返してきた記憶と同じ。

あの時に

その場所は“仮のもの”に過ぎず。

帰る場所ではなくなった。

故郷ではないのだから。

辿りついた思考の結論は、至極納得いくものだった。

数千、数万と時を重ね、億をも越える時間が過ぎる中
それすらも、ただ“通り過ぎた場所”の一つでしかなくなっていた。
そういうことらしい。

考えてみれば

あそこにはもう、帰りたいと思う理由もなくなっている。
もう、あの時の時点で

そう考えて脳裏に浮かぶのは、最後の光景
終わった場所ではない。

改めて実感する時の流れ
その重さに何故か笑みがこぼれた。
案外、それを意識するのは、こういふときなのかもしれない、と。

「どっかしたの？」

不自然に浮かべた笑みに、疑問の声を上げる旧知の女性
似て
非なる時を生きる薬師。

「いやいや、なんでもありませんよ」
ただの思い出し笑いです、と笑って返した。
そう、と小さく返す彼女。

眺める月は、相も変わらず遠いままに。

「それじゃあ、これからどうするんだ？」

互いの事情を理解し、それに納得したところで、その話題を切り出した。

向こうもこちらも、無駄に争う意味もない　偶然、死にかけただけ。

そんなことには慣れている。

「身を隠すわ。姫様の能力を使えば、それも可能はず」

「能力、か…」

「そう、私の能力を使う」

そこまで話したところで、後ろからそんな声がした。

「あら、姫様のお目覚めね」

長い着物のすれる音。

その音の方向に振り向くと、そこに立つのは　優麗さを体現したかのような柔らかき美しさを持つ少女。

なるほど、あの噂は本当だったか。

竹の中より生まれし少女、その美しさはこの世のものとは思えないほどのもの。

その噂は、はるか都まで伝わり、天の長が我を失うほどだという。

「私の能力を使えば、月の追っ手からも見つからない」

なよたけのかぐや姫。

高尚なる美しさは、確かにこの世ならざる美麗さを誇っている。
まるで、別世界の 別種の美しさをもつかのような、そんな姿。

「盗み聞きは良くないですよ。竹取の姫さまよ」

「聞こえてしまったの。仕方がないじゃない」

返す言葉には、なんの悪びれた様子もない。

そのまま、手ごろな岩を見つけてそこに座りこむ。

「そのための場所を探していたところなの。ねえ、永琳」
そういつて優雅に従者を指し示す。

「永琳・・・？」

「こちらでの名よ」

地上の人間に、私の名前は理解できないようだから、との補足。
なるほど、と軽く頷いた。

「姫様の力なら、あちら側に発見されない 発見されたとしても
手出しができないような結界を張ることが出来る」

当てもなく空を彷徨っていた理由。
わざわざ、人気のない夜を飛び回っていた訳を説明する。

「そのためにはまず、大きな力を使っても、それとわからない場所を探さないといけないから」

その力の源である姫が、後を引き継いで補足を加える。

そう

私たちはその場所を探さなければならないのだ。

確かに、姫の力を使えば、余程のことがない限り、それが露見することのない結界を創ることが出来る。

けれど、そのためには大きな力を使わなければならない。

そうなれば、いくら強固な結界を張ろうとも

「結界を張るための力によって、居場所がばれる。そういうことか」

それを理解したのか、男は納得したように呟いた。

「正解」

説明の手間が省けて嬉しいのか、輝夜が微笑みながら答える。

「足取りを混乱させるのはできるのだけど」
「流石に、一箇所に留まっているあいだわね。」

苦悩を滲ませた言葉に、男は納得がいったというふうに頷いている。

「それで、永琳。場所は見つかったの？」

「まだ、ね」

輝夜が上げた疑問に、暗い調子で返した。

月の者たちにすら通じる結界　それほどのものを拵えるには、余程の大きな力を使わなければならない。

それが、紛れてしまうほどの力を秘めた土地となると

滅多なことでは見つからないだろう。

そう、と気落ちしたように呟く輝夜の顔にはあまり精彩がない。

元々、家屋からあまり出たがらない性質の人間だ。

長期間の野外生活に、肉体的には大丈夫でも、精神的に疲れが溜まってきているのかもしれない。

早く見つけなければ

そんな焦燥感がこみ上げる。

「それは」

何かを考え込むように、腕を組んでいた男。

それが、ぼそりと呟くように言葉を発した。

「例えば、龍脈　土地自体に力が集まりやすい場所。力を惹きやすい場所ってことでいいのか？」

「ええ、かなりの規模は必要になるけれど、そういう強い力を秘めた場所なら大丈夫」

ふむ、と何かを思い起こすかのように顎に手を当てる男。

こちらの様子を探るように、低い声で問う。

「そこに住人には、何の影響もないのか」
「隠れる場所さえあれば、その者達が近づかないような呪いもできるわ」

よし、と軽い声を上げ、男は膝を叩いて立ち上がる。

そして、こちらから少し離れ、ぶつぶつと何か呟きながら空を見上げた。

どうやら、月や星の位置を見て、方向を測っているらしい。

「ふむ、ここからなら・・・向こうの方向か」

そう呟いて、ある一点の方向を指差した。

「ここから真っ直ぐ　まあ、歩けば半月といった処に、変わった土地がある」

指し示された方向にあるのは、険しい山々。

「人間と　多分、妖怪もいるはずだが、まあ、上手く位置を調整すれば、隠れる場所くらいあるだろう」
そこなら多分大丈夫だ、そういつて男は振り向いた。

歩いて半月・・・最高速度で飛んでいけば、一日二日程度でたどり着けるだろう。

男が離れた距離を自分たちの速度に換算する。

それほど手間もかからない。何より

「手がかりなしに探すより、よっぽど楽でしょうっ」

こちらの思考を読むように呟かれた言葉に、思わず男の顔を見ると、男はにやにやと胡散臭げに笑っている。

「何やら、信用しづらいわね」

「嘘はついてませんよ」

疑わしげに目を細めた輝夜に対して、男はそのままの表情で答えた。

「ま、参考程度に聞いといてください」

そういって、元に位置に座りなおした男。

眠たそうに欠伸をしながら、話す姿には、ほとんど頼りがいを感じられない。

けれど

こちらは手がかりも何もないのだ。

「行きましょうか。姫様」

「いいの？永琳・・・？」

あっさりと男の話に乗ったこちらに、輝夜が不思議そうに声を上げる。

確かに、いつもの自分ならもう少し情報を得てから動くだろう。

けれど

「たまには、騙されてみるのもいいでしょう？」

微笑みながらいった言葉に、信じられないと驚いた様子を見せる輝

夜。

自分でも、なんだかおかしな気分ではある。けれど、なんとなくそうしてみたい気分なのだ。

「おや、信用してくれるんですか？」

慇懃無礼に微笑む男に

「ええ、折角の縁なのなもの」
自然に浮かんだ笑みで返した。

輝夜は、その様子を不思議そうに眺め、それから、何故か微笑んだ。
何かに安心したように 何かに納得したように。

「それじゃあ、また、縁があれば いや、八意永琳、か」

「ええ、また」

それは、ここにいると決めた名前^{あかし}。

そう、きつとここにいれば、また会うこととなる。

永遠に続く時の中

永遠に浮かぶ月の下

決して終わりはないのだから

「で、結局、あの男は誰だったの」

光り輝く牛の車に乗り、空を駆ける中。

先程から浮かんでいた疑問をぶつけることとした。

「あら、聞いていたんでしょ？」

「あれだけじゃよくわからないわよ」

断片的に交わされていた会話からは、二人が昔馴染みだということ
は理解できても、男が何者なのかということはわからなかった。

ただ、この月の頭脳と対等に会話しているという時点で、何かしら
の力を秘めているということだけは推測できたが

「教えなさい。永琳」

彼は何者なの。

そんな疑問に、答えを探すように遠くを見る従者。

その様子は誤魔化そうとする、そんな印象ではなく、ただ、わから
ないのだといった様子に見えた。

何でも知っているような彼女には、とても珍しい表情だ
き合いである自分にとってもあまり見たことのない表情。
長い付

よくわからないわね。

そんな状態の従者に、ますます疑問がわく。

「切っ掛け、かしらね」

しばらくして、囁くように呟かれた答え、また理解しづらいものだった。

「え？」

思わず聞き返したこちらに、彼女も、考えを整理するようにぼつぽつと呟く。

「最初の 可能性というものを知った、最初の切っ掛けといったところ、なのかしらね」

曖昧な答え。

けれど、きつとそれ以上のことを聞いても答えてくれないだろう。多分 自分でも理解していないことなのだ。

そう思った。

「そういえば、姫様。最後に、何か渡していたようですが…あれは？」

「ああ、なんでもないの」

道案内の褒美よ、尋ねられた疑問に用意しておいた言葉を返す。

そう、お礼。

「珍しいものを見せてもらったものね」

「？」

ぼそりと零した呟きに、従者は不思議そうな顔をする。

慌てて何でもないか答えると、まあ、いいかといった様子に、探索

の続きを始めた。

本当に珍しい。

妙に表情の豊かな様子を眺めながら思う。

こんなにペースを乱してるのを見るのは初めてだわ。

いつものようにみえて、なぜだかバランスを崩している様子の従者

長年の友人を見て思う。

なぜだか、嬉しい と

ずっと見てきたものの新しい部分を知ったからなのか。
この友人が、なぜだか、少し楽しそうに見えたからなのか。
それはわからない。

けれど

地上じじにきて良かった。

そう思えた。

ずっと変わらない月の下で

少しだけ変わった時を見た。

退屈な永遠の中で、そんなものと出会ったのは、本当に稀なこと。
本当に稀で　とても面白いものだ。

そんなことを

今更ながらに

深く実感した。

永月が縁（後書き）

袖触れ合うも永月の縁。

永き時を生きているなら、だからこそ感じる驚きもきつとある。多分、きつと。

という感じなのですが、思い浮かんだことと書きたいこと、その間を繋ぐのは難しいと、つくづく思います。バランスもさることながら、それが一つの話になっているのかどうか。

まだまだ精進が必要ですね。

上手く着地できたか。それが心配です。

皆様方、読了ありがとうございます。

お気に入り、評価ポイントについても本当に嬉しく思っています。本当にありがとうございます。

ご感想、ご批評もお待ちしております。

灰被り（前書き）

この次の編を先に書き始めてしまって、この話は後になってしまいました。

遅ればせながら、更新です。

楽しんでいただければ、光栄です。

灰被り

荷車に荷物を載せる。

大きなものから小さなものまで
簡単に運べるように
なるべく楽になるように

そこにあれば楽だから
そこがあれば簡単だから
全て載せて
全て一緒にくたにして

一つにまとめて運んでく。

背中に乗っていた重荷も
両手に抱えていた嵩張りも
大事には包み込んだ大切も

一緒にくたに

そうして

ある日気づいた。

この荷車を失くせば
私はどうなってしまうのだろうか。
一つ失くしただけ

どろろになってしまつたのだろ。

「西洋式・・・いや、ここは、法力に変換して・・・魔力と神力の複合式・・・しかし、それでいて・・・」
ぶつぶつと呟きながら、拡げた布の表面を指でなぞる。

そこに描かれているのは、様々な文字によって細かく刻まれた方陣。

封印式、か。

特殊な道具で描かれた線が複雑に入り組み合い、意味を持つ形
方陣として造り上げられているそれ。
法師が描く札にも似ているが、所々に混じる文字、力の方向性が違
う。

和洋折衷・・・いや、和式の魔法陣ってところか・・・

正道とは外れた形に組み合わせた式、法師が描く法力　霊力によって
造られる札とは違い、この札は、西洋の方法　俗にいう、魔法使
いが主として扱う魔力を混合して造られている。

行動阻害、思考低下、妖力封殺、能力制限、等々・・・

込められた力は、妖怪の封印を主とするもの。
力を削ぎ、思考を奪い、行動を縛り　その対象から自由を奪う。

それも　この規模なら大妖すらも無力化できる可能性がある。

並の妖怪なら生命活動まで停止してしまうほどの力が織り込まれた
一種の封印兵器とすらいえる、それほどの力が練りこまれている。

おそらく、かなりの年月をかけて、それも超一流の術者によって造られたものだ。

『何だかわからないからあげる』

お礼よ、そういつて手渡されたものにしては、いささか貴重品過ぎる贈り物。

確か、空飛ぶ鉢を操ったとか、帝を快癒させたとか、そんな逸話を持つ聖・・・その姉が造った霊験豊かな札だといって献上された胡散臭い品とかいつていたが・・・

案外、実話かもしれない。

そういつてしまえるほど

面白い技術だ。

元々は法力を基本とする方陣に、西洋式の方を取り入れて、それらが打ち消しあっていない。

それぞれを上手く混合させ、相互に高めあうようにして、より強力な封印を作り出している。

長い間生きている自分としても、なかなか珍しい品。

・ この式を繋ぎとして反発を緩和・・・この線は循環と固定か・

刻まれている意味のある線、その一つ一つを確認し、分析していく。

こういうものは面白いと思うのは、昔から変わらないな。

自分にはない発想、着眼点によって造られて技術は、どれだけ永く生きようとも、どこかで現れる。

長い経験、積み重ねによって

独創的な発想、天才の発現によって
偶然の一致、神の気まぐれによって

そんなものを眺め、知り、学んでいく。

知識を得て、知恵を知り、新たなものを思う。

年寄りにとっちゃ、この上ない道楽だ。

既存の知識と新たに得た知識を組み合わせて
知らないものを知って、新たな発想が生まれて

確かに少なくはなかったが、零ではない愉しみの一つ。

「・・・む？」

その時、扉の向こうが妙に騒がしいことに気がついた。
日が暮れてから大分時間が経つのに、複数の人間が走り回っている
気配がする。

何かあったのか？

慌ただしくなる気配に警戒を強め、広げていた荷物をまとめた。
いつでも行動が出来るように、いつもの旅衣装に整え、様子を伺う。
そこへ

「火事だー!!」

喧しい叫び声が飛び込んできた。

身体が熱い。

暑いのではなく 熱いのだ。

焦げつくような熱さがこの身を包み、
周り中の全てが緋色に染まっ
ている。

ただ一つしか、そこには存在しない。

楽だな。

そう思った。
身を任せれば、何も考えずにすむ。
熱さ以外に何も。
心の内、そのずっと奥でくすぶり続ける何かも、この炎に包まれて
いる間は感じ
ない。

全て

自分の全てが一つとなる。
憎しみも愛しさも
苦しみも悲しさも
全てがなくなつて
ただ一つだけ

いつそ

失くしてしまいたい
壊れてしまいたい

このまま灰になるまで
消えてしまえば
楽なのだろう。

そんなこと

絶対にありえないのだろうけど

「じりゃあひどい」

赤い灯りに包まれ、白い煙をあげる木々。

風に煽られ、呻き声のようなおどろおどろしい音をたて、その勢いはますます増していく。

回りが早い・・・

煙に巻かれないように口に布を巻き、なるべく低い体勢をとりながら走った。

山火事。

実りある緑の木々が緋色の炎に包まれ、周りのもの全てを呑み込んでいく。

そこに暮らす者にとって、致命的な災害。

雷にしては雲がないし、誰かが不始末でもしたのか・・・？

それは自然に起こることもままあるが、その原因の大概は火を使うもの。人間が原因であることが多い。

里山、人の生活圏の一部であることを考えれば、誰かが火を使ったのが原因かもしれない。

火事というのは、どんなに小さな原因からでも、思わぬ間に燃え広がるものだ。

流石に消し止めるのは、無理か・・・何処かで食い止めるくらい、かね。

木々の間が狭いために、次々と燃え移り、火勢が増していく。

煙の流れる勢いからしても、このままでは被害が広がっていくばかりだろう。

近くに水源をないことを考えれば、あとは、どれだけ規模を小さくして治めるか、という話だ。

そんじゃ、ここ辺りから・・・

速力を維持しながら、身体に巡る力を活性化させるように気を練る。脚回りを中心に、残りは身体全体に

「・・・ふっ！」

小さく息を吐きながら、高まった力を一気に燃焼させ、普段とは比べものにならない力を発揮させる。

身体強化の技法、筋力と体力の底上げである。

火が回ったその一番端の位置、火の勢いを増し始める寸前の木々に向かい、その柱芯に一撃ずつの打撃。

少々上向きに放たれたそれは、木々を根こそぎに　　地面から引き抜くようにしながら吹き飛ばしていく。

根から干切りとられた地面はえぐれ、そこには切り株すら残らない。

類焼を防ぐため・・・あんまり気は進まないが・・・

そんなふうにならばやきながら、まだ生きた木を削っていく。

円を描くように火の発生源を中心に、炎と木々の間を空けていく。

つまりは、破壊消火　それと似たようなものだ。

周りの木に燃え移り続ける火炎、その一番端から木々を減らしていくことで、さらなる拡がりを削っていく。

燃え移る先をなくした炎はそこで動きを止め、今ある燃料分しか姿を保つことができない。

炎を閉じ込める、そういう策である。

その範囲こそ完全に焼き尽くされてしまいかもしれないが、それ以上には拡がることもない。

あとは・・・

簡易用の結界。

軽い火避け程度の力を込めた符を散りばめて、その線を強化する。

実験用の符紙を用意してて良かった、な。

握りしめる長方形の紙の束　元々、輝夜に貰った符の解析と実験用に用意したものだ。

利益こそ高くはないが、数だけはたくさんある。

風避け、火除け、水縁、土符・・・

炎を避け、防ぎ、消し去る力をもった様々な符。

指先についた煤と血液を使って新たに式を書き込みながら、それをばら撒くようにして走る。

簡略化しているために効果はまちまちだが、それなりに意味はあるだろう。

よし、あそこで

自分が描いた線　森の切れ目を見つけた。

このままこの境界を繋げば、完全に炎を閉じ込められる。
あとは時間さえあれば、それなりの被害で鎮火させることができるだろう。

「これで最後つ・・・と」

そう呟きながら、最後の一本を弾き飛ばした。

半分ほど火の回り始めていた広葉樹は、勢いよく吹き飛んで、燃え上がる火炎の内側へと飛んでいく。

そこに

「ありゃ？」

緋色の何か　炎の塊のようなものが飛んできて、ドゴンツという鈍い音と共にぶつかった。

とても痛そうな音だった。

「・・・・・・・・っ」

目が覚めた途端、頭に痛みが走る。
軽い鈍痛、すぐに治る程度のものだろうが、そのせいですぐに意識が覚醒する。

「・・・・・・・・？」

視界がはつきりしたところに飛び込んできたのは、茶色い木目民家の屋根だった。

私はなんで、こんなところに・・・？

意識を失ったせいかわからない、しばらくの間の記憶が飛んでいる。自分が何をしていたかもわからない。

いや、もしかすると

痛みの名残はあれど、傷のない頭に触れながら思う。

また、死んでいたのかもしれない。

「お、目が覚めたかい。お嬢さん」

低い男の声。

少しぼうつとした感覚が反射的に引き締まり、寝転んでいた体勢を整える。女の一人旅は危ないことが多い、その経験から身につけた習性だ。

何があってもいいように身構え、警戒を強めながら、声の方向に視線を向けた。

「・・・ふむ、大丈夫そうだな」

視線の先 壁にもたれるようにして座っていた男が、こちらの様子を観察しながら呟いた。

その声に悪意は感じられないが、警戒は緩めない。

「誰なの？」

「まあ、通りすがりのもんだ」

お嬢さんが森でぶっ倒れてたから拾ってきたってとこだよ、そんな説明をする男。

長身で細身、少し年寄り臭くも感じるが、見た目自体は若い。凡庸そうな、なんとなくやる気のないようにも見える表情は、嘘をついてるようには感じられなかった。

だけど

どことなくだが、妙な雰囲気を持っている。

それは、昔に感じたことのあるような 何処かで見たとような

「……………」

頭の中をよぎった映像に、一瞬身体が熱くなり、我を忘れそうになった。

それを無理やり押し込めるようにして、なんとか意識を食い留める。

違う……こいつは違うんだ。

言い聞かせる言葉。

相手は、あいつに少し似ているだけ

ただ、似ているだけ

それだけのことだ。

暴れだしそうな熱を抑えて、頭を平静に保つ。

あいつはもういない。

あの晩、あの場所から 消えてしまったのだから

「何処か、痛むのか？」

心配気な声で男がいつて、こちらを気遣うように視線を向けた。

「なんでもない」と無理やりに落ち着けた声で返すと、少し訝しげな表情はしていたが、「そうか」と低く呟いて、何かを考えるように口元に手を当てた。

そして

少しの間の後、もたれかかっていた壁からこちらへと向き直った。真っ直ぐに、見据えるようにこちらを見つめて

「ここまで燃やされちゃあ困るからな」

そういった。

「……っ……お前……！」

男の言葉に反応して右腕が振り抜いた。

先程の熱さの塊が 赤々とした火が手首より先を覆い、まるで手のひら全体が炎に変わってしまったような形となっている。

落ち着いて……上手く制御すれば大丈夫。

自らに言い聞かせるように放ったそれは、ただの威し。

男の首元に突きつけて、戦意を削ぐ。

そうやって、ただ、何者かを聞きだすつもりだった。それを

「 ああ、やっぱりあんただったか」

こともあろうくに、男は掴みとった。

「えっ……あっ……」

緋色の光をあげ、その身すらも焦がし、焼けつかせる炎。

その前では、人間はおるか、妖怪すら長くはもたない。
そのはずのもの。

それを 男は素手で掴みとったのだ。

「あ、あ・・・」

あまりの光景に、思わず声を漏れた。
それと共に

「む・・・」

勢いを増した熱さに男が顔を歪ませる。
制御が乱れ、手を覆っていた炎が揺れ蠢いた。

あ、また・・・

押さえつけていたたがが緩み、炎が、その勢いを表し始める。

「逃げる・・・！」

腕の方にまで拡がり始めた炎を無理やり抑え、制御を取り戻そうとするが、一度乱れた思考は元には戻らない。
それどころか、その焦りによって、炎の揺らめきは余計に酷くなる。

焦げつくような炎の匂いと、熱くなっていく身体。

何度も繰り返した失敗が 過ちが脳裏に蘇って

「 駄目・・・！」

諦めの叫びと共に、完全に制御を失った炎はこちらの全てを呑み込み、私の全身を緋色が包む。

また、繰り返される。

そう思った瞬間。

「落ちつけ、お嬢さん」

そんな言葉と共に、腕から何か暖かいものが流れ込んだ。

男の触れている部分、そこから入り込んだ何かが、私の中で爆発寸前になっていた熱さとぶつかりあって 炎が、霧散した。

「っは・・・えっ・・・」

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

高まり始めていた力が急速に薄まって、体中から力が抜ける。

「落ちついて・・・落ちついて、ゆっくり息するんだ」

「くっ・・・っはあ、はあ」

ぼんぼんと背中を叩きながら、言い聞かせるようにこちらに呼吸を促す。

反射的に息を留めていた肺が、今までの分を取り返そうとするように働きだした。

何が・・・

息苦しさが落ちついてくると共に、自分の意思とは無関係に消えた

炎へと疑問がわく。

一体、どうして、何で
ぐるぐると巡る疑問。
混乱する頭。

「制御は、できてないみたいだな」

ぽつりと、男が呟くようにいつて、やっと我にかえった。
さつと男から距離をとり、身構えた。

「な、何をしたのよ」

まだ冷静になりきれしていないのか、地の口調がでてしまった。

舐められてしまう、そう思って慌てて口を抑え、こほんこっつ咳払いをしたあと、「何をした」と言い直した。

男はさほど気にした様子は見せず、「さて、ね」と小さく呟いて、面倒くさそうに頭をかいた。

睨みつけるようにして先を促すと、男はしぶしぶといった様子でこちらに向かいなおす。

「相殺・・・まあ、火に水をかけて消しただけ」

お嬢さんが火を出したから、こっちは水をだしたただだよ。

男は簡単そうにそういった。

確かに、言っていることは単純だ。

火は水で消える。

そんなことは子供でも知っている。

けれど、そんなことでは説明できない。

もし、この男が自分と同じように水を出したりできるのだとしても燃えている物体を素手で掴んだり、まだ炎にすらなっていない力を打ち消せる理由にはならない。

手の内が読めない。

そんな警戒したままのこちらに対して、

「ま、そう構えなさんなって」

こっちに害意はない、と男は気楽に言い放った。

ゆっくりと歩いて、部屋の真ん中辺りにあった囲炉裏の前に座りこみ、向かい側に座るように促した。腰を落ち着けて話そうということなのだろう。

確かに、言葉の端々に引っかかりは感じようとも、まだ、向こうは手を出していない。

そう考えて、出来るだけの警戒をしながらも、相手の向かい側へと乱暴に腰を下した。

「どうぞ」と相変わらず真剣見の見えない表情をしたまま、男はどこからかとり出した器に囲炉裏にかけられていた鍋から湯を掬って、こちらに差し出した。

何もおかしなものは入っていないと示すように、先に口に含んでみせる。

確かに、先程までのやり取りや眠り込んでいた時間も含めて、喉はかなり渴いていた。

よしんば毒だったとしても、どうせ自分には効果がない。

そう思つて、精一杯に睨みを効かせながら、白湯を口に含んだ。待ち望んでいた水分に身体が潤い、少しだけ頭が冷えた。

「少し落ち着いてから・・・ゆっくり説明しますよ」

それを見届けてから、男はのんびりとした口調でいった。

もう一度、自分とこちらの器に湯を注いで、囲炉裏にかけていた鍋を外し、隣へと置く。

そして、すつと立ち上がると、部屋の端、扉の方へと歩いていった。

安心は出来ない。

一挙一動を見逃さぬように、油断なくそれを見守る。

男は、扉の向こう側に置いてあつた風呂敷包みを持ち上げ、そのまま元の位置まで戻ってきた。

ささて、と呟きながらその結び目を解き、こちらに見せつけるようにそれをふわりと開く。

そこには

「腹が減つては戦もできないでしょう？」

白い湯気を放つ、美味しそうなお粥があつた。

お腹がぐうとなった気がして、少し恥ずかしかった。

灰被り（後書き）

喉も渴けば、お腹も空く。

我慢できても、必要なくても

本当は戦闘シーンもあるはずだったのですが、なぜか不意打ちご免
と言う感じに・・・

まあ、らしい気もします。

少し、同じパターンを繰り返すすぎ、かもしれないですね。

なぜかこの主人公は、同じ釜の飯をくって親交を深めるみたいなの・・・

・何かそういう風になってしまいう気がします。

マンネリになるのは回避しないといけませんね（汗）

ご批評・ご感想お待ちしております。

何かご指摘もあれば、ご一報を

読了ありがとうございます。

種まき爺（前書き）

・・・本当に遅くなってすいません。

この部分の話をこんなに長くするつもりはなかったのですが・・・

次の登場人物の話はある程度できているので、この次話を公開した後、少し早く更新できると思います。

種まき爺

生きている　瑞々しい深緑の葉を繁らせて、柔らかく佇む木々。枝一本、葉一枚に至るまで生命力溢れたその身の内には、多量の水が含まれている。

大気中、土中から取り込まれ、また、その中へと戻されて、一つの流れとして循環していく。

それは、植物が進化し、この大地の上で生きていく上で獲得してきた生きる形であり、あらゆる状況に対応してきたものである。

それは、たかが火勢ごときに覆されるものではない。

そもそも、木々が燃えやすいというのは、それが枯れたもの、乾いたものであるという状況でこそ成り立つものだ。

ある程度の火力をもって、無理やりにその水気を干上がらせ、それを殺しきってからでなければ、生きている木々が燃え上がることはほとんどありえない。

ましてや、今は植物の謳歌する季節。

温暖湿潤のこの島国においては、木々は緑の色に覆われ、森は水気で満ちている。

余程の燃料、材料を集め、元とするかなりの火勢がなければ、山火事などが起きることなどないだろう。

もし、それが起きるとすれば

それ相応の理由　原因が存在する。

「また、やっちゃったのか」

呟くように零れた言葉は、きつと正しい。

あの時見たのは。

緋色の炎に彩られ、明るく輝く翼をはためかせて、炎の鳥が飛んでいた。

火の粉を散らし、その火力をもって、木々を殺し　森を焼いた。

それを落としたのは偶然であり、過失のようなものだったが、そこにいたのは、一人の少女だった。

焼け焦げた世界の中、ただひとつ生きていた存在。ある意味では、異分子のようなもの。

その流れをせき止めた要因。

火事の原因、か。

多少混乱は見られたが、自覚もあつたのだろう。

こちらの話を理解して、少女はすぐにそれを認めた。

年齢からは考えられないだろう真白く染まった髪に表情を隠しながら、少女はぼつぼつと話す。

その炎の力　制御できない力のこと。

何かに取り憑かれたように暴れ、壊してしまう自分のこと。自分でもわからない自分のことを

「人里には被害はでていない。山に小さな広場ができただけだ」
罪人の告白のようなそれを聞き終えた後、それが起こした結果を語る。

「どうせ、森は開発する予定だったらしい。開墾する手間が省けたって笑ってたよ」

それは慰めでもなんでもなく、ただの事実であり、村人から聞いた話をそのまま少女に伝えている。

被害はあってないようなもの、焼けた木々も、その土地を耕せば肥料となって、新たな田畑を造ることに繋がる。

村人にとって、その山火事は大した被害にはならないだろう。そういうことになった。

「一応は、そういう結果となった。」

「運が良かっただけだろ」

小さな声でそういって、顔を伏せたまま、少女は固く拳を握りしめる。

手のひらが白くなるほどに込められた力は、そのまま彼女の揺れを示しているのだろう。

全くといっていいほど、その後悔は晴れてはいない。

確かに・・・安心は出来ても、喜べるわけがない。

本当に、運が良かったにすぎないのだ。

風向きが悪ければ、空気が乾燥していれば、近くに人がいれば・・・被害は免れなかった。

死人が出たとしてもおかしくない。

あのまま火事が拡がり、山全体を焼いていけば・・・人々は生活の糧を失い、やはり大きな損害を受けていた。

村一つ。下手すれば、それ以上・・・

そんな結果になっていた可能性もある。

それだけで、十分な恐怖となるのだろう。

人の命も、なくしてしまったものも、起こしてしまったことも

それは、決し

て拭えるものではない。

ただ、その肩に積み重なるのみで、自分が失わってしまったものは、取り返ししようもない。

後悔先に立たず、だ。

だが

「ああ、運が良かったただけだな」

今回は運が良かった。

今は、それだけのことに過ぎない。

「誰かを殺さずにすんだし、誰かの生活を壊さずにすんだ。被害も
しれたもの お嬢さんに責任はない」

「ふざけるな！そんなわけがあるか！」

平坦に、報告するように告げた言葉に、爆発するように少女が叫んだ。

自らの内で噛み締めていた感情の大きさを示すように、激昂する姿は、その少女の生来の性格も示しているようにも思える。

「殺していたかも・・・壊していたかもしれないんだ・・・」

そうしていたかもしれない。

そうなっていたかもしれない。

そんな恐怖。

真っ直ぐに受け止めて、真っ直ぐに受け入れるからこそ、その波に吞まれてしまう。

浮かぶのは、壊していたかもしれない人々と汚れた手。きつと、そんなものだろう。

それでも

「殺していないし、壊していない」

「・・・っ・・・運が良かっただけだ・・・」

小さく縮こまった声。

自責に満ちて

怯えて

震え

罪に

苦しみに

足をとめてしまう。

けれど、それは

ただの自己満足だ。

「そうだ。運が良いですんだんだ」

可能性はあった。

やりかねなかった。

それでも

それはまだ

後悔できるわけがない。

「あんたはまだ、それをしていないだろう」

いくら重そうでも、いくら苦しそうでも

「それは　その重さは現実じゃない」

ただの幻。

存在しない罪。

「悪者ぶりなさんな。まだ、何もしていないんだ」

勝手に罪人になるのは、お門違い。

ただの自己満足の自己嫌悪。

やってもない罪に怯えて、蓋を閉めて閉じ込めても　それでは、
折角の運の無駄遣いだ。

後にも先にも後悔はたたない。
勝手に諦めて、勝手に放棄して

「償いたいなら、それを起こした後にすればいい　今からでも間に合いますよ？」

「っ！」

言い放った言葉に、少女は顔を上げ、きつと睨みつけた。
多少の怒りは覚えているようだが、先程の失敗を踏まえてか、なるべく抑えているようで、力の高まりは感じられない。

「冗談ですよ」
軽く口端を持ち上げながら、からかうように告げる。
その軽い調子が気に入らないのか、少女はますます目を吊り上げる。

「ふざけるなよ・・・」
静かに、それでいて、激しい怒りの込められた声。
高ぶりやすい感情を抑えようとしながら、それでも、見過ごせないという姿。

それはあまりに幼く、拙い若さを抱えていて

少しだけ、昔を思い出す。

苦しくて
怖くて
何かに怒って
何かに悲しんで

それでも諦められずに、足掻き続けて

どこまでも、人間らしかった感覚

にしても

嫌われたもんだ。

自分が誘導したことながら、少女の真っ直ぐさ 単純さに苦笑を
浮かべる。

それは昔の自分にはなかった部分だ。

真っ直ぐな強さと真っ直ぐすぎる弱さ。
危なげで、生きづらそうなのその性分は、きつと永く時間の中での重
荷となってしまう。

しかし、まあ、気分的には。

悪くない。
そう思う。

自分にはない部分だからこそ、それが、とても好ましい。
人間らしいと、そう思える。

まあ、それでも

だからこそ、教えないといけないだろう。

自分達のような存在を生きていくため、少しでも、楽に生きていくために

年寄りの・・・この道の先達の役目として
馬鹿な先輩の滑稽譚を

この蓬萊の少女に

「いやいや、すみませんね」

ふざけた調子で、少しだけ先輩面をしよう。
手本にも反面にもなるように。

「けれど、冗談で終わらせられる話なんです」

あとは自分次第。

あとは自由気ままに。

少しは生きる足しになればいいと、心の底に呟きながら

つらつらと男は語る。

「いくら嘆いても、いくら考えても、まだそれは起こっていないこと。」

「どうせなら、冗談のままにしまえばいい」

ずっとそうしてしまえば。

そうなら、誰も傷つかない。

ありえたかもしれないことは、ありえただけで終わる。ただの幻想で

「勝手に後悔して、死んでもいない人々を哀れんで
そんなのは意味の無いことだ。」

折角運が良かったのに、自分勝手に苦しんで水をさされて

殺していたかもしれないんだ。
壊していたかもしれないんだ。

「そんなの知りませんよ」

そんなことがあったなんて誰も知らない。

そんなこと知りたくもない。

運が良く助かった。

それだけでいい。

「勝手に理由にされて、立ち止まられる方が迷惑だ」

ずっとそのままではいられたら、今度は本当になってしまつかもしれない。

今度は現実になってしまつかもしれない。

それこそ、いい迷惑だ。

「そう思いませんか」

言い放たれた言葉は、身体の奥に突き刺さったように、冷たく胸の中に滑り込む。

悲しむことすら、苦しむことすら許されない。

それより早く消えてくれ。

こんなとこにいないでくれ。

存在すら感じさせないでくれ。

さっさと消えてくれ。

きつと、そんな言葉を聞いた現実はない。

けれど、私はそんな存在だ。

そういわれている存在だ。

こんな化け物に　イテホシクナイ。

「お嬢さんは どう思います」

不意に男の姿が目の前にあった。

いつの間にか立ち上がったのか、いつ移動したのかもわからない。

ただ、こちらに伸ばされようとしている手が、ひどく恐ろしく感じて必死で後ずさりながら、何かを守るように身体を両手で抱え込んだ。

きつと

私は外れてしまったのだ。

人という道から

幸福になれる場所から

あいつのせいで

こみ上げてくるのは、暗く 激しく燃え盛る炎。

何もかもを壊してしまいたいそうな

どろどろとした感情。

「あなたはここに・・・」

イテモイイソソザイナンデスカ？

きつとそう続けられる言葉。

聞きたくない。

全部なくなってしまうば・・・きつと

思考が何かに喰われていく。
何も考えず。
何も感じず。

ただ燃え上がるように

何もかも・・・キエ・・・

「なんてまあ、そんな話に意味はないんですがね」

は？

真っ白に吞まれかけた思考が引き戻されて、一瞬、何が何だか分からなくなつた。

頭に置かれた僅かな重みと共に、落とされたのはそんな言葉。
柔らかい人の温度に、ふざけた調子の声。

「え・・・？」

目を開けると、そこには、悪戯に成功したような様子で微笑む男と頭に置かれた手のひら。

男はそのまま、頭を二度三度ぼんぼんと叩いた後、先程までの真剣な雰囲気はどこへいったのかというほどに気の抜けた様子で、「うーん」と声を上げて伸びをしながら、近くの壁を背に腰を下した。

どういう・・・え、あれ・・・？

あまりの豹変振りに、頭がついていかない。

ぐるぐると疑問の音が鳴り響き、思考に収拾がつかない。

「これは昔の、どっかの惚けた年寄りの与太話　大した意味なんてない。ただの馬鹿の失敗譚」
どうでもいい滑稽話ですよ。

口元に笑みを浮かべ、男は軽い調子でそう語る。
どうでもいいことだというように
ただの戯言だったとでもいうように

「だってね」

困惑するこちらを放ったままに、男はそのまま話続ける。
たわいのない雑談や意味のない世間話のような調子で、それでいて、
なぜだか真っ直ぐとこちらを見据えたままで

「ばれてないなら、そこにおいても同じでしょう」

飄々とそう告げた。

「は？」

そんな間の抜けた声が小屋の中に響いて
それが自分の声だと気づくと、なんだかひどく恥ずかしく思った。

男はつらつらと言葉を続ける。

「ばれてないなら、そこにおいても同じでしょう」

子どものような 幼子が考えたような揚げ足取りのような論。

「なかったことにして、知らない振りしていれば、別に誰も困らない」

誰も知らない方がいいなら

忘れた方がいいなら

そうしてしまえばいい。

「そんな・・・わけに」

「どうせ気づかれていないんですよ？」

そこにいる必要もない。

そこからいなくなる必要もない。

「本当になかったことにするなら、それでもいい」
「で、でも」

それじゃ、いつかそれを本当にしてしまう。

本当に壊して、失くしてしまうかもしれない。

そんな可能性は当然のこと。

今回のように運がいいですむとは限らない。

なら

「それなら、自分の分だけは忘れないようにすればいい」

そういった言葉に、少女は意味がわからない、といったふう目を見せた。瞬かせて、きよとんと幼い子供のよような表情を見せた。

「そのまま　　ずっと同じまま立ち止まるから繰り返す。なら、ちゃんと必要な分だけ抱えて進めばいい」

その様子に少し笑いがこみ上げながら、だらだらと無駄話を続けていた　　その終わりの部分を紡ぐ。

黙っているだけで

誰にも知られないだけで

それは自分の中に降り積もる。

それだけで十分だ。

「わざわざ、いらぬ分まで抱え込んで」

そんなものに

「押しつぶされてやる必要もない。さつさと荷物をまとめて、勝手に自己解決して、成長した良いところだけを見せてやればいい」

外面を飾りつけ、悪いところはなかったことに。
良いところ取りの善人面で

「いい子ぶつてしまえば、誰にもわからない」
騙しきつてしまえばいい。

知らない方が幸せだ。

「それなら、誰も損はしないでしょう」

口端を持ち上げて、嫌味な笑みを浮かべながら言い放った言葉に、少女は黙り込んだ。

色々な考えが頭の中でぶつかりあっているのか、妙に一貫しない表情となっている。

その混乱振りがよくわかるため、見ていて、少し面白い。

多分・・・

それでいいのか・・・とか、そんな結論・・・だとか　納得で
きないやら、普通はもっと高尚な答えでも出すんじゃないのか、と
かいう不満やらがどたばたと頭に溢れて、わけがわからないといっ
た感じになっているのだろう。

自分でも、ここまで色々と並べておいて、それが、なんていう感覚
も存在している。

けれど

まあ、そんなものだろう。

少なくとも、幸せに人を騙す分には誰にも損はない。

たかが一人の人間の経験が出せる言い訳なんて、こんなものだ。
もっともらしい答えも、高尚な悟りも存在しない。

「背負わなければならぬ荷は背負っていけばいい。わざわざ、必
要以上に背負う意味はない」

ただ、それだけのことだ。

「忘れなさんな。あんたはまだ、後悔すらしないでいいところにいる」

まだ、選ぶことができる。

まだ、考えることができる。

時間がある。

「うだうだいう前に、次を失くす努力をすればいい」

その方がずっと楽だ。

今は辛くても、後から後悔するよりも

ずっと、後悔だけしかできなくなるよりも

「でしょっ？お嬢さん」

「……っ……わかってる……」

子どもを相手にするようなふざけた調子でいった言葉に、少女は少しむっとした声で答える。

強がっているようにも、無理しているようにも感じるが、先ほどより、少し力をもった声で

「逃げない」

そういった。

種まき爺（後書き）

種を撒いていくだけ。

育つかどうかは人次第。

・・・なんだか、上手くまとまっていないうような気もします。主人公が、らしくない態度をとっている気もしますが、一応、まだ途中。そして、相手が相手だから、というところもある・・・はずです。

ご批評・ご感想お待ちしております。

何かご指摘もあれば、ご一報をお願い致します。

読了ありがとうございます。

枯れ木に花を（前書き）

長い・・・ですね。いろいろな意味で・・・なんだか申し訳ない。
次話、というより次のひとくくりは、先につくっていたのでもっと
早く更新できると思います。

枯れ木に花を

焼けた木々は灰となり、土を鼠に染め上げる。
煤けた灰は宙を舞い、彼方の場所に降り注ぐ。

はらはらと散った命
さらさらと流れた命

風はいつか吹きやんで
浮かんだ鳥も止まり木に
何処かの
遠い空気をはらんだままに

新たな命が芽吹く土地は
新たに運ばれた大気を吸って

いつか
花が咲くこともあるだろう。
枯れた命を糧として
花は色づき、緑が咲く。

聖灰から再誕する焔のように美しくはななくとも
灰に汚れた手だからこそ
魅せられる姿

一つの命の生き様を示した。
異端の辿った軌跡

何処まで外れても
その中心は変わらない。

きつと
どこまでも
どうしても

私は私でしかないのだから

調子の狂う。

胡散臭い笑みを浮かべていたと思えば、妙に真剣な雰囲気を出して話出し、かと思えば、急にふざけた調子になる。
はぐらかされているようで、からかわれているようで、何だかつかみ所がない。

語られ
諭され
誤魔化され

その雰囲気は吞まれて、自分が何に怒っていたのかもわからなくなってしまう
不思議な感覚

戸惑い
迷い

溢れ出るものは変わらない。

でも

これほど他人と話したのは久しぶりかもしれない。
最近ほとんどが野宿で、人里には近づこうとしなかった。

自分が違うことを意識させられるから
何か別のものになってしまったことを実感してしまうから

それが怖かった。

他人の視線。

自分の力。

投げかけられる言葉も
向けられる感情も

だから

「さてさて、寢床はどうするかねえ・・・」

端に束ねてあった布切れを確認しながら、男は何やら思索気に呟いている。

まるで、何事もなかったかのように
ただの、日常の延長とだともいうように

「不思議じゃないのか？」

ぽつりと、独り言のようにいった言葉に、男は訝しげな顔をこちらに向ける。

「あ、えと……」

無意識に零していた言葉に、自分自身でも驚きながら、慌てて口を動かした。

「こんな……わけのわからない姿で、炎を出して」

その声は擦れ、聞き取れないほどに小さくなっていく。口に出すのが、自分でも辛くなる。

けれど、それは本当のこと。

「ばけ……」

「ああ、そっぴや水沸かしとかないといけませんねえ」

続けようとした言葉は、中途のところで男の飄々とした声に遮られた。

夜半に沸かしなおすのも面倒だと、そんなことをいいながら、置いてあつた鍋を抱えて男は扉の外へと出て行ってしまふ。

「あ、え……ちよ」

折角覚悟した気概をいなされたようで、なんだかたたらを踏んだよ
うな気分となってしまうた。

ああ、もう

ほんとに調子が掴めない。

そんなこちらの様子を知ってか知らずか、戻ってきた男は、慣れた様子で囲炉裏の火を調整している。妙に良い手つきで、それもなんだか癪に障る。

なんなのよ・・・この男は

「で、火がどうしましたって？」

丁度いい具合に火を治めた様子で、男はそっぴいなながら自在鉤にぶら下げた鍋からこちらに向き直った。

一応聞いていたのか、と半ば呆れて、残りは怒りが込み上げる。

なんでこんな奴に私は・・・

ああ、もう

「こんな炎を出すこんな“化け物”、それがおかしく思わないのかっていつてるんだ！」

ほとんどやけくそのような感覚で 苛立ちを吐き出すように一気にその言葉をぶつけた。

本当は口にしたくない言葉。認めるしかない現実。

一瞬の沈黙と

ぱちぱちと小さな火が弾ける音だけが響く。

受け入れられるとは思っていない。
ただ、それでも

何かが変わるかもしれない。

諦めがつくのか。
何かを得るのか。

そんな希望とも絶望ともつかない　小さな予感。
それを感じさせる男の、答えを待った。

握りこんだ拳は、白く　痛みを伴うほどに力がこもる。

そんな状況で

「くくっ・・・」

聞こえた声と知らぬうちに下がっていた視線。
それを上げると、頭を抱え込むようにして笑みを浮かべる男の姿があった。

「何がおかしいんだ・・・？」

いたって真剣だったはずの発言。
それに対して、笑い続ける男。

「なんだ・・・いいたいことがあるならいつてみる」

心なしか自分の声が低くなった気がした。
俗にいうと、いらついている。

「いやいや、すみせんね」

そんなこちらの様子を察しながらも、全く反省の色もない様子で男は答えた。

その様子にますます目尻がつりあがる。

「あー・・・悪気はないんですよ?」

こちらが少し本気になっていることに気づいたのか、男は少し焦ったように表情を崩す。

それでも、目だけは笑ったままで

胡散臭い。

今までの様子から見ても、まったく信用できない態度。

男は、こちらの訝しげな目をまったく気にしない様子で

「まあまあ、落ち着いてください」

おっとりといった印象にいった声色で　そういった。

「あんまり興奮するから　指から炎ちかいがはみ出でてますよ」

「・・・っ!？」

その言葉に慌てて自分の両手を見つめた。

そこにあるのは、白く汗ばんだ手のひら。

いつも通りの、傷一つない手、だった。

火花の一つも飛んでいない。

はっと顔を上げると、口元を押さえて声を抑えながらも 先程よ
り数段笑みを深くした男の顔があった。

「おい」

低く、ドスの効いた声。

妙に落ちついた怒りが込み上げてくる。

頭は冷えているのに、腸が煮えくり返っている。

「ふざけるなよ・・・」

今なら罪悪感もなくこいつを殴ることができる。

そんな感覚に反応してか、いつもはぎりぎりのところで抑えている
炎が思い通りに 掌の上でごうごうと音をたてるのみに収まっ
ている。

妙に落ちついてる・・・

造り出した炎に自分でもそんなことを思ったが、今は置いておく。

先ほどよりも鋭く 敵意を込めて睨みをきかせた。

脅しのように炎を見せつけると、男は興味深そうに目を細めた後、胡散臭そうな笑みを浮かべて、敵意はないというように両手を上げた。

「まあまあ、落ちついてくださいよ、お嬢さん」
「人をからかっておいて・・・」

よくいう。

鼻先に炎をちらつかされても笑んだままの男。

本当に殴り飛ばしてやろうか・・・

そんな危険な思考が頭をよぎる。

けれど、一瞬だけ、男の表情が歪んだように想えた。

幼子を眺めるような、昔を思い出すような そんなものが・・・

なに・・・？

疑問が浮かぶが、その表情はすぐに、先程までの胡散臭いものへと変わった。

ほんの一瞬にしかすぎなかった出来事に、見間違いかと意識を戻す。

「では」

そんな微妙に逡巡していたこちらに、男は小さく呟いて、ゆっくり

とこちらに腕を伸ばした。

こちらの前に伸ばされた腕の先、その拳の中身見せつけるようにそれをゆっくりと開く。

そこには、何ものっていない。

「なんだ？」

ぶっきらぼうに声を上げて、男に視線を向ける。

「一つ面白いものを見せましょう　これで許してください」

男は大仰そうにそういつて、軽く息を吐いた。

目の前の掌に、少しだけ力がこもる。

そして

「さてさて、お立ち会い」

そんな軽い調子で放たれた言葉と共に

「え？」

そこには　小さな、蠟燭の灯りほどの炎がそこに、ふっと浮かび上がった。

呆然とする此方を淡い光で照らしながら、水、火、光の玉など、次々と小さな何かが生み出されていく。

「　　よいよいつ・・・ん」

そんな軽い掛け声と共に、生み出したものたちはふわふわとその手の上に浮かび、複雑にその空間を動き回った。

様々な成分で造られたそれらは、互いに光を反射し合いながらくるくると渦を巻くように揺れて、きらきらと星のように明滅して

男がすつと手を閉じたと同時に、ぱんつと音をたてて消えた。

固まったこちらに、にやにやと嫌味な笑みを浮かべながら、男が視線を向ける。

「おやおや、どうしましたお嬢さん。何か驚くようなことがありましたか？」

からかうように上げられた声。

その嫌味な態度が気にならないほどに、頭に一つの疑問が持ち上がる。

「何者、なんだ？」

こぼした疑問ににやりと口元を歪ませて、男は口を開く。

「なあに、ただの年寄りですよ」

また寂しそうな表情を見えた気がした。

けれど、それもまた、すぐに消えてしまう。

そして

低く、落ち着いた声で

その不思議と、吞まれてしまうような雰囲気

「髪の毛の白くない、若づくりの、ね」

そういった。

そうして

内緒ですよ、と悪戯っぽくいつて、男は笑う。

軽い調子で

飄々と

その姿はあくまで自然体で、あくまで普通で

何もおかしいところは存在しないし、存在していないようだった。

ただ、当たり前前に 特別なことをしていた。

おかしいな普通さ。

不思議な自然さ。

それでもいいか、と思っってしまったような当たり前前。

それが、妙に滑稽で、妙に可笑しくて なんだか子どものように

笑ってしまいそうになった。

頑張っただけ、笑ってしまった気もする。

それくらい

おかしいことだと思えた。

自分も
相手も

それでいいのかと、思ってしまったくらいに。

こぼれた笑いは、なんとなく湿っぽかった気もして……

少しだけ頬が濡れていた。

「さて、と」

始めますか。

小さく息をついてから、荷物を探り、一枚の衣を取り出した。

すっかり夜も更けて、鳥と虫の声しか聞こえない。

久しぶりに人と話したせいで疲れているのか、少女もすっかり眠ってしまっている。

市で捌こうとも思ってたんだが……まあ、いいか。

鮮やかな紅色に白い線で模様がいれられたそれは、なかなか珍しい、かなりの

上物である。
上手くすれば、貴族や豪族を相手に高値で売りつけることも可能だ
っただろう。

しかしまあ

路賃に困っているわけでもない。
無用に財をもっても、旅の邪魔になるだけだ。

そう考えて、綺麗に縫いつけられた衣をほどこき、一枚の布の形へと
戻していく。

加工しやすい部分だけを残して・・・あとの端切れは大きいも
のを残して・・・他は村人に渡せばいいか。

端切れといっても、こういう上等の繊維は貴重品。
きつと上手く役立ててくれるだろう。

そう考えて、必要のない分の布を適当な袋に押し込み、細長く、長
方形のような形になった残りをしわのないように綺麗に広げた。

確か、と。

壁際においておいた荷物を解き、奥から筆と小瓶を取り出す。

手のひらほどの大きさそれから栓を抜き、中身を小皿へと引っくり
返した。

細長い口から、とろとろとした液体が注がれ、円の形へと波が落ち
着く。

少し薄めるか・・・これじゃ描きづらい。

そう考えて、隣に置いておいた鍋　温めておいた白湯の残りをそこに足す。
筆の先でかき混ぜると、先程までは白く濁っていた塊が、半透明程度の液体へと
変わった。

「・・・まあ、こんなもんだろう」

そう呟いて、改めて広げた布へと向き直る。

基本的には封印の式。それを長期発動、装備者への簡易的干渉と制限。

あまり複雑にすると、式が短命となる。

なるべく長期的に考えるなら、無理矢理にではなく、術者が自主的に動く方向に働きかけるもの。

夜明けまでには完成する・・・それでいて効果的な。

そんな術式を頭に浮かべ、それを目の前の布へと刻んでいく。

染み入るように吸い込まれていく液体は、乾くと何もなかったかのように消えてしまう。

全体図を把握しておくためにも、あまり時間はかけられない。

円と線、曲と式・・・継ぎと繋ぎ・・・

霊力を込めながら淀みなく腕を動かして、その図を組み上げる。

参考とするのは、朝に眺めた封符。

あれよりは余程に簡単ではあるが、様々な要素を組み合わせるのに
は違いない。

水で消し、土で沈め、金で塞ぐ。
風を止め、氷で冷やし、木で和らげる。

その火を、その感情を、その高まりを

あくまで微かに、あくまで簡単に　けれど、気づける程度に。

あとは本人次第。

これは、ただの印。

今の現状を知らせるだけのもの。

完全に抑えはしない。

ただ、きっかけを与えるだけだ。

それ以上の効果はつけない。

そこまでする気はない。

これはあくまで　忠告程度。

「よし、と」

一つ目の術式を描き終えて、再び筆を濡らしなおす。

自分で自分を扱えなければ、結局繰り返す。

だからこそ、最初の切っ掛けだけおいておく。

一つの機会はそこにあり、あとは、掴むかどうか。

完全封印をずっとなんてのは、俄然無理だろう。

その印はいつか消えてしまう。

だから、それまでに出来るようになっていかなければならない。

後悔しないように。

ほっぼりはしないが・・・

甘やかす気もない。

ただ、学ぶ機会を与えるだけだ。

何をすればいいのかは、自分で考えるしかない。

方法はいくらでもある。

それに

多分、自分一人しかできない方法で　それは治まる。

なんとなく、そう感じている。

原因は少女自身で、解決するのも少女自身。

これは

それに気づくための切っ掛けに過ぎない。

自分で自分を律するための

自らに由る力を操るための

「さてさて」

どうなりますか。

一人呟いた言葉は何処か楽しげで

それはそのまま、響きどおりの感情を示していた。

久し振りに感じた感覚。

それは、目が覚めたというものだった。

夢か現か、朦朧とした意識の中をさ迷う眠りではない。

目蓋を閉じた暗闇の中に、身をゆだねる感覚。

ああ・・・朝なのか・・・

ぼやけた思考の中で、差し込まれた光によって日の出を知る。

なんだか、とても懐かしいような気がした。

いつもと同じはずなのに・・・

少しだけ、違う。

それは、何だか悪くない感覚だ。

昔は、そうだったかな。

温かい布団の中、慣れ親しんだ人たちの声で起こされて、誰かと共に食事をとる。

当たり前で

普通のことだった日常。

それは・・・

「ん、目が覚めたのか・・・」

そんな追想に水をさすように、無粋な声が響いた。

ふわあ、と眠たげに欠伸を噛み殺しながら、ぼうつとした視線でこちらを見る男。

「まあ、よく眠れたようだ、な。お嬢さん」

重畳重畳、とやる気なく呟く様は昨日と同じだが、妙に覇気のない胡散臭い印象の言葉使いもどこか薄れて、なんだか疲れているようにも思える。

眠っていないのか？

なぜ、その原因・・・もしかしたら、という様々な憶測が頭の中に満ちていく。

建物は焼けてない・・・怪我は？・・・見当たらないけど、隠してるのかも・・・でも・・・えっと

蓋が外れたように溢れだす悪い予感。

先程までの清々しさが嘘のように萎んでいく。

自分のせい、私の責任。

そんな言葉で埋まっていく思考。

そこへ

「落ち着きなさい、と」

トンツと軽く突くようにして、額に指が当てられた。

急いで立ち上がるうとしていた体の力が抜け、ぼてんと尻餅をつくような形で座り込んでしまった。

目の前には、呆れ顔でこちらの前にしゃがみこむ男の姿。

「何を勝手に盛り上がってんですか・・・」

寝ぼけないでください、とそういつて男はまた眠そうに口に手を当てて、大きな欠伸する。

「まあ、おかげで少しは目が覚めましたか・・・」と目蓋を指で擦っている以外は、本当に平常な状態に見えた。

「ね、眠ってないのか？」

「あー・・・ちよつと野暮用で」

少しヒリヒリとする額を押さえながら尋ねた疑問に、やりたいことがあったんですよ、と男は簡潔に答えた。

「・・・私のせい、か？」

迷惑をかけたのかもしれない。
そんなことを考えながら、恐る恐る声を上げる。

「いやあ…」

それに対して、男は小さな欠伸を噛み殺しながら答えた。

「それは半分くらいで…」
あとはこっちの都合です。

言いながら、男は先程まで座っていた場所へと移動し、床に広げてあった何かを取り上げる。
そして、何かを確認するようにその全体を眺めてから、「うん」と軽く頷いて、こちらに放り投げた。

「わわっ…と!？」

ばさりと風圧にはためきながら飛んできたそれを慌てて掴みとった。
手にはするりとした感触。

これは…

薄紅色の細長い布に、何かの文様のようなものが白い線で描かれている。

繊維のざらつきも感じられない感触の良さから、この布が高級品であることが伺えた。
それを

「やる」

「え、あ…?」

端的にそう告げられる。

一体・・・何？

そんな疑問が浮かぶが、男は気にした様子も見せず眠たそうに欠伸をしている。

昨日の人を食った態度が幾分減退している分、なんだかまた 微妙な印象だ。

「さてさて」

男はこちらの戸惑いを、知ってか知らずかなにやら呟いて、調子悪そうに伸びをした。

ぐつと両腕を上げて「うう」と苦しそうに呻きながら腕を下した後、隣においてあった荷物から何かを取り出して、隣に置く。そして、そのまま何かの作業を続けながら、口を開いた。

「あんたはこれからどうしたい？」

こちらの疑問とは関係のない質問。

視線は別の方向に向けたまま、そんなことを問われた。

何の脈絡のない質問に多少逡巡しながらも、少し悩んでから答えた。

「もうこんなことがないように、山奥にでも引きこもるさ」

そうすれば、誰にも迷惑はかからないし、このまま何もしなければ

何もなかったことになる。

私は自分の罪だけを背負っていればいい。

そう考えれば、随分と楽になった。

自分でも納得がいつている。

けれど、そんな答えに、男は顔をしかめた。

そして、「はあ」と小さく溜め息をついた後、また問い直す。

「どうするんじゃないくて、どうしたいかって話だ」

問われた言葉に疑問がよぎる。

一体なにをいつているんだ？

上手く繋がっていないような会話に、少しの苛立ちを覚えた。

本当に寝ぼけているのかと、男の方をきつと睨みつけるように見るめる。

そうするしかない。

そうしなければならぬのはわかっている。

それが、私の罪だ。

他に方法はない。

そんなこちらの様子に再び嘆息しながら、男は先程の布を指差した。

「それを身につければ、お嬢さんの力を抑えることができる」

「………!？」

告げられた言葉に思わず男の顔を見つめた。

男の言葉は、変わらぬ調子で続いている。

「まあ、正確にはそのきつかけとなるものだ」

男が語るのは、その役割。
制限と方法。

「お嬢さんが止めようと思えば、それは止まる」

制御の方と意識の蓋。

方法自体はごく単純なもの。

私の気持ち次第、というだけ

ただ

「止めようと思えなければ、それは止まらない　すべてはお嬢さん次第ってことになる」

自分を制御できるか。

自分を止められるか。

自分次第の　　自分の責任。

「受けとるかい？」

突きつけられたのは、一つの選択。

このまま諦めるのか、足掻こうとするのか。

思っても見なかった可能性　広げられた誘いに、言葉が出てこない。
い。

一瞬、どうすればいいのかわからなくなる。

私は・・・

どうすれば

「と、まあ急ぐこともありません」

また、熱くなりかける思考。

その手前で、男はあつけたかんとした調子でいった。

「その前に一杯といきますか」

迷いをみせたこちらを察しているのか。

どうやら、少し時間をくれたようだった。

男は、いつの間にか沸かされていたお湯に先程隣においていた容器から何かを注ぎ、細長い棒でそれをかき混ぜる・・・それが湯の中に完全に溶けると同時に微妙に強めの香りが広がった。柔らかな香草の匂いが部屋全体を覆う。

「ちよつとした滋養の薬草です。少しは目が覚める」

そう説明しながら、それが注がれた器が差し出される。

温かい湯気を立てるそれ、少し息を吹きかけて冷ましながら、男はそれを口に含んで目を瞑った。

そして、こちらにも、どうぞというふう指で促した。

強めではあるが、何だか身体に活力を与えてくれるような、そんな香りを放つそれ。

少し迷いながらも、相手と同じようにそれを冷ましながら、それに口をつけた。

瞬間

「・・・っにが!?!」

舌の上に絶大な苦味がはしった。

思わず叫び声を上げ、器を放り出しそうになる。

「ね、目が覚めるでしょう」

思わず涙目になったこちらに、けらけらと笑い声を上げながら、平然とした様子でそれを飲み続ける男。

確かに、先程よりも目が覚めたようである。 昨日の調子に近づいている。

「おまつ・・・!!」

「身体にいいことは確かです。 ゆっくりり呑みながら 悩んでくだ

さい」

言い放たれた言葉に、怒鳴りつけようとした言葉がしぼむ。

微妙に釈然としないが、『その間ぐらいは待っていてやる』、そういうことなのだろう。

「 ありがとう・・・」

すっかり子どもも扱いされるのに、少し慥然としながら、ぶっきらぼうに礼をいった。

それに対しても、「いえいえ」と軽く笑って受け取る。

本当に、子どもに戻った気分だ。

それに反発するように、その苦い飲み物に無理やり口をつけた。

「私に出来ると思うっ?」

やっと半分ほど薬草汁を飲んだところで、少女は口を開いた。

その姿には、昨日ほどの悲壮感は見られないが、やはり、あまり明るいものには感じられない。

それは、積み重ねてきた失敗の重さであるのだろうし 自分を信

じきれない自信の無さでもあるのだろう。

それだけの経験があるということだ。

「さて、ね・・・」

そんな様子の少女の器に、鍋の中身を継ぎ足しながら呟いた。

微妙に嫌な顔をしていた気もするが、まあいいだろう。

「ふう」と自分の分の器に口をつけながら、軽く息を吐いた。

昨日に使いすぎた気力が少し回復し、頭が働き始めるのがわかる。

やっぱり二徹はきつかったか・・・

ただでさえここのところちゃんと眠っていなかったのが、昨夜に力を使った分、かなりの疲労となっている。

保存しておいた薬草によって多少緩和できるが、この体の重さは、きつちりとした睡眠をとらない限り抜けきらないだろう。

まったく・・・

そんな疲れを吐き出すように息をつきながら、回りきらない頭で、正直な返事をした。

「わからん」

「そんな適当な」といった感じに少女の表情が曇るが、構わず言葉を続ける。

「お嬢さんが何を抱えているのか 何に囚われてるのかも知らないんでね」

少女の根幹になる記憶に対して、自分は何も知らない。
人間何人分もの時間、その間中、保ち続けた感情を知ることはいできない。

そして

知りたくもない。

たとえば、まったく同じ時間を生き続けたとして 感じるものは違う。

それが、人の生というものだ。

決して共有できるものではないだろう。

「それがどれだけ大きいもので、どれだけ根深いものなのかもわからない」

それでも

それが、苦しいもの。なくしてしまいたいような重荷だとしても、きつと、なくしてしまえば、何かを失ってしまうくらいに。

それほどに　生きる意味だと言い換えてしまってもいいほどに、大きくなってしまったものなのだろうことは理解できる。

それと似通った何かは知っている　多分、それは別のもので少女と自分は違うが

「それでも」

それでも

「嫌なんでしょう?」

そうしてしまうのが

そうとしかできないのが

「苦しくて、辛くて、何もかもを終わらせたくなくて、消えてしまえと願っても　それでも、嫌だ」

そう思ってしまう。

それだけが変わらない。

それは
きつと同じ

「消えない火のなかで、ずっと在り続ける」

それが何なのかはわからない。

ただ、いつもそこにあることだけは確かなもの。
振り切れない、磨耗しない、風化しない。

折角消えたと思っても、いつの間にか、また生まれ、そこに居座って
いつそ失くしてしまえば、そう願っても

「自分が自分である限り 変わらない」

そんなもの。

身体の不調を訴えるように込み上げた欠伸を噛み殺しながら、少し
ぼうつとしている頭に浮かび上がる言葉を連ね続ける。

「そんな不老不死みたいなもの、相手にし続けるだけ面倒になる」

これはきつと、実体験を語っているだけの思い出話。

ただの事実で、自分を振り返っているだけに過ぎない。
重なるか。

重ならないか。

自分なりの解釈で

「なら、相手にできるほうを相手にしてる方が楽だ」

昔の後悔、過去の失敗。

自分の中に根付く教訓と経験。

当てはまるなら、そうしなければいい。

当てはまらないなら、そうすればいい。

「その力は自分のものだ」

選ぶのは自身の想い。

したいことをしたいようにするだけだ。

「悲しみだとしても、憎しみだとしても、それは自身のもので、そこから沸きだしたもので なら」

止められない想いで、振り切れない感情で
それでも、自分自身のものならば

「方向を逸らすくらいはできるかもしれない」
誰も、何も巻き込まないように
消えない炎ならば 広がらないように

自らのうちに楔を 誓いを打ち込んで

「少なくとも、この一夜に ぼや騒ぎも何も起きていない」

自らの過去から、今の目の前の少女に向き直る。

「あとは、それを繰り返す」

それだけのこと。

偶然を繰り返せば、いつかは当たり前前になる。
それがずっと続けば

日常に

そうなればいい。
そう思った。

遠くを見ていた目は、いつの間にかここにまで近づいて、こちらの前に立った。

柔らかく笑いながら、男はこちらを眺める。

「こんなじいさんより、よっぽど若いんだ
ならば、腐ってしまっ前に。」
時間は腐るほどある

そういつて微笑んで

「年寄りが新しいことを始めるのは大変だ」
軽い調子で嘯いて

「先はお嬢さん次第」

その手をとるのか、払い飛ばして逃げ出すのか。
選択するのも私自身。

そんな選択を差し出した。

「年寄りにできるのは、その手伝いだけです」

言い渡すように指された指先には、赤い布。

まだ汚れぬままにいるのは、私のことを示すのか。

「当たるも当たらぬも、信じるか信じないかも　お嬢さん次第」

手をとりますか　闘う気はありますか。

そう問うたのは、言葉ではなく、その眼差し。

無言のままに告げられる。

自分の想い。

自らの覚悟。

頭によぎったのは、過去の過ち　そして、その元凶への暗い感情。
それを思い浮かべるだけで、焦げつくような炎が胸を焼く。

それでも

眠るのが怖い。

近づくのが怖い。

もう嫌だ。

何度も振りおろしかけた腕。
焼け焦がした生活。

この炎に吞まれても

見過ごせないもの。
捨てられないもの。

無間地獄のように続く生とその切欠と 届くかもしれない指先。

希望に続くのか。
絶望に終わるのか。

「ああ」

きつと、睨み付けるような視線を男に向ける。

自らを奮い立たせるように
誰かに誓うように

「私は」

ばらばらに放っていた髪に手を差し込んだ。
ずっと変わらない傷みのない髪の間にしゅるりと音をたてて、通り
抜けていく感触。

半分に閉じていた視界が広がって、はっきりと前が見える。

どうせ逃げないと決めたんだ。

その先に立つのは、眠たげに目を細めながら、どこか楽しそうに微笑む男。

負けじと、こちらも不敵に微笑んでみせる。

焼き尽くす炎ではなく。

この先を照らす火を灯せるように

「
」

可能性を手を取った。

荷車にのせてしまえば楽になる。

けれど、これだけは自分で運んでいこう。

その荷車だけが別の場所に行ってしまうても失わないように。

重くとも

辛くとも

これだけは失くしたくないものなのだから

心の隅に置いておこう。

きつとそれだけで

私は私を失くさない。

枯れ木に花を（後書き）

繰り返し、繰り返ししながら真ん中へと寄っていく。

言い訳っぽいですが、そんな感じであれば

少し長くなってしまったのですが、やはりどこかで切った方が良かったですかね・・・

微妙なところです。

ご感想、ご意見共にお持ちしております。

読了ありがとうございます。

薄紅色の誘いの中で（前書き）

少し早めに更新。

時間が少し飛んでいます

あのこととはまた後ほどに。

また、少し長めの一話です。

薄紅色の誘いの中で

はるか昔に大陸から歌が伝わり、この国でも様々な歌が詠まれるようになった。

自然の営みから人の感情まで、それは優美に詠いあげられ、一種の芸術として、国の文化の一部とも呼べるものへと洗練されていった。

その中でも、花というものは人々の目を強く惹くものだったのだらう。

それを扱った歌というものは、数え切れないほどに存在している。花というものは、それほど人の感情を 心を揺さぶるものであったのだらう。

けれど、その基 原型となった場所

大陸であっては、花といえば『梅』が代名詞であったといわれている。

美しい薄紅の花といえば、詠うのは『梅』と決まっていた。

それは、当たり前前の、当然のことでもあった。

それが、時代が進むにつれて代わっていったのだ。

いつの間にか

いつからか

花は『桜』となった。

それは

この国がやっと

自らの美しさを知った瞬間だったのかもしれない。

自らの価値に気づいた瞬間だったのかもしれない。

そんな『誇り』とも呼べるかもしれないもの。

この国の美しさ

一つの象徴

薄明るく灯る燈あかり

薄紅に染まる光の下

少なくとも

そんな季節に舌鼓を打つのも悪くない。

たとえ

自画自賛であるとしても

自らを誇れるということとは

それは、とても尊いことだ。

そう思う。

自らを大切にすることこそ

その内の 本来に大事なものに気づけるのだから

ひらりひらりと散っていく欠片たち。
薄い紅色、桃色のそれは降り積もり、雪の様に地面を染める。
雪と違うのは、そこに冷たさはなく。
溶けぬままに、ただ、積もっていくということ。

温かく降り重なっていくこと。

「 絶景絶景」

高く続く登り階段。

その上から降り続ける花びら。

高き場所から、ひらりひらりと風に舞い、階段を少しずつ染め上げていく色。

いい光景だ。

そんなことを考えながら落ちる花片を眺めた。

「桜、か……」

大陸の方では、春の花といえば『梅の花』、うわさで聞いた程度の話だが、それが象徴とされているらしい。

けれど、この国。

この日出ずる国なら、なんとなくだが　この『桜の花』の方が合っているようにも感じられる。

築き上げてきた豊かな強さではない。

しなやかで、それでも芯の通った強さ。

散っていく弱さの中にあるからこそ、残る余韻。

この国には、そんな柔い美しさが似合う。

そんな気がしている。

あくまで、主観ではあるのだが・・・

「もし、御主。ここで何をしておる」

そのまましばらくぼうつとしていたところに、背後から声をかけられた。

振り向くと、初老の男性が立っている。

白い髪に、緑を基調とした着物。

ゆるりとした佇まいでこちらを見据えているが、その気配自体は凛と澄んでいて、一縷の隙も感じられない。

腰には二振りの刀、長刀と短刀を一本ずつ帯びていて、一目で侍なのだとわかった。

その振る舞いからしても、それなりの達人なのだろうと感じた。

けれど

なんだ・・・

何か違和感がある。

多分、人間なのだろうと思う。

けれど、なぜか多分としかいいきれない、そんな違和感。

姿かたちは確かに人間のもの、けれど、なぜか半分ほど、違うものようにも感じられる。

知っている、ような気もするが……この気配は……

「おう、聞こえておるのか」

もう一度声を上げられて、はっとする。

ここで黙り込んでしまつては、自ら不信を煽っているようなものだろう。

敵意は感じられない。多少妙な気配はするが……多分、大丈夫だ。

そう思い直して、意識を切り換えた。

「ああ、申し訳ない。あまりに桜がきれいなもので」

少し見惚れていました、と笑いながら返した。

「ふむ、そうか……」

そついいながら、侍はこちらと同じように落ちてくる花びらを眺めた。

「確かに見ごろではあるが、しかし、あまりここに長居するなよ」

悪いことが起きるかもしれん、ため息をつくように彼はいつ。

「悪いこと？」

「ああ、そうなりたくなければここには近寄るな」

最後の言葉を威圧的に

脅しつけるような声で言い渡された。

ここにいて欲しくないのか。

それは勧告であり、それでいて脅しでもあるのだろう。

『ここにいれば、何があっても文句はいえないぞ』と、言外にそんな意図が含まれているようにも感じられる。

少しの剣呑さはらんだ態度は、こちらに向けて刀を抜き放つてもおかしくはない。

けれど

態度と声色こそ厳しいものだったが、その雰囲気自体は微妙なものだ。

こちらを睨むように細めている目には　そんな感情は感じられない。

鋭く尖ってはいるが、どこか寂しげなものを含んでいるようにも思える。

悔やんでいるのに、それを飲み込まねばならない。

何かに耐えているような、そんな感情。

「　　この屋敷に何か？」

「深入りせんでくれ」

触れてはいけない、そんな拒絶の声。

こんな声を昔聞いたことがある。

何かを守るために、自分を犠牲にする声。

傷つきながら、自分以外のものが傷つかないように守る声。

それが、どこかに潜んでいるように思えた。

風が通り抜け、桜が舞う。

しばしの間、沈黙が訪れる。

「もうしばらくだけ、眺めてていいですかね」

桜を、といいながら、その優美な色を指差した。

侍は、少し思案気な顔をした後「少しなら」と許可をくれた。

「しかし、長居はせんでくれよ」

再度念を押してから、階段を登っていく男の後ろ姿を見送り、散り続ける桜を眺め続けた。

堅物そうではあったが、元来優しい気質なのだろう。言葉尻からそう感じられた。

それにしても

「何があつたのか、ね」

ぼそりと呟いた。

先代なら、ここで一緒に花見酒と洒落込んだことだつてあつた。

この主人は、そんな広い器の持ち主だつたはずだ。

風のうわさで亡くなったという話を聞き、この場所はどうなったのだらうとやってきたが、桜はそのままでも、ここに温かさはない。

あの風流な歌と、温厚な人柄と共に、様々な人がこの桜をのぞみにやってきていたというのに

今はまるで、何かが『死』んでしまったような、そんな気配がする。

主人と共にその温かな世界も消えてしまったような 温度を失っている場所。

桜はまるで『墓標』のようにも見えた。

しばらくそれを眺めた後、ふっと息を吐き、歩を進めた。ここはもう、あの時の場所ではないのだろう。そう強く感じて、時の流れを想いながら

けれど

「？」

再び上を見上げた。

妙な気配を感じる。

何かと何かが争うようなそんな感覚。

間に何か挟んでいるように微妙に解りにくくなっているが、確かに戦闘あらしそいの気配がする。

結界……？

いつのまにか、外界から切り離されるようにして、屋敷が薄い壁に包まれている。

ぼんやりと 意識を凝らさなければ、認識できない程に高度な結界。

それに気づくと同時に気配が強まり、余計に濃くなる 争いの音

色。

「……っ！」

微妙に見覚えのあるような気がするが、思い出している暇はない。間違いない。何かが起きている。

一瞬、侍の言葉が頭によぎったが、かまわず石段を駆け上る。数秒もかけずにのぼりきると、その屋敷の戸へと手を添えた。

視界に移っている景色には、何の変哲もない。ただ、閉じた扉があるのみ。

けれど

すぐそこに感じる喧騒の気配。何の変化もない屋敷の風景。

「違和感ありすぎんだよ」

境界に覆われた扉に手を添えて、目を瞑る。

幻と現実、それを区切る境界の扉を脳裏に浮かべて、その鍵を開く様を思い浮かべる。

一瞬だけ、すり抜けるようにただ、『扉を潜る』だけ、そんな感覚で

我、幻想の扉を開く

言霊を放つと共に、押し込むようにして身体を進めた。

閉じていた境界は何の抵抗もなく　その向こう側への道を開く。

刀を振る。

長刀と短刀の長所生かしながら、それぞれの隙を失くすように、振り、薙ぎ、払う。

長い年月をかけて、研磨してきた技術。

片腕の力では決して絶つことのできないものをも断ち斬る　技の剣。

半分が人ではない我が身だからこそ、たどり着いた境地。

そして、この身の一部ともいえるこの二振りの剣。

これさえあれば、斬れぬものなどない。

それほどの自信を持つ剣技。

それが

「あらあら、物騒ね」

届かない。

目の前の空間が何の前触れもなく割れて、現れた妖怪の女。

薄笑いを浮かべ、主人のいる部屋を眺め、その襖に手を伸ばそうとする瞬間。

それをなぎ払った。

「何用だ。妖怪」

ふっと姿を消し、少し離れた場所に着地した妖怪に刀を向ける。久しく見ていなかったが、妖怪退治の経験は積んでいる。

そして、人型の妖怪というのが一番厄介だということも、よく理解していた。けれど

これは別格だ。

そう感じた。

今まで退治した数々の妖怪、それを全て集めても足りないほどの実力を持っている。

にやにやと浮かべる薄笑いに、背中の汗が止まらない。

「この主人に用があったのよ　あの噂が少し気になってね
放たれる圧力に耐えながら、その言葉を聞く。」

「我が主は妖怪などに用はない。お帰り願おうか」
萎えかける意識を叱咤して、無理やり相手を睨みつける。

「あら、この主人は客人を選ぶというの。どうも失礼な話ね」
こちらの様子を眺めながら笑みを深くする妖怪。

「噂では、どちらかという私たちに近いものと聞いたのだけれど
……」
言った瞬間、刀を振った。

最速で音を鳴らした刀は、何も存在しない空間をきる。

「人の話もきかないのかしら」

「我が主を貴様らなどと同じにするではない」

怒りを込めてその言葉を発する。

そう。同じではないのだ。

報われぬ力を持ってしまっただけの少女を化け物として、人であらぬものとして　これ以上、傷つけてはならない。
そんなもの、そんな言葉を近づけてはならない。

何も出来ぬ自分に

不甲斐ない従者ができることは
ただ、それだけだ。

「失礼な話ね。まあ、邪魔なものはどけて進めばいいわ」

そついいながら妖怪が手を上げると、空間に裂け目が入る。

「遅いつ！」

いいながら、一気に距離を縮め、両手に持った剣を下から切り上げる。

空間の裂け目へと逃げ込む時間はないと踏んだのか、妖怪は滑るよ
うに後ろへと下がった。

そこへ上空からの影がかかる。

半霊、我が身の半身。

自分が半分でしか人でないことの証。

「……っ！」

予想外の方向からの攻撃に妖怪は一瞬怯んだ様子を見せたが、半霊から放たれる一撃を手をかざし、不透明な障壁のようなものでそれを防いだ。

その動きが止まった瞬間。

飛び込むように地面を蹴り、すれ違いざまに二刀の刀を振りぬいた。

魂魄流「現世斬」

自らの最速の一撃。

しかし

「なるほど、あなたもただの人ではないようね」

当たるはずの一撃に、手ごたえはなかった。

刀を構えなおした先に浮かぶのは、無傷のままに微笑む妖怪の女。

「少しだけ、難易度をあげることにするわね」

先程まではわざとだったのだろう。

こちらの一撃を食らう寸前の、ほとんど見えないほどの速度での移動。

わざわざ空間に穴を空ける手振りなどする必要もない。

能力を使用する前に仕留めたかったが。

頭の中で毒づいた。

相手がこちらを侮っているうちならば、まだ可能性があった。

「今度はちゃんと相手をしてあげましょうか」

そういつてこちらに手を伸ばす姿には、もう微塵の隙もない。

こうなれば相打つてでも

覚悟を決める。

相手が一撃を放つ瞬間に、捨て身の攻撃を仕掛ける。

そうしなければ 命をかけなければ勝てない、これはそんな相手だ。

伸ばした手のひらに収束する光。

こちらも構え、唯の一撃に全てを込める気構えを練る。

主人を守るために命をかける覚悟を その身に刻む。

「では、いくわよ」

収束された妖気が形をとっていく。

それが放たれば、瀕死に近いダメージを受けるかもしれない。

額から脂汗が流れ落ちるが、構ってはいられない。

その分だけ、一撃分の力を溜める。

ほんの一瞬・・・ただ、一撃を放つだけの間、命が保てばいい。

決死の覚悟を刃に込め、相手の攻撃に真っ直ぐに進む。

そうすれば、この剣が届くかもしれぬ。

ただ、それだけを考えて　二刀を持つ腕に力を込める。

妖怪の笑みが深くなり、その手が振るわれるその瞬間だけに意識を傾けて

その直前　一寸手前で、妖怪の動きが止まった。

今までの笑みが消え、口元を押さえ、信じられないといった表情へと変わる。

「私の境界を破った。いえ、すり抜けた？」

口の中で呟くように、ぶつぶつと何かを呟き、こちらの存在を無視するように何かを考え始めた。

これは、どうした・・・？

依然として構えは続けているが、相手の変化に少し気構えが崩れそうになる。

闘いの最中の隙。

けれど、格上の相手に対して、それに飛びつくのはあまりにも愚策である。

それなら、一か八かの捨て身になった方がまだ可能性はある。乱れた意識を整え、再び集中を呼び戻す。

そこへ

「　こんなとこで何やってるんだ・・・八雲の」
気の抜けたような声が響いた。

仕切られた境界を抜け、屋敷の入り口へと出た。

先程までは微かにしか感じなかった闘いの気配が大きく感じられる。

裏か。

幾度かだけ通ったことのあるその場所を思い出し、大体の位置を割り出す。

建物を迂回した先、あの桜が咲いている辺り。

これは

予想以上な大きな力の波動。

それが、二つ いや、三つ以上感じられる。

それぞれが混ざり合い、干渉しあっており、その判別は困難だが

そこらの中堅程度は一蹴できるほど、か。

何があってもいいように、ある程度の力を溜めながら、出来るだけ早い速度で走る。

不意を打てば、多少有利になるかもしれない。

そんなことを考えながらたどり着いた先、桜が散りばめられた庭園の中。

そこには、二振りの剣を構えた先程の侍と 見知った妖怪がいた。

「こんなところで何やってんだ。八雲の」
思わず気が抜けた声が出た。

一体何をやっているんだ・・・あの妖怪の嬢さんは・・・

「なるほど。貴方だったのね」

一瞬驚いたような顔をした件の妖怪 八雲紫は、すぐに納得した
といった表情へと変化した。

「それなら」などと呟きながら、うんうんと頷いている。

「けれど、どうやって私の結界をすり抜けたのかしら」

「それは能力を……いや、その前に」

話を聞こうと口を開いた瞬間

鋭い殺気を感じ、後ろに飛びのいた。

「 貴様も仲間か」

見ると、先程まで立っていた場所に剣を振り下ろした男の姿。
あきらかに攻撃態勢に入っている。

一体なにをしてたんだ。

戦闘の気配、八雲紫の存在、切りかかってきた侍と、妙な状況にな
ってきたことに頭を抱える。

「妙な気配を持つものとは思っておったが、妖怪か。上手く化けた
ものだな」

放たれた言葉に紫がクスクスと面白そうに笑い声を上げる。

笑うな。まあ、真つ当なものじゃないことは確かだが。

開こうとした口は、追撃をしかける侍の一閃二閃によって妨げられる。

「　　と」

思う以上に鋭い剣さばきに、さらに間合いを開き、ぷかぷかと空に浮かぶ妖怪の隣まで移動した。

優雅に笑いながら、それを観察する妖怪に、侍は舌打ちして動きを止める。

合流した・・・とても思ったか、ね。

同時に相手するのは分が悪いとでも思っているのかもしれない。そんな気はさらさらないが　話しをするには丁度いい間だ・

「すまないが、こっちのが何か迷惑でもかけましたか？」

「あら、ご挨拶ね」

わざと引つかかる言い方をすると、八雲が不満気な顔をして噛みついてくる。

それに向かつて顔をしかめながら、そちらだけに聞こえるように小声でいった。

「…………どう見てもこの状況は、お前が原因だろう」

失礼ね、と脹れる八雲を無視して、相変わらず怒気を発したままにこちらを睨みつけている侍に目を向ける。

「戯けたことを　　」

ジャリ、と地面の砂を踏みしめるように構えをとる侍。
あきらかにこちらの話を聞いてくれるようには思えない。

やれやれ、厄介なことに巻き込まれた、か。

最近は色々なことに巻き込まれやすくなった気がする、頭を抱え
たくなった。

こここの辺り、妙に事件に出くわす年月を送っている。

少しだけ考えた『いつも通りだ』、という感覚は打ち消しておく。
自分の日常はもう少し、のんびりしているものはずだ。

そんな言い訳を頭にめぐらせながら、
癖になった溜め息と共に、『荒事』に対する構えをとった。

「っし！」

唇の間から息を漏らすように、鋭い声と共に刀を振るった。

その一撃に対して、男は大きく距離を開けるように飛び退いた。

隣に浮かんでいたはずの妖怪の姿は既に離れ、屋敷とは違う方向へ
と移っていた。

こちらに手出しする気も、隙を見て屋敷へと向かうつもりもないら
しい。

何を考えているのかは分からないが、好都合だ。

まずはこの男を・・・

対面する男からは、あちらほどの脅威は感じられない。
妙な雰囲気は持っているが、それほどの手間をかけずに無力化できるだろう。

出来るだけ時間をかけずに終わらせる！

なるべく、あの妖怪を相手にする力を残したい。
そう考えながら、地面を蹴った。

「っはあ！」

男との距離を潰すと同時に、左に構えた長刀を男の首を薙ぐように振り下ろす。

相手はそれを身体全体で屈むように避けるが、それは想定の内、その下がった頭へ向かって流れるように右の短刀を突き込む。

二刀流の利点である隙間のない二段攻撃。
しかし

「……………！？」

手応えが消える。

外れたのではなく、攻撃したという事実自体が消えてしまったようなそんな感触。

身体の芯の部分から勢いを消されてしまったような、何もしなかったことにされてしまったような感覚がその身に襲う。

なん、だ……？

力が抜けてしまった腕に、思わず動きだと止まった。

「話、聴いてくれる気になりましたか？」

刀に手を添えたまま、こちらに口を開く男。

その掌には、こちらの刃が真っ直ぐに受け止められている。

これは、次元が違いすぎる。

それが意味するところに、愕然とする。

おそらく、この男は、こちらの全体重を乗せた一撃をそのまま殺し
きつた。

全速の一撃を、腕の動きのみで零へと変えてしまったのだ。

それは、自分の剣ではこの者には届かないという確信になる。

こんな芸当ができる者に、例え偶然であったとしても 剣先が掠
めるということすらもありえないだろう。

自分の剣は、殺されてしまった。

そのことに大きな衝撃を受ける。

が

退くわけにはいかない。

自分の役目は主を守ること。

自らの矜持が折れそうになろうとも、せめて誇りは守り通さなければ
ならない。

体は完全に止められているが、ただの人間ではない自分にはもう一
つの身体がある。

「舐めるな！」

自らをも奮い立たせる、気合の一喝。

男の背中に迫るのは、自らの半身、半霊。

二番煎じだが、あの妖怪とそこまでの会話をする余裕はなかったはず、初見ならば、あの妖怪のような力がない限り、避けようもない攻撃のはず

あるだけの霊力を込めた一撃が、相手の背後から放たれる。

首を薙ぐように、斜め上から振り下ろされる一閃。

するどい一撃だが、見切れないほどの速さではない。

膝を曲げ、屈むようにしてそれを避ける。

すると、その下げた頭へと右手の短刀が流れるように迫ってきていた。

上手い剣だ。

長い時をかけ、研鑽してきた流麗さがそこにはある。

人の贅力では困難であろう片手での殺傷を、その一撃は可能としている。

まるで、その時間の全てを剣につき込んだように。

けれど、時間をかけたことでは、自分も負けてはいない。

右の手のひらを盾とするように、突きこまれる剣先へと伸ばす。そして、剣がその刃に触れた瞬間、同じ速度で、力を分散させるようにしながら 引いた。

いくら刃が鋭くとも、止まっているものに触れても、指を切ることはないように。

勢いを失くしてしまえば、それはただの鉄の棒と変わりはない。その原理で

真っ直ぐに、勢いを殺すように その速度を殺す。

「……!?!」

相手の驚愕が伝わる。

これほどの達人だ。

自らの剣を こんな形で止められたことなどなかったのだろう。

「話、聴いてくれる気になりましたか？」

実力の違いを知らせ、それをもって説得にかかる。

趣味ではないが、この状況をなるべく穏便に済ませるには仕方がない。

武人であるからこそ、認めるしかないだろうと、そう樂觀しようとした時。

一瞬の逡巡を見せた侍の瞳に、火が灯った。

「舐めるな！」

殺しきつたはずの体から、気合の入った一喝がはいる。

そして背中側から感じた悪寒。

感覚的に理解したのは 背後に撃ち出された霊力の塊。

煙が晴れる。

そこにいたのは、二対の人間。

侍自らをも巻き込む、ただただ力だけを込めた暴発のような一撃は確かにその男へと直撃したはずだった。けれど

「なるほど」

そう呟く男は無傷だった。

捨て身にも近い攻撃で、自らも傷を負う覚悟だっただろう相手もまた無傷。

あるのは、先程までなかったはずの、地面に空いた穴一つのみ。

そう。

死角から放たれたはずの、その予想外の攻撃を、背中を向けたままで捌ききったのだ。

全身全霊 半霊によって打ち出された最大限の霊弾は、後ろでのままに受け流された。

それは、もはや、人間業ではない。

「……………」

言葉もなく侍は絶句している。

自らの全力の攻撃を殺され、さらには、自滅覚悟の特攻でさえも、目線すら向けないままにいなされてしまったのだ。なまじ実力がある分、その衝撃は計り知れないだろう。

「確か、半人半霊っていうんだったか。危ない危ない」
妙な気配の正体はそれだったか、初見だったら危なかったな、と土煙によって負った埃を払いながら話す男。
まさに

「 規格外、ね」
感嘆の声が漏れる。

多分この男は、長年の経験のみによってあの半霊の攻撃に対応したのだ。

百戦錬磨という言葉では足りない。
億と数えても小さすぎるほどの闘いを積んできた経験。
あの程度の不意打ちなど、無意識で対応できてしまう それほど
の年月の塊。

相手が半人半霊という自覚がなくとも、勝手に身体の方が半霊に反応していたのだ。

しかも、相手を傷つけないほどに手加減をしたまま。

敵に回すとこれほど恐ろしい存在はいない。
なんせ、一つの歴史といえるほどの年月を相手にするようなもの。
そんな経験の塊に、不意打ちなど通じるはずがない。

呆然とした表情のままの侍。

それでも相手に向けた切っ先を下ろさないのは賞賛に値するものだろう。

この侍の主への忠誠心は、きつと自らの死の恐怖よりも強いもの。

これほどの実力者に、ここまでの忠誠を誓わせる主人とは一体どんな人物なのだろう。

ただの暇つぶし、興味本位でしかなかった屋敷の主への想いが少しの強さを帯びた。

「とりあえず話を……」

「さて、そろそろこの主人に会わせてもらえないかしら」

事情を把握していない言葉をさえぎり、相手に畳み掛けるように話す。

この規格外は性質上、事情を把握すれば邪魔になる可能性の方が高い。

なら、この雰囲気のままに話を進めた方がいい。

「おい、ちょっと……」

「ふざけるな！この命ある限り、我が当主には触れさせん！」

勝ち目はないのは理解しているのだろう。

それでも、その意志は衰えていない。

下手な攻撃ならば、せめて腕一本だけでも道ずれにする、そんな眼をしている。

「そう。なら」

お望みどおりに、そう続けられるはずの言葉は、別の、涼しげでどこか冷ややかな声に遮られた。

「もういいわ、妖忌」
その声と共に開かれた襖。そこにいたのは幽玄な雰囲気をもつ少女。幼いといつてもいい姿からは何故か、その年齢からは考えられないほどの静かな空気が漂っている。

「し、しかし姫様」
呆然としていた侍が、慌てたように叫ぶ。

「下がりなさい。あなたではこの者たちの相手は務まらないわ」
静かな声で、配下の者を律する。
その眼はこちらを見ているようで、まるで何処も見えないような希薄さがあつた。

そして

強い。
そう感じた。

「貴女がこの屋敷の御主人かしら」
「いかにも、私がこの西行寺が家の主人。何用でここに訪れた、妖怪よ」

辺りに広がる強い霊力。

一流の術者でも、これほどの力を発揮できないだろうと思えるほどの規模。

それに

これは、霊魂？

その力と共に集まりだす魂の形。
濃密で 　　　　それでいて清浄な、死の気配。

なるほど、これなら

並の人間ならば、耐えられない。
正常な生が
当たり前の命が

理解すら出来ない光景だ。

「ただの見物よ 　　　なるほど、確かに噂どおりのようね」

「貴様！」

激昂する侍の声。
主人に諫められたせい、刀に手をかけてはいるが飛び掛ってくる
という様子ではない。

「本当に噂どおりというのなら、貴女もその通りになるかもしれな
いわよ」

「あら、ただの人間程度と比べられてもね」

そう、と小さく呟くと、集められ、浮かびあがる靈魂の群れが主人
の前方へと集中した。

「なら、貴女も死霊の仲間入りね」

その言葉と同時に、膨れ上がった靈力。それが 　　　人魂にのせて放
たれる。

「あんまりなめてかからない方がいいわ 　　　怪我をするから」

矢のように打ち出される人魂を妖力によって作り出した妖弾によって打ち払う。

弾幕と弾幕の衝突よって拡散する霊力と妖力、具現化していた力が残照を残して消えていく様は、まるで散っていく花のように美しい。その美しさの中で

「これは」

思考の中に、妙な乱れが生じる。

こ……こい……

何処かへと誘われて、吞まれてしまうような

こつちへ……こい……

そんな声。

精神に直接受ける負荷。

死に 誘われる。

「……！」

背筋にはしる悪寒に、その精神波から身を守るように境界を弄つた。予想していた以上に強力な力は、それでもこちらを蝕み、軽い頭痛が襲う。

こちらが本命、ね……

死の概念が薄い妖怪であっても、それを意識せずにはいられない。惹き込まれるような、引きずり込まれるような 死への誘い。

妖怪である自分がこれほどの干渉を受ける・・・もし、相手が人間ならば

「 便利な能力ね」

表情を読まれぬように、わざとらしく微笑んでみせる。

「 便利・・・そう、そう思えるのね」

無感情にそう呟く少女。

精神攻撃が通じないと理解したのか、先程よりも多くの弾幕が打ち出される。

それを相殺しながら、自らの隣の空間を弄り、隙間を広げる。

覚悟していれば、自らの能力を持って精神干渉など防いでしまえる

ならば、あとは力勝負 圧倒的な物量で私の前に跪かせる。

捻じ曲がり、繋がった隙間からは、上下左右関係のない攻撃が広がる
ことができる。

大量の弾幕を境界の内に潜ませ
それとわからぬように力を設置して

さあ、踊りなさい。

笑みを深くして、そこに妖弾を打ち出そうとしたとき。

「 いい加減に」

ぼそりと、そんな呟きが聞こえた。

侍の、ではない。

あの少女が力を使い始めたところで、あの侍は後ろへと下がった。

ならば

「話を聞けと行ってんだろう」

あの規格外に決まっている。

低く呟かれたその言葉と共に、片足で地面を強く叩く。

恐ろしいほどの力が込められたそれによって 打ち出していた弾幕、集めていた力が、吹き飛んだ。

気当たり、というものがある。

元来それは、立会いなどで相手の出方を伺うための威嚇や牽制のものである。

けれど、それが一流の者によるものならば、ただそれだけで相手を萎縮させ・・・格下の者ならば、気絶させ、吹き飛ばすことすら可能だともいう。

それでも、これは桁違いだ。

一瞬、風のようなものが生まれたかと思うと、溢れていた霊力・妖力といった力のみを吹き飛ばしてしまった。

それを操っていた本人たちに影響がないところを見ると、他の方法

なのかもしれない。

それでも、相当の実力差がなければ、こんなことができるはずがないということくらいは理解が出来る。

あまりの力に自然と竦みながら、自らの主の身を案じた。

いつでも飛び出せるように身構えながら せめて、この身を盾として

それを行った男は、ゆっくりとあの妖怪の方へと近づいていく。
そして、優しげにこりと微笑んだ。

「さて、お話ししましょうか」

自分より、一回り以上も下に思える男に恐怖を感じたのは、これが初めてだった。

薄紅色の誘いの中で（後書き）

勝手に巻き込まれて

勝手に置いてかれて

流石に怒りますよ、的な

会話のキャッチボールは大事です。

戦闘描写は難しい。

頭で想像することを上手く文章にのせられているのかどうか・・・

「指摘、感想、

何でも下されれば嬉しく思います。

読了ありがとうございました。

花の宴（前書き）

今年最後に更新を、という感じでお目を留めていただければ光栄です。

花の宴

自らが違う存在だと知っている。
自らが異なる存在だと理解している。

それは偶然のもの
万象が彩る世界で天然に生まれた不自然な形
足りず 過ぎた 欠けた 超えた
凡とは非するもの
普通とかけはなれたこと

怖いのだろう
恐ろしいのだろう
近寄らないで
触れようとしないで

その姿に誘われたものは、皆消えてしまうのだから

いくら美しくとも
どんなに魅せられようと

きつと
それは

此岸のままには味わえない

ふらりと、少女の身体が傾いた。
まるで糸が切れてしまったかのように、ふっと力が抜け、慣性のま
まに崩れ落ちる。

「……………!？」

慌てて近寄って受け止めると、その身体は見た目以上に軽い。

これは……

骨が透けて見えてしまうほどに痩けた身体と病的に白い肌。
閉じられた目には深い隈が刻まれて、ろくな睡眠もとっていないこ
とがよくわかる。

「姫様!？」

少女を抱きとめた形となったこちらに、慌てて侍が駆け寄ってくる。
刀に手をかけてはいるが、主人を抱えたままのこちらに対して迷い
があるのか、切りかかってくるような様子は見せなかった。

「寝かすところは？」

そのまま身体の下へと手を回し、少女を抱き上げながら尋ねる。
侍は一瞬ためらったようだが、屋敷の奥を指し、こちらに先導する
ように歩き出した。

なるべく少女の身体に負担がかからないようにしながら、その指示
に従う。

しかし

軽い。

軽すぎる身体だ。

小さな子どもを抱えているような、そんな感覚しか腕には感じない。時より口からもれる吐息は浅く、息をしているのかしていないのかすらも怪しくなってしまうほど、それほどに希薄にしか感じられない命の重さ。

まるで

この世から消えてしまつような、儂い重さだった。

妙なことになっている。

自分が守るべき姫は、奥の寝所にある布団に寝かされている。

最近はろくに食事すらとっておられないのだ。当然のことなのだろう。

そんな御身体の姫を戦わせなければならなかった自らの未熟さに憤りを覚える。

まるで修練が足りていない。

が

しかし、それよりも今現在の問題は他にある。

「うづむ……これとこれ、あとこれか」

そう呟きながら何やら書き物をしているのは、後から現れた下手人の一人である男。

自らの攻撃を捌ききり、姫様と先の妖怪の攻撃を吹き飛ばしてしまふほどの力を秘めた、桁違いの力をもっているはずだが、今現在の様子からはそんなものは少しも伺えない。

確かに妙な雰囲気を持ち、見た目も気配も少し変わってはいるが、人間にしか思えないことは確かだ。

そして

「なんで私が……」

「審議の結果だ」

全面的に悪い方です、といいながら微笑む男と「なんのことかしら」と笑って返す妖怪。

どこか背筋が寒くなるやりとりである。

こちらの女の方は、異様な風貌ではあるものの、姿かたちは年端の行かぬ少女。

しかし、感じる気配は妖怪そのもの、しかも、信じられないほどの妖力を放っている。

それが

「へええ、一緒に食事をとる相手がいなくなって残念ですね」

「あらあら、冗談じゃないの」

軽口を叩き合うような、そんな胡散臭いやり取りをしながら、姫さ

まの世話を手伝っている。

正確には、男の方が姫さまの状態を調べ、必要だといったものを、女の方が何処からか取り寄せるといふ形だが、まず、姫さまが倒れる原因になったはずの者達がその介抱をしている時点でおかしな状況だ。

男に最近の姫さまの状態を尋ねられ、勢いそのままに答えてしまったが、見る限り、そこらの医者よりも適切で、手早い処置を行っているように見えた。

そして、妖怪の方も男の言葉に素直に従っている。

「よし、これを頼む」

男が何かを書いていた紙を妖怪に渡すと、「面倒ね」といいながら、しぶしぶといった印象で、空に開けた妙な穴に潜っていった。

「あとは、湯か……すまないが、台所を借りていいか」

「……あ、ああ」

満足に医家にもかかれない姫さまにとって、もし医術の知識がある者が世話をしてくれるのなら、それは願ってもないことである。

それに

先程からこの者の行動には邪気は感じられない。

頭に血が上っていた先程までならともかく、それくらいの判断はできている。

妖怪の方は信用ならないが……

ここまでくれば、なるようにしかならなйдらう。

「……こつちだ」

毒を食らわば皿まで、そう考えることにして、備えられている勝手場へと男を案内した。

脈が弱い。

その軽い身体を布団に寝かせ、手首を取って考える。
最初のうちからすでに顔色も良くなかった。

元々体が弱っていたのかもしれない。

その上での先程の戦闘　多分力を使いすぎたのだろう。

「食事はとっていたか？」

「な、なんだ？」

急に声をかけられて驚いたのか、侍は驚いたように問い返す。

それに対して、少女の方を指しながらもう一度問うた。

「食事はちゃんと摂取していたか？」

少女の方を心配そうに見る侍。

微妙に混乱しているもままにも見えたが、ちゃんと答えてくれた。

「あ、ああ。しかし、最近は食も細く……多分、汁物を少々のみだろっ」

「なるほど」

栄養不足からくる貧血。

それに、睡眠不足かなにかも重なっているのだろう。

「こういう場合は・・・と

寝かせている頭から枕を抜き、頭の位置を少し低くする。

多少寝苦しいだろうが、頭に血が巡るようにしたほうがいい。

季節柄、気温は温かいため、体温の低下は掛け布団のみで防げるだろう。

加えて

よく眠れるように、何か用意しておいた方がいいか・・・

睡眠補助のための方法をいくつか頭に思い浮かべ、可能そうなものを選んでおく。

普通の場合、自分ひとりでは難しいものもあるが、今はその手立てがある。

利用しない手はない。

「あとは、と」

起きたときの栄養補給、多分臓腑の方も弱っているだろうから摂取しやすいものを用意しておかねばならない。

自分の記憶と少女の様子を照らし合わせながら、最適な処置を考えておく。

しかし

ある程度の対応を考えたところで、一端思考を止めた。

まあ、眠ったばかりだ。

まだ時間はあるだろう。

だから、その前に

「それじゃ、事情を聞かせてもらいましょうか」

一緒に屋敷の中へと上がり込んでいた紫の妖怪に、にこりと笑いながら振り向いた。

「あらあら」と微笑む姿はなんとも胡散臭い。

その笑顔に対して、そこはかたなく自分の影響を感じた気がしたが、多分気のせいだろう。

長年生きていれば、人への対応など、それなりに似てくるものだ・
・多分、きつと

「大体事情は察せますが・・・一応、弁解の機会がありますよ」

自分が与えた悪影響なんて、微々たるものはず。

「全面的にお前が悪い」

事情を説明して、返ってきたのはそんな答えだった。まあ、そうだろう。

都での噂を聞いて、ただの興味でここを訪れたのだ。ただの暇つぶし。興味本位。

途中からそれは少し強いものとなったが、ほとんど気まぐれで行動し、この屋敷の者へ害を与えたのだ。

どちらが悪いといえば、当然私が悪い。

頭を抱え、肩を落とすようにしながら、男は後ろで眠る少女の方へと目を向ける。

「まったく、暇つぶしで人に迷惑をかけるなよ」

「それが妖怪というものではなくて」

にこりと微笑みながら返す言葉に、男は溜め息をつく。

「仕方ない」

後始末はしてあげますからお前も手伝え。

前半は丁寧に、後半は端的にそういつて男は立ち上がる。

正直、私が手伝う理由などないのだが、この男に悪印象をもたれるのはあまり良いことではない。

それに

間もおかずに戦闘に入ってしまったが、この屋敷の主には興味がある。少し話をしてみるのも面白いかもしれない。

眠る少女を一瞥して、仕方ないわね、とそんなことを呟きながら頷いた。

さて

ぐつぐつと煮立つ鍋に良く洗った薬草を放り込む。

滋養、疲労回復、栄養補給、様々な種類のもの、あまり変な配合をすれば毒にもなるのだが、その辺りは経験と知識で補える。

枯れる前　新鮮なうちでなければ使えないものとしばらく乾燥させなければならぬものなども、紫の力を使えば、何処か遠くからもってくる事が出来た。

まったく便利な能力だ・・・

ある程度、成分が染み出たところで、放り込んだ薬草を取り出す。本当は刻んでこれ自体も食べた方が効果は高いのだが、身体が弱っているところに固形物はあまり受け入れられないだろう。

肉体的にも　精神的にも

あとは、と

「八雲の、頼んだのは？」

「はい、こんなもの何に使うの？」

差し出されたのは目の粗い清潔な布。

「なるべく不純物をとっておく」

空の鍋を用意して、それに蓋をするように布をかけ、ずり落ちないように固定する。

そして、煮立った鍋を持ち上げ、その上に中身をひっくり返した。湯気に当てられ、熱くと飛びのいたこちらに、紫が不思議そうな顔を向ける。

「ああ、この薬草。こうして細かく漉してやらないと苦味が強いんだ」

良薬口に苦しだが、苦くて食べれないんじゃない意味がない。

それに

「多分 食事自体を嫌になっている場合もあるから、な」

鍋の中身が漉される様子を見ながら、あの少女の軽さを思い出す。細く痩せた腕、青白い顔色。

そして、あの従者の様子。

身体的には、何の病気のようにも感じられなかった ならば、精神からくる類のものかもしれない。

「なるほどね。だから、こんなに良い匂いのする食事なんて作ってるのね」

「ちゃんと人数分用意していたから、つまみ食いはしないでくださいよ」

失礼ね、とこちらに不満な表情を向けてくる紫だが、多分、自分の分がなければ盗っていった可能性が高い。それが妖怪というものだ。

「 まあ、それにしても物好き、か」

人間と関わろうとする。

人を見下しながらも、どこかしらの部分で認めてもいるようにも感じられる。

微妙におかしな印象を受ける妖怪。

「何かいったかしら？」

「いいや。それより」

運んでくれるか、という言葉には、嫌よ、という返事が返ってきた。

これはまあ・・・

仕方ない。

温かい香りが鼻をくすぐり、目が覚めた。

頭がぼうつとしていて、自分がいつ眠ったのかもいま思い出せない。

少しの違和感を感じて起き上がると、頭の後ろにあるはずの枕がなかった。

代わりに薄い布が畳んでおいてあり、香か何かしみこませているのか、心地よい香りがしている。

こんなもの、用意していただろうか。

不思議に思って回りを見渡すと、何やら考え込んでいる様子の妖忌

が目に入った。
なにやらぶつぶつと呟きながら頭を抱えている。

「大丈夫なはず……いや、しかし相手は妖怪……けれど、姫様の体調を考えると」

「妖忌、どうしたの」

「ひ、姫さま！？ お目覚めに……」

慌てて居住まいを正し、心配そうな声を出す妖忌。

「大丈夫よ。 それより、一体何が……」

「あら、目が覚めたのね」

そういつて、襖の向こうから現れたのは金色の髪をもつ紫の服を着た妖怪。

「貴女！」

自分が何をしていて気を失ったかを思い出し、急いで立ち上がろうとする。

しかし、思うように身体が動かない。

「これは……？」

「あら、よく眠れるように仕込んでおいた薬草に当てられたようね」
ふふふ、と優雅に微笑む妖怪に寒気かはしる。

「何をする気？」

「あらあら、何をして欲しいのかしら」

胡散臭く微笑む妖怪の少女。

一瞬の油断もせぬように、今の身体でできるだけの霊力を集める。

そこへ

「何やってんだ」

コンっという間抜けな音共に、右手に湯気の漂う器を持った男が現れた。

左手にはいくつかの木製の椀を持っていて、それによって少女の頭を軽く叩いたらしい。

「え？」

思わずほつけた声を出して、動きを止めた。

何するのよ、と妖怪の少女は不満気に男を睨みつけている。

その仕草は、妙にこどもっぽい。

「こつちの言葉だ」

「妖怪は人を怖がらせるのが仕事よ」

「相手は病人だ」

「だからこそじゃない」

はあ、と手に持っていた器の類を置きながら、男は疲れたように息を吐く。

妖怪の少女はその様子を面白そうに眺めながら、湯気の立つ鍋に視線を向けた。

「　　食事はいらさないんだな？」

「それは嫌ね」

「なら大人しくしていきな」

目の前で行われる妙なやり取りにそのまま呆然としてみると、目の前ではテキパキと膳の準備が整っていく。

「侍さん、勝手に器借りましたから」

「む……ああ、構わん」

こんなとき、一番に反応するはずの妖忌がなぜか普通に対応している。

「さて、食欲はあるかい」

「あるわ」

「……そっちじゃない」

あら、そうだったの、とクスクスと笑う妖怪。

はあ、とまた溜め息をつきながら頭を抱える男。

貴様ら姫の御前で失礼を……とやっといつもの調子で怒り出す妖忌。
なんだか、不思議な空間だった。

笑う妖怪。

呆れる人間。

怒鳴る半人半霊。

ちぐはぐで

滑稽で

おかしな光景

「まったく……子供みたいな奴ですいませんね」

妖忌の説教にそ知らぬ顔で答えている妖怪を指しながら男がいった。
本当に呆れているようなその姿に　妖怪を、まるでただの少女の
ように扱うそんな言葉に。

妙に心がざわついた。

「あなたたちは・・・これは・・・一体？」

この状況、目の前の者たちの正体。

そんな疑問が頭の中をぐるぐるとまわって、理解が追いつかない。そんなこちらの様子に、男はふむ、と小さく呟いて口元に手を当てた。

何かを考えるような仕草だ。

「まあ、あつちは妖怪で、こっちは人間です
そのまま端的に告げる。」

「まあ、真つ当なもんじゃありませんが　とりあえず、悪さはさせませんよ」

こっちもしませんしね、とこちらの警戒を解かせるようにか、男はにこにここと笑いながらそういった。
害意は感じられない。

「貴様！言つに事欠いて・・・」
「うるさいわねえ」

小さな力の高まりを感じ、妖忌のいる場所に何かが生じる気配が生まれた。

そして、その力が発動する瞬間

「食事はいらないんだな」

そんな男の言葉に、何もなかったかのようにその気配が消えた。不満があるのか、妖怪の少女は恨めしげに男の方を睨みつける。

「やれやれ・・・」

それに対して、面倒そうに頭を抱えて首を振りながら、男は少女と妖忌の方へと近づいていった。

「侍さんもそのへんにしといてください。食事が冷めてしまう」
そんなとりなしで妖忌の溜飲を下げようとし、何か言おうとする少女の口を塞ぐ。

それはまるで、小さな子どもの面倒を見る父親のようで

「食事は美味うちに食べたいでしょう?」
あっちのご主人もね。

そんな言葉に促され、ばつの悪そうに膳の前に座る二人も、どこか滑稽で

「ふふ……」
男が不思議そうな顔でこちらを見る。

「なんだか おかしな状況ね」

本当に 呆れて、笑ってしまう。
なぜ、こんなにも

可笑しいことになっているのだろう。

理解できない 何一つわからないけれど
こんな、この場所がこんなに声で溢れるのは、本当に久しぶりな気がした。

笑えたのも とても久しぶりな気がした。

「さて、食べられますか」

「ええ、いい香り」

湯気のたつ温かい液体をほんの少量ずつ口に含む。

いつもは食べることにすら拒んでしまうような状態であったのが、食欲を促進する美味しそうな香りに誘われて　とてもゆっくりとだが、喉は動いてくれた。

水のように滑らかな液体は、ほとんど消化器官を揺るがすことなくその身に染み込んでいくように感じられ、弱った身体にも柔らかく活力が満ちていくに思えた。

「おいしい……」

「そいつは重畳」

そういつて微笑む男。

それでも、「ゆっくりと、少しずつ食べなさい」という注意は忘れない。

「少し水っぱくない？」

「病人食だ。他にも用意してあるだろう」

きつと自分の分なのだろう鍋から液体を掬い、自分の椀からすする妖怪の少女。

確かに、用意された自分以外の膳には形のある野菜や魚などの固形物がのっている。

今は食べられないが、きっと美味しい物なのだろう。

食欲のわからない状態でも、それを食べてみたいという興味がわく。

「妖忌、あなたも食べていいのよ」

「し、しかし、姫さまを差し置いて」

私に遠慮しているのだろう。

自分の分も用意されている食事の膳に、妖忌は手をつけていない。

「そうさね」

私の勧めにも渋る妖忌に、横から男が口を出した。

「飯食ってないと肝心なときに力も出ない。姫さんのためにも食つといた方がいいでしょう。それに　美味しそうに食べて羨ましがらせてやればいい。『食べたい』って思えば、その分回復したくもなるさ」

「ふふふ……そうね。その通りよ、妖忌」

随分の言い草に思わず笑いがこみ上げてしまう。

確かに、向こうで美味しそうに食事を頬張っている妖忌の少女を見ていると、私もいくらか羨ましくなってくる。

「ですが……」

「早くしないと、あの悪い妖怪が全部食べちまいますよ」

男がいった言葉に、向こうの少女は眉を顰め「失礼ね」と文句をいっている。

けれど、それでも箸を止める様子は見せないのは、余程あの食事が美味しいからなのだろう。

「冷めてしまっわ。さあ妖忌」

「は、はあ」

しぶしぶといった印象で、妖忌が自分の膳の前へと座る。

あまり気は進まないようだが、箸を手に持ち、野菜と薬草を煮込んだ汁を口に含む。

「む、これは」

そんなことを呟きながら、漬物、魚の焼き物と次々と手が伸びていく。

顔こそ仏頂面のままだが、その表情のまま素早く箸を動かしている様は見えていて面白い。

あの妖忌が、そんなにもおいしいと思っているのだろうか。

食べてみたい、そういう感情が自分の中に広がっていく。

これでは、この男の言っていた通りだ。

そんなことにも、なんだか笑みがこぼれてしまう。

「なら、早く良くなればいいさ。お姫さん」

そんな私の表情をよんだのか、隣にいた男が微笑みながらいった。

細められた目は、楽しそうに少女と妖忌と眺め、こちらへと向けられる。

「美味しいものを食べる　それが大勢でなら、特に楽しめるってものだ」

それを聞きながら、薄く微笑んだ。

「そうね……そうできたらいいわね」

そう出来ればいい。
そうなればいい。

けれど

そんなことは
そんな資格が

私にはあるのだろうか。

白く揺れる水煙の温かさに触れながら、自らの冷たい指先を思った。
その先にあるのは 薄紅色の誘い。

伸ばされた手を

失う未来。

たとえ

誰かが認めてくれたとしても
誰かが隣に居てくれたとしても
きっと私は私を許せない。

大事だからこそ
大切だからこそ

それを失いたくない。
ずっと一緒にいたい。

それと
同じくらい

私のためだけに生きてほしくない。
その重荷となりたくない。

私には
何も返せない。

そして
あなたが弱さを見せれば
きっと、誘ってしまふ。

それが
とても怖い。

花の宴（後書き）

温かさを知っているからこそ
それを壊すことを恐れる、のかもしれないですね。

こんな気ままな更新に付き合っていただけ、ありがとうございます。
来年も宜しくしていただけたら光栄です。

季節感のないお話で申し訳ありません。

ご感想・評価、共にお待ちしております。

問話旧題（前書き）

誤字にあらず。

問の話、古い題目の境での出来事。

相変わらずの速度ですいません。

問話旧題

「そろそろ寿命か」

焦げつき、血に塗れ、幾度となくその汚れを纏ってきたその身。引き裂かれ、穿たれ、擦り切れるほどに刻まれた傷跡。

「もう保たない」

これ以上、それを使い続けることは不可能だろう。

どれ程繕い、代わりを接いでも、もう、その元となる部分自体が物質としての強度を保てない。

寿命 存在できる時間を過ぎてしまっている。

引き伸ばすことは出来ない。

「仕方ない」

代わりを用意しよう。

そう一人呟いて、申し訳程度に形を保つそれを動かした。

「近くに村でもあればいいが」

それが問題。

代わりを用意できるまでの間、これが保ってくれなければ、少々面倒なことになる。なるべく急いでおきたい。

しかし、まあ

「よくもったもんだ」

木々の間から差し込む陽光に片手を上げ、掲げるように伸ばした。ぼろぼろになったその外套の袖は、所々に穿たれた傷跡から光を透かして、ちらちらと眩しく揺れる。

「なるべく丈夫な布でも手に入ればいいんだが、な」

季節が変わりはじめてからでは遅すぎる。

まだまだ暑いうちに、旅装を整えておかねばならない。それもまた、旅をする上で大事な点である。

「まあ、こんだけ保ったのは、あの神様たちのおかげだ」

今度、土産でも持っていつてみようか。

そんなことを考えながら自らが纏う外套を広げ、あれ以来会っていない神たちのことを思い起こした。

「それにしてもまた、盛大に破けてるね」

男が纏う着物。

その袖に当たる部分を指しながら言った。

「まあ、仕方ないですよ」

神様な力を受けたにしては、形が残っているだけで上々。

そんなことを呟きながら、男はその元々が何色であったのかすらも解らないほどに焦げついて、もはや布きれとさえいえないうらいにボロボロになった袖を広げてみせる。
それはもう、着物とは呼べないものだ。

それにしても

「本当に よく私たちの攻撃を防いでいたものね」
たったそれだけの被害で。

私が思い浮かべたそのままの疑問を、隣で器を傾けていた侵略者の方 大和の神である八坂神奈子が口に出した。

多少場に慣れてきているのか、少しだけ口調に砕けてきた気もする。

「流れ弾とはいえ、一応全力での攻撃よ」
それをどうやって防いでいたのか。

私もそれが不思議なのだ。

私も八坂の神も、どちらもこの国有数の力を持っている。
余程の能力を持っていても、その力を防ぐことは叶わない たとえ同じ神であったとしても、だ。
それが引つかかっている。

「そうだね。私も手加減なんてしなかったのに」

そんな余裕はなかった。

あの時には、周りへの被害も何も考えていない。

そんなことをすれば一気にもっていかれる、そんな状況であったのだ。

だからこそ

あんなに大きくなっちゃってまあ……

視線の先あるのは、自らの名を刻む湖。

自分達の攻撃の余波によって、一回りか二回りほど広がってしまった水溜りだ。

威力の低い方の私であっても、地震くらいは起こして、地形ぐらいは変えちゃってる。

天候を左右し、地形を変えてしまうほどの神のぶつかり合い。

たかが人間の力で、この程度の被害に抑えられるのは 『おかし』ことなのだ。

何か秘密でもあるのか？

同じようなことを考えているのだろう、八坂のもその力強い瞳を男に向けている。

そんな二つの好奇の視線を向けられて、男は「ふむ」と小さく呟いた。

そして、そのボロ布と化している着物の袖に手を突っ込んで、数枚の紙を取り出す。

「それは・・・」
「一種の護符、ですよ」

そう言いながら、それをこちらに見えやすいように広げた。男の手の中で扇状に広げられた紙には、意味のわからない文字や複雑に交差する線、象形文字のようなものなど、不思議な文様が描かれている。

守りの札・・・それも妙に複雑な・・・

世界には、力を持つ文字・文様・図形といったものが存在する。それは、この世に存在する様々な力。もしくは、存在しないはずの力を固定化、現在させるための、一種の印のようなものだ。『呼び出す・借りる・起こす・使う』、様々な役割でそれは使用され、また、創造されてきた。お守り、破魔矢、お札、などなど、私たちの利益を人々に還元するための媒介も数多く存在する。

その一種、ということなのだろう。

けど、これは・・・

見たことのないものだ。中には、知っている術式も混ざっている気もするが、あまりに手が加えられすぎていて、もはやどんな効果を発揮するのかすらわからないが、それでも確かに

力を感じる。

「まあ、色々と手を加えてる分、多少、独特のもんにはなってますがね」

いいながら、男はそれを袖の中へと仕舞いこむ。それ自体がボロボロで形を保っていないものだが、本当ならそれは袖の内側に大量に仕込まれているものなのだろう。破れ目から見える着物の裏地には、貼り付けられていたはずの紙の切れ端や力を行使した後の残骸が見え隠れしている。

「これを媒介にして、結界を構築する。そして、その結界を」
「そこまで言葉を切つて、男は地面から小さな石を拾い上げた。そしてそれを上空へと軽く投げ上げて、落ちてきたところを

「こうする」

着物の袖の垂れた部分、まったく硬さのない部分をそれに触れさせるようにひゅつと音をたてて振つてみせた。
風に歪みながらも、ぼろぼろの布地は小石に触れて　それは何か硬い物にでもぶつかったかのように横殴りに吹っ飛んでいった。

「これは・・・？」

「硬いものでぶん殴つた。ただそれだけです」

そういつて目の前に広げられた袖には、いつの間にか、半透明の壁のようなものが出現していた。ちらちらと布の間から垣間見える先ほどの紙の符が微かな光を放ち、そこから力が発生していることがわかる。

つまり

「・・・結界を盾として袖に仕込んで　それで流れ弾を逸らしていた。そういうこと？」

確認の言葉に、男は軽く頷いて肯定の意を示す。

なんてめちゃくちゃな・・・

固定や隔離、封印を主とする結界をそんなふうに使うなんて聞いたこともない。

即興の壁として前面に張るならまだしも、それを仕込み武器のように使うなんて まったく考えたこともない方法だ。

多分、かなりの高度な技術や変則的な術式を扱わなければ、きつと実現すらできないし、誰もそうしようとは思わないだろう。それは、凡人にとつて一生をかけて習得するものをさらに変形させたもの。

いくら積み重ねても、人間には過ぎた力 人間の一生では足りないほどの時間を必要とするものだ。

神であつてさえも、そんな面倒なことはしない。それなら、もつと自分の地力を上げたり、違う方法で高みを目指す。わざわざ、竹で作った槍で鉄を貫こうとはしない。もつと別のものを作り上げる。

一点突破 人だからこそ目指し、人だからこそたどり着けない技術の粹。

「おかげで袖がぼろぼろになっちゃいましたけどね」

からからと笑いながら軽い調子で話す男。

とても、そんな高度な力を持っている存在だとは・・・・・・思えない が、どこか、この男ならありえるかもしれないと感じている自分もいる。

そんな不思議な、懐の深さをうかがわせる存在。

本当に、おかしな……面白い人間だ。

「しかし、それだけじゃ足りないでしょう？」

そんな変な存在に、八坂の神は、神として当然の疑問の口に出した。

そう　それだけでは足りない。

たとえ優れていようと、たとえ過ぎた力を持っていようと、私が八坂の神に対して押し切られてしまったように　力の規模が違えば、そんなものは紙の盾にもならない。千年、万年の時間をかけようと、竹の槍は竹でしかない。持てる力の許容量が違えば、それは防げるわけがないのだ。

ましてや、男から感じられる力は達人　人として限界の境地に達している力は感じられても、決して人の枠を大きく超えているものではない。精々、下級の神か中級以上の妖怪程度に届くかどうかの力しか持っていないだろう。

その程度の力で張られた結界がいくら高度であろうとも、私達の力に届くわけがない。

そんな疑問の声に男は意味あり気に笑い、ゆらりとその手を持ち上げた。

のんびりと動くその腕は、ふわりと、まるで鳥の羽か何かが落ちるような　何かの流れの中にあるようで、なぜかぶれるようにはつきりとしなない。

「……………」

その腕は、焚き火を囲んで向かいに座る八坂の神の方へとゆっくりと伸び

「おや、この魚が食べごろですね」

下方にそれで、香ばしい匂いを放つ魚の刺さった棒を持ち上げた。がくりと、一瞬だけの妙な雰囲気が消え去って、身体の力が抜けた。

何かするのかと思った……。

それは八坂の神も同じだったのだろう。反応しかけた体から急に力が抜けて……妙に気の抜けた不恰好な体勢となっている。身構えかけた腕が途中で固まってしまったのだろう。

一体……今のは？

「はい、どうぞ」

そんな、微妙に呆然としていた視界に、ひょいといった調子に頭から尻尾までを棒で突き刺した、温かい湯気を立てる一匹の魚が差し出された。

見ると、指に挟んだ棒を差し出してにこりと笑う男がいる。

「あ、ああ、ありがとう」

「ほら、そちらさんも」

言いながら、もう片方の腕に持っていた同じものを八坂の神の方に放り投げた。

「ととと……」と慌てた調子にそれを受け取って、落とさずに

すんだことに安心したような顔を見せる軍神。

なんだか妙な感じだ……。

「まあ、大体のことはこんな感じですよ」

もう一つ。

自分の分の魚に齧りつきながら男が口を開く。

「年寄りの知恵袋……亀の甲より何とやらってやつでなんとかしたって感じですよ」

魚の焼き加減と同じ。

そういつて男は笑う。

なにやら胡散臭そうな笑い方は、何かを隠しているようであくはぐらかしているようで……

これ以上は『語らない』ってことかな。

そんなふうを感じさせた。

不満あり気な八坂の神に、どこからか取り出したまた違う酒を見せろ宥めている男。

無然とした様子を見せながらも、その妙に美味しい酒に杯を向ける神。

なんだか込み上げてくる愉快的気分を浮かべながら、こちらも催促するように杯を向けた。男も笑いながらそれに応え、なみなみと酒を満たす。

本当に楽しい気分だ。

全て失って負けたはずなのに、今までよりずっと

酒杯を傾けながら、その原因となった不思議な存在。
そんなものに対して、なんだか……

「それで、その神の力すら防ぐぼろ袖はどうするんだい」

そのもう見る影もない服の袖を指して、からかうような調子でいった。

男は「さて……」と小さく呟いて、隣に置いていた荷袋から小さな短剣を取り出した。

古びてはいるが、この辺りでは珍しい金属製のそれを使って 肩口からぱっさりとそのぼろぼろとなっていた袖を切り落とした。

「………!？」

驚くこちらの様子を気にしないまま、具合を確認するように肩をぐるぐると回して 「よし」とまた小さく呟いて

「ごつすりやまだ着られますよ」

そういつて、おどけるように肩をすくめて見せる。

ほんとに、行動の読めない。

いちいち人を食ったような……神をからかった調子で動く。

「それじゃあ、もう札は隠せないわね」

慣れてきたのか、呆れた様子を見せながらも八坂の神はそんなことをいって

「なあに、適当な布でもあればまた」
新しいのをつくりますよ、と適当に男が返す。

そんな調子で酒宴は続く。

敵と味方と、その仲介をした妙な人間と
愉快な時を刻んで

あれからもうかなりの年月が経っている。

あの二柱の神様はなんとかやっているのか。

一応、自分がその間に立ったのだ。
一度くらいは様子を見にいつてもいいかもしれない。

礼にと貰った布で作った上着も、この通りのことだし・・・

なんだかそんな気分なのだといって贈られたものは、確かに神の加護を十分に受けた丈夫なもので、仕込んだ札やらの力も通しやすい良い品だった。

なかなか、楽をさせてもらった。

礼くらいは返してもいいだろう。

なんとなく次の目的地を定めて、背負った荷を抱えなおす。

「　　つむ」

ごうつと音をたてて、風が通り過ぎていく。
空を見上げると、雲の流れが妙に早い。

「こりゃ一雨くるかね」

まあ、矢の雨が降るよりはましか。

微妙に湿り始めた気もする大気に足を速めながら、そんなことを思い起こした。

同じように貰ったお礼の品も、いまでも荷の底に眠っている。

あの二人は、上手く辿りつけたのかねえ？

少々意地の悪い道案内だったと反省しながらも、込み上げる笑いを囃殺した。

「もう、いらいらするわね。あの男」
「はははは」

不満そうな声に適当な返事を返しながら、周りの様子を確認する。

静かに、風と共に音をたてるだけの竹林には、何の気配もしない。天然なのか、何かの作為によってのものなのかはわからないが、どうやらこの辺り一体には妙な力が発生していて、感覚を狂わせる効果があるらしい。

これは利用できるわね。

自分達が張ろうとする結界の一部として活用できそうなものを計算する。

確かにこの場所なら、結構な規模の力を使っても目立たない。

霊脈、地脈……とにかく力が集まりやすい場所。

それもかなりの規模のこの場所は、私達が隠れるのにはうってつけの場所だ。

確かに嘘ではなかったわね。

ここのことを教えてくれた男。

半信半疑ではあったが、なるほど、嘘は言っていなかった。

しかし

「ちゃんとお礼まであげたっていうのに……」

歩いて半月　まるまる半月の時を歩きっぱなしで、という意味ならそういっておいてほしかった。

それならば、休みなしで進んで輝夜の機嫌を損ねることもなかった

だろうに。

彼なりの復讐だったのだろうか……。

子どもの悪戯のようなその行為に、少し笑いが浮かぶ。

「何笑ってるのよ、永琳」

私達をからかったのよ、とこちらに指を向けながら憤った様子を見せる姫。

月の都でいつも退屈そうにしていたこの子は、地上に来て随分と表情豊かになった。

「ああ〜！もう！この都を震撼させた絶世の美姫にたいして……」

「……………」

少しだけ不安にもなるが、まあ、良い傾向だろう。

それにしても

本当に、生きていたのね。

忘れていたはずの

失われたはずの

過去の記録　記憶。

罪人となった私の道先案内人を思い出の中にしか残っていなかった存在が勤める。

まるでお伽噺のような、不思議な　何ともいえない気分だ。

恨まれても仕方がなくて、復讐されても文句はいえない。

それでも、彼は笑っていた。

何を考えているのかしらね。

月の頭脳とも呼ばれた自分が想像もつかない。
人の頭の中というのは、本当に不思議なものだ。

「これくらいかしらね」

片手間にそんな思考を巡らしながらも、この場所に点在する利用できそうなものと不確定要素を調査しきった。
大体の完成を頭の中に描き、必要な構築式を組み上げていく。

何かしらの情報源………外の様子を探る伝手も必要ね……。

結界に対する例外、内と外を行き来できる存在。
相手方に利用されず、目立たない……この辺りに居ても不思議ではないものであれば上々だ。

しかし、そんな都合の良い存在が……。

「永琳、見てみて兎があんなにいるわよ」
月のとは全然違うわね、と楽しそうに輝夜が指差す先には、竹林の間に隠れた白い小動物が二、三……。。
感じられる気配には、微かにだが、妙な混じりものを感じることができる。

ただの動物ではないもの。

これは……

この竹林に適応して……………

少しの知性の光を灯す赤い瞳。

確かに月のものとは似ても似つかないが、その分、単純そうではある。

使える、かしらね。

おそらく、この竹林の作用 訪れる者を惑わす効果を利用して、天敵から身を守っているのだろう。自然を利用し、その場に適応しながら共生する。この大地に生きる動物としては、よくあることだ。そして、長い時間をかけて進化してきた分、幾分の知能も持ち合わせていると考えられる。ただ単純に妖怪化しただけかもしれないが これは、上手くすれば利用できるかもしれない。

手なづけることが出来れば、外界との橋渡しにも……………

ずっとこの土地で生活してきた個体だ。誰にも怪しまれることもないだろう。

渡りに船のような存在に、思わず笑みが浮かぶ。

「何悪い顔してるのよ……………あんまり苛めてあげちゃ駄目よ」

そんな気配を察したのか、いつの間にか姿を消している兎たち。

臆病な生き物つてところは変わらないのね。

自分の迂闊さに、またも笑い込み上げて、自然と口端が持ち上がる。

そんな私を見ながら、輝夜はなぜか、微妙な表情をしていた。

「どうしたの？」

「いや、まあ、なんていうかね・・・」

妙な感じよね、と何やら眩きながら、こちらの様子を不思議そうに見つめて ゆっくりと私の顔を指差した。

「あの男に会ってから、妙に表情豊かじゃない」

まっすぐにこちらを指差すその表情は、なんだか楽しそうで 何処か、優しそうな笑みを浮かべていた。

まるで、手にかかる幼子を見るような、そんな保護者のような温かな瞳で・・・

「ふふふ・・・」

柔らかな笑みを浮かべている。

いつもは手に取るように分かるこのお姫様の気持ちがなぜか分からないのが、妙に癢に触った。

「 　　なんででしょうか。輝夜姫さま」

「 　　いいえ、なんでもなくてよ。八意永琳」

姫と従者。

なんだかその立場が逆転しまったような様子を見せる輝夜の含み笑い。

まったく・・・

しかし

これは、自分の方の調子が狂っているのかもしれない。
幾年の年月振りにこの大地に降りて、ありえもしないはずの再会を
経て 少し揺らいでいる感情。
このような想いをするのは、本当に久方振りのことだ

少しくらいおかしくなっているけど、仕方のないことなのかもしれない。

そんな私の様子が可笑しいのか、相変わらずにやにやと笑みを浮かべ続ける輝夜。

少しの恥ずかしさが込み上げながらも、顔を背けて口を開いた。

「そんなことより、大体の目処は立てたわ」
あとは準備を整えるだけ。

その言葉に、輝夜は一つこくりと頷いて、表情を引き締める。

「時を閉じ込める永遠の結界 細かい術式やら何かは任せるわよ」
「ええ、細かい設定は私が担当するわ」

じゃあ、と小さく呟いて、輝夜の身体から薄い光のような力の高まりが感じ始められる。
展開されていく力は、空間を固定し、新たな別種の異次元へと形を創りだしていく。

時の狭間、永遠と一瞬の境界・・・

永遠と須臾を操る力。

「そういえば」

そんな桁外れの力を発揮しながら、それを片手間に口を開く姫君。その優美な黒の髪を揺らして、意味あり気に笑ってみせる。

「なにかしら」

輝夜の力を基にして結界の式を構築しながら、半分ほどの意識をそちらに向ける。

月の都に気づかれないものにするのだ、かなりの精密作業を要する。あまり集中を欠くわけにはいかない。

「貴方も怒っていいのよ」

「………?」

意味のつかめない言葉に眉を顰めた。

それに対して、輝夜は悪戯っぽく顔を歪めてみせる。

「こんな美人二人を騙したんだもの。今度あつたら文句いってあげなくちゃ」

放たれたのは、そんな言葉。

一瞬、驚きに目を丸くして 再び込み上げる笑い。

「ええ、そうね」

色々と話したいこともある。

是非、文句をいう機会ぐらいはつくっておかないと

完璧に組み上げていた式に、少しだけ、小さな細工を加えた。
再び相見えるためのほんの小さな工夫。

ただ、危険を増やすだけかもしれない。

それでも、そうしておきたい。
そう思った。

「さてさて」

結んだ縁も数多く。
何やら付き合っても長くなりそうな知友もできて

ここ千年ほどは、妙に騒がしい。

過ぎ去る時に親しみつつ、決して同じ日々を歩めぬままに　ただ、
眺めてきた世界。

それもなかなか楽しかった。

極短い時間だけを共にする人々。
いつか自分だけが取り残されて　それでも、残る記憶に喜愛を得
てきた。

けれど

やはり、長く付き合える知り合いは・・・嬉しいもんだ。

慣れた寂しさ・・・けれど、消えぬ淋しさ。

もし、この道の隣に誰かが居てくれるなら、きっと、それはまた喜びとなるものだろう。

「楽しくなってきたもんだ」

まだまだ、生きていたい。

十分に・・・人並みはずれて生きていても、そんなことを想ってしまふ。

しかし、まあ。

「こんな思い出にばかりふけても 意味はない、か」

黒く染まり始める空を眺めながら、一人ぼつりと呟いた、

とりあえずは、この雲行きの中を、濡れずに行く方法を考えよう。
過去は後で楽しむことにして、未来を考え、今を乗り切る。

あんまり過去に溺れてちゃ、走馬灯と変わらない。

そうというのは、もっと死に際で考えよう。

まだまだ、時間はあるのだろうし・・・

そんなことを考えて、

「ん・・・？」

これこそ物語の最後のようじゃないか。

くくっ、と過去に読んだ御伽噺の最後を思い浮かべる。

冒険活劇の最終幕　主人公はこれと同じような思考をしながら、その終わりに向かうことになる。

最後の序幕、お話の約束事、よくある展開。

まさかまさか、だが

折角面白くなっている物語を、ここで終わられては敵わない。
不吉な思考は追い払って、次に向かうことを考えよう。

このぼろ布の使い道。

今日の食事をどうするか。

そんなことを思い浮かべて、山の間こつへと足を向ける。

日が翳り、暗くなり始めた森の道を。

何かが動いている。

暗い影の道の中、雲を通した微かな灯り。
先ほどまでも眩しさはすっかりとその身を潜ませ、生温かい風が通り抜けていく。

森の中は暗い。

普通は、はっきりと見通すことは出来ないだろう。

そこは境界。人の領域と別の領域とを分かつものであり、違う存在の場所である。
明るい陽の中を活動する動物もいれば、夜の月明かりを歩く獣もいる。

そこにいるのは狩る存在と狩られる存在。

入り込めば、自らの常識は通じない。
踏み込めば、命の保障はない。

そこは、私たちの領域。

ほの温かい闇に目を細めながら、暗い影を見通した。
そこにあるのは、一つの命。

だんだんと闇の色を濃くする黒雲の下。

飛んで火にいった虫に　私の場所に踏み入れた人間に、にこりと
微笑を浮かべて

音もないままに飛びたった。

今宵の晩餐は、きっと美しく彩られることになるだろう。

問話旧題（後書き）

問話とフラグ（死に際的な）？

まあ、主人公というより、主人公達によって改心しかけた瞬間に死を迎える的な……立ち位置が（笑）

後半は一気書きでしたので

一応、確認はしたのですが、もし誤字脱字があればご一報をお願いします。

読了ありがとうございました。

暗中模索に五里霧中

「やあ、邪魔するよ」

薄煙る囲炉裏の前に座り、床に広げた何かに筆を揺らす老翁。

その先端に向けて鋭く細められていた目蓋を開き、こちらへと顔を上げた。軽く手を上げて応えると、呆れたように小さく溜め息を吐いて

「嬢ちゃんも物好きだねえ・・・」

そう言いながら、筆を脇に置いた。

ぺこりと頭を下げて、老人と向かい合うようにして囲炉裏の前へと腰を下す。

「今日もお願いします」

もう一度、今度は深々と頭を下げて、丁寧に礼の形をとった。その様子に翁は仕方ないといった感じに首を振って、一枚の紙をこちらに渡す。

「それじゃあ、今回は」

こんな勉強をすることになるなんてね。

歳の割には力強いその声に耳を傾けながら、今の自分の身の上の不

思議さを思った。

少しずつだけれど、上手く動くようになった指先と流暢になった筆さばき　これも習練の成果だろう。

霊力の使い方も、その抑え方も、なんとなくだが理解できるようになってきた。

でも

油断しちゃいけない。

髪に触れると、少しのほつれを感じさせる薄絹の感触。

まだ、待つてほしい。

自信をつけるまで　自分を抑えられるほどの力を得られるまで

あの時に誓った『約束』を守りきるために。

こりゃあ、きついな・・・

獣道ともいえないほどに荒れ果てて、腰ほどにも届く草々に覆われてしまった道。

それを両腕で掻き分け、多少なりともまじだと思える地面を選び分

けながら 本格的にますぐなり始めた空を見上げた。
そこには、日光を遮るほどに濃く、黒ずんだ雲々がもつすぐ開戦の
時間だぞとでもいうように湿った空気を吐き出して・・・その時を
待っている。

こりゃあ、掴まっちゃうかもしれんね。

幾分水気の多くなった気がする空気を胸中に取り込み、迫りくる雨
の気配に眉を顰めた。

ごろごろと際限なく転がる小石や雑草に邪魔されながらも、出来る
だけの速度で先へと進み、なるべく早くここを抜けてしまおうと足
を早める。

せめて雨宿りできる場所までは・・・。

この辺りの地形を思い返し、少しはマシであるだろう場所を考える。
記憶は数十年前のものだが、参考程度にはなるはずだ。

ただ

「少し妙なんだよな」

爪先に当たる石を蹴り飛ばし、道の端へと吹き飛ばしながら思った。
記憶の中の光景と目の前に広がる景色の、その差を見比べて 首
を傾げた。

流石に荒れすぎじゃないか・・・？

山と山との間をすり抜けるようにして存在する山越えの道。
正規の街道ではない知る人ぞ知る抜け道のようなものだが、これを

利用するものも結構な数存在していたはずだ。地元のものも当然として、急ぎの訳があるもの、退治屋や被い師などの裏家業のもの、盗賊や落ち武者など　あまり良くない事情を持つものにとっては、ある意味公道のようなものであったはず。

昔、とある武将が相手陣への奇襲のために造ったものが元となっているそうだが・・・今はそれは関係ない。重要なのは、人びとがある程度行き来していたはずの場所だということ

何十年か前の記憶とはいえ

整備はされないまでも、そこそこに人々が訪れるこの道は、もう少しともなものだったはずだ。通り過ぎる人びとによって踏み固められた地面は、そこを通った人々の分だけ歩きやすい場所になっていた　それが、今は獣道とさえいえない。

道の名残が少し残る程度。

もう使われていないのか・・・？

道の真ん中にまで侵食した植物の群れに、そんなことを思う。

予定では悪天候に掴まる前　もう少し早くこの場所を抜けてしま
うはずだった。

荒れ果てた道が足枷となったことにより、そんな予定は叶わない。

小さく溜め息をついて、まだまだ続く荒れ道を眺めた。

「まあ、人生に予定外はつきものだ」
これもまた、良い経験になる。

そうやって無理やりにも前向きに考えて、打ち捨てられた旧道を進む。

胸に過ぎる嫌な感覚は、考えないように蓋をして　それでも、なんとなくの予感を感じながら　先を急ぐ。

「これは・・・？」

男から差し出されたのは、何枚かの書状。

「紹介状・・・陰陽術や法術なんかを扱ってる人たちへのね」

　　なんのために・・・？

相手の意図が分からずに訝しげな顔を見ると、男は「ふむ」と小さく呟いて、懐から何枚かの紙の束を取り出した。

そしてそれらをこちらに見えやすいように床に並べて広げて見せる。

「これは『炎除け』、火を沈め、退ける系統の力をこめた霊符です」

男の指の先、長方形の白い紙の列には、それぞれ複雑に絡み合った線が詳細に書き込まれており、それは何かの形を象っているように

も見える。貰った髪留め（にしているもの）にも同じような模様が描かれていた気がするが　たまに書かれている『水』や『土』といった文字以外、ほとんど意味が分からない。多分、これが術式や方術を使うための意味を持っているものなのだろう。

「これが一体何なんだ？」

首を傾げる私に男は、自分の右隣、部屋の中央にある囲炉裏を指差した。

それは先ほど、鍋を煮るために使ったため、まだちろちろとした炎が残っており、もくもくと細い煙とあげている。

「少し待ってくださいよ」

そんな言葉と共に、男はその中にくつつかの焚き木を放り込んだ。しばらく、息を吹きかけたり、薪を動かしたりしながら、それに火を燃え移らせて　炎の勢いがある程度高まったところで手を止めた。

「さて」

小さく呟いて、こちらに振り向いた。

そして、ゆっくりと口を開いて

「火を消すものといえは？」

「え……？」

そんなことをいった。

質問の意図がわからずに首を傾げるが、男は何も言わずにこちらの

答えを待っている。

え、えっと……

深読みするべきだろうか。それとも単純に……。でも、あれ……ええと……

「水、じゃないの？」

ぐるぐると頭の中を巡る迷いに混乱しながらも、極単純にそう答えた。

それ以外に考えられない。火を消すには水をかければいい。子どもだって知っている。

そんな答えに、男は軽く「そうですね」と頷いて見せた。

ほっと胸を撫で下ろした私をよそに、男は並べて札のうちの一枚を掴み、それをこちらに見えやすいように掲げて見せた。

「これは水符……霊力を使って空気中の水分を集め、それを力とするもんです」

言いながら、薪を持ち上げた。

その先を囲炉裏の炎にかざし、炙るようにしながら、もう片方の腕で私の方を指す。

「こういうのは込める力の他に、その場の環境にも左右される」

水気が多き場所ならそれだけ強い力を発揮するし、からからに干上がった場所であるなら弱くなる。下手すれば発動すらしないかもしれない。

その場における状況。天気や気候といったものなどに左右されて力の強弱が決まる。

そんなことを話しながら、囲炉裏の火に当てていた焚き木を掲げるように持ち替えた。

その先端は炎に炙られ、赤い光を放ちながらパチパチと音をたてる。

「つまり」

それに向かって、片手に持った札をゆつくりと近づけていく。

すると、その札が近づくと徐々に炎の勢いが和らぎ、それが弱まっていくのがわかった。

「こうなる」

「へええ」

まるで見せ物を見ているような光景に、思わず感心の声を上げる。

「そして」

ある程度まで近づけた札をぱつと引き離して、男はその札をひよいと囲炉裏の中へと放り込んだ。ひらひらと、しばらく炎の中を踊るように揺れたそれに、炎の勢いがわずかに緩んだように見えたが、次の瞬間には札は燃え尽きて、炎も元の勢いを取り戻してしまふ。

「水気や力が足りなけりゃ、こうなります」

黒く焼け残った札の燃え滓小さく舞い上がる。

男は、それを手で払いながら、片手にもった焚き木をくるくると回

し、そうやって風に煽られた火種はまた赤々とした姿を取り戻していく。

「つまりね」

そんな手遊びをしながら、もう片手での指が伸ばされた。

私の顔より少し上方　頭の上辺り。
男のくれた髪留めのことを指している。

「それが水だとしても　もし、上手く作用しなければ」

くるりと手首を回転させて、男は炎の灯る焚き木を掲げるように持ち直した。

宿った炎はパチパチと音をたて、細かな火の粉を散らし

「炎は止まらない」

赤々とした灯りが、男の顔を下から照らしてみせる。
ちろちろと揺らめく炎にあてられて、天井に伸びた影がゆらゆらと揺らめいた。

「それは絶対じゃない」

伸ばされた指の先、炎よりも暗い紅の　するりとした肌触りの髪留め、その存在を確かめるように手を伸ばした。
触れた指先に感じるしつかりとした強さを持った生地。

「ああ、わかってる」

いつかは綻びてなくなってしまうもの。
それはこれを受け取るとき、最初に説明されたことだ。

それまでに

力を制御できるようになる。

私自身で抑えられるように 力をつける。

それが私の誓ったこと。

改めて言った言葉に、男はうんと頷いてみせた。

そして、目を細め、何処か、老人のような昔を思い出すようなそんな表情を浮かべて

「ああ、それが一番いいんだがね」

そういった。

「いくら水を探しても 火を消そうとしても、それがない場合もある」

「どうということ?」

小首をかしげる私に、男はにこりと何処か自嘲するような調子に笑みを浮かべて、低い声を出す。

「抑えられないもんなってのもあるでしょう自分自身では いや、自分自身であるからこそ、どうしても・・・ね」

男には珍しく、小さく呟くように 何か噛み締めるように、少しの憂いを含んだ声で・・・

少し伏せられた目には、一体何が映っているのか、それはわからない

い。
けれど

抑えられないもの

何処か共感めいたものを感じた。

思い浮かんだのは 自分が犯した罪の記憶とその原因となったもの。
息が苦しくなるほどの後悔と激情。

私も

もし、それを目の前にすれば・・・

「だから」

ひゅっと

風を切る音がした。

「他の方法も考えておくんです」

松明のような炎を上げていた木の棒が、私の目に明るい残像を刻みながら、素早く振り下ろされて その先端の炎は、風圧によって吹き飛ばすように散り消えながら、その先に待っていた囲炉裏の中、その灰の中へと突き刺さり、その姿を消した。

「火を消すのは水だけじゃない 土に埋めてしまえば消えてしま
うし、岩でせき止めることもできるってね」

男は、炎の消えたことを示すように焚き木を持ち上げてみせる。

赤く燃え上がっていた木炭は、ぶすぶすと細い煙を上げながら窒息したようにその活動を止めていた。

「風に散り、地の止まり　薪を加えなくても、その姿は消える」

それを囲炉裏の中心の炎へと放り込む。

半分が焦げついた薪はすぐに炎吞まれて、その勢いの中へと加わった。

「　だから、色々な方法を身につけておけばいい」

勢いを増す炎。

少量の水では、消えない炎。

「消えない炎を止めるために」

水を溜めて

岩で囲って

風で止めて

「知っておくだけで、用心しておくだけでなんとかなるかもしれない」

だから、その気があれば

学ぶ。

陰陽術でも、法術でも 何かの力を身につけておけば、この力を抑えられるかもしれない。我を失っても、意識をなくしても、どうにかなるような、可能性が残る。足掻いて、足掻いて、どうにかしようともがき続けければ、少しだけでも変わるものがあるかもしれない。

その少しだけを得るために その方法を学ぶ。

「ふう……」

額に流れる汗を拭い、その手の強張りを吐き出すような感覚で大きく息を吐いた。

なんとか……形になった

やっこのことで完成させた一枚の札。

老人が描いた札や あの男が作った札とは比べようもないが、数ヶ月かかって、やっとなしコツがつかめてきた。

少しずつだが、自分が成長しているのが分かる。

『成功すれば万々歳』

そう言って笑っていた男。

何の役にも立たないかもしれないし、意味のないことかもしれないけれど

役に立つかもしれないし、身を結ぶかもしれない。

『そんな微妙な可能性ですが』

努力したいのならすればいい。
頑張りたいなら頑張ればいい。

『そうしたいなら 手助けぐらいにはなるかもしれない』

そういった差し出された書状は、半分は役に立たず、もう半分も半信半疑にされるものが多かった。

当然だ。

どうやら長生きしているのは本当であるらしい。

だって、あの書状の先にいたのは、その子孫であったり、弟子であったりといった、何世代も後のものであったり……昔の縁からの紹介状といえど、その縁自体が忘れられていたり、伝わっていないかったりして 結局、地図の代わりになる程度にしか役に立たないものばかり。

まったく……いい加減だな。

けらけらと胡散臭い表情で笑う男の顔が浮かんで、少しむっとなった。

案外、それを知っていかかったところもあるのかもしれない。

そうだとしたら、今度あった時はぶん殴ってやろう。

助かったことは確かなのだ。

妖怪退治屋や呪い師などの中でも、伝手を知らなければどうしようもない人たちに会うことができた。特に、地方に住む実力者や隠遁

者などは、教えられなければ知ることすらできなかつただらう。

それでも

まだ生きていた人。

男を知っている人は、揃って笑っていた。

相変わらずだねとか、変わらないようだ、とか　そんなことを言
つて可笑しそうに笑んでいた。

若いままだという男の話に驚きながらも、何処か納得するように頷
いて

「お嬢さんもからかわれたのかい？」

なんて面白そうに聞かれたときは、何だか可笑しくて笑ってしまっ
た。

いつもそんな調子なのだ　なんとなく納得してしまつて

だから

『まあ、それでもどうしようもなければ　雨でも降るように祈る
しかないんですが、ね』

最後は、そんなことをいって、けらけらと笑っていた男。

あの人を食った男に一泡吹かせてやる。

世話になった分の礼をいって、からかわれた分、思いっきりぶん殴って

こんなにも上手に、力を使えるようになったって

そういつてやる。

そんな

永い時の中、少しだけできた楽しみに向けて
ぐっと伸びをして　また筆をとった。

今頃、あの変わった男は何をしているのだろうと、少し思い浮かべながら

「ああもう
どうしてこう、間が悪いのか。」

疫病神以上に死神に気に入られていそうな、自分の生まれついた天運を呪う。

といっても、両方見知っている気はするが・・・

しかも、どちらも年下で一緒に酒を飲んだ記憶もある。
なかなか楽しかった。

「　　と・・・」

頭の中に浮かんだ馬鹿な記憶を振り払いながら、地面を蹴り飛ばすようにして左に跳んだ。
強く踏みしめられて地面には深い足型が残り、その上をいくつもの黒い球体を通り過ぎていく。

さらに

着地先。

地面に右足が触れた瞬間にそれをさらに蹴り上げて後ろへと跳び退いた。

乱れた体勢からの無理な跳躍によって脚には鈍い痛みが響くが

ドゴンツ　とそんな破砕音が響いて、一瞬前まで自分がいた場所に大きな穴が空く。

あれを食らうよりはましだ。

避けなければ脚が吹っ飛んでいたかもしれない。

身体をくるりと一回転させて、両腕の向かってきた弾幕を避けながら、不安定になった姿勢を立て直した。

通り過ぎた弾丸は、荒れた地面に着弾し、その道をさらに歩きにくいものへと変えている。

「まったく・・・」

怖ろしいことで。

そう呟く暇もなく、襲来し続ける弾幕の群れ。

どうか良い場所は・・・

地面を穿ち、空気を切り裂き、こちらを追い詰めようとする弾幕。それを紙一重のところでもかわし続けながら、辺りを観察する。

周りは、鬱蒼と茂る木々の群れ。

まだ時刻は昼時ほどのはずだが、その奥は見通せないほどに暗い。太陽が雲で隠れてしまっているせいだろう。

あっちの方に逃げこむとしても・・・

動きを先読みするように逃げる方向へと群がる光球。それを近くにあつた木に駆け上がることで回避する。が

「・・・つと」

その球体が幹に直撃し、まるで爆発でもするようにして吹き飛んでいく木々。

ぎりぎりとのところでそこから飛び降りるが、着地した先へとさらに攻撃が迫る。

そんな暇がない、と

身体に巡る力を凝縮し、瞬発的な限界突破を繰り返す。それでも、ぎりぎりのところ。

避け続けるだけで手一杯だ。

何か切っ掛けでもなければ

「いつになったら大人しくしてくれるのかな？」

そう思い至ったところに、凜とした声が響いた。

歌うように高らかに　涼やかな声。

暴風のように降り注いでいた弾幕の嵐が止み、森の中に静けさが戻る。

「のらりくらりと楽しそうに逃げ回って」

ほんの数間先に見える大きな黒い塊。

それが生き物のように身震いし、凝縮するように小さく形を変えていく

「早くお食事にしたいのだけど」

闇が凝固したような　小さな人型。

この国の人間とは思えない黄色の髪を長く伸ばし、細長いすらりとした体躯に、闇に溶け込むかのような黒の衣装。にこりと上品な笑みを浮かべている女性。

「まだ、じっとしてくれないの？」
人間さん。

そういつて可憐に笑うのは　妖怪。それもかなりの大物だ。

少し小柄な体型からは考えられないほどの濃密な妖力に、空気がぴりぴりと振動しているようにすら感じる。

まったく・・・

「まだまだ、いい味だせるほどに熟成した自信がないもので
来世の楽しみにでもとっておいてください。」

こちらにもこりと愛想笑いを浮かべ、慇懃無礼にそう返す。

「そう」

細められる赤い瞳　と、同時に降り注ぐ黒の塊。

「なら、私が美味しく調理すればいい」

難儀な相手だ。

脚や腕を中心としたこちらの四肢を削ぐように襲いかかる攻撃。
遊ばれているのか。食べる部分が減るのが嫌なのか。

どちらにしても、この攻撃を食らっても多分すぐに死ぬことはない
ただ、数が減ってしまうだけだ。

「達磨になるのは御免ですよ、と」

降り注ぐ弾幕。

それを真っ直ぐに見据え、その位置を頭に叩き込んだ。

老人の知恵袋ってね。

その弾道、性質を読み、先ほどまでの攻撃の分析と合わせて、回避
方法を構築する。

あとはそれに従って、腕を引き、脚を弾くだけ。

瞬き一つ分前には右手があつた部分を、真つ黒な球体が通り過ぎていく。

次弾を肩に、その次を袖先に掠めさせ、紙一重の形でその黒の塊のわきをすり抜ける。

「へえ……」

経験によつて造る先読みでの動き。

先ほどまでよりも小さく。

必要最小限の動きによつて攻撃を避けるこちらに、女性は感心するように声を上げた。

愉しそうに口元を歪め、鋭い視線で探るようにこちらを見つめる。

「なら　これはどう？」

すつと優雅に伸ばされた両腕。

その先から伸びるのは　二筋の閃光。

「　そらまた」

えげつない攻撃だ。

両脇から挟みこむようにして振るわれる光は、射線上にあつた木々をなぎ倒し、全てを切り裂きながら、こちらを真つ二つにするような形で迫り来る。

それに飲まれれば、こちらも二つに分けられるか、焼け焦げ、上手に焼かれることとなるのか。

逃げ場は・・・

「そう、上空のみね」

垂直に地面を蹴り、光線に挟み込まれる前に空へと舞い上がった。そして、二筋の光が真下を通り過ぎるのを見届けた。その瞬間にぞわつとした悪寒が背中を駆け上がる。

「　　こんどこそ」

美味しく焼けるかな。

これは

周りを取り囲む球体の群れ。

足場のない空中に、敷き詰められた暴力の塊。

引つ掛った、か。

回避行動をとろうにも、ここは空中。空でも飛べない限り、普通の人間にはどうしようもできない。

悪戯が成功したというように、視界の端でくすりと笑う少女。

ああもう・・・とんだ災難だ。

暗い闇の中、金色の長い髪がゆらゆらと明滅し、紅く裂けたような口に鋭い犬歯が見え隠れする。愉しそうにこちらを眺める眼は、玩具で遊ぶ子供のような好奇心か、活きの良い獲物に舌を濡らす妖怪としての食い道楽か。

どちらにしても、このまま吞まれてしまう。

無駄に長生きしているとはいえ、そんな最期は真つ平御免である。

「なけなしの・・・なんですがね」

小さく呟いて、もはや用をなしていないぼろぼろの袖の内へと手を引っ込めた。

ドンッ

そんな音と共に空気が振動した。

力と力が衝突し、互いの威力を持って相殺しあつた余波の広がり。辺りに散らばっていた木々の残骸を吹き飛んで、そこら中に飛礫を撒き散らす。

そして、それが晴れた先に

「 耳が痛い、な」

無傷で立つ男の姿。

先ほどの爆音に耳をやられたのか、顔を顰めて片手でそれを抑えている。

何を・・・？

動きのとりようのない空中を狙った不可避の攻撃。

よしんば耐えることが出来たとしても、無傷のままではいらぬはずがない。

「一体どうやって・・・」

「ちょっとした手品ですよ」

あげようとした疑問の言葉を遮り、男がにこにここと胡散臭い笑みを浮かべて声を発した。

「まあ、思った以上に簡単に避けられたもんですが」
手加減してくれたんですか？

にやにやと口端を持ち上げて、こちらをからかうような声音で話す。
そんな男の姿が 癪に障った。

「馬鹿にしてるの？」

多少のいらつきを込めて、男を睨みつける。

この程度のやり取りで馬鹿にされるほど、私の底は浅くない。凶に乗られるのは気に食わない。

「いえいえ」

こちらの視線 程度の低いものなら、それだけで動けなくなるほどの力を放っているのにも関わらず、男は平然とした様子で私を見返して

「この程度なら反撃だってできるんじゃないかと、ね」
そういった。

「・・・・・・・・つく」

込み上げるのは、抑えきれない感情の嵐。
この人間に対しての 馬鹿げた存在に対しての

「くくつ・・・あははは！」

笑いがとまらない。

この程度の存在が こんな食物でしかないものが私を馬鹿にして、
対等になるとでも思っているのだろうか。

本当に笑いがとまらない。

可笑しくておかしくてオカシクテ

「いいわ かかってきて」

愉しくなってしまう。
本当に愉しい獲物だ。

壊して、砕いて、潰して 出来るだけのことをして、散々に遊び
尽くしてから 美味しく食べてしまおう。

その希望を叩き潰して、絶望の中に閉じ込めて
上手に料理してしまえば、きつと素晴らしい食事になる。

そう決めた。

だから

両腕を上げ、まるで磔にされた罪人か何かのような姿で待ち受ける。

何をしてもし無駄だということを見せつけるように
全てが意味のない行為だと知らしめるように

「あなたの全てをみせなさい」

格の差を見せつける。

さて・・・

濃くなる気配を身体全体で感じながら 目の前の相手を眺めた。

光を返す長い髪。

少し小柄な身体と細長い体躯。

闇に溶け込むような真っ黒な衣装は、そのすらりとした体型にきつちりと沿って、美しく妖艶な雰囲気を引き立てる。

まあ、それだけならただの美人ってことですむが・・・

そこから感じられるのは、ただ、目の保養になるといって雰囲気だけではなく、暗く、鋭い多大な力の気配。
数少ない大妖の、それも中でも選りすぐりの者に並ぶか、それ以上に強大な妖力。

まったく・・・

不敵に笑う姿が型に嵌りすぎて、本当にお似合いだ。

これに敵う者など、この国中を探しても数えるほどにしか存在しないだろう。

加減した攻撃が中級妖怪の全力以上で。まともに相手しても、ただ殺されるだけ・・・地力に差がありすぎる。

両腕を袖の中に引き込んで、その内に仕込んだ札を握り締めた。
さらに濃くなる気配に体勢を整え、何時でも飛び出せるように構えをとる。

「そろそろかしら」

余裕を見せ付けるように尊大に微笑んで、こちらを見下す妖怪。

猫が捕まえた鼠をなぶって遊ぶように、彼女にとってはそれは暇潰しの遊戯のようなものでしかないのだろう。

「ええ、そろそろですね」

袖から取り出した札を見せ付けるように掲げて、こちらにもこりと微笑んだ。

相手と違い、こちらは虚勢を張るだけのものだが、騙まし討ちに

は丁度いい。

一応、時間は稼げた。

後は上手くいくことを祈るのみ。

天のご機嫌次第。

にしても

待ち受ける強大な妖怪。

それに立ち向かう矮小な人間。

何処かの物語のようだと、なんとなく思った。

くすりと微かな笑いが漏れて、怪訝に眉を顰める妖怪。

もっとも、自分が行うことは、まったく物語の主人公らしからぬこと。

そのために油断を誘い、正面からの打ち合いを望んだ。

あとはそれが満ちるのを待つだけ

さらに濃くなる気配に笑みを深めて……………

その瞬間を待つ。

「……………」

ぴりぴりと痛いような沈黙が流れ、空気が張り詰める。

それでも、大気に満ちる湿気に身体は暑さを訴えて汗を流れる。

のろのろと進む時間。
どろどろと濁る時間。

そこに

ぽたりと、音がした。

暗中模索に五里霧中（後書き）

遅れました。長くなりました。

せめて二、三日前に投稿しようとしたらネットが停まりました。その間にさらに長くなりました。

内容は濃くなったのかどうかは………疑問です。

お待ちになってくださった方々がいればありがたく思います。

とりあえず、それなりの戦闘中。

主人公はどうするのか。

御批評、御感想、共にお待ちしております。

暗夜行路（前書き）

仕切り直しと何かの予兆。

暗夜行路

「ねえ、紫」

振り落ちる桃色の雨を眺めながら、彼女はまるで囁くように言った。ゆるやかに笑んだその顔が薄い日の光に照らされて、血の気のない白い肌をますます色のないものに見せている。

まるで、散り際の花のように

「なあに」

にこりと薄く微笑み返して、背中に這い登る違和感を振り払う。盛りの季節は過ぎたというのに、私がそう意識しなければならぬほどの力が、それには芽生え始めている。

「私ね。この子はきつと悪くないのだと思うの」

細く痩せこけた手が伸ばされる。

その先にあるものに向けて

「この子は……ただ、普通に生きていただけ」

ひらひらと舞い落ちる桃色の花片。

その一枚を掴み取りながら、彼女は言った。

「決して呪われてなんていない。必死で生きて……美しく

咲いただけ」

宙へ手放された花びらは、一時吹き抜けた風にのって、空遠く舞い上がっていく。

まるで、溶けていくかのように姿を消していくそれは、美しくどこか儚げだ。

「最後の最後まで、それは変わらない」

歪んでしまったというのなら、それはきつと

天から降り注ぐ数え切れない水滴の群れ。

灰色だった雲はいよいよ濃度をまして、黒くその姿を染め上げる。

時折、ごろごろと唸るような声を上げるのは、天の神が怒りの声を発しているのか。それとも、ただ腹を空かしているだけなのか。

どちらにしても、癩癩をおこしているには違いない。

「さて、ここまでは大丈夫、か」

辺りの気配を探りながら、目の前の緑を両手でかきわけるようにして道を開く。ちりちりと肌の露出した部分に触れる草々が、くすぐったくてうつつとうつしい。

にしても、きついもんだ。

塩辛い汗交じりの雨水が頬を流れ落ちていく。
それでも、休まずに進み続ける。

正道どころか裏道ですらないこの逃走路は、進みづらいことこの上ない。悪天候であるならなおさらのこと。湿った着物がさらなる負担を身体に強いて、残りの体力をじわじわと削り取っていく。

まあ、でも

この雨のお蔭で助かったということは確かなのだ。
あの時、この雨が降らなければ、こんな風に逃げ出せていなかった。
少なくとも、それだけは感謝しなければならぬ

残りの札は十枚程度、か。

袖に仕込んだ分と荷袋の中にしてあってある分　この前に作って
いた分はそれだけで、心もとないことは確かだ。
あの場に残してきた身代わりは、そろそろ一掃されているところだ
ろう。

いや、もうとつくの昔に吹き飛ばされていたかもしれない。

「　運が悪いのかどうなのか」

それが問題である。

上手く時間を稼げているのか。
上手く引っ掛つてくれているのか。

どれを引いたのか。

どちらにしても、脚は動かし続けなければならない。
あんな規格外の妖怪を正面から相手するなど真っ平御免である。

さてさて、どうなることやら。

もはや、お決まりとなった思考に僅かに笑いを漏らし、視界を塞ぐ
雨水を拭う。
ぬかるんだ地面は、ひどく歩き辛い。

「うつつうつしい」

額に張りついた前髪を払う。
水を吸った髪は、すぐに目に入りそうになって面倒だ。
同じく多量に水を吸った衣服もびたりと肌に張りついて、身体を重
く制限する。

本当にうつつうつしい。

すっかりの濡れ鼠。
一張羅が台無しだ。

「ああもつ」

それもこれもあの人間の　あの胡散臭い男のせい。
あの男さえ手早く食べられていてくれれば、こんなことにはならな
かった。

込み上げる怒りに、思わず手の中のそれを握り締めた。
それはくしゃりと小さく潰れ、元あった形を失くして破れてしま
いそうになる。

ああ、いけない。

これは手がかりなのだ。

あの男を捕まえるためにも大切に扱わないと

折角の材料を自らの手で壊してしまう。

それでは意味がない。

雨で大分薄まりながらも、微かに香る人間の香りが染み付いている。
多分、血と何かを混ぜて作ったのだろう。

意味はわからないが、複雑な文字が描かれているもの。

人型に切り取られた白い紙。

こんなもので・・・

これは・・・

落ちた雫が地面を染めて、それが斑点となり、徐々に範囲を広げていく。
空気に満ちた水の気配は、とうとう水そのものとなって辺り一面を埋めていく。

天から落ちているのは無数の水の塊　つまり、雨だ。

とうとう降ってきた。

感想はそれだけだった。

ずっと空は雲で覆われていたし、徐々に雨の気配が濃くなっているのを感じていた。

そもそも、太陽が雲に隠れきっていたからこそ、私はここまで来たのだ。いつもなら、余程お腹が空いた時でないとき夜以外に出歩こうとは思わない。

辺りが暗かったから、散歩をしようと思った。

だから、雨が降ってきたのは予想通り。

特別思うこともない。

けれど、多分ずっと待っていたのだ。

この偶然に見つけた獲物は、その時を待っていた。

だから、その瞬間にはもう、動き出していた。

「　雨巡り、火炎と結べ」

聞こえるか聞こえないか程度の小さな呟きと共に、投げられた何枚

かの札が、男の手によって、まるで弓で射られでもしたかのような速度で打ち飛ばされる。

空気の抵抗を感じさせないそれは、真つ直ぐとこちらへと向かい

「・・・へえ」

多分、雨を利用しているのだろう。

そのいくつかが、鈍い光りを放ちながら、辺りの水滴を絡めとり、力を増していくのがわかる。

さっきまでの私のと、同じくらいか。

人間がよく扱う、環境を利用した術というものなのかもしれない力を増強させた札が、空気を切り裂きながらこちらへと飛んでくる。

でも、その程度で・・・

それに応戦するようにして、無数の妖力の塊を辺りへ生み出し、相手へと打ち放った。

その数は、男が飛ばした札の倍以上の数　込められた力も数倍のもの。

ほんの少ししました程度の攻撃では、覆せるような差ではない。相手の攻撃すら呑みこんで、男に襲い掛かることになる。

物量差で、質量差で　持って生まれた差の違いだ。

いくら人間が力を得ようと、同じ以上に力を得た妖怪に敵うはずがない。

黒の光球は、札を消し飛ばし、そのままの速度で男へと襲い掛かる

「さて」

はずだった。

「火と水が打ち消しあって 混ざり合って何となる？」

呟く様に男がいった その瞬間に目の前が白く覆われる。

「？」

まるで爆発するかのように発生した白い塊。

自分と相手の間に突然現れたそれは急激にその範囲を広げ、あたり一面を埋め尽くす。

煙？……………いや違う。

まるで呑みこまれるように、それに触れると、僅かに肌が湿るのがわかった。

それは、水蒸気 つまり、霧や靄のようなもの。

さっきの札はそのための…………？

降り注ぐ雨の中、突然現れた水の煙幕。

空気に溶けきれない膨張した水分が、粒となって辺りを漂って…………
……視界のほとんどを奪い取っていく。

「こんなもの」

それに紛れるようにして飛び掛ってくる気配。
視界が奪われて、混乱している私の不意を討つつもりなのだろう。
今まで感じた以上に素早い動きに、一瞬の焦りが生まれるが 本
気でなかったのはこちらと同じこと。

一瞬で頭を冷やしきり、それ《・・》に向かって真っ直ぐに手を伸
ばした。

ひゅん　　つと風切り音。

指先を伸ばし、そのまま真っ直ぐと腕を突き出しただけの、贅力に
ものをいわせただけのただの突き。それでも、たかが人間の身体は
容易く突き破る。

もう少し遊びたかったけれど・・・

狩られる側の獲物が狩人に牙を向いたのだ。
仕方のないことだろう。

白い靄の中から飛び出したそうとする影の中心。
その真ん中を私の腕が貫いた。

が

「何・・・？」

感触がない。

その人型の真ん中を確かに私の腕は貫いた。
それは、予想通りに向こう側へと突き抜けたが　　それにしては、

あまりにも抵抗がなさすぎる。

「おやおや、何をしているんですか」

「な・・・!？」

右手側からの声。

振り向いた瞬間には眼前にまで迫っていた靄の中の影に対して、右腕を薙ぐことで応える。

しかし、返ってきたのは

「また・・・」

ただ、靄をかき回しただけの空を切る感触。

振り払われたはずの影はまるで溶け込むように消えうせて、感じていた気配も掻き消える。

「これは・・・」

にせもの・・・？

再び表れる気配と、靄の中につつすらと写る影。

よく見ると、周りには無数の影が写り、辺りを囲んでいる。

「あんまり長くは保たないんですが さてさて
どれが本物でしょう。」

おどけるような調子の声が響き、その影の一つがこちらへと飛び掛つてきた。

それを片腕で振り払い、切り裂くが それもまた、粉微塵になつて散り失せる。

幻術。

昔に何度かだけ味わったことがある。

術者が作り出した幻　何かの形に象つた幻で相手を惑わせる術だ。術師が自分の偽物を作り出し、それを罠に使つて、私を誘き出し、退治しようとしていたのを覚えている……獲物の数が減つたのを見てがっかりした。

これは多分、その時ほど上等なものではない。あるのは影と気配だけだし、完全な人型を作り出しているわけではない。霧はその細かい部分を隠すための手段であり、また、そういう術の媒介にもなっているのかもしれない。

つまり、霧が晴れば、消えうせてしまうような脆弱なもの。

「で、どうするの？」

種が割れてしまえば、どうということもない。
ただの幻で、ただの影なのだから

再びその内の二体が左右同時に飛び掛ってきたのを両腕で吹き飛ばす。

全てなぎ払えばいい。

周りに漂う霧も少しずつ薄まっている。

時間が過ぎれば、その仕掛けは露出してしまふはずだ。

「……………」

ほんの数秒。
沈黙の時間が流れる。

こちらの様子を伺っているのか。影はその場に留まるのみで、動く様子を見せない。不意をつこうとしても、通じるわけがないことに気づいたのかもしれない。
ただ、散漫に時間を待って、生きる時間を引き延ばすだけ。
この霧が晴れるまでは 自分の命を守れると思っている。

「何もしないの？」

挑発するように言い放った言葉。
何の反応も見せない相手。

それでは面白くない。

こうやって少しずつ追い詰めていくのもいいが、私はもっと能動的に動きたい。
逃げる獲物を、自らの力によって追い詰めて、怯えさせて 狩りを楽しみたいのだ。

なにより、相手の思惑の中にいる今の状況が

「 なら、こっちの番ね」

気に食わない。

洗練された技術に、工夫を重ね、時間をかけ、それを成し遂げた。
そんな、男がやっとのことで作り出した状況。

努力の結晶のようなそんな領域に　私はそれを振り下ろした。

……あの瞬間。

私は確かに吹き飛ばした。

その水蒸気ごと、姿を隠す仕切りごと、あの影達を吹き飛ばした。
それが振り落とされた地面は、辺りにあったものごと全て消し飛んで　そこには何もなくなった。

そう……そこには何もなかった。

みしりっ

そんな音を立てて、支えにしていた木が揺れた。
どうやら、当てていた手に思わず力を込めてしまったらしい。

千切りとってしまったその残骸を放り捨てる。

本当に……ご丁寧に。

そこで激昂した私は、すぐさまその気配を追いかけた。
騙されたという屈辱感にはらわたを煮えたぎらせながら、それを追ったのだ。

そして、そこにあつたのは　より高密度に造られたさらなる分身
体。

気配と僅かな霊力を放つ、霊符を媒介とした身代わり人形。

それが浮かんでいるだけだった。

「……………」

真っ白になった視界には、何も見えなくなった。
そして、それを通り越して、私は冷静になった。

ただ

「捕まえてあげないと」

そんなことを考えて

くしゃくしゃになってしまったそれを丁寧に握りなおしながら
その感情を呑みこんだ。

これを吐き出すのは、それを目の前にしてからだ、そう決めて

「　行つて」

真っ暗な形を空に放った。

必ず見つけるの。

ぼっかりと森の中に空いた広場で、その知らせを待つ。

「ふう……」

こんなものだろう。

これで、出来るだけのことはした。

森の中に存在する小高い丘の上の、さらに一際高い一本の木の枝の上で、景色を見下ろすようにしてそれを待つ。

弱冠小降りにはなつたが、雨は依然治まらず、雲は晴れないままで……多分、少しの小休止程度だろう。台風の目のようなもの、きつとさらなる暴風が、この辺りを襲うことになる。

しかも、二つ以上……か。

握り締めたのは、先ほど自分が使ったはずの札。

人形として媒介としたはずの霊力を込めた幻身の符。その切れ端。

力を伝えるためとはいえ、血を使ったのがまずかったかね。

よりらしく錯覚させるための一工夫。それが仇となつたのかもしれない。

妖怪というものは、人間の臭いに敏感で、それ以上に血の臭いに敏感だ。

その本能に従って、真つ直ぐにこちらへと向かう。

「雨だから、大丈夫だとおもったんですがね」
まさかそんな方法でくるとは・・・

そんなことを呟きながら、辺りに集まりだした黒い塊を見下ろした。先程より数が増えたそれは、こちらを監視するかのようになりを囲んでいて・・・今から何処へ逃げたとしても追いついてくるだろう。

一度見つかってしまったえば、終わりなのだ。

「ねえ、鳥さん」

返事のないそれに小さく呟き、嘆息を漏らした、

何の鳴き声もなく。瞳も継ぎ目もない、ただ形だけをなぞったもの。まるで、闇をかためたかのような暗い色彩の 鳥の形。

ただ、その主に従うだけの方向性とその身の内に仕込まれたもの。それを追うためだけの存在。

そして、その報告は、その主へと届けられることとなる。

上手い力の使い方だ。

自分の能力を把握し、それに合った力の使い方を創りだす。

それは鍛錬によってつくられた努力の結晶なのか、はたまた、本能に従って生み出した天性の力のなのか。もしかしたら、生まれたときには既に知っていた天然のものなのかもしれない。

往々にして、妖怪というものには後者二つのものの方が多いが。

「どつちだろう、ね」

今までの相手の動きを思い起こしながら、それを考える。何の意味もなく、ただの時間つぶし程度ではあるが、そこから何かを考えるのが人間である。

圧倒的な力に対してどう対応するのか。

工夫に工夫を重ね、新たな段階へと繋げていく。

それが、発展であり、進化であり 人間のもった特性だ。

生きるために、自分と周りのものを最大限に活用する。

出来るだけのことを、出来るだけするのだ。

それが、生き残るための方法。

「 といつても」

世界が揺れたかのように感じた。

森の一部が歪んでいるように見えて、まるで陽炎のように揺らめいている。

きつと、抑えきれない力が空気を震わせているのだ。

背中に流れる冷や汗は、露出した肩に当たる雨水と混ざりながら衣服を濡らす。

手首に巻きつけた布とそれに挟んだ残りの札を確認し、雨水と汗が視界を塞ぐことのないように、額にもしっかりと手ぬぐいを巻きつける。

最後に、思い切り息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出した。

「最後は運次第。風にまかせるしかない」と
この場合は雲行きにまかせるしかない、かね。

そんなことを呟きながら、すっと脚を踏み出して、目の前の浮遊感に身を任せた。

神のご利益があるのか。

自己の不運に吞まれてしまうのか。

一人ごちて、その前に立つ。

一対の黒翼のひろげる美しい闇の化身の　その前へと

ごろごろとした音を鳴らし、降り止まない雨。
濡れた植物が埋め尽くす地面の上。

ふわりと、まるで重さを感じさせない感覚で、男は降り立った。

「おやおや、また会つとは偶然ですね」

そんな調子で嘯いて、おっくうそうに肩を回す。
軽く身体の調子を確認しているだけというような、今から作業を始める農夫のような様子だ。

「ええ、落とし物を返そうと思って」

重荷を感じさせない相手に応じるように、こちらも軽い調子でそう答えた。
持ち上げた片腕に舞い降りたその黒の塊を撫で、薄く微笑んで見せる。

「そりゃあ、ご苦労様で お礼にお茶でもどうですか」

変わらぬ様子で微笑み、布を巻いた手首に手を当てる男。
額に巻かれた布きれにより、先程よりも、その細く引き絞られた目が鋭くこちらを見据えているのが解る。

「いえ、遠慮しておくわ。それより お腹が空いたな」

口の両端を持ち上げて、にっこりと微笑む。

そう、限界だ。

これ以上は待てない。

身体が熱くなつて、意識が焦げついて コワレソウニナル。

「早く」

抑えていた激情が溢れ出す。

これ以上我慢できないと身体が震えだす。

「ハヤクタバサセテ」

止まらない。

止める必要もない。

ただ、身を任せる。
妖怪としての本能に。

「さてさて」

私の感情に影響されたのか。
空を飛び回る中の一匹が、我慢ができないというように男に向かった。

鋭く尖る嘴をもって、その肉を食いちぎろうと迫るそれは

「なら、届けてもらった分はご馳走しますか」

こともなげに掴み取られて、霧散した。

残ったのは、小さな紙片。

追跡に利用した、男のものだったもの。

それを受け取って、男は構えをとった。

ゆらりと、まるで力を込めない姿で、その手を揺らす。

「ご満足いただけたら、お引取り願いますよ」

「ええ、満足したら、ね」

変わらぬ調子に男は微笑んで、

こちらも心地いい開放感に身をゆだねて

「始めましょう」

晩餐会の幕が上がる。

静かに寝息を立てて、肩に寄りかかる少しの重さ。
確かな温かさと　そうは思えないほどの軽さに、そう遠くない未
来の光景が思い浮かんだ。

「　大丈夫、よね」

それを実現させないために、私は力を尽くしているのだ。
間に合わなければ・・・間に合わせなければならない。

もう、私は知ってしまったのだから

一陣の風が吹きぬけて、辺りに散った花びらが舞い飛んだ。
薄い芳香を纏ったそれは、遠くの　季節違いの木々の間へと降り
注いでいく。

「　また、探しにいかないか」

このまどろみのような一時が・・・せめて、最後まで続いてくれる
ように。

ほんの僅かな胡蝶の夢が、途中で覚めてしまうことのないように。

もう少しだけ・・・この時間を過ごしたら

降り落ちる花片と、まるでその色を映してしまったかのように染まる薄紅色の髪。

それを片手で撫でながら、隣に立つ満開の老木を見上げた。

枯れない桜は、美しく咲き誇ったまま

暗夜行路（後書き）

やっと次の段階への始まりといったところ。

あまり進んではないかもしれませんが、必要である回……

このような状況の中での更新ですが、一時でも楽しんでいただければ幸いです。

ご感想、ご批評、どちらでもいただければ嬉しく思います。

光芒一閃（前書き）

攻防収束・・・終息？

光芒一閃

今

今、目にしているものは、現実にはありえないはずのものだろう。

この世界　この星の地表において、自分達人間……視覚というものが存在する生き物、いや、触覚や何かしらの器官によって、光を知覚することができるどんな存在においても、絶対に知ることがないはずのもの。
光を遮り、灯りを塞ぎ、目を閉じて　それに夜が訪れても足りない。

あの天照が隠れた時でさえ、炎を灯し、光を焚くことで、少しの光源を得ることができた。けれど、この闇にはそれさえ叶わない。

触れてはいけない。
見てもいけない。
壊れてしまう。
崩れてしまう。

この世に光があることを、何かが存在することすら、忘れてしまう。
真っ暗な一色だけの色に、塗りつぶされてしまう。

あらためて　初めて実感する、その規格外さ。

「　化け物、以上……か」

心配はない。

けれど、そこに何かがあるのはわかりきっている。

そこに地面があることすら、そこに空気が存在することすら感じさせない。

そこにある空間が、まるで切り取られて消えてしまったかのような

まるで、そこには何も存在しないような

あるはずのものせかいがない、そんな違和に満ちている。

逃げろ。

本能が叫ぶ。

あれに触れるな。近寄るな。一分一秒でも早く走り出せ。

怖い。

恐ろしい。

苦しい。

この場から逃げ出せと叫ぶ声。

けれど

途方もない年月に培った経験が、生き延びる為の知恵が 命を支えた理性が全力でそれを抑え込んでいる。

考えろ、何ができる。何をすればいい。

今
何も考えずに逃げ出せば、そんな感情のままの逃亡では、絶対に助からない。
全力で、全霊で、ただ一つのことにて全てのものを注ぎ込まねばここで生きることができない。

考えるな。感じてたままに、そのままにいけ。

ゆらりと揺れる球体の闇。
その先に存在するのは、もう、別の世界とってしまってもいいだろう。

感じて、考えて、本能のままに理性に従って

そんな矛盾した思考を実現させるほどに研ぎ澄ます。

眠りこけた原初の獣を引きずり出して、それに人の知識と知恵を乗せ、狂いながら正常に 余力を残さず全力以上で挑む。

それくらい 自分自身くらいは騙しきれなければ、賽の目に『生存』という文字すら浮かばない。

「想い描く幻像は 最速の形」

その発現を言葉とすると同時に その場を全力で飛び退いた。
迫るのは、目の前にあった闇の球体が、ばらばらに弾け飛んだ破片。

こりゃあ、また・・・

弾けた破片。不定形の塊。

そこには、先ほどまでの攻撃の癖や型など存在しない。規則性など持たず、制御などされていない。ただ、飛び散っただけの破片が飛んでくる。

まるで、陶の器が割れたかのような、ばらばらに散った黒の塊が迫る。

「読みづら」「いきなさい」「

動きが読み辛い、そう言い放とうとしたその時に。

大小、形や速度もそれぞれに違う乱雑な攻撃を避ける最中に、小さな声が響く。

「と……!」

破弾の間より迫っていたのは、明らかにこちらを認識した上での攻撃。

そのばら撒かれた弾幕の中に潜む 獲物を穿つ嘴の群れ。

誘導式つ……!

多分、こちらの方が本当の使い方なのだろう。獲物を追うのは二次作用で、本来の役割は相手を逃がさない追跡式の弾丸。数は数十匹以上の、妖力で編まれた鳥の群れが、今度はこちらの肉を抉る遊撃隊として辺りを囲んでいる。

散弾と合間合間からの鳥による曲射、ね……。

「大判振るまいしすぎですって」

迫り続ける真っ黒の群れに対して　微かにも、休む暇はない。

ちりちりと、毛が逆立つほどの力の奔流に晒されながらも、その間をすり抜けるようにして身体を滑り込ませる。右に、左に、いくらかの薄皮を削られながらも、それが肉まで届くことはないように、踏み外せば終わりの綱の上を渡り続ける。

そして、そのぎりぎりの間隙を埋めるようにして迫る黒い嘴、それを

「お客さんは物を投げないでくださいよ・・・っと」

こちらに届く前に、羽根や胴体の部分を狙って、身体からだの何処かしらを叩きつけることによって弾き飛ばす。幸い、この鳥達に込められた力はそれほどものではない。嘴の部分に触れさえしなければ　火傷程度ですむ。

この雨だ。それほど酷いことにはならない。

そうやってやせ我慢を決め込んだところに

「無茶をするわね」

くすくすと笑い声が響く。

辺り中が黒に囲まれ、ほとんど視界が覆われてしまっている今の状態では、それが何処から聞こえてくるのかはわからない。

今はまず、この攻撃を避け切る、そう判断し

「・・・っ!？」

ぞくりと背筋が震えた瞬間に、全力で空中へと跳んだ。

今、一時手前まで自分がいた場所に伸びるのは、一本の剣。

「おしい」

一際大きな黒の破片の中から覗くのは、漆黒の剣を携えた黒衣の少女。

破片の中から……!?

弾けた破片は囷で、本命はそれを隠れ蓑にしての直接攻撃。そして、狙い通りとはいかずとも体制を崩したこちら。

「じゃあ、今度も避けられる？」

足場のない空中で迫るのは、幾匹かの黒の鳥と無数の光球。奇しくも、前にあった状況を同じ形。

「ああもう」

ほんとうになけなした。

そんなことを呟きながら、手首に巻いた布の中から仕込んだ札を取り出す。

右下、いや左上方……

その攻撃の隙間。追撃が少ないだろうと考えられる空間を探り、両足に力を込めて跳んだ。空中を進む身体は、その弾幕の群れを抜け出しかけて

「つぐ……」

僅かにだが、一匹の嘴が右肩口を掠めた。
軽く血が流れ、鈍い痛みが走るが、前のは桁違いの数の隙間を抜けたのだ。

この程度なら上々といったところだろう。

先にあつた木の幹を蹴って地面に着地したこちらを、少女は面白そうに口端を持ち上げる。

「そんなことをしていたのね」

やっと種が割れた、と楽しそうに笑う。

どうやら、今の攻撃はそれを探るものでもあつたらしい。

「ただの手品ですよ」

対して、こちらは前と同じような台詞で返した。

そう、ある意味では簡単なことなのだ。

踏みしめたのは、札で作り出した固定式の結界。

対した集中もなく作り出した結界では攻撃は防げないが、ただの足場代わりにはなるといった寸法。それを上手く誤魔化しただけ。

「ええ、面白い見せ物だったわ。お礼をしないと」

そう口にしながら、宙へと浮かび上がっていく少女。

さらに高まる妖力と共に、背に広がる闇を塗り固めたかのような翼が現れ、大きく広げられた。片手に掲げられた剣は暗く明滅し、その気配をさらに色濃いものへと昇華する。

「ここから、本気ってことですかね」

「ええ、知りたいこともなくなつたからもういいや。」

軽い調子で呟かれたのは、ほんの僅かな好奇の終わり。今度は、試しではなく、明確な殺意を持って その凶弾がばら撒かれる。

「さっさと幕は降ろしたいんですがね」

手品の種の残りは四枚。稼げる時間はそれほどのものではない。対して、相手に打ち止めの兆しはなく。まだまだ余裕たっぷりといった状況。

伸るか反るか……。

あまりに分の悪い賭けではあるが、まだ犀は転がり続けている。まだまだ、結果が出すには早すぎる。

「ぎりぎりまで踏ん張ってみますか」

年寄りには気が長いのがいい所と、そう言い聞かせて 疲労した身体を叱咤する。

右に、左に

迫る弾幕の間をすり抜けて、飛び掛る夜鳥を叩き落して

上に、下に

落ちていた木の棒をつつかえにして跳ねたかと思うと、私の攻撃によつてできた隆起に身を潜める。

よく避ける。

攻撃が当たらない。

さっきの不意打ちに対応してからは、札を使わせることすらできていない。

そうさせないように男は動き、距離を保っている。

ほんとに面倒……。

いい加減に飽きがきてしまう。

いつまで繰り返し返せば、いつまで同じままなのか。
どこまで続くのか。

なぜ……

「なんで反撃してこないの？」

辺り全体を破壊し尽くして、もう、ほとんど平らな地面など残っていない。

囲んでいて木々のほとんどを吹き飛ばされて、もはや、残るのは一、二本程度。それも、男がそちらに近づかなかったからこそ巻き込ま

れずに済んだだけのものだ。

それほどの攻撃を繰り返して、それほどの破壊を繰り返して、それでも 男は傷を負ってはいない。勿論、僅かな掠り傷や火傷などの軽傷はだんだんと増えて、少しずつ息も乱れ始めている。動きが遅くなっているような気もしている。

それでも、致命傷どころか、動きを損なうような傷は負っていないということは確かだ。明らかに、こちらの攻撃に慣れて 見切り始めている。

しかし、だというのに、

「あなたなら、そろそろ何かをしてもいいころでしょ」

何もしてこない。

見せた隙にも、作った隙のも 偶然にできた隙にさえ、何の反応も見せない。

ただ、避けて、逃げて、それを繰り返す。

一体なんで

いくらそれを続けようとも、人間の体力が妖怪に叶はずもない。ジリ貧だというのはわかっているだろう。このままでは、時間を稼ぐ程度のことしかできない。

「さてさて、何のことでしょう」

攻撃が止まったのを見て、男も動きを止めた。雨に濡れた髪に手を当てて、深く息をつく。

「あんまり買い被られても、俺の力なんて、そう大したもんじゃありませんよ」

ひらひらと片手を振って、覇気のない様子で微笑む。

そこには、死に直面しているという絶望感も、絶対に生を掴み取るという気負いも見られない。まるで、何かの流れそのままに身をまかせているかのような自然体。

「変な手品はもうお終い？」

「ほとんどを上着と一緒に置いてきてしまったので　出し惜しんです」

ふざけた調子を崩さないままに答える男。

にこりと人の良さそうに微笑む笑みは、とても、とてつもなく

「また、何か企んでるんじゃない？」

胡散臭い。

「さて、どうでしょう？」

人を食ったような嘘臭い笑み。

どちらが化かす方なのか、分かったものじゃない。

はったりなのか・・・何か考えがあるのか。

どちらにしても、このままでは埒が明かない。
なら

「月が出るには少し早いけれど」

この暗闇には映えるでしょう？

言葉に共に、両腕を伸ばし、男の方へと真っ直ぐに向ける。そして、打ち出されるのは、月の光を模した光の線。

「……………とっ!？」

一度見せた攻撃だからだろう。

真っ直ぐに伸びた光線を男は危なげなく横に跳んでかわす。

それを追いかけて、そのままなぎ払うこともできるが、それでは多分当たらない。

なら

ダンッ

「……………っ!」

地面を穿つての急加速。

雨が染みた土によって多少の減速は免れないが、それでも、人間の動きに追いつくには十分。

背の翼が空気を切り裂く音と共に、目の前に迫るのは男の僅かに狼狽する姿。

「ここから先は、出し惜しみは無しよ」

そんなことをしたら、一瞬で消し飛ばす。

右手に掲げた剣をその胴体を狙って薙ぎ払う。

どす黒い闇をはらんだその切っ先は、そのまま男の身体に吸い込まれる寸前　投げられた札から出現した障壁にぶつかって、それを消し飛ばす。

「 あっ・・・ぶないですねえ！」
「 まだまだ、よ」

その一瞬に生まれた均衡の間に後ろに跳んで回避した男に対して、真っ直ぐに左手を向け、そこに溜めた妖力を撃ち出す。
今度は数ではなく、質の 威力による範囲攻撃。当てる攻撃ではない、巻き込み、吹き飛ばす規模の攻撃だ。

これで・・・！

「 こりゃまた豪勢な」

目の前まで迫るその大規模攻撃。
それでも、男の余裕 空気は変わらない。

柳に風。
暖簾に腕押し。

というよりもぬかに釘。

交渉ものではなく軽薄なまま。
雲のように飄々と 崩れない。

「 つぐ・・・！」

大分元の形を無くしているでこぼこの地面の上を転がって、その勢いを殺しながら呻いた。
体中に出来た擦過傷や火傷が小石や砂利に擦れてさらなる痛みを誘う。

「い……ったいなあ。こりゃ……」

そんな軽い悲鳴を漏らしながらも、手のひらをぐーぱーし、手足の状態を確認しながらすぐさま立ち上がる。

右手が弱冠ひどい……が何とか。両足も万全ではないが、十全程度には大丈夫……邪魔にはならない。

「なんとかって……とこですな」

負傷の具合を知らせないように、わざと明るい声を出しながら、土ぼこりの晴れた先に立つ影に向かって言い放つ。

「いい加減にしてほしいわね」

いい加減にとさかにきているのか。そこにはもう、優雅に微笑む姿の少女など存在せず、ただただ、にらみ殺そうとでもするかのような瞳を向ける妖怪としての姿のみ。
その視線だけでも、気の弱い者なら石にでもされてしまいそうな圧力が放たれている。

いい加減にやばいって感じかね。

だんだんと激しくなる攻撃。少しずつ、少女の機嫌が取り返しのつ

かない方向へと進んでいつていることがよくわかる。

周り全部を吹き飛ばしてしまいそうな攻撃は、もはや、食べるために殺すというよりも、ただ、殺してしまおうというものへと移行し……先ほどの攻撃をまともに食らっていれば、多分自分は原型も残らなかった。

ただでさえの、少しだけの付け込み先が、だんだんと薄くなり死が間近まで迫り始めている。

待つか……賭けるか。

先ほど、自らを吹き飛ばすためと余波を避けるための防御に札二枚を使ってしまった。おかげで命は拾えたものの、右手は重症で残りの手札は一枚。

自分の力だけでの反撃には、今が最後の機会だ。

雲の具合は上々……あとの確立は大目にも積もっても五分あるかどうか。

それを待つか。

一か八かの突撃か。

決めかねたところに、一瞬だけ……小さな明るさとくぐもる音が響く。

届く光と遅れる音。

「……ふむ」

最後の最後まで粘ってみますかね。

「ねえ、妖怪のお嬢さん」

口八丁手八丁での時間稼ぎ。
老人の知恵の使いどころで、長話というのは自分の得意分野だ。
自分より二桁以上も下の相手に対して大人気ないが 血気盛んな
若人に体力で敵うはずが無い。なら、自分の方法で戦う……..
相手の土俵で戦わないようにするしかない。

「貴女の方が大体わかってきましたよ」
「？」

突然しゃべりはじめるこちらに対して、少女は多少の警戒を見せながらも、動きを止める。

「あなたが操っているのは『闇』……そして、それを象徴する『夜』ってところですかね」

並べ立てる言葉。

それは、相手の攻撃を分析し続けた結果 それを含んではいるが、そのほとんどは出鱈目と山勘に過ぎない。ただ、それらしいことをそれらしくしゃべっている。

嘘八百で、詭弁の騙し。耳を傾けさせるためだけの弁舌。

「暗がりつてのは古来からずっと恐怖を誘うものとしての代表。ならば、それから生み出された妖怪が強力なのは当然」
敵わないことです。

両手を広げ、嘆息を吐きながらいった言葉に、少女は右手に持った剣を構えなおし、こちらに向けながら口を開く。

「何が言いたいの」

「夜の闇を固めて、月の光を降らせる　なかなか洒落た能力です、とね」

再び集まり始める妖力を感じて、肌があわ立つ。

先ほどの比ではない。こちら辺りごと吹き飛ばしてしまうような力。それでも、無防備に近い状態で言葉を続ける。

「しかし　そうになると、もしかしたらって考えが沸きますね」

ここまできたら、それを続けるしかない。

「何かしら？」

今まで最大の攻撃を出すためだろう。溜めの状態に入った少女は、まだ動く気配は無い。

まだ、時間を稼ぐことは出来るということだ。

「例えば、夜　闇とは対を為す光であるならば、それを打ち消せる・・・まではいかないまでも、苦手ではあるんじゃないかと思いまして」

「.....」

少女は無言でこちらをにらみつける。

どうやら、この答えは、正解に近いものだったらしい。

つまり、予測は当たっていたというわけだ。

「　もし、それが正解だったとして・・・あなたはどつするの？」

一歩。

こちらに踏み出しながら、少女は話す。
周りに渦巻いていた黒く濁った塊が姿を消して、その姿をはっきりと捉えることが出来る。

「この天気では、太陽なんてではるはずがない　あなたは、それに匹敵する力でも持っているというの」

そこにあつた暗闇はすっかり仕舞われてしまっている。
不気味に明滅する剣は、その身の内に何かを孕み　早く吐き出してしまいたいと訴えているように見える。

あれはやばい、と。

あんなものを振り下ろされれば、ここは更地となってしまう。
塵など残さず、消されてしまう。

「　　いえいえ」

歩みを進める少女に対して、こちらも一歩踏み込んだ。
右手首に巻いた布を解き、そこから最後の札を取り出す。

「俺にやあそんな力はありません　あるとすれば」

左手に札を挟んで、解いた布を右手に持ち直す。
手の平に疼く傷に触れたそれは、そこから漏れる血液に触れ、赤い染みが伸びる。

「助けを呼ぶくらいですよ」
「助け？」

一步。

一步で踏み込むことが出来る距離に立ち、少女は可笑しそうに首を傾げた。

こんな場所で、誰の助けがあるのだと 何が助けてくれるのだと。

「ええ 誰かに、何かに……天に助けをつてね」

地面を踏みしめ、同じように掲げられる剣に向かい合わせるように、左手に挟んだ札を少女に向けた。

「努力して、工夫して、頑張つて 自分に出来るだけのことをして」

激しさを増す雨。

空から鳴り響く轟音。

「 最後は、運次第」

生きるか死ぬか。

不運か好運か。

それしだい

「じゃあ、運が無かったのね こんな天気の良い日に」

私の前に通ってしまったのだから。

言葉と共に膨れ上がり、一気に噴出す暗闇。

夜を纏った剣が、暴発するまでに溜め込んだ力を吐き出して……
……それが振り下ろされる。

「それでも」

視界を塞ぐように、鉢巻代わりの布を下した。
迫る衝撃から目をそむけるようにして

「昔から、大吉を大凶だけは引いたことがないんですよ」

呟いた。

「……………!?!」

真っ白になった視界　その音が届く前に跳び出した。

!!

もはや、音にすら感じられないほどの轟音。

視覚も聴覚も、全てが真っ白になって、何もかもがわからなくなる。

何で

太古より　この世界に水が生まれ、雲が生み出された瞬間より存在する原初の光。

太陽がない空の中、ただ一つ、闇に亀裂を入れる存在。

何でこんな近くに。

かみなり
神鳴。

音より早き光と遅れ響く轟音を引き連れて、それは、そこに残っていた一本の木に落ちた。

一際高い場所にある、一番背の高い木。

確かに、それはそういう場所に落ちやすいことは知っている。そういう性質だと知っている。

しかし、それが今、この瞬間に落ちてくる確率はどのくらいのものだというのだろうか。

こんなに間近でこの光を浴びることなど、考えたことも無い。

それなのに

今、この瞬間、この時の中に、偶然に落ちてきた稲妻に　　どうして、この男は反応しているのだろうか。

「・・・・・・・・・・!?!?」

何も見えず、聴こえない中で、一つの気配が飛び込んでくるのがわかる。

光が視界を埋めた瞬間。その次の瞬間には、もう動き始めていた。

一体、どうやって・・・?

まるで予見していたかのように、今この瞬間を狙った攻撃。

これ以上ない機会に、これ以上ない時を　　狙っていたのだろうか。

頭がおかしくのではないだろうか。

それでも

それでも、相手は人間だ。

目も耳もきかない状況でも、その居場所さえわかれば、対応できる。これが妖怪で、もつと速さを持つ生物なら危なかった。

右手に構えた剣を、その気配向けて振り下した。

込めていた妖力は、この光によって霧散してしまっていたが、それでも十分。

たかが、人間なら、それで……いや、この思考は、どこかで考えたことが無かっただろうか。

ついさつきに　こんな感覚で

それに気づいた時には、剣を振るった後だった。

返ってきたのは、空を斬る感触と　落ちてきた声。

「封結」

しゅるりと音がして、何かが髪に巻きつく感触。

身体から力が抜けて、意識が遠くへ飛んでいく感覚。

何も考えられなくなった。

「かはっ……がっ……あ」

今さっき呼吸を思い出したように、一気に空気を吐き出して、地面に身体を放り出した。

鈍い鋭いを通り越して、ただ痛いとしか思えない感覚が全身を駆け抜ける。

「ぐがっ……！」

間抜けな声を上げ、一瞬身体の疼きに耐え忍び、それが落ち着くのを待った。

流石に……きつかった、か。

身体の筋という筋が悲鳴を上げて、少し腕を動かすたびに骨の軋む音が聞こえてくる気がする。振り落ちる雨が口内に侵入し、微かにも水分が補給されるのが、たまらなく心地いい。

「ああ………疲れた」

身体という身体が、精神という精神が休息を欲している。

少し休まなければ、指一本も動かせない。

それでも

「なんとか、生き延びた、か」

幾度となく逃れた修羅場の中でも、十本の指に入るような危機に、なんとか生き延びた。

しばらくは日常生活にすら支障が出るだろうが、どうにか命だけは

拾ったのだ。

助かりましたよ……諏訪と大和の神様さん。

雷を呼ぶための媒介として使った上着と残りの札。

神の利益を受け、自分の長年の血が染みだされと札で陣をつくり、それを一番確率の高そうな木に結びつけ、どうにか雷が落ちやすい状況は作れた。それでも一か八かの賭けではあったが、それがなければどうしようもなかったことは確かだ。

本当に　運がよかった。

本当に、天に身を任せていただけだったのだ。

使えないと思っていたものも、思わぬところに使いどころがあったもんだ。

あの夜に参考としていた布製の札。強力すぎて使いようがないとおもっていたそれ、思わぬところで役に立ってくれた。あの月の姫様にも感謝しなければならぬ。

まあ、妖怪さんには悪いことになったかもしれないが……

多分、その拘束によって押しつぶされてしまっただろう妖怪の少女を思う。

しかし、死ぬか生きるかの瀬戸際では、仕方ないことではあっただろう。

過剰な力に、過剰な力を返したただけだ。後味が悪いような気もするが、今更でもある。

せめて、石碑でも作るかね。

退治された妖怪にはつき物だ。ものによっては、強大な存在だったとして守り神や好運の印としてその土地に祀られることもある。生き返るの可能性だってあるだろう。

「ま、どっちにしても」

今は休んでから・・・

そう思つて、目を瞑ろうとした時。

「あれ？」

土を蹴る音と共に、幼い声が響いた。

「ここで何してるの？」

小さな体躯に、高い声。

まだ、ほん子どもにしかみえない姿の

「食べてもいいのかな？」

金色の髪をした少女が、そこに立っていた。

光芒一閃（後書き）

戦闘シーンはやめておいて方がいいのかなとも思いました。
長くてくどくどすぎているような気もしています。

ご感想・ご批評お待ちしております。
読了ありがとうございました。

針が揺れて、言葉が返る（前書き）

珍しく早めです。

なぜだろう。彼女が登場したからか（予定では別人物だったはず）
キャラが動いたってやつだろうか……。次も頑張ろう。

副々題は『因果応報』。

針が揺れて、言葉が返る

食べてもいいか、そう尋ねられれば、勿論それは駄目だという。けれど、相手が必ずしもそれをやめてくれるわけではない。ましてや、お腹を空かした子どもなら、さらには、それが妖怪の少女などであった日には、万に一つ程度の可能性でしかない。つまりは

一発の光球。

さっきまでのとは比べ物にはならないほどに弱く、しかし、確かな形で撃ち出された力によって、身体が吹き飛ばされた。

鈍い痛みと共に、視界がぐるりと回転して、地面に身体が叩きつけられる。

致命傷ではない。けれど、動けなくなったことは確か。

終わり、か。

折角にここまで粘り強く耐え切って、千に一つの可能性に全てを賭けて、それを掴み取ったというのに。結局は、自分の読み違い。相手の地力によってそれを引っくり返された。

思惑通りに進んだ好運の中、予想以上の不幸に呑みこまれ、面白いほどの逆転にあった。

まあ、らしいっちゃあらしい………かね？

ある意味では、新鮮な　懐かしい痛快さがある。

こんなにも生きてきた時間をもつてしても、それ以上の奇想天外な出来事が、まだまだ世界には存在するのだ。その実証が、たまたま

規格外の妖怪で　少女であっただけ。
それもまた、面白い巡り合わせではある。

本当に、退屈しない世の中だ。

こういうとき、人間というのは泥臭く足掻くものだというのが、流石に、ろくに身体も動かせない状況では、どうしようもない。
年寄りの潔さ　冷静さというのもある。

それに

ここ千年辺りは、なかなか面白かった。
予期せぬ再会。偶然の出会い。

自分と似た存在。似ていない存在。
懐かしい、微笑ましい、感慨深い……忘れがたい。

くるくると巡る記憶の中で、からからと音を立てて回る渦。
楽しく、面白く、滑稽で　ひどく面倒で、手放しがたい。
ひどく寂しく、辛く、苦しく。

それでも、関わりたいと望むもの。

触れたいと、望むもの。

満足、だと思う。

ここらが潮時ではないかとも思う。

『本当に?』

そう問われれば、まだまだ迷ってしまうほどに未練はあるのだけ

ど。

それこそ、思う以上のやり残したことがいくらでもあるのだけれど。

　　まだまだ、『人間』だったってことかね。

この島に暮らす人の数ほどに生きてきておいて、今更ながらにそんなことを思う。

永い時の中で、未だに手放せぬものを改めて実感して　薄く笑う。

自嘲を含めて、まだまだ、『生きていたい』という感覚を滲むのを
噛み締めて　笑う。

　　そういや、まだ、名前を聞きにいけてなかったな。

死に際に思い起こすにしては、いささかのはずれなものが頭に浮かんだ。

　　そういえば、新しい自分の名前も決まっていな。

そろそろ腰を落ち着けようかと思っていたのに、間の抜けたことだ。最後は名無しのままに終わるのかと、少し残念に思う。

けれど

　　案外、そんなものなのかもしれない。

　　名もなく野垂れ死ぬ、名もない老人。

　　無縁仏で、茶毘にもふされず妖怪の腹の中。

「　　それがお似合い、か」

今まで散々に勝手をやってきたのだ。
そんな末路も仕方がない。

柄にもなくそう思っ、隣にたつた気配に瞳を開けた。
どうせなら、痛みなく終わってほしいのだと考えて

「 あらあら、こんなところに落し物」

そこに響いたのは、天使の加護か、悪魔の囁きか。

「私が拾ってしまったでもいいのかしら？」

どちらにしろ、こんな雨に出歩く者など、酔狂なものに違いない。

訪れた森の奥に感じた気配。

その微かな力の流れを辿って探し当てたのは、森の中にぽっかり空
いた小さな広場と焦げついた大木。

そこに倒れ伏す男とそれを見下ろす少女。

懐かしい顔だった。

「 お姉さんは何？これは私のだよ」

生きているのか。死んでいるのか。
雨水の降り注ぐ暗闇の中では、それが良くわからない。

けれど

そう簡単にその男が死ぬはずがない。

少なくとも、私の殺気を受け流すほどには力を備えているはず。
それが、まさか、こんな幼い妖怪に敗れるはずがない。

そう思った。

ではなぜ　　こんなにも、微かにしかその力を感じられないのだろうか。

「あなた、なにをしたの？」

にこにここと笑う少女に対して、問う。

「なにつて？」

金色の髪を赤い布で結んだ少女は、小さく首を傾げた。
その姿からは、何の脅威も感じられない。

妙な違和感を感じこそすれ、ただの小妖怪の一匹。
それがどうして、ここにいるのだろう。

何かが起こった後に、偶然訪れただけだろうか。

「私はただ、お腹が空いたから
美味しそうだったから
」

食べたかったから

丁度良かったから

少女が話すのは、どこかずれた話。

要領を得ず、結局のところ、何の説明にもなっていない。ただ、お腹が空いたからそれを食べるのだといっているだけ。自分がどうしてここにいるのかすら、少女はわかっていない。

まるで全部を忘れてしまったような……

ゆらりゆらりと、その金色の髪の間で揺れる赤。

この島では見かけないものだが、異国では、よくあんな髪飾りを見かけることがある。

それが視界に妙に印象深くうつり　そこに感じるのは、僅かな血の香り。

「　　そうということ」

微かに見えた力の片鱗と複雑に絡まりあう何か。
力を使いきったかのような男と何かを忘れた少女。
合点がいった。

面白いことになっているわね。

別にどうというつもりもなかったが、これは貸しになる。
この男に貸しを作るとするのは、なかなか面白い。

丁度、退屈していたところだった。

「じゃあ、あなたに用はないわね」

なかなか愉快なことをしてくれたと、少しの感謝が浮かんだ少女に
対して、せめて、優しくそれを放った、
一瞬だけ、驚きの表情を浮かべた幼い妖怪は、音もなくその中へと
吞まれて吹き飛んでいった。

多分、死にはしていない。

荷物の中から包帯と薬を取り出し、身体に治療を施す。

本当は、ちゃんと傷口を洗い流してからのほうが良いのだが、この
雨ではしかたないと、軽く布でふき取り、傷口を固定するだけの
応急処置だ。

「靈力も空っぽで札もなし。こりゃ、ちょっと長引くか。」

治療符の使用も回復の底上げもできない。
本格的な治療は少し休みをとってからだ。

「そんなに強い相手だったの？」

それを興味なさげに見つめながら、先ほど壊してしまったという傘
を小さくたたんで、自分と隣で雨宿りをする命の恩人がいった。

退屈なのか、その残骸をくるくると手遊びしている。
少し残念そうにしているのは、それがお気に入りだったのか。

「ああ、お天道さんを相手にするくらいに」

竹の水筒を取り出し、その中身を口に含みながら答えた。
婉曲した表現だが、それ得的を得ているはずだ。
能力的にも、実力的にも、それほどの格の差があった。

「久々に死にかけましたよ」

嘆息するように呟いて、疲労に震える身体を叱咤する。
その様子に、彼女はくすくすと面白そうに笑った。

笑い事じゃないんだが・・・。

気力も体力も、使えるものは全部使ってしまった。
正直、今すぐ倒れこんでしまいたいほどに疲れている。

まだ、やらなければならないことがあるため、すぐには眠らないが。

「やっ」

包帯と薬を仕舞い、荷物の中身を探った。

爆風や流れ弾の煽りを受けて、少し中身が散らばっているが、袋に記した強化の印が、なんとか作用してくれたらしい。大体のところは無事ですんでいるようだ。

良かった良かった。

これまで失くしてしまっていては、大損どころの話ではなかった。草臥れ儲けではあったが、不幸中の幸いほどには、自分にも運が残っていたらしい。

「大丈夫だったの？」

にこにここと微笑みながら彼女が尋ね

「ああ、大丈夫」

こちらも微笑んで返す。

訪れる妙な沈黙。

どちらも微笑んだままだが、居心地はすこぶる悪い。傷ついた身体には堪える圧力が、辺りに満ちている。

むう……。

それを刷新するためにも、話題を振った。

「ここには偶然に？」

「ええ、瘤に障るのに会ったから、気分直しの散歩をしていたの」

この森の子達にも少し挨拶をね。

そついいながらしゃがみ込み、彼女は足元にあったそれを愛しそう見つめる。

壊れてしまった傘を捨てようとしもないのも、この森を傷つけないようにする配慮なのかもしれない。その姿には、そんな優しさが垣間見えるように思えた。

が

「　　といつても、近くで懐かしい気配を見つけて、そっちにいってみたら」

面白いものを見つけたわ。

そのままの姿勢でこちらに視線を向け、にっこりと、綺麗な笑みを浮かべられる。

その笑みに、なぜか背筋が冷える感覚がするのは、まあ、気のせいだろう。

美しい花のような笑みの・・・はずだ。

そういえば、先に会った時にも、色々と危ない橋を渡っているような気分だった気もする。また同じような感覚・・・一歩踏み間違えれば奈落の底といったような、戦闘中とはまた違う緊迫感が辺りを漂っているような・・・気のせいだろう。そうと思いたい。

「どうしたの？」

笑みを崩さぬままに、尋ねる言葉。

多少、その中に被虐的なものを感じられるのは、きつと勘ぐりすぎだ。

一応、助けしてくれたのだから。

どんな理由があつたにせよ、それに違いはない。助けられたことは確かなのだ。

そう、助けてもらったのだ。

だから、こういうときに使う言葉は決まっている。
それだけは、昔から変わっていない。
それを素直に伝えるだけ。

荷物を後ろに寄せ、正面を向くように、身体の向きを変えた。
そして、相手に真っ直ぐに視線を合わせ、姿勢を正してから、口を
開く。

「ありがとう」

「……?」

言った言葉に、訝しげな顔。

さっきとは、また違う沈黙がその場に流れる。

なんだろう、かねえ……?

どうも、自分がたまに素直な言葉を言うと、皆、こんな顔をするこ
とが多い。

妙な感じになってしまって、なんだかわからない気分で……
……やるせない。

だからこそ、いつも斜めに構えているところもあるのだ　　が、ま
あ、それは置いておいて

「本当に助かった。この礼は必ずする」

深々と頭を下げて、感謝の意を示す。

命の恩人にくらい、素直に礼を伝える。

らしく思われなくとも、それが、数少ない自分の流儀　　ずっと、

届けられずに終わる言葉よりも、その方がずっといい。抱えたまま進むのは……重すぎる。それは、経験で知っている。

と、これこそ柄にもない。

頭を上げて、微妙にずれている思考を立て直す。大分草臥れている分、少し混乱しているらしい。

頭に血が足りてないのかね……。

調子のおかしい意識を落ち着けるように深く息をつき、雨宿りをしている木の幹を背もたれに身体を預けた。少々気を抜けば眠り込んでしまいそうにもなるが、この方が気分は楽になる。

ああ、眠い。

それを首を振って振り払いながら、ふと隣に向くと、不思議そうな顔でこちらを覗き込む姿。

何やら納得できないというように、不満ありげに見つめられている。眠気に濁った思考では、上手く判別できないが、何か文句を言いたそうではある。

「どうかしたか？」

疑問の声に、軽い溜め息。

「相変わらず、よくわからない人間ね……」

小さく呟かれた言葉は、降り続く雨の音にかき消されてよく聞こえ

ない。

ただ、肩を竦めていたので、呆れられていることだけはわかった。先ほどのからのぴりぴりとした圧力も、少し薄れたように感じる。

「なんですかね。おじょ……」

「……うかよ」

む……？

聞き返そうとした言葉を遮られる。

「前にいったでしょう 忘れたの？」

そっぽを向くような形で、視線を他へ向けた。

そのままゆっくりと立ち上がり、弱冠小振りになり始めた雫のほうを見つめる。

その先にある何かを眺めるように いくつかの花畑で見たような姿で。

幻視するのは、辺り一面に咲き誇る彼女の友人たち。

「私が決めた私の名前」

その中心に立つようにして

堂々と、宣誓するように

それは言い放たれる

「四季の花と共に生きる花の妖怪」

自らを誇る言葉として
美しい笑みと共に

「
幽香、よ」

その存在を告げる。

「よく覚えておきなさい」

悠然と言い放った言葉を、男は整然と受け止める。

その目は、どこか遠く　あの時と同じように、何かを思い起こしているようにも見えた。失ってしまった何かを羨むような、何か眩しいものを見ているような……私にはわからない何かを抱えているように

「
ああ、忘れない」

男は、それを呑み下す。

「
良い名前だ」

垣間見えたあの表情は何処かへと消え失せて、温和に、愉しそうに、

緩く笑う。

それでも、前のような軽い調子はどこか薄れていて　　妙に、
むず痒い。

調子が狂うわね・・・。

男の雰囲気に吞まれてしまつて、なんだか毒気を抜かれてしまう。
折角、助けてあげたことを盾にして遊んでやろうと思つていたのに、
そんな気分でもなくなつてしまつた。

前の時といい、今の状況といい、狂わされっぱなしである。

「　ああ、でもすいませんね」

なんだかもやもやとする気分の中、言葉は続く。

「まだ、俺の名前は決まつてないんですよ」

本当にすまなさそうに、男は告げた。

返すものがないと、どうしようかと悩むように口元に手を当てて、
考え込む仕草をする。

恩人に礼を失つてはいけななくても思っているのだろうか。

妖怪相手に対して・・・。

しかも、その相手はこの私。

たとえ、同じ妖怪相手であつたとしても、このような態度をとるもの
など、ほとんどといつてもいいほどにいない。余程の馬鹿か絶対
の自信を持つ実力者くらいだ。大体の者はその前に逃げ出している。
ましてや、こんな人間風情が、まるで私と対等であるかのような態
度で礼儀を示す。

これは、笑い話にもならないほどに可笑しい話だ。

舐められているのか。侮られているのか。

普段なら、そう思っても仕方ないというのに。

「ふむ・・・そうだな」

そうとは思えないのは、あまりにも平然とそれを行っているからだろうか。

当たり前なことだともいうように、男がそのままの自然体でいるからだろうか。

何なのかしらね・・・？

興味がつきない。

愛しい花々以外の対象にこんなことを思うなど、私にとっては本当に稀なことだ。

そんな様子を知ってか知らずか。

何かを思いついた様子で、男がいった。

「なんなら、適当に決めてくれるか」

「は？」

思わずあげた声。

気にせず続けられる問い。

「俺の名前は　なんだと思いますか？」

何気ない様子で、それは尋ねられた。

名前を問う。

それは、自分にとっての儀式のようなものであり、その者との繋がりを認めることだ。

何処かの共有体で、何かしらの関係で、呼び名を決める。呼ばれる名と、呼ぶ名を交換する。

一時の関係なら、それは必要ないだろう。

けれど、それを自分にとって少しでも大切なものだと思えば、記憶に残る存在としての記号を教えあう。固有のものとして、固定された存在としての名詞。

前に八雲のにも聞いたが、結局うやむやになったものだし。

ここで決めておくのも良いだろう。

なんとなくだが、結構な付き合いにもなる気がする。そろそろ、今の名前を決めておいたほうがいい。

「どうして」

ん・・・？

答えを待つ中、まるで睨みつけるような視線をこちらに向けて、彼女は言った。

「あなたは どうしてそれを他人ひとに聞くのかしら」

問う言葉。

責めるように、刺さるように。

それは響く。

堂々と放った自分の名と、その重さの違いを示すようにして

いや、違う。

その言葉には、そんな意味は込められていない。

それは、ただの疑問で、自分に対する質問。

そう感じているのは、自分自身 震源地は、自身の内側。

「 そんな真剣な理由なんてないですよ。 適当に考えてくれれば
いいだけのものです」

まるで誤魔化すように、軽い調子でそういった。

そう、ただの呼び名だ。深い意味はない。

けれど、彼女との会話でそれを否定したのは誰だったか。

「 どうしたの? 」

被った面がずれたのか。

いつもは誤魔化せるはずの態度に、疑問を抱かれる。

それを慌てて否定して、いつも通りの笑みを貼り直す。

疲れているのか？

多分そうだろう。

そんな感覚は、とつくの昔に置いてきたはずだ。

だから、留まらなかつた　一時の場所のみを得てきた、それで、満足だつた。

だから、大丈夫。

約束どおり、生きてられる。

「・・・・・・？」

過ぎつた何かを奥へと仕舞いこんで。

覗き込まれる目を見返した。

「　いや、なんでもないですよ」

少し眠気が襲つてきただけで。

少々増した疲労感を頭をふって振り払いながら、笑みを返す。

まったくの普段通り、変わらない普通に　蓋を戻した。

そんな様子をじっと観察するように眺め、

「そう・・・」

彼女は小さくいった。

そして、何かを考えるような仕草をした後、大分薄くなった雲の下に手を翳した。

ほんの少しの水滴のみがそれに当たって、多分、この雨がもうすぐ止むだろうことを示す。

「私はそろそろいくわ」
もう大丈夫でしょう。

しばらくそうした後、彼女は言った。
それは大丈夫だが、せめた雨が止むまで待たないのかと返すと、にっこりと笑って答える。

「いったでしょう。瘤に障るのに会ったの」
ここにいとまた会っちゃいそうだから。

そういつて、その長い緑髪を小雨にさらしながら、歩いていく。
壊れた傘は、なぜかこちらの荷物の中に突っ込まれていた。

「ああ、そういえば」

そのまま歩き去る前に。
少しだけ振り向いて

「今度は、ちゃんとした貴方の名前を聞かせなさい」

そんな言葉を残して、彼女は進んでいく。
自らの存在を誇るように、悠々と。

それを
なぜか羨ましく思った。

見つけた。

なぜかそれは相当にぼろぼろで、妙に疲れた様子を見せていたが、突然現れた私の姿を見て、なぜか、合点がいったという表情を見せた。

「なるほど、癪に障る・・・ね」

小さく何かを呟いていたように見えたが、小さすぎてよく聞こえない。

けれど、何だか少しいらっとしたので、男の下にいきなり隙間を開いた。

珍しいことに、何の抵抗も出来ずにその中へと落ちていく。どうやら、本当に弱っているらしい。

丁度良いのでそのまま轉移させて、目的地へと場所を移す。

話し合いはこれからだが、これほどに疲れている相手なら、案外簡単にすむかもしれない。

何があつたかはわからないが運がいい。

そう考えて、私は駒を進める。

時間は待つてはくれないのだから。

降り止んだ雨は、吉兆になるのだろうか。

そこに、虹はかかっていなかった。

針が揺れて、言葉が返る（後書き）

珍しく、ペースが狂う。（作者・主人公共）
吉兆か、凶兆か。

とりあえず

一幕終わり、舞台裏では何かが進む。

そんな感じで。

ご感想、ご批評お待ちしております。
読了ありがとうございます。

過去を根ざして、今を知る（前書き）

ちよつと違和感があるかもしれません。
おかしいところがあればご指摘ください。

過去を根ざして、今を知る

「さてさて、と」

新しい薬と包帯を用意し、それらを手の届く位置に並べる。

傷薬や火傷に効く湿布薬。これらは、先ほど村の医家で買い求めたものだが、このような田舎に存在するものとしては、なかなか品質が良い。処方してくれた薬師の手際も見事なものだった。

まあ、ある意味では、それはこの村では、傷を負うものが多いという反面もあるのだろうけれど……今回は都合が良いというもの。

この傷じゃ、薬草集めもきつい。

着物をはだけさせ、傷が外気に触れた瞬間に、体中に軽い疼きが走って思わず身震いしてしまう。中でも、包帯を取り外した後の右腕はなかなかのものだ。

全治……一月半、くらいか。

至るところにある火傷自体はそれほどのものではない。痛みは感じる分、その熱が神経までは達していないことが理解できる。よく寝て、気力と体力を回復させれば、自分の今の回復力なら十分に自然治癒が可能だろう。無理させなければいい。

けれど、この右腕……爆発の衝撃に一番近い位置だった右手首の方は、骨の方にまで異常をきたしている。折れているほどではないが、ヒビが入っていることは確実。回復に時間はかかるのは当然、直った痕もある程度の慣らしが必要となるだろう。

流石に無茶だったかね・・・？

腕の骨が正位置を外れないように固定し、包帯でぐるぐる巻きにしながら考える。

攻撃を避けるためとはいえ、伸ばした右腕の先で札を爆発させたのは不味かったかもしれない。その衝撃と勢いによって窮地を脱せたとはいえ、ただでさえ、質の悪い札で加減が効かない状況であったのだ。一歩間違えば、右腕を失うか、かなりの間悩ませられることになる後遺症を背負うことになっていたかもしれない。

流石に、緩んでたかねえ・・・。

包帯を巻き終えた右腕。それと身体全体に負った傷を感じながら思う。

全盛期の自分なら　せめて昔の力を持てていれば、もう少しやりようがあった。

正面からのやりようはないまでも、逃げ切ることぐらいは・・・。
・運任せではない、真正面からの不意打ちくらいは出来ていたはずなのだ。この数百年　いや、千年以上の時間の間に、すっかり錆びついてしまった。こと、戦闘に関しては、過去の積み上げでなんとかもっているようなものだ。
ぬるま湯に浸かり、平和な日常の時間を過ごしすぎた。

いや、まあ、それは結構なことなんだが・・・。

昔出来ていたことができないせいで後悔をする。怠けていたせいで、死を迎えるというのは、なんともなしに格好の悪いことだろう。なかなか小物的な死に様だ。

らしいといえはらしいし、自分一人のことならば、それはそれで納得がいくのだが、あいにく、この力と技術は自分一人のものではない。借りてきた看板に傷をつけるわけにはいかない。足掻くのならば、全力を使い切つて敗れる。でなければ、顔向けどころか、向こうにいつてから怒鳴り殺されるのが落ちだ。

そいつは御免ですからね。

そのまま死んでいたらまだしも、今はそれを考える時間が出来てしまったのだ。どうせ暇なら、やっておかなければ後悔する。それがあることは知っているのだ。後顧の……死後の憂いなどは払っておきたい。

「つと、こんなもんか」

身体全体に薬を染ました包帯を巻きつけて、打ち身や火傷に湿布を張って固定した。右腕はあまり動かさない方がいいので、一応肩からたらしした布で釣っておく。

これで大体の治療は終了。

治療符などの使用は、もう少し力が回復してからのことになる。

あまり急ぐことはないだろう。少しゆっくり療養してから……

こんなことを考えているから腕が錆びていくのだ、そんな思考は封印しておくこととする。

年寄りには気が長いところがいいところなのだ。

老人治療中……

といったところであった。
先ほどまで

そして現在。

「おお、兄ちゃん！傷の具合はどうだい？」
「おかげ様で」

包帯塗れの腕を晒しながらも、その言葉に笑って「大丈夫だと」答える。
声をかけてくれた中年の男性は、今手入れをしていた畑の耕作を止め、多少心配そうにもしながらも、良かったと笑って返してくれる。

いい御仁だねえ……。

村の入り口に放り出された自分に一晩の宿を貸してくれ、必要だと

いったら医家まで足を運んで薬を調達してきてくれもした。実に親切な御仁である。

「どうも、ご心配おかけしまして」

「いやいや、元気になつてなによりだ」

礼をいうこちらに「気にすんな！」と豪快に返される。ばんばんと肩を叩くおまけつき。その力強い腕によって視界が揺らされて正直、傷に障って痛い。

「ちょ、ちよつと……」

落ち着いて……、と言おうとするが、その豪快な態度を伴ってか全く聴こえていない。

叩き続けられる肩、揺れる視界。

「いやいや、兄ちゃんもあれだろう。ここらは妖怪も多いから、それに襲われたかなんかだろう。いいっていいって気にすんな！困ったときはお互い様よお！」

「いや、あの、ちょ……」

打たれる衝撃と込み上げる痛みによって声はか細いままにかき消される。

声が届かない。聞いていない。

「いやいや、あれだろう！最近の妖怪にやあ色っぺえのが多いから、それに気いとられて逃げ遅れたとかそんな感じだろう。なあに、俺だつて若い頃はこつそり覗きなんかしようとしてよくボロボロにされたもんだ！若いときの無茶は買ってでもしろってねえ…….いいさ、それが若さつてことだ！」

「……あの……おい……」

勢いのままに続けられる話に「一緒にするな」だとか「あんたより随分と年上だ。こっちは」だとか言い返したい。けれど、なぜかこの中年親父の合間合間に挟む肩叩きはこちらの負傷部位を狙うように的確に打ち出され、いちいち動きを止めてくる。

「いいっていいって気にすんな！」

ドンツと響く衝撃。

その恐ろしく太い腕は本当に農作のみで鍛えたものなのか？
何かの達人か何かじゃないのか？

妙に身体の芯まで響く衝撃に、そんな考えが浮かぶ。
それほどに、素人とは思えない。悪意があるのではないかというくらいに的確さで急所を突いてくる。
傷口が開かない程度なのが絶妙だ。怒るに怒れない。

「ああそついや、森の妖怪といやあ」

そうして、こちらが動けない状態を作り出してから、強制的に話を続ける。

悪意のない世間話だが、それでも、たちが悪いことには変わりない。言い返す間を与えてくれない。

こういう人間は苦手だ……。

噛み合わせが悪い。

つつつい、相手の空気に吞まれてしまう。

これは、ずっと昔からだ。

といつても・・・

ずっと話を聞いているわけにはいかない。

この肩に置かれた手もそろそろ止めてもらいたい。

傷の治りが遅れるのは御免だ。

そういう意志を結集して、萎えかけた気持ちを奮い立たせ、言葉を放つ。

「すいま・・・」

「あなた・・・？」

寸前に、その厳つい親父さんの後ろに細身の女性が現れる。

ん・・・？

少しの疑問。

姿勢好自体はその辺りの農民の女性と変わらないが、その細い腕や白い肌は、こんな肌を陽に晒すことの多い農作地の中ではなかなか珍しいものだ。その仕草、上品な歩き方といい、多分、きちんとした着物を着て、かるく紅でも挿せば、そこらの貴族の娘と比べても遜色はない。

それくらい、場違いな女性。

「おお、おそとか」

その後ろに現れた女性に、親しそうに近づくと野太い男。

「あなた 何をしているんですか？」

「いやー。昨日拾った兄ちゃんが元気になったみたいですよ」
良かった良かった。

そういつて再び笑う親父さん。

「それは良かった」と上品に笑う女性。

なかなか妙ちくりんな立ち絵だが、互いの呼び方からして・・・
・あれは夫婦なのだろうか。

子女をさらった山賊、というようにも見えなくはない。いや、どちらかというところで見ってしまう者の方が多いだろう。

まあ、ある意味、そのチグハグ具合が丁度いい釣り合いになっているようにも思えるが。

ありゃあ、奥さん苦労しているだろうな・・・。

思わずそう感じてしまう。

豪放磊落な夫と上品で小綺麗な奥さん。

そりゃしんど・・・

「で、お仕事は？」

その言葉と共に、その親父さんの巨体がぐるりと回転した。

「・・・・・・・・・・っ!」

その場で宙返りしようとして失敗したような形で、自分から跳んだような感覚で背中を打ちつけた。下はある程度耕された土壌の上であつたのでそれほど痛手は受けていないようだが、何の予備動作もなく投げられた親父さんは、あまりの驚きにはくぱくと口を開け

閉めた後、すーっと青くなった。

「い、いや違うんだ、おそと・・・ただおりゃあ兄ちゃんのことを嬉しくて」

「・・・で、それが仕事をさぼった理由になるのかしら？ ああ、旅人さん？なのかしらね。この人が迷惑かけてごめんなさい」
怪我人に向けて、あんな態度とつちやいけないわよねえ。

にこにこ笑いながら、こちらにぺこりと頭を下げる けれど、確かに見たのだ。この女性が男を軽く投げ飛ばす様を・・・あれは美しい、完成された投げ技だった。自分から見ても、なかなかの達人技だ。

「い、いや、すまなかつたな兄ちゃん・・・お、おれは仕事をしなけりゃいけねえから、これで」

おそとさんが、ぱんつと手を叩いた瞬間に立ち上がり、すぐさま鍬を構える親父さん。

多少声を震わせながらも、なんとか引きつった笑顔を浮かべている。情けないが・・・仕方ない。

いい終わった後、すごい速さで畑を耕し始めた・・・仕方ないだろう、うん。

「い、いえ、ありがとうございました」

その背中に向けて、一応聞こえる様に礼を言っておいた。聞こえていないようだったが・・・忙しそうなので仕方ない。

ということ、くるりと背中を向けて、そこを歩き去ろうとする・・・

「あ、旅人さん」
「はい？」

穏やかに笑いながら、こちらを呼び止める女性。

先ほどまでの親父さんに向けていたような圧力はすっかり霧散しているが、少し引いて構えてしまう……。あの花の妖怪の笑みとはまた違う、妙な迫力を感じるのはなぜだろうか。

こういうのを、旦那を持った女の強さというのだろうか。

「身体はもうすっかりいいので？」

優美な仕草で髪に手櫛をさし、こちらを観察するように眺めながら問う。

その立ち振る舞いは、素人というには余りにも隙がなく、堂々としたもの。

確実に、何かの武術を齧っている。

「ええ、歩き回るに障りはありません」

一応、油断せぬようにしながら答えた。

妙に丁寧に、居住まいを正したものとなったのは、気持ちの表れである。勿論、助けてもらったことへの感謝の念。

恩人にはちゃんと礼をする。

それが自分の流儀だ。それは嘘ではない。

「それは良かった」

口元に手を当てて微笑む女性。

その優美な仕草からは、先ほどまでのやり取りなどまるでなかった

ようである。

けれど、その後ろの方では、ものすごい勢いで鋤を振り、鋤を振り回す親父さんの姿。

そこは畑じゃありませんよ……。

新たに開墾されていく土地に、生暖かい目を向けながら、そんなことを思った。

というか、なぜ彼は二刀流なのだろう。なぜ、そんな追い詰められた眼をしているのだろう。

ここにことしたきれいな笑顔からは、どうにも逃げられそうにない。

「ええ、そうですか」

ありがとう、と軽く礼を言って、挨拶もそこそこに歩き出した。

どうやら、ここも外れだったらしい。

少し気落ちした気分を抱え、額にかかる汗を拭った。

かんかんに照る太陽の日差しに目を向けると、雲ひとつもない快晴。まだまだ半ばにさしかかったばかりの暑さに、思わず思い息を漏らす。

日傘でも持ってくれば良かった……。

使用人が持たせてくれた水筒の中身を口にうつすも、すっかり温くなってしまっているそれでは、あまりのどが潤ったようには感じない。むしろ、身体の中に熱を取り込んで、さらに体温を上げてしまふような気すらしてくる。

「うむむ・・・」

少し早まったかな。

いくら拭いても収まることのない汗をうつとおしく思いながら、数刻前の自分の行動を後悔した。いくら経験があるとはいえ、自分の身体はまだまだ幼いもので、あまり運動には向かないことは重々承知していたはずなのに・・・。

これでは、使用人たちに笑われようともし方ない。自分で自分の世話ができないのなら、まだまだ一人前とは呼べないものだろう。

といつても、わざわざ付いてきてもらうのも・・・。

気恥ずかしい。

どうせなら、誰かを使いに行って探してきてもらえば良かったかもしれない。

いや、それもあまりいい気持ちではないが、こんなところでへたり込んでいるところを見られるよりはましといったもの。

わざわざ無理をいって外に出たっていうのに、これでは本当に背伸びした子どもみたい・・・

力ない笑みが浮かぶ。

これで屋敷に担ぎ込まれるなんてことになれば、誰にも顔向けできなくなってしまう。

せめて、もう少し休んだら、近くの茶屋でお茶でも貰って休憩しよう。そうすれば、屋敷に帰るくらいは大丈夫なはずだ。

「よし！」

力強く拳を握りこみ、立ち上がるうとした。

「どうかしたんですかね？お嬢さん」

「ひゃっ！」

その瞬間に声をかけられた。

思わず声を上げて狼狽してしまう。

「む・・・？ああ、驚かせたか
すまない。」

そういつて謝る男の声。
見上げると、そこには

「で、こんなところでどうかしましたか？
お嬢さん。」

緩く笑う私の知らない男が立っていた。

「ええ、ですから。あなたが襲われたという妖怪の話聞きに来たのですが」

「ふむ、なるほど」

茶店の前に置かれた縁台に座りながら、温いお茶に舌鼓を打った。暑い日差しの中ではあるが、野点傘の作る影の下では、それもまた美味しく感じられる不思議がある。これが趣を知ることなのだろう。

あの奥さん　おそさんの案内で、法師や術者による一応の取調べを受けていた間、何も飲んでいなかった分もある。妖怪が多いのなら当然の備えでもあるのだろうが、少々肩が苦しく思えた。よそ者にしては、案外軽い尋問ですんだものだが……。

ああいうのは御免だ。

身体をほぐすように伸びをした。

隣に座る少女も、ゆっくりとお茶をすすり、その姿形よりも大人びた様子の落ちつきを見せている。着物といい、髪飾りといい、何処かしらの格式ある家の子女か何かなのかもしれない。よく躰けられていると感じられる。

しかし……

少し気になるのが、不思議そうにこちらの様子をちらちらと伺っている視線　何やら違和感を感じているような表情だ。まるで、何か腑に落ちないことがあるというように首を傾げてはこちらを観察

している。
そして

何だ・・・？

自分も似たような感覚。妙な違和感を感じている。

この少女には会ったことがないはずだ。けれど、何処か……..
僅かにだが、記憶の中で何かが疼いている。

これは……

「懐かしい、のか？」

ぼつりと呟いた言葉。

確信ではないが、それが一番しっくりくる言葉である。

その容姿には見覚えが無いにも関わらず、何処か、この少女に懐かしさを感じてしまっている。誰かに似ているというのではなく、その本人として。

それが聞こえたのかどうか。

少女は、こちらにはつきりと視線を向けて、思い切るように一息ついてから言葉を発した。

「あの」

小さな少女。まだ、十代に入ったところかそれくらいの年齢だろう。少し言葉が安定しないのは身体が成長しきっていないからか、わずかに舌足らずなところがある。けれど、その言葉遣いは

「もし間違っていたらすみませんが、一つ質問を宜しいでしょうか？」

妙に洗練されているように思えた。

その雰囲気、空気といったものも、同じ歳の少女とは少し違って感じられる。

ふむ……。

気配は、人間にしか思えない。

けれど、長く生きた妖怪のように、どこか浮世離れしているようにも ほんの僅かにだが 自分に似ているようにも、そう思えた。知識としてではなく、感覚として……何かを感じる。

頷くこちらに少女は、もう一度息を吐く。

緊張しているというよりも、何かを迷っているような素振りだ。

自分でもその感覚を信じきれず困惑している感じで。

それでも、それを振り払い

「あなたは」

躊躇うように言葉を区切って

「私の前世を知っていますね」

そう言った。

半信半疑、というものではない。ほとんど確信しているといったものの。

その言葉は、この感覚の核心で 自分の中にもストーンと落ちた。

なるほど・・・

知識として知っている。

そういう記録も確認したことがある。

転生、記憶の継承。

前世の記憶、魂継ぎ。

生まれ変わり。

先の自分へと何かを残す方法。

いずれのものかは判らない。

けれど、この少女がそれに関係する何かを行った人間であることは確かだ。

少なくとも、自分の感覚がそれを証明している。

前に・・・違う姿で出会ったことがある、と。

それも、ちゃんとした会話を、印象に残るほどの話をした。

それが、この違和感の根っこ 懐かしさの正体。

思い出せはしていないが、感じる事ができている。

「 確かに、長生きしてますが・・・」

記憶を探り、少女の面影を探る。

肉体に刻まれずとも判るかもしれない、想い出の中の一幕

「貴女のお名前は？」

確信に至るための鍵。

「失礼しました」

少女は、顔を上げ、真っ直ぐにこちらを見た。

居住まいを正し、自らの負った荷 任を誇りとして語る。

「稗田阿未 今世の幻想郷縁起の編纂を担う者です」

見知らぬ少女と、初対面の再会。

古き記憶は薄れて消える。

古き記録は崩れて消える。

けれど

それを継ぐものがいるのなら

それを写すものがいるのなら

その意志が失われることはない。

その意味が失くなることはない。

心を受け継ぐものがいる限り
それは繋がり、積み重なる。

人の歴史として

また

新しき印を刻む。

過去を根ざして、今を知る（後書き）

少々間話ぎみ。

落とされた場所での初対面の再会。

ご感想、ご批評お待ちしております。

理由を囁き、答えを探す（前書き）

少し難産。

理由があるとはいえ、少し『らしくない』かもしれない。かもしれません。あまり酷いようなら『指摘ください』。

理由を嘯き、答えを探す

数え切れない魑魅魍魎で溢れ、人知を超える妖怪亡者が跋扈する。何が起きてても不思議ではなく、何が存在してもおかしくはない。それが当然で、当たり前前とされる。現実とは思えない現実と出会う場所。

ある人は、地獄に繋がっているのだといった。ある者は、別世界への入り口なのだといった。古き妖怪が生まれ育った地だと、力を失った神々が隠れ住む場所だと、

誰も帰ってこない。

誰も知らない。

何があるのかすら、忘れられた場所。

そして

時折、その地に命を捨てに行く者がいる。

誰かが噂した。

行く先のなき者達の桃源郷があるのだという『幻想』を抱いて

唯一つの希望を目指す。

嘘か真か。

鬼か蛇か。

語られるのは、風に瞬く噂のみ。

「記録、か」

「代々、私自身が受け持つ役割です」

そのための閻魔との交渉も済ませました。

注がれた茶を啜り、慣れた様子で話す少女。

転生の方法。

受け継ぐ役割。

その能力。

同一人物ということ代々という言葉には少しの違和感も感じるが、まあ、ある意味では正しいのだろう。記録を残し、それを受け継ぐ・
・その由来と歴史を知れば、なんとなくだが納得いくものもある。

違和感、というより既視感に近いのか・・・。

知っているのに知らない。わからないのにわかる。

おかしい感覚だが、それで正しい。

同じところと違うところがある。向こうも似たような感覚だろう。

にしても・・・

「幻想郷・・・ね」

「ええ、そう呼ばれています」

隣に置かれた団子を齧りながら、「ふむ」と小さく呟いた。

こんな閉鎖された土地にあるものとしては、なかなか美味しく出来ている。それとも、閉鎖されたからこそ独自の進化を遂げているのか。

「化け物　妖怪がいるのが当然としている、か」

退治され、被い清められるのが常識である妖怪。

時に、人間との友好的関係を築くものや人の中に混ざりながら生きるものもいるが、ほとんどのところ、それは決して表に出るものではない。日常の裏、ひっそりと、薄く隠れ住むように生きるのが当然……もし、表に出れば、良きにしろ悪しきにしろ、ただではすまない。それが、妖怪として生まれたということ。そう生み出された存在。

生まれた由縁。妖怪としての定義……。

しかし、それを判断するのも、また人間であり、人間の常識は往々として変わる。

その方が都合が良いのなら、いくらでも上書きされる。

その場所には、その場所なりの常識が生まれる。

なかなか面白そうな土地ではある……。

お代わりしたお茶を啜りながら、疼く好奇の虫に、口端を持ち上げる。

まさか、ここまで続くものとなっているとは、そんな予想もしてい

なかった事実が、余計に面白い。

「縁は異なるものですねえ……」

「何かいいましたか？」

ぼそりと呟いた言葉に、少女が首をかしげた。

それに微笑み返ししながら、くるりと、団子のなくなった串を指先で回してみせる。

「いえ、人の縁ってのは不思議なもんだとね」

少女は、自分との出会いを指しているのだ理解したのか、納得したように頷いた。

そう、それも一つだ。

くるくると回る木製の棒。

この棒一つをとっても、長き間を経てきた木々を、人が重ねた技術により加工して、今の形に至るまでの時間の鍛錬を乗り越えて、今自分の手へと至っている。

それは、一つの奇跡に違いなく。当たり前前に存在する無数の軌跡の中の一つに過ぎない。

たとえそれが、偶然の再会であり、ほとんどありえないはずのことであろうとも　この世界を見れば、実はそこら中で、当たり前にいくらかでも起こっている何の変哲も無い出来事の一つなのかもしれない。

それでも

「で、その幻想郷縁起っていうのは……」

「ああ、それはですね……」

当人にとっては奇跡であることには違いない。

この地で書を刻む。

生きるすべてを書き留める少女との出会いも、またそういうもの。たとえ何億年の時を経ようとも、それが驚き、嬉しいものである。心から笑ってしまうほどに。

過去から受け継いだ記憶と書き記された記憶。

残る想い出と、記録から得た微かな残滓。

どうやら、覚えている部分と覚えていない部分があるらしい。

書から読み取った知識だけでは、実感がないのだろう。

知らぬこと、わからぬこと。

問答は果てなく続く。

「なるほど、あなたはずっと……」
生きていた。

薄い記憶。

おぼろげに感じる懐かしさ……のようなもの。

真実、転生といっても、私自身の全てが受け継がれるわけではない。確実に受け継がれるのは、その役割と能力、一部の幻想郷縁起に関するもののみであり、あとは、あまり覚えていないのといったのが実のところ。前世に出会ったことがあるといっても、その人間を確実に覚えているとはいえない……。そもそも、私が転生する間隔自体が百年を越すものであり、そのころには、旧知の人物などすでに亡くなってしまっているはずだ。

その子孫と出会えたとしても、記憶の中の実物と出会えることなどない。

会えて妖怪や化生のもの、それも大分稀なことだ。

それが……

「人間……。なんですよね？」

「まあ、多少長生きしているがね」

一応、種別としては人間ですよ。

そういつてからからと笑う男性。

それだけを見ていれば、本当にただの人間に過ぎない。周りの者と変わらない……。少し妙な感じのする男性だというくらいだ。

けれど、自分の感覚　そして、男に問うた記録と照らし合わせてみても、それが事実であるということは揺るがない。確かに……。確かに前の私が生きていた時に、この男は生きていたのだ。旧知の、人間なのだ。

可笑しな話……。忘れない能力を持つ私が、思い出せない人がいるなんて……

あまり経験したことのない感覚に、なんだがむず痒くなる。人相手にこんな思いをするなんて、思っても見なかった。

「何かおかしいことでも？」

微笑む私に、男が問う。

生きた時間を感じさせない飄々とした態度で、軽い口調で

それに向かって「いいえ」と笑い返しながら、また次の問いを重ねる。

長い時間を生きて、私よりもそれに詳しい人物など、本当に珍しいもの。

できるだけ、色々なことを聞いておきたい。これは、私が初代から持ち続ける欲求の一つ。『知りたい』という気持ち。

それに・・・

なんだが、楽しい。

誰とも共有できなかったものを、誰かに共感してもらえるとということが。

わからないことをわかってくれるのが……………。

まるで

親、年長者に甘える子どものようなようだ。

まあ、この場合は友人と昔懐かしむ老人の感覚なのかもしれないが……………今は子どもで、転生前を合わせたって私の方がずっと年下。見た目以上に差は歴然。

なら、少しくらいならいいでしょう。

なんとなく、自分にそう言い訳して、自分の聞きたいことばかりを聞く。

その気分は、なんだか懐かしくて　初めての感触だった。
年上に、大人に寄りかかる子ども。

もしかしたら、昔の私もこんなふうに感じたのかもしれない。
そんな気がする。

子ども扱いされても仕方ない。
素直に思ってしまうのだから。

「ふー」

稗田の少女を家まで送り届け、宿を貸すとい誘いを丁寧に断ってから村を出た。

そして現在は、それからしばらく歩いた先の草原の上で、のんびりと寝転がっている。
すっかり真っ黒になった空には、数え切れないほどの星と、僅かに欠けた月の姿。

中身が残り少ない荷を枕にして、大きく息を吐いた

稗田の少女には、まだまだ聞きたいことがあったのだろう。少し残

念そつな顔をしていた。また、機会があれば尋ねてみようと思つ。編纂しているという資料もなかなか面白そつなものであつたし、見せてもらいにいくのも良いかもしれない。

つらつらとこの先のことを考えながら　それを待つ。

ぱきりと音を立てて、炎の中の薪が折れ、崩れ落ちた。

半身を起き上がらせて、隣に置いておいた幾本かの木棒を放り込む。

そろそろか。

その炎　焚き火にかけていた鍋を見て、そう思った。

荷の中から木杓を取り出して、大分古ぼけた器の中へと少量を注いで口に含んだ。

ふむ・・・こんなもんだらう。

その味に納得をし、もう一つの器へとその中身を注ぐ。

夜の草原に上がる白い煙と湯気。

ぐつぐつと、薄く透き通つた香りを漂わせるそれを　ずっと、どこからか急に現れた手が受け取つた。

「　温かい内にお召し上がりくださいよ」

「　ええ、ありがたく頂戴いたしますわ」

予定調和の流れの中にいるように、向かいにある石の上に腰を下ろし、特製薬湯に口をつける女性。金色の髪と紫色の衣装に身を包む、妖怪の少女。

こちらと同じように座りなおし、自分の分の器にそれを注ぐ。

そして、一杯分の時間、互いに黙ったまままで過ごした。

夜の風を楽しむように目を細め、遠くには、人里の明かりが微かに見える。妖怪を警戒しているのだろう。不寝番の者は気の毒だが、重要なことだ。

いくら理由があつたとしても、妖怪相手に理屈が通じるとは限らない。

生きるため、守るため……。

人が生きるための工夫。生き残るための努力。

自分たちの出来るだけのことをしているのだと思う。
良い里なのだと思う。

けれど

「あの村は、なぜ残れているんだろうな。八雲の」

それが、あの村が存在していられる理由にはならない。

記憶の中。

浮かぶのは、あの時出会った法師と獣の妖怪。変り種の土地。
交わされた約束は確かでも、それが永劫続くはずが無い。

こんな場所に存在する人里が、滅びることなく存続し続ける可能性
など、限りなく零に近いものでしかない。

それなのに

「あのときの面影を残したまま 受け継いだままに存在し続けて

いる」

それはおかしいことだ。

誰かの 何か規格外の理由でもなければ、それができるはずがない。

まるで、あの村を存続させ続けるための別の意志が働いたような

誰かがそれを望んだような 人間だけの手では実現できないものが存在している。

「・・・・・・・・」

紫の妖怪は、口を閉じたまま、僅かに目を細める。

そして、何かを思い起こすように、辺りを・・・・・・・・人里だけではなく。辺りの山や森、草原や河川を見回して、小さく息をついた。通り抜けた風は少し生温く、周りの枝葉をざわざわと揺らす。

「 あなたはどう思ったの? 」

この世界を。

試すような声音。

細められた眼はこちらを見透かすように、けれど、どこか不安げな光を放ちつつ、まっすぐに向けられた。強いるように、縋るような視線は揺れる。

まるで、人間のような弱さと強さを込めての問い。

「 変わり者の集まり・・・・・・・・かな? 」

一寸、吞まれそうになった視線を外し、人里の方を見る。

「天然で靈力を扱うや西洋かぶれの実験三昧学者……妙な
能力持ちや妖怪相手に素手で挑もうとする武術家に、ずっと念仏を
唱えてる兵法家」

二刀流を使いこなす農夫に達人級の奥方。
転生し続ける少女。新たな味をがむしゃらに研究し続ける甘味ど
ころ。

一日里を歩き回るだけで、それほどの人間を目撃した。
皆が皆、おかしな者ばかり、わけがわからないままに絡まれたり、
怒鳴りつけられたり、巻き込まれたり　そして、その隣で普通の、
一般の人々が笑いながらそれを見ている。
当たり前のこととして、受け入れている。

妙なこと。

おかしなことだ。

「可笑しな所だ」

笑ってしまうほどに。

「悪くない場所だと思いますよ」

込み上げる気分、思わず笑みがこぼれる。
それほどに、楽しい場所だった。

「そう」

少し安心したような顔で、彼女も笑う。
間違っていなかったと、何かにほっとしたように。

器を傾け、一口含む。

「で、何で俺をここに？」

再び、聞きたいことを問う。

それが一番気になること。

なぜ、それを見せたかったのか。

「自分の作ったものを自慢したかったにしては……少し強引じゃないですかね？」

空になった器を、伸ばした人差し指の上でくるくると回す。

あの時。

稗田の少女の話を聞いたとき。

その初代が会ったという、妖怪の話を聞いた。

幻想郷の歴史と共に、その成り立ちと関わるといふ妖怪の話を聞いたのだ。

十中八九、それはこの妖怪『八雲紫』。

長い付き合いのある、神出鬼没の友人。

「全て、私が作ったわけじゃないわ」

ただ手伝っただけ。きっかけはあなた。

深く息をついて、空を見上げる少女。

金色の髪揺れて、月明が返る。

語るのは、とある気まぐれから始まった戯れの計画。
何処かの老人の無責任から始まった場所に、続きを書き足す妖怪の
話。

それは

新たな妖怪が現れる度に、それに仕掛けを施した。
人がいなくならないように、適当な噂を流した。
本当に危険なときに、僅かに手を貸した。
自衛の力を得させるために、知識を供給した。

誰かを導いたり

何かを招きこんだり

ほんの少し手を貸した。

気ままに手を貸した。

気まぐれで

悪戯のようなもので

ただ、少し興味があっただけ。

それが

いつの間にか大きく育っていた。
大きな場所を占めていた。

一つの可能性を生んでいた。

それだけの話。

男はそれを黙って聞いていた。

「ただ、それだけの話よ」

一息に話し終えたので、少し喉が痛くなってしまった。
器に残った分を飲み干し、息をつく。

それが、この場所が出来た始まり……………。

まだ、肝心なところは語っていない。
けれど、この場所に関することはこの程度。少しは手を入れたとは
いえ、ほとんど勝手にこの土地は成ったのだ。

そういう人間や妖怪……………変わりものが集まる。そんな由縁
があるのかもしれない。

私も、この男も、偶然訪れて、そのきっかけを与えていったのだから

「……………」

男は、何かを考えるように目を細め、視線を下に向ける。

自分の器をくるくると回しているのは、何かに集中するための手遊
びのようなものか。

一本の指の上で器用に器が回転する あれは昔私が渡したもの。
勿論、自分の手にある同型のもの。

本当に変わってるわね。

その付き合いが始まってから、もう何百年以上の時間が過ぎている。それでも男は、私とのほんの時折の邂逅のために、古びたそれを保管し続け、前触れも無く現れる私に食事や飲み物を振舞い、話し相手となってくれる。

人間どころか、妖怪にさえ、恐れられ、疎まれる私を相手にして。

変わり者といわれる私としても、そんなおかしな存在はない。何百年も、何千年もずっと、人間のまま。飄々と、恐れぬままに。

妖怪と付き合い続ける人間の男。
これほどの変わり者もそうはいない。

「で、ここに呼んだ理由は？」

前と同じ問い。

緩い調子で、変わらぬ調子での再びの問い。

少しは動揺してくれてもいいのに……。

確かに、私が語ったものはその理由にはならない。

それは、ただのきっかけで、始まりの経緯。今のこの状況とは関係が無い。

それでも、自分の気まぐれがきつかけとなったものが、ここまで大きくなっていたことに対して、少しは揺れてくれてもいいだろうに。

慣れているのか、面の皮が厚いのか。

こんなこと考えている場合じゃないのだけどね……。

男の雰囲気か。かもし出す空気か。

どうにも、真剣になれない。どこか緩んで、たわんでしまう。

けれど、それを無理やりにも締めなおす。

ここからが、正念場なのだ。

「それは」

引き込んだ理由。

そうした目的。

「あることの手伝いをしてほしいの」

「手伝い？」

眉を顰める男。

それはそうだろう。

今まで、巻き込んだことがあっても、何かを頼むことはなかった。

迷惑をかけるだけかけておいて、謝ることも悪いと思うこともなかった。

そんな私が、事前にこんなことをいつている。

それだけでもおかしいことだ。

「あなたに手を貸してほしい」

もう一度。

男の目を真つ直ぐと見つめて

「この場所を、偶然のものでない……必然の存在とするために」

力を貸してほしい。

そういった。

「 どうして？」

その声に少しの揺らぎを見せながら、男は、静かに問う。

いつになく……今までにない真剣な言葉に戸惑っているのか。疑っているのか。

無理もない。興味本位で動き回り、様々な場所で暗躍し、裏で薄笑いを浮かべながら悪戯を楽しむ。神出鬼没で底の知れない……それが自分の立ち位置であつたはず。

それが、何かを守ろうとしている。

何かに執着を見せている。

自分でもそれがおかしい。

それでも

「 居場所をつくるため」

私はそれを望む。

似合わずとも

見失っても

「私たちのような存在の……安らげる場所を作るため」

その願いを叶えるために、何を捨てても構わない。

「いいですよ」

軽い調子でそう答えた。

「え？」

あっけらかんと答えた言葉に、口をあけて固まる相手。

「まあ、そういう理由ならやぶさかじゃない」

悪戯だったり、極悪な犯罪だったりしたらごめんですがね。

口端を持ち上げて、焚き火に薪を足しながらいった。

八雲のはまだ固まったまま動かない。

どうせ、怪我が治るまで動けないですしね。

「しばらくこの辺りに拠点でも構えますか」

いいながら、薬湯を自分の器に入れなおし、八雲の分も注ぎなおす。そろそろ腰を落ち着けようかとも思っていたし、この土地もなかなか面白そうだ。各地で集めた術や技法を使って実験や研究をするのもいいし、様々な書や話から得た知識を整理し、書き留めておくのもいい。幸い、あの稗田の少女との協力も取り付けられそうだし、互いに利にもなるだろう。

あれだけの^{おお}大戦の後だ。少しのんびりするのもいい。

この先どうするかを考えながら、器を傾ける……久しぶりに酒類を作るのもいいかもしれない。確か、里には酒屋もあったはずだ。

「えっと……」

まだ混乱から抜けきれない様子で、首を傾げる八雲。

先ほどまでとは違う、また珍しい姿を見せていて、なかなか面白い

「……いいの？」

毒気の抜けた表情での言葉は、その容姿のためか妙に幼く感じるものだった。

思わず笑ってしまって、そっぱを向いて鼻を鳴らされる。

まだまだ若いねえ……。

それにさらにけらけらと笑いながら、答えを返す。

「まあ、しばらくは」

無然とした相手に軽く謝りながら、薬湯を注ぎなおした器を渡す……受け取った顔が軽く赤く見えるのは、不覚を取ったという羞恥心からだろうか。長い付き合いの相手の知らない表情を見るのはなかなか楽しいものだ。

若者をからかうのは年寄りの楽しみですしね。

それを気づかれたのか。こほん、という咳払いと共に、いつもの調子に戻る八雲。

器を抱えなおして、そっぱを向いたままに言う。

「全部は聞かないのね」

「いいたいなら聞くが、ね？」

互いに薬湯を啜りながら、黙り込んだ。

まあ、無理して聞くこともない。

多分、八雲が語ったのは表の、それが全てではない理由。きっと、その大元にはもっと自分の益となる即物的な理由がある。そうでなければ、周りの、自分以外のもののためとなるようなことはしない。

自分一人の、それだけの居場所が作れば十分で、わざわざ、興味のない存在すら守ろうとなんてすることはない。そこは、人間だっ

て妖怪だつて同じところだろう。

それなりの理由がある。

何かのために・・・何かを得るために、必要なことをしているのだ。

ただ、それでも。

気まぐれでも何でも、助かる者もいる。

あの里を守っていたことは確かだ　それは自分が発端となった続きでもあるのだ。

それに

頼まれた。

長年の友人に頼まれたのだ。

それだけで、それなりの理由にはなる。

老人として、若者に頼まれるのは嬉しいことだ。

「したくないことはしないし、好きなときに出て行く　それでいいなら、猫の手分ぐらいには力を貸しますよ」
保障はしませんかね。

だから、そういつて軽い調子で笑う。

正直、興味もあるのだ。

この場所がこの先どうなるのか。
どんな未来を迎えるのか。

しばらくの間、それを眺めて過ごすのも、悪くない。

「……………」

その様子をしばらく眺めた後、ふつと一息ついてから、八雲は口を開いた。

「……………」

呆れたようで、どこか安心したような様子で吐き出された言葉。それに「よろしく」と答えて、また、薬湯を啜る。

風は温くて、星は明るい。

月は大きく。森は豊かだ。

利用されるだけだとしても、こういう所で眠れるのなら、悪くない

そうして

しばらくの仮宿を。

当分の居場所を決めた。

自らが出て行くのが先になるのか。

この場所が滅びるのが先になるのか。

はたまた、自分の死によって幕が閉じられるのか。

どうなるうとも、愉しめれば重畳

『貴方の名前を聞かせなさい』

何かを探すにも、丁度いい。

そんなことを思った。

理由を嘯き、答えを探す（後書き）

繋ぎ。

大事な繋ぎゆえに少し迷ったかもしれませんがね。

プロットが薄くて揺れやすすぎるのが問題なのか……。

とりあえず、逗留決定。

拠点配置完了。

少しは動かしやすくなるのかどうか……。

ご感想・指摘をお待ちしております。

読了ありがとうございました。

とある口常(前書き)

遅れましたすいません。

話はいつも通りです。

とある日常

目の前の対象へと向けて、まっすぐに刃を当てる。

ためらってはいけない。そして、考えなさ過ぎてもしいけない。

頭に描くそのままの結果を生み出すために、その細胞一つ一つの繋がりを観察し、より慎重に、より丁寧に。赤子を抱くような柔さを持ちながら、その片手で火のついた火薬を弄ぶ大胆さを持ち合わせて
それを引ききる。

「.....!」

シュツ　と一瞬の音がして、それは成された。

無言の発声と共に、一気に引かれたそれは、寸分たがわず対象を切り裂いて、その一部だったものを空に散らす。薄く、向こうが透けて見えるようなそれは、一時ひゆるりと漂って、重さに引かれて落ちた。

目の前に残されるのは、人工的に形を変えられた自然物と切り開かれた断面　まるで、最初からそうであったかのようにまでの綺麗に切り取られた存在。

ごくりと息を呑んで、それを見守っている人々。

もし、不具合があつたとしても、やり直しはきかないのだ。

一つ一つが命を摘み取っての行為。無駄にするわけにはいかない。

だからこそ、この行為のためだけに、一生をかけるほどの鍛錬を重ねる者だっている。

「・・・・・・・・」

隅々までを丹念に観察し、誤りがないのを確認する。

無駄にはいけない。けれど、それが後の災いとなってしまうのは、それこそ意味が無い。もし失敗をしたのなら、その失敗の責任を取るのが筋というものだ。決して、それから逃げてはいけない。

「・・・・・・・・よし・・・」

小さく呟いた。

それと共に、待ちきれないというように目を見開く人々にこりとそちらに振り向いて、それを指していった。

「大丈夫です」

一瞬の沈黙。

そして

「「　　いいいよっしやー!」」

周りを囲む者達が一斉にあげた歓声に、空気が揺れた。

そのままの勢いで手が伸ばされて、背中や肩に打ちつけられる。

「痛い・・・ちよつと痛いですって・・・ちよ・・・」

親愛の情だと理解しながらも、普段からの力仕事で鍛えられた腕力

は並ではない。次々と降りかかる衝撃を防御しながら、その間を抜けていった。

その先にいたのは、深いしわが刻まれ、鋭い眼光でこちらを見つめる老人。

短く刈り込まれた頭に、白い布をねじりこんで巻きつけ、視線の先にあるそれを見つめている。

騒ぎ立てていた若者達がそれに気づいて黙り込んだ。

ゆっくりと立ち上がった老人が、じろりとその完成品を観察した後、こちらに振り向く。

頑固そうなその顔が歪み、若者達が一筋の汗を垂らした。

そして

にやりと持ち上げられた口端とともに呟かれた言葉。

「やるじゃねえか若えの。久々にいい技見せてもらったぜ」

若者たちは二度目の爆発を迎えた。

それが

今朝の作業場の光景である。

「ありがとうございました」

ぺこりと頭を下げ、丁寧な礼を述べた、
いいってことよ、ときつぶ良くに言い放つ棟梁に、もう一度簡単な
感謝の意を示す。

良かった良かった。

木材を削るために道具と場所を貸してほしいという願いを快く受け
入れて、さらには、その預かりまで申し出てくれた粹な御仁だ。礼
はいくらいつても足りないし、こういう人にはちゃんとした礼を示
したい。

流石にそこらにほっぽって置いとくわけにはいかないしね・・・

あの場所で一夜を明かした後、そこらを適当に歩き回っていて見つ
けた倒木。

樹齢二、三百年にも及びそうな大木が、まるで、何かもの凄い力に
でも吹き飛ばされでもしたかのように辺りをなぎ倒して転がってい
た。

そこに放置したままなら、それはただ自然に還っていくのみだった
ろうが　　こんな好運を利用しない手はない。

こういう自然乾燥した木材ってのは、加工するのにもってこい
だ。

家屋に家具に、また、燃料としても受容が高い。

この辺りに腰を落ち着かせる自分にとっても、これからかなり有用
になってくるものだろう。

そう考えて

符や札、梃子の原理などを利用しながら、どうにか人里の方まで運び出した。

多少、門番の人々に驚かれ、ひと悶着もあつたが……どうやら、こんなことを出来る者も里の中には幾人が存在するらしい。思ったよりも簡単に受け入れられて、必要のない部分は里の共有部分の補強材料に使うということで交渉は成立。大工の加工場での経過を経て、棟梁の手に預けられた。

しかし……久しぶりに大工道具なんて握つたもんだ。

昔に行つた何十年かの大工修行や日曜大工の積み重ね。

勘を取り戻すのに少々時間がかつたが、なんとか納得の仕事
木材の鉋かけ　　を行うことができた。人間、何事も経験しておく
ものである。

「さて」

そんな今朝までの記憶の整理を終えての、今現在。

目の前に広がるのは、人里の端に存在する田園地帯。

早朝の大工仕事を終えた後、そこを離れ、人々が働く田畑の様子を眺めながら、朝食代わりに昨日残しておいた薬草汁を腹の中に注ぎこんでいた。具のない汁では少々溜まらない感はあるが、栄養補給には十分。

呑み干した後、その入れ物である竹筒を近くの水田に引かれた用水路で洗い、ついでに飲み水も確保しておいた。

そして、準備が出来たところで、ぐっと伸びをして立ち上がる。

天気は晴天。

少々暑すぎるほどの陽光が降り注ぐ。

「どうしますかねえ」

いつもと同じに呟く言葉。

いつもと違うのは、その向く先があるということ。

「腰を落ち着ける場所・・・ねえ」

仮宿とはいえ、人間一人の一生分程度には居座るつもりである止まり木を一体何処に置いておくのか。悩みどころで考えどころだ。

材料は用意しましたし・・・。

今度は、土地探し。

これほどの面白げな地だ。

色々と見回りもせずに決めるのは勿体無い。

どうせなら楽しまなきゃ損ですしね。

年寄りの道楽は、今まで見たこともないものを見つけること。
折角の奇想天外で溢れる場、観光がてらの探検も面白い。

「鬼が出るか蛇が出るか・・・・・・・・・・」
愉しむこととしますか。

そんな浮かれ気分で呟いて、気ままに一步を踏み出した。

うだるような暑い日差しを避けて、木の根を背中に森林浴。葉々の間から洩れる僅かな光の線を眺めながら、片手に持った杯を煽る。

至福の瞬間。

そう、そのはずだ。

「はぁー」

漏れる息は、喜悦が溢れた感慨などではなく。ただの酒臭い空気を吐き出しただけにすぎない行為。頭に回った酒気が醸し出す快樂など微塵も感じられない、ただ水を飲み干しているのと同じようなもの。

まったくといってもいいほど、酔えない。
楽しい酒にならない。

なんだろうなー・・・この感覚。

いくら呑んでも愉しくない。
いくら飲んでも楽しめない。

つまらない……。

酒自体は結構な上物。

いつもなら、これが手に入っただけでも気分は上々。匂いを嗅いだ瞬間から飲み干す瞬間まで、ずっと心地いい酔いの感覚に身を躍らせているところだ。

けれど、今は全然酔えない。

気分は乗らず。

呑めば呑むほど胸のうちから萎えていってしまうような気がする。典型的な悪酒だ。

「ああもつつ！」

腹立ち紛れに殴り飛ばした木が、根元からぱりぱりと音を立てて崩れ落ちた。

ちっともすつきりはしない。それどころか、寄りかかる支えがなくなつて余計に具合が悪いくらいだ。

「むう………」

仕方なしに座り込むのをやめて、持っていた杯を散らしながら立ち上がった。

酒瓶の方はそのままの状態で、片手に抱えて歩き出す。

どっかで飲みなおそうか。

場所を変えれば気分も変わるかもしれないし、こんなに不味く飲ん

でしまつては酒にも失礼というものだ。何か肴になるものでも調達すれば少しはましになるかもしれない。

そう考えて、適当な範囲を決めて、辺りへと意識を散らしていく。

何か余興でもあつたらいいんだけど……。

面白いもの。

博打でも喧嘩でもなんでもいい。

何か熱くなれるものでもあれば、ここ数日のこんなもやもや感覚も晴れるだろう。

あんな夢なんかを久しぶりにみるから……

込み上げる嫌な感覚はぐるぐると胸のうちに渦巻いて、暗い気持ちをごんと強いのとする。

この鬱屈した苛々を散らしてしまいたい。

こんな自分らしくない感覚から抜け出してしまいたい。

さつさと私おにに戻りたい。

「……お？」

そんなことを考えていたところで、何やら気になるものを見つけた。

これは……

森の端に伸びる足跡。

獣道しかない山の中で草を踏み進むそれは、真っ直ぐと奥へと進んでいる。

その先にいるのは

「よし！」

久しぶりの獲物。

もうすぐ、自分たちの縄張りに踏み込みそうにはなっているが・・・
・・・まだ、誰にも見つかっていないようだ。

丁度いい。

憂さ晴らしにも、ちょっとした仕返しにも、これ以上の相手はいない。
それを正々堂々正面からぶっ飛ばしてやれば、少しは気が晴れるだろう。

「急がないと」

誰にとられてしまつともかぎらない。

鬼は鬼らしく即断即決だ。

素早くその身を散らして、現場へと急ぐ。

ほんの数秒に過ぎないが、それでももどかしい。

はやくはやく・・・。

強い相手であってほしい。

なんなら、私たち相手の専門家でもいい。

いい喧嘩をすれば、きつと酒も美味しくなる。

能力さえ効かないこの感情を疎ませてしまったためにも
そう願
う。

「どつこらしょつ、と」

村の用水路から水源を辿り、川原を上流へ上流へと遡っていた。
目の前の多い岩を乗り越えて、その先のごつごつとした小石だらけ
の地面に降りると、周りは既に緑で覆われた森の中。その中で真っ
直ぐに伸びる透明な水の流れと灰色の河原。

この川は、どうやらあの一際大きい山の方から流れ出しているらし
い。

そんなことを考えながら、また歩を進める。

途中までは手入れされ、河原に沿うようにして伸びていた道も草に
覆われた獣道へと変わり、辺りを囲む緑はその数を増して、水気を
含む独特の匂いがどんどん濃くなっている。

煩いほどの虫の声はもはや気にならないほどの当たり前のものとな
り、微かにあった人が通ったことがあるような痕跡もほとんど見か
けなくなった。

「ふーむ」

顎に手を置き、歩きながら考える。

どうするか……。

転びやすい砂利道を避けての移動はしているが、そろそろ足腰への負担が大きなものになってきた。そろそろ本当に人が入り込むようなところではなく、なってきた。そろそろ引き返した方がいい頃合なのかもしれない。流石にこれ以上踏み込めば、何かの縄張りに触れてしまわないともおかしくはないところまで来てしまった。

一応、目立たないようになるべく静かに移動はしているが、あまり初日から冒険するのも本意ではない。怪我も治りきってはいないことだし、もう少しいったところで引き返すことにしよう。

「あの辺りまでってことでいいか……」

視界の先にみえる適当な目標を標にして、緩い歩みで進む。

どのみち、この辺りは住むのには向いていなさそうだ。元々、水源の確認としてのところがあったので、こんなもので十分といったところ。ただも散歩と確認ということにしておけば悪くない。

河原の涼しげな風に目を細めると、僅かにだが、虫の勢いのよい叫びの中にさらさらという川のせせらぎが聞こえてくる。時折混じる飲み込んだ空気のぼこぼこという音や大岩にぶつかった白い飛沫が上げた音。

人の手の入っていない。
そこにあるままの風景の音がする。

これほど豊かな自然が残っているところというのは、人里の近くでは珍しい。

川辺は人の生命線として、だいたいのところ、誰かが手を加えていることの方が多いものだ。

それだけ、近寄りがたいってことかね。

狭い狭い人の縄張り。

周りを囲う全てが違う領域で、何か別のものが住む世界。恐れ、敬いながら、それと戦い、補い合いながら生きる。

まだまだ、丁度いい具合とはいえないのだろう。
人が弱く。神秘が強い。

今はまだまだそんな時代だ。

この先どうなるかはわかりませんがねえ……。

寄った振り子がこれから先にどう変化をしていくのか。
そして、その中でも特異点となり得そうなこの土地がどうなっていくのか。

まだまだ、未来のことはわからない。

「おっと」

つらつらとそんな適当なことを考えているうちに、目標としていた場所に到着していたらしい。無意識のままに脚を進めていた分の今まで気づかなかった。

「そんじゃ、ちょっと一休みして道を引き返しますか。」

荷物を降ろし、近くの手ごろな岩に座り込みながらそう呟いた。取り出した竹筒に口をつけ、乾いたのどを潤す。

眺めるのは、標とした印。

辺りの音を打ち消す轟音の滝である。

「ふいー」

身体の疲労感を吐き出すように思い切り息をついた。

「ごうごうと音を立てて下り落ちる滝の流れは見ていてなかなか清々しい。」

「風流風流」などと呟きながら、一杯やりたい気分である。さぞや心地いいことだろう。

まあ、流石にそこまで気は抜けないか。

一応、それはある。

わざわざ荷物の中で強化を施してまで保存し続けている一品だ。とある伝手で手に入れて以来、ずっと機会を待って荷の奥へと仕舞いこんでいる。

もうちょっと気のおけないところで呑みたいもんですしねえ・

ちゃんと住居を構えてから、一人でひっそり飲むことにでもするか。それとも、誰かと適当な祝いで空けることにするか。結構な悩みどころである。

とりあえずは、今は我慢。

・・・。

「む?」

一瞬、何か妙な感覚を感じた。

薄い。限りなく薄い。何かか蠢くような気配。

なんだ・・・?

生憎、辺りは元々妖怪の巣窟らしく。その残り香といった感じの気配が強すぎて、それをはつきりとは感じられない。けれど、確かに何かがあるような。混ぜっっているような感覚がする。。

滝壺・・・森の中・・・空・・・いや、どこだ?

周り一帯を改めて確認しても何も見つけられない。

ただ、滝が放つ飛沫が辺りに薄く漂っているだけ……いや、これだけ大きな滝とはいえ、こんなにも濃く、その飛沫を感じるこ
とがあるだろうか。

それは霏か　霧にでも包まれてしまったかのように辺りに満ちて
いて……。

まるで、意志を持っているような……。

「　こりやまた……」

気づいたと同時に、はっきりと蠢き始めた霏の塊。

空気を吸い込むように、その一箇所に向けて風が集まり、渦巻いて
圧縮されていく。

全く……

どうやら、のんびりしていられるのもここまでのことらしい。
拾った荷物をしっかりと身体に結びつけながら思う。

こつこつ引きだけはいいは、いつものことだ。

高まってく気配。

それは、まごつことなき大妖のもの。

「……少し豪華すぎやしませんかね」

観光気分で訪れたにしては、少し胃にもたれすぎる歓迎だ。

地元民の不況を買ったのか……何にしても、簡単には逃げられな

い。

上物だね・・・

姿が収束する前にこちらの気配へと気づき、対応しようとする構えの男。

まるでなっていないようで、力の抜けた隙のない姿を見せている様子に、思わず口端が持ち上がる。

ひっさしぶりに愉しめそうだ。

いい喧嘩になりそうな相手。

この鬱屈を吹き飛ばせそうな予感に血が沸き、肉が踊る。これこそが自分といえる感覚。

鬼としての本能。

「よしっ！」

完全に姿を表したところで、がっんと拳をぶつけ合わせて、男を正面から見据えた。

人間にしては多少長身。少し痩せ方で、前髪が目にかかる程度に伸びている。

決して見た目から強そうに見える相手ではない。

けれど、こっつという人間こそ油断がならない相手というものだ。

その証拠に、私の姿を見て油断することもなければ、怯えることもない。

髪の間から見える細い目で、こちらを真っ直ぐと油断なく見つめている。

ちゃんと私の力を理解してる。

簡単に終わってくれるような相手ではない。

嬉しい限りだ。

持ち直した気分。

高揚するそれを押さえながら、一つ咳払い。

「その人間。こんなところで何してるんだい？」

通りがかりにふらりと声をかけたという印象で呼びかけた。

男は、それににこりと微笑んで言葉を返す。

「いえいえ、ちょっと散歩をね・・・お嬢さんこそどうしました？」

「こっつちこそただの気まぐれさ」
ただの散歩。

うすく微笑みながら、愉しげに言葉を重ねる。

馬鹿馬鹿しいやりとりだが、これは儀式のようなもの。
これから始まる人間と妖怪との関係を示すもの。

「ここらは危ないよ　恐ろしい妖怪の住処だからね」
「そりゃ怖い。そろそろお暇しないといけないですかねえ」

まったく怖くなさそうな表情で男は応える。
少し大きめの着物が、その動きに従って揺れた。

「近くに私の家がある。そっちでゆっくりするといい」
「いえいえ、それには及びません」
自分で帰れますから。

踵を返して立ち去ろうとするその背中には、微塵の隙もない。
形式だけの行為。

けれど、まるで合わせてくれているように男も応えてくれる。
盛り上がる気分をさらに持ち上げて、一層楽しい舞台に引き上げてくれる。

嬉しい。嬉しいが・・・

「いや、いけないよ」

ギシリ、と握った拳が音を立てた。
もうそろそろ我慢が効かない。

「鬼を前にしたんだ。ちゃんと攫さらわれてくれないと」

男は歩みを止めて、ゆっくりと振り向いた。

その手には、先ほどまで持っていた札を指に挟みこんでいる。

術者が使う補助式

そこから感じるのは、やはり愉しい戦の気配。

「用事があるんですよ。どうしたら帰れますかね？」

慇懃無礼に。

気の抜けたままの姿勢で。

自然体で、構えをとった。

「勿論」

その姿に笑みを深めながら、再び拳同士を打ち鳴らし、威風堂々言い放つ。

真正面から真っ直ぐに。

鬼らしく。私らしく。

「私に勝てたらさー！」

気合をいれた叫び共に、脚を思い切り踏み出して地面を叩く。

辺りは揺れて、木々の葉っぱが揺れ落ちる。

それが開戦の合図。

喧嘩の始まり。

思い切り拳を振り上げて、勢いのままに私は男へと飛び掛った。

こちらの背丈を越えるほどに跳躍し、上から降りかかるようにして
落ち来る少女。

見えない。

というほどではない。

多少の手加減でもしているのかもしれない。

その速度は、人間でもある程度の心得あるものならば十分に出せる
ものだ。

避けられないほどではない。

けれど

「・・・っ!」

今の体調で出せる最高速度で。

それを見た瞬間に、思い切り飛び退いた。

紙一重などではなく、不恰好なほどに大げさな距離を開けて、体勢
を崩しながらもなんとか着地する。

「おお!?!」

数間ほどに距離の空いた地面に向けて、その勢いのまま拳は打ち下

ろされる。

勢い余ったという印象の間の抜けた声と共に弾けたのは
どまで自分がいたはずの場所。

先ほ

ドゴンツ という派手な音と共に地面が陥没した。

「つぐ・・・」

その衝撃で飛んできた砂利を両腕を盾にして受け止めた。

川辺で地面が湿っている分、あまり土煙があがらなかったのが幸い。
相手を見失う心配はない。

「悪いね。久しぶりで加減が効かないんだ」

可愛らしい小さな姿。

身体の所々に着けられた無骨な鎖。

そして、その橙色の髪の間から聳え立つ強靱な角。

鬼の証。

「それじゃあ次いくよ」

ぐるぐると肩を回転させながら話す少女。

手首の先に鎖で繋がれた分銅のようなものがその度にカチャカチャ
と揺れ、音を立てて擦れ合う。

あれも武器かね？

三角錐と球型の飾り。

あんなものでも人間の身体ぐらい簡単に砕いてしまえるだろう。

小さな体躯からは考えられない剛力である。

流石鬼……ってどこか。

怪異の中でも、有名で……さらには際立つ特別な存在。

古来より悪しきもの、超常的なものへの代名詞としてすら扱われてきた。

他の有象無象とは比べ物にならないほどの力をもって、人知が及ばないほどの災いを引き起こす。

ある意味では、人の社会へと大きく関わってき続けた物の怪である。その分だけ、力と逸話を手にし続けてきている。

武器もない。身体も万全じゃない……。

こんな状態で敵う相手ではない。

けれど、頼んだって謝ったって退いてくれる相手でもない。

「ほらほらどうしたんだい！」

気風も気前もいいが、何より喧嘩好き。

それが鬼というもの。

「……つと！」

愉しそうな笑みを浮かべたまま振り下ろされる拳。

それ振るわれる度にぎりぎりまで強化した脚力を使って飛び退き続ける。

「反撃しないとどうにもならないよー！」

避ける度、すぐさまこちらに接近して拳を振るう少女。
言葉はごもつともだが、こちらはそう簡単にはいかないのだ。

当たれば終わり。受けても吹き飛ばす。
つまり

「そうですねっ、と！」

避けるしかない。

相手が飛び込み拳を振り下ろした瞬間に、その腕の内側へと滑り込み、相手の正面へと入り込む。いつもならもつと時間をかけて癖を掴んでからの行為だが……今はそんなことをしている暇はない。

動けるうちに……

力が残っているうちに　なるべく早く終わらせてしまわなければ、身体の方が保たない。ある程度まで回復したとはいえ、全開の状態で動ける時間には限りがありすぎる。
相手の動きはだんだんと速くなってきているのだ。まだまだ油断してくれているうちに、一気に決めてしまおうしかない。

「はあっ！」

裂帛の気合と共に打ち込む掌底。

背格好の違いから上から振り下ろすような形ではなつたそれは、地面に打ち込む震脚によって力を存分に伝え、その小さな身体に吸い込まれ　振りぬいた方とは別の、もう片方の腕によって受け止め

られた。

まるで巨岩に拳を叩き込んだような・・・そんなその姿は考えられないような重さが体に響き、傷口に走る痛みに顔を顰める。

「なかなかの一撃だね」

こちらを認めるような笑みを見せる少女。

そのまま腕を振り抜いて、こちらを吹き飛ばそうとするが　その前に。

「そりゃあ・・・光荣ですよ！」

右手に持った本命の札を少女に叩きつけるようにしながら発動させる。

威力も乏しく、簡易的なものでしかないが　多少の時間稼ぎには成る封印の符だ。

上手くいけば数瞬だけでも相手の動きを止められる。その間に逃げればいい。

逃げるだけなら色々方法はある・・・。

これだけ濃い力に包まれた土地。

上手く工夫すれば気配の誤認などいくらでも行うことが出来る。

そういう作戦だ。

が

「ぐっ!?!」

思い切り振りぬいた掌が空を切り、無茶な稼動で身体が悲鳴をあげる。

右腕の骨が軋み、傷口を中心に身体全体へと痛みを運び、うめき声が漏れた。

「っ痛……」

込み上げる感覚を全力で押し殺しながら、後ろへと回った気配へと向き直った。

そこには不敵な笑みを浮かべる少女の顔と 半分ほどが霧散し、霧のような状態になっている光景。

そう簡単はいってこないってか……。

能力。

多分、少女個人が持つ特殊な力だ。

どう判断すればよいかはわからないが、こちらの攻撃が当たる瞬間・少女はその身体を霧か何かのような実体のないものに変化させ、こちらの攻撃をすり抜けた。そんなふう感じた。

「こりやまたでたらめですねぇ」

よりもよつての能力持ち……。

その種族……培った技術で得た技ではなく。

その個人だけ発生し、独特の力を発揮する特異的なもの。

勿論、鍛錬や工夫を重ねなければその力も微々たる物のはずだが……個人個人でまったく別々の力を示すので、初見で見抜くという

ことは難しい。

どうにか当たりをつけて・・・

対応するしかない。

さらに手札の少なくなった不利を覆い隠すようにして、不敵に笑んだ。

隙があればいつでも逃げ出せるように、全力を込めて構えをとる。

「そうそう・・・その意気だ！」

まだまだ、この鬼の少女は満足していない。

どうやら、長い祭りにつき合わされることになりそうだ。

「ぐっぐつと流れ続ける滝の音を聞きながら、そんなことを思った。

とある日常（後書き）

幻想郷巡り。
名物観光中。

まずは鬼との喧嘩から入るとのこと……。

そんなふうには満喫中の主人公です。

あと、報告なのですが。

少々、まとまった時間がとれない状況続いているので、更新の頻度が遅れることになるかもしれません。申し訳ありません。

その代わりといっってはなんですが、電車の中でも書ける勢い任せの軽い感じの奴をもう一シリーズで投稿します。クオリティは低いものですが時間つぶし程度にご賞味いただければ光栄です。

読了ありがとうございます。

ご指摘・ご感想お待ちしております。

らしさの茶番(前書き)

今回は時間が取れたので更新です。

らしさの茶番

『らしく』ある。

決められたとおりに
考えたとおりの姿で
その役を演じきる。

自分で想い描く理想像。

こうありたいと願う完成形。

誰かに与えられた『自分』という虚像。
自分自身で作った『自ら』という形。

それから逃れるのは、案外難しい。

自分を自分で失くすということ。

今までの自分を打ち壊すということ。

外れてしまえば、どこか心細くなる。

守り続けていれば、どうしても息苦しい。

『幻想』にすぎないものなのかもしれないけれど、

『現実』はその虚像を通して存在している。

誰かは私を見ている。

誰かは『らしい』私を見ている。

どう振舞っても、逃れきれずに成りきれず。

どうやっても、未完成で割り切れない。

それでも、誰かは判断するのだろう。

あなた『らしい』と

あなた『らしくない』と

ならば

それを見失ってしまえば

『私』は『私』ではいられないではないだろうか。

思わず、使ってしまった。

男の右腕が目の前まで迫る瞬間。

その攻撃を受け止めた硬直時間目掛けて放たれた一撃を 全力
で避けた。

たかが一撃。たかが人間の攻撃一つ……受けたところでどうとい
うこともない。それが、どうしても当たってはいけないものによ
うに感じた。

長年の闘いで培った経験。喧嘩師の本能として、避けなければいけ
ないと感じた。だからこそ、たかが人間相手に対して能力を使用し

てまでもその攻撃を避けたのだ。

そして、おそらくそれは正解だった。

陰陽術か何か・・・かな？

拳と同時に振るわれた札。

露に散らした身体に触れたそれは、僅かにだが、確かにこちらの力を削ぎかけた。

力の制御が乱れ、体がいうことを利かなくなるような感覚に襲われ
て・・・・・・慌ててそこから移動したのだ。あのまま留まってい
れば そのまま受けてとめていれば、確実に何かをされていた。
その危険を読み取っての能力行使。

能力を『使う』のではなく『使わせられる』のは、かなり久しぶりの
経験だ。

自然とあがる口角は止められず、拳を掲げ、意気揚々と振り回す。

「さあ・・・もつともつと」

楽しませてくれる。

正面から、真正面から堂々と。

それこそが私の求めた闘いであり 『鬼の喧嘩』だ。

「いくよー！..!」

ここからは手加減なしで。

本気と本気の勝負で、決着をつける。

そんな気持ちを込めて、能力ちからを使用した。

少女が掲げた右手。その上に出現する巨大な岩石。

明らかに、少女の身長どころかこちらの背丈よりも巨大なそれを、まるでそこらの小石でも投げるかのような気軽さで　　ぶん投げられた。

「な・・・つと!？」

とつさに飛び退いた場所には　　砕けた岩の塊。

「ほらほら!　もつといくよー!」

「　つとに・・・!」

　冗談みたいな光景だ。

そんな悪態をつきながら、かるうじて飛び退いたこちらに向けて、第二・第三弾を投げ込む少女。まるで手品のように、次から次へと途切れることなく打ち出されるそれは　　ドゴンバゴンと危険な音を立てて地面に傷跡を刻み、その威力を物語る。

「　　つとにわりに合わない・・・！」

走り抜けたその僅かに後ろに起きる破砕音。

さらに前方から向かってきていた次弾を、後方のその瓦礫に飛び乗ることで回避する。さらに右、さらに左。いいように弄ばれているようにも思えるが、一発でも当たれば、終わるのは自分。怠けてはいられない。

まったく・・・

飛び散る破片を片腕で振り払いながら考える。

確かに少々気を抜いていたことは確かだ。

怪我は治りきらず、ろくな準備もしないままに山の奥に入り込んだ。飲み水と簡易符程度は持っていたとはいえ、その状態で妖怪の縄張りを侵し、あまつさえ、その相手が鬼　　数時前の自分が本当に恨めしくなる。

自分の巡りあわせの悪さくらい・・・自覚していただろうに。

うかれすぎていた。

色々と考えすぎていて、自らの身を守ることを忘れていた。

どうやら、自分でも思っていた以上に

「　　つと」

いくら河原で地面が湿っているのだとしても、流石にあれほどの規

模の攻撃を繰り返せば、土煙も舞い上がる。少々こちらの姿が捕らえづらくなつたのか……攻撃が途切れた。

微妙に霞んだ相手の姿を見据えながら、動きを止めて呼吸を整える。

手中に岩……霧状の身体。

わかっているのはその程度のこと。

どうやっているのかも、何をしているのかもわからない。

けれど、確かに目の当たりにした現実であり 事実。

なら、少しは足しになる。

ここに現れたとき霧……靄のようなものに姿を変えていたのか……。

辺りを囲っていた妖気の影。

もし、そこら中に身体を拡散できるのだとすれば、どう逃げたとして意味が無い。少しの間でも意識を奪い、こちらを誤認させるくらいのことをしなければ、すぐに見つかってしまう。それでは意味が無い。

どうにか、隙を……。

そう思ったところで少しの違和感。

辺りに漂う土埃……薄く霞んだ姿。

そこから連想されるものは。

「っ！」

本能に任せるままに全力で地面を蹴り、その土煙の中から飛び出した。

辺りを囲い、薄く漂っていたそれは、私の動きに反応するように追いつがり、再びその身のうちに飲み込んでしまおうと襲い来る。

やっぱり・・・あつちは囷か。

いつの間にか姿を消した影。

こちらかははつきり見えないのをいいことに、置かれていたのは身代わりだったのだらう。いつも自分が行う行為を相手にされるとは面白い・・・なんていつてもいられない。

こりゃあ、力だけじゃあないですねえ・・・。

自らの能力を使いこなす技術。それを上手く利用する知識と経験を
持つ相手。

力に溺れずにそれを研鑽し、さらなる高みにのぼったもの。

こういう相手と相対するのは

「いい読みだったけど　おしかったね」

本当に難しい。

囷としていたのは、その力で操っていた土煙の方。

それを自らのように見せかけて動かして、本体自体はこちらのすぐ近く、その腕の届く位置まで移動し

「それじゃ、いくよ」

掴んでいるのは自分の右袖。

空中で身動きがとれず、抵抗しようにもその剛力によって微動だにできない。

「ええと……どうするんですかね？」

「もちろん！」

にこりと可愛らしい笑みを見せて、先ほどまでと同じような構えをとる。

その手にあるのは、弾かんせきの代わりとして存在する自分の身体。

あー……。

導き出される未来は一つ。

背筋に流れる汗はとても冷たく

気持ち悪いものに感じた。

喧嘩において相手の不意を打つことが悪いことだと、そう思っただろうか。

相手の視界から外れ、今まで見せた事のない技を披露して　　予
想もできない攻撃を浴びせる。真正面から、堂々と不意を打つ。
私はそれを卑怯なことだとは思えない。

確かに、相手が構えもしない。気づいてもいない状況でいきなり殴
りかかったり、予め仕掛けておいた罠によつて、こちらの姿も見せ
ぬままに一撃を食らわせ、弱った相手をいたぶり仕留める。
そんなものなら、私は私の作法としてそれを拒絶する。

自分の身を何の危険にも曝さずに、相手にその実力を発揮させる機
会も与えないままに、それを制圧してしまうのは　　それは『喧嘩』
ではない。

ただの一方的な殺戮であり、下等な騙まし討ちだ。そんなものを私
は認めない。

けれど、相手の前に堂々と立って、真正面からぶつかって玉砕する
そんな蛮勇だけを闘いと呼ぶのではないとも思う。

自分の出来るだけの工夫をし、その力をあらん限りに使用しきつて、
相対した相手を全力で倒しにかかる。これも喧嘩の礼儀であり、力
に対して力で挑むだけが闘い方というわけではないのだ。

だからこそ、いくら自分たちと比べてひ弱な存在であろうとも、鬼
は人間と喧嘩したがるのであるうし、その力を認めることだつてあ
る。ようは心意気の問題である。

正々堂々と、真正面に立ってから闘ってくれるなら　　それで不
意を打ってくれるなら、十分に相手を認められる。時には、負けた
つていいとだつて考えることができる。

覚悟だつて決められる。

なのに　　人間というものは、さっきまで笑いあっていた相手を

後ろから刺し殺すことだってできるのだ。

だから……。

自分の能力を最大限に使用して、闘いに役立てた。
相手の後ろに回り、その腕を掴み取った。

「いくよ」

ぐるぐると自分の身体ごと相手を回転させ、その速度が最大まで高まったところで手を放す。力づくで力任せな……鬼にふさわしい力業。

振り回す勢いで既に風がはためき、叩きつけられた相手は原型も留めずに碎け散る。

加減なしの鬼の観業に男は粉々になる……はずだった。

それが

「　　っ痛……効きますねえ。ほんとに……」
年寄りには応えますよ。

口元に笑みを浮かべながら、地面を擦った身体を擦る男の姿。
生身のまま引き摺った部分には多少の擦過傷を拵え、その勢いを止めようとした足にもある程度の傷みを負っているようだが　　確か
に生きている。

「　　っぐ……」

思わず唾を呑み込んだ。

私が捕まえた　掴んだ右腕の袖。その着物の部分がまるまる千切れ飛んでしまっている。

それは私の力によって裂けたものではない。確かに、それほどの力がかかっただろうが　その前に、既に男自身の力によってそれは切り離されたのだ。

投げられる途中。まだ力が乗り切っていないうちでの一瞬の判断。

これはなかなかできることではない。自分の命がかかっているならなおさらのこと。

「あー・・・借り物だったんですけどね」

余剰によって吹き飛びながらも、それをそのまま食らうよりはましというもの。現実には、男は私の投げを逃げきれはしなかったもの、なんとか凌いだのだ。

少々傷つくが、これは賞賛に値することだ。

けど

けれど

「なんで・・・」

それは今の私の状態の理由にはならない。

むしろ、私の攻撃を凌ぐほどの相手と喧嘩できるのだ。

普段の私なら、それは喜ぶべきことのはずである。

けれど

沸き立つのは、どうしようもない悔恨と悲哀。

割り切れない やり場のない気持ちで頭がいっぱいになって
叫びだしたくなる。

「どうして……!」

真正面から『鬼』らしく。

喧嘩の作法に従ってまっすぐと。

正々堂々闘っているはずだった。

それが 男の破れた袖の下にあったのは、身体を縛る傷の証。
包帯でぐるぐる巻きにされた真新しい傷が、そこにはあった。

「私は……」

私が襲ったのは最初から怪我人で 全力を出せない相手だった。
弱っている相手に対して、私は拳を振り上げたのだ。

……

言葉にならない感覚に奥歯を噛み締める。

知らなかった 知らなかったから仕方ない。そう割り切れないほ
どに子どもなわけじゃない。頭を下げた俺びをいれ、このまま逃が
してやればいい。

取り返しのつかないほどの怪我を負わせたわけじゃない。
どうしようもないほどのことをしてしまったわけじゃない。

けれど

「折角……」

振り切れると思っていた。
忘れてしまえると思ったことを……また、抱えていなくて
はならなくなった。

楽しい戦は終わってしまったのだ。

そう思った。

「どうかしましたか？」

突然、動きを止めた少女。
先ほどまでの覇気もなく。ぶらりとさがった腕にうつむいた顔。
おかしくなった様子に首を傾げる。

すると

「なんでもない……飽きたから、もう行っていいよ」

そう言った。

吐き捨てられた言葉に、ますます困惑が深くなった。

ぎりぎりの運用を覚悟していた身体から力が抜けて、きよとんとい
った感じに気が抜ける。

「いいん、ですか、ね？」

少女は、少しだけ顔を上げて応えた。

「ああ・・・もういいよ」

気の抜けた。

やる気のない声で。

・・・

鬼が喧嘩の途中でそれにあきるなどあるだろうか。

まして、未だに相手を仕留めておらず、有功打も当てていない。こ
ちらに興味を失ったという可能性もあるが 先ほどまで、ずっと
愉しそつに拳を振るっていた。

なのに、突然、だ。

何か・・・したか？

襲われた。

殺されかけた。

確かに、逃がしてもらえないなら好都合だが・・・今の少女の
表情は納得がいかない。

鬱屈し、何か耐え切れないものを我慢し続けているといったような、
そんなものを見せられてしまっつては、こちらが悪いことをしたよう

な気分になってしまふ。年下の少女を苛めただなんて……そんな引け目など持ちたくはないのが年寄りというものだ。折角のこの土地で初めての散歩がそんな記憶で彩られてしまつては、この先随分と道行きが暗いものとなつてしまふ。

しかし……。

「なにしてるんだ。さつさといけばいいじゃないか」
見逃してやるつていつてるんだ。

こちらを恨めしげに睨みつける少女。
それを見て思う。

一体自分は何をしてしまつたのだろう。

豪放磊落な『鬼』にこれほどに珍しい態度をとらせてしまつほどのことを、その矜持に触れてしまふほどのことを自分はしてしまつたのだろうか。

うーむ……。

記憶を辿りに探る。

少女の態度が変わつた瞬間を。

その機嫌を損ねてしまつた何かを考える。

ここを立ち去るにしても、何かすつきりさせなければ気持ちが悪い。疑問はなるべくその場で解決しておいた方が精神的にも楽だ。

逃げて、避けて、跳んで……掴まって……。

少女に背を向け、近くの被害を受けていない森のほうへと歩きなが

ら考える。

そっちにあるのは、投げ置いた荷物。それを取り上げて、肩に背負いなおした。

カチャリ、と中身が音を立てて揺れ、袖のない生身の右腕に触れる。

「・・・・・・・・」

そこにあるのは、包帯を巻いた傷。治りきっていない右腕。

「なんだい？ やっぱりそのまま攫われないの？」

軽口のように脅しの言葉を口にするが、やはり、晴れきっていない表情で。

言葉こそ強いが、その感情は何処か虚ろなままで。

どこからか取り出された杯に口をつけ、豪快に酒を煽る。

姿こそ堂々としているが、それは少し寂しげに。

そう見せかけているように見えた。

くるりと振り向いて、それを真正面へと立つ。

「あー……。ばれちゃいましたか。」

精一杯にひょうきんな声を口にして、にやりと口端を持ち上げる。突然に上げた声に少女は驚き、なにやら訝しげに首を傾げた。

「そうですよねえ。人を攫うといった鬼が嘘をつくわけがない」

軽い調子で上げる声。

その言葉が気に障ったのか。一寸、少女のこちらを見つめる目に力が入った。

「嘘……?」

「そつでしようよ。さっき攫つと言っていたのに何もせずに見逃すなんて……」

きっとそれは一番に気に障るもの。

鬼として、少女の『らしさ』として、見逃すことの出来ない言葉。

卑怯な振る舞いをすると同じくらい、少女の誇りに傷をつける言葉だ。

「……」

無言で拳を握り締め、こちらに向ける。

先ほどの続き いや、今度は喧嘩なんかじゃなく。自分を舐めた相手に身の程を知らせるための行為。

恐ろしいまでの気当たりがさつさと消えろとこちらに襲い掛かってくる。

怖い……ですねえ。

それでも、言葉が続けるのは何のためなのだろう。

「そんなに怒らなくても……冗談だったんでしょ? ほんとの目的を隠すための」

これも、自分『らしさ』なのか。
己が己であるための立ち位置の確保なのか。

振り子を揺らさないようにする自分なりの逃げ口上。たたかいかた
そんなものなのかもしれない。

意味のわからないといった表情をする鬼の少女に向けて、それを振りかざすのは自分のためだ。決して、誰かのためなんかじゃなく、ただ自分のやり方を通すだけ。

「確かに・・・直接それを奪われるってのは格好悪い。それなら、喧嘩して勝った方の賞品にするって方が気持ちがいいってもんですしねえ」
気を使ってもらってすいません。

軽い調子にいつて、軽く頭を下げる。
仰々しすぎず。簡単に受け入れてしまえるような気軽さで。
それくらいのほうが丁度いい。
最初のやりとりと同じこと。

「鬼が気に入ってくれるような酒が造れたってなら酒屋も光栄ですよ」
「よ」

差し出すのは、とっておきの秘蔵品。
荷袋から取り出した紫色の瓢箪。

鬼に納める献上品。
人から妖への捧げもの。

「どうぞ持って行ってください」

見逃してもらったための　認めてもらったための古来からの形式行事。
互いがらしく振舞ったための茶番。

「・・・・・・・・」

ぼかんと、口を開けて固まっている鬼。

予想だにできなかったこちらの行動に、思わず思考が止まってしまっているのか。

見えていなかなか面白い。

「おや、信用できませんかね　なら、一緒に呑みますか？」

続いて出た言葉は　ただの酒への未練だったかもしれない。

長年保存し、愉しみにとっていた大事な品。

実は、少し惜しかった。

騙まし討ち。

一瞬そんな言葉が頭を過ぎったが　なんだか口惜しそうになり、
急に「一緒に呑みませんか」などといった男の表情に

「はは・・・あはははっ！」

笑ってしまった瞬間に、なんだか、もうどうでもよくなった。毒気なく。気負いもなく一緒に酒を呑もうだなんて・・・そんなこと、同格の鬼にしかいわれたことなんてない。

そんな緩い表情で、飄々とそんなことを行えるなんてことがあるはずがない。ただでさえ、私はあの時にそれを学んでいるのだ・・・その程度が見抜けないはずがない。

だから、この男は本気なのだ。

「はは・・・はははっ・・・ここまで話を組み立てて・・・最後はそれって・・・」

気が抜けたのか。

妙に気持ちが上がって、笑いが止まらない。

涙が出てくる。

「そんなに笑わなくても　　そんだけ上手い酒なんですって」

言い訳がましく呟く男に、ますます、笑いが込み上げる。

鬼の目にも涙というのが、鬼に笑い泣きさせた男なんて前代未聞だろう。

そんなの情報通である私だって聞いたことがない。

「い、いやっ・・・気を使ってもらったのはわかるけどさっ・・・
つくく・・・」

本当におかしくなってしまうている。

止まらない。

楽しい。

楽しくて愉快だ。

「あははっ・・・腹痛っ・・・」

こういうのを本当に痛快だともいうのか、まあわからないがそんな気分だ。

嘘は嫌いだが、こんな茶番ならなんだか受け入れられる。

馬鹿馬鹿しすぎてどうでもよくなってしまっ。

明るく、私らしく笑って 昔のことなんて冗談みたいなことだと思えた。

酒の席の与太話のようなものだ。愚痴話でもある。

そう考えると、妙に軽くなった感覚。

「 ああもういいですよ。そっちの酒も貰っちゃいますから好きなだけ笑ってください。」

こちらが笑っている隙に上手いこと自分の取り分を増やしている男。まあ、許してやろう。これから浴びるように酒を呑めばどっちにしても同じことだ。

痛む腹を押さえて立ち上がる。

そろそろ笑いの波もひと段落だ。

片手に持ち上げた杯に酒を注ぎ、それを男に向けて差し出した。

男は、一瞬迷ったが、それを受け取って、片手に持った紫の瓢箪を

こちらに渡す。

「よーし」

互いに微笑みあい、「乾杯っ！」とそれをぶつけあった。中身の液体がとぶとぶと心地よい音を立てて私を誘う。

そして、一気に喉に注ぎこんで一言。

「「美味っ！」」

久方ぶりの美味なる酒は、命の洗濯。酒は百薬の長とはよくいったものだ。

一気に飲み干そうとする私とそれを奪おうとする男。酒宴という祭りはまだまだ始まったばかり。

楽しまなけりゃあ損である。

いつの間にか見失う自分。
いつになくわからない『らしい』自分。

そんなときは、好きなことを思いっきりやってみればいい。
上手くいかなくても、失敗しても、とりあえずめっちゃくちゃにやっ
てしまって あとで思いっきり後悔する。

振りきって
暴れきって

揺れきらして

それから
うだうだと愚痴や文句を誰かに聞いてもらう。
そうやって元の位置を取り戻す。

一回りして元通りを狙う。

そんな茶番を演じて見ればいい。
案外、途中でどうでも良くなっていつもの調子に戻っていることだ
つてある。

馬鹿馬鹿しくても、やりきって疲れて休めば………そんな
酒でも呑んでいれば、どうにかなるものだ。

それが美味しい酒なら、なおさらのこと。

それが『私』が『私』でしかない十分な証拠だ。

らしさの茶番（後書き）

前半真面目で後半ふざけ調子？

一応、考えては書いてのですがそんな感じですかね・・・いつもと毛色が違うような気がします・・・なんだか楽しく書けました。

あとは、感想でも増えてくれれば万々歳ですね（やらしい要求ですが、一応、誰かの言葉を参考にしたい考えもあります）。

ご感想・批評もお待ちしております。

読了ありがとうございました。

いつもの飯事（前書き）

求めた感想を頂いておきながら、更新を遅らしてしまつて申し訳ありませんでした。

少々体調を崩していました。

いつもの飯事

「さて……………」

沸き上がる気泡。

ぶくぶくと、その内に巻き込まれた具材が揺れ、浮かび上がっては沈んでいく。

ほどよく空気を含み、呑みこんだ熱に従って流れを起こし、少しずつ……少しずつ、溶け広がっていくのは、その時間によって作り出された年月の粹。成長し、熟成してきたその形自体が溶け出して、一つの形を 調和を作り出す。

自分に出来るのは、そう成りやすい環境を整えることのみ。

その身の内に元々から存在する力を引き出すことにだけ、全力を注ぐ。

それが

「よし」

料理である。

「完成完成……つと」

少し輪郭を崩した山芋が浮かび、細く切り刻んだごぼうが散るその

液体。

山で野生化していた作物の風味。それをそのまま生かして、少々味付けをしただけの特性山菜汁。食欲をそそる温かい湯気と香りには、どこか懐かしさのような郷愁的な雰囲気漂わせるそれは……
・今日の朝食である。

「いやー。お待たせしました」

少々高級そうな膳の上へとそれを乗せ、主食である焼き魚と玄米粥と共に運びこんだ。

その姿に少々彼女は驚き、一瞬目を丸くしたようだが、おほんつと軽く咳払いして気を整え、精一杯当主としての威厳のあるように居住まいを正した。隣で微笑ましそうに微笑んでいる女中さんがそれを台無しにしているが……まあ、そこは突っ込まないほうがいいだろう。

「どうぞ。早朝にとった山菜と川魚でつくったものです。お口に合えば幸いです」

自分もその真向かいに腰を下ろし、渡した方と別の方の膳を前に置いた。

内容は同じ、ただ、相手の身体の大きさを考えて、少々自分のほうを多く盛ってある。少し失礼かもしれないが、まあ、相手も気にしないだろう。

「汁のお代わりは勝手の方の鍋にまだあるので……使用人の皆さんの分も十分にあるんで、そちらの女中さんもどうぞ」

冷めないうちに、という言葉に少し迷ったようだが、正面に座る主が頷き、それを許可したので、丁寧に礼を述べてから出て行った。これで、残ったのは自分とこの屋敷の主のみ。

僅かに開けた障子の隙間から気持ちのいい風が通り過ぎ、静寂を揺らす。

少女は肩を揺らして、「ふう……」と静かに息をつく。

やっと

「付き合っていたいただいてありがとうございます」

肩の力を抜ける状況になった。

「いえいえ、何処の馬の骨ともいえない男を逗留させて、宿まで貸してくれたんです。そりゃあ、礼儀くらいは通さない」と

正していた居住まいを崩し、正座に組んでいた足を胡坐へと組み替える。流石にこの年にもなれば、多少礼儀には慣れてはいるとはいえ、あまり堅苦しいのは柄ではないのだ。

その方が相手も気兼ねなく話すが出来るだろうし……ある程度に気を抜いていたほうが、食事も会話も弾むというもの。振る舞いのみとはいえ、型に嵌められたままの状態では、圧迫感を与えるのみ。

まず、空気の方から揺るませなければ、間合いだって詰められないものだ。

。まあ、これも手を抜くためのいいわけみたいなものですが……

完全に嘘ともいえないのでよしということにしておこう。

その証拠に、少女は姿勢を崩さないまでも、先程よりも少し肩の力を抜いた表情となっている……ただ呆れているだけかもし

れないが。

「本当に・・・食事まで作ってもらっちゃって」

「そっちは趣味みたいなもんですから。こっちこそ無理いってすいませんでした」

ぺこりと頭を下げる少女を制し、逆に頭を上げる。

いくら持ち込みの食材、材料を使用しての料理だからといって、主人の客であるはずの男が許可を貰ったとはいえ、ご勝手に立って朝餉の準備をし始めたのだ。使用人にとっては眉を顰める事態だろう。あまり褒められたことではない。

しかし、折角の食材だったからねえ・・・。

人間は滅多にはいらないう妖怪の縄張りで食材集め。

あまり手の入っていない幻想郷という秘境でのその場には、珍しく新鮮な食材が溢れていた。余程の山奥や長大な時間をかけて探索せねば見つからないような山菜や茸類、薬草などがごろごろしていたのだ。

ついつい腕を振るってみたくなくなってしまふのもしかたないだろう。

ついでに弁当もつくっておきたかったですし

仕方ない。

全員分の食事をつくったということと許してもらおうということにしてもらおう。

味は確かなはず、だ。

とりあえず

「 此度は一宿と一飯の助け、一無宿人に対する稗田家のご温情・
……厚く感謝を申し上げます」

再び姿勢を正し、深く頭を下げ、その礼を述べる。

一瞬驚き、呆けた表情を見せた少女は、すぐ表情を引き締め、堂々とした当主としての表情へと移る。

「こちらこそ 昨夜の有意義な化物諸々の話等。幻想郷縁起の書き手……稗田家当主として、厚くお礼を申し上げます」

互いに深く頭を下げ、数瞬。

「ありがとうございます」

揃えたように同時にいった言葉。

そして、互いに顔を上げて笑いあった。

礼儀作法もやりすぎれば滑稽なだけ、童の遊戯と大差ない

食事は美味しく食べるものだ。

愉し気な会話は、その肴に丁度いい。

そういうもの。

「しかし、これからどうするんです」
「ん・・・？」

食後のお茶。

(これもこの目の前にいる男がいれてくれたものだが)それを口にしながら尋ねる。

あ、美味しい。

今日の朝食といい、このお茶といい、妙なところでこの人は家庭的だ。料理やら炊事やらをどこで覚えたのかはわからないが、下手すれば、専門の料理人よりも技量は上なのかもしれない。

長く生きていただけありますね。

人のことはいえないが、この男を見ているとくにそう思う。
まあ、見かけだけなら全くそんなことは思えない相手なのだが。

「ここに居を構えるのでしょうか・・・必要なら私が用立てますが」

この人を迎える利益から考えれば、それくらいは手間にもならないだろう。

自分と対等以上に知識の交換ができる相手なのだ。自分にとっても、

この里にとってもきつと有益なものをもたらしてくれる。

「いや、それには及びませんよ」

その言葉に、男はにこりと微笑みながら答えた。

懐からなにやら一枚の紙を取り出し、こちらに見えやすいように広げてみせる。

「これは………地図、ですか？」

「ええ、この土地　幻想郷の妖怪縄張り図です」

「は？」

簡易的に描写された山や丘の分布図と川や水路を表した緩やかな線。その所々に書き込まれた文字と丸い印を指差しながら説明を加えていく男。

「ここここは鬼の縄張り。ここは、小妖の群生地………」

この辺りは妖怪の狩場で、ここから伸びてる先には天狗が……

つらつらと、すらすらと当たり前のように語られていく　お

かしなこと。

「え、ええと………ちょっと待ってください」

言葉と共に片手を上げて、その口上を制した。

その紙片を指していた手を止めて、男は訝しげに視線を上げる。

「何かおかしなことでも」といった具合だが………それがおかしなことと思っていないことの方がおかしい。

だって　　- そんなこと、この里に住む誰一人だって知らないはずだ。

「そんなもの、いったいどこで手にいれたんですか？」

広げられた紙。

妖怪の生息地を記しているという地図。

確かに、僅かばかりの伝達……今まで積み重ねてきた里の人々の経験によって、どの妖怪がどの辺りに出やすいか。どこか危険で、どんな場所が比較的安全なのかなどの記録はある。むしろ、この屋敷の書庫……私が書きとめてきたものもつとも重要な部分といってもいいだろう。

それは、戦えない　力なき普通の人々にとっての命綱。

『妖怪に出会わないようにする』

決して破ってはいけない。

生活に溶け込んだ当たり前の鉄則だ。

それでも

だからこそ、私たちは、どこからどこまでが妖怪の縄張りなのかを知らない。

その境界に僅かでも踏み入ったものは　ほとんどは生きてはいないのだから。

まともな者なら、まず、その領域の近くにすら近づかない。腕に覚えのあるなら、なおさらのこと。

けれど……けれど、それには私の知らないことだって描かれているのだ。

その数少ない証言のほとんどが集まっているはずの記録を上回っている。

それは、おかしなことだ。

「 ああ 」

私のいいたいことが伝わったのだろう。

男は、少し納得したような表情を見せた。

「これは………ちょっとした友人の手を借りましてね」

言いながら、茶瓶を持ち上げて、空になっていた自分の器に注ぎ、ついでに、減っていた私の分にも足してくれた。

まだ温かいお茶がちよろちよろと音を立て、心地よい香りが部屋へと広がる。

それを受け取りながら　さらに問う。

「一体誰に……？」

にこりと微笑んで、茶を啜り、男は事も無げに言った。

「ええ、昨日知り合った鬼のお嬢さんにね」

あんなに驚かれるとはねえ……………。

そんな今朝のことを思い起こしながら、目の前の障害となる草木の間を潜るようにして、その僅かばかりに開けている方へとを進んでいく。

片腕を吊っている分、少々進みづらいが、どうやら本当に質の悪い妖怪がいないようなので、その分気が抜けるというものだ。時折気配を感じて辺りを見回すも、いるのは草食系の兎 多少、妖力は感じるが人間に襲い掛かる類ではないものが見えるのみ。身の危険さえないのならば、多少時間をかかっても損はない。

さつすが鬼……………その言葉に嘘偽りはないな。

自分の居場所にしても、誰にも迷惑のかからないところ。

他の妖怪や何かの存在の気に触れないところということとていくつかの居場所を教えてもらった……………稗田の主は驚いてはいたが、きちんと交渉できたなら、鬼という存在ほど信頼できるものはない。多少大雑把なきらいはあるが、その力によって様々な事象に有用な力を貸してくれる。

人里との利便が悪くない誰の縄張りでもないところ……………

……………
そんなあやふやな条件ながら、きちつと仕事はしてくれた。

代わりに大事にしていた酒瓢箪をとられてしまったが……………
まあ、いい取引だったということだろう。入れ物はまた時間をか

けて酒ごと造ればいい。
腰を落ち着ければ、そんな暇も出来る。

そのためにも……。

土地の確認。

立地条件を確認せねばならない。

ここは『幻想郷』。

山勘で住居をおっ建ててどうにかなるといわけではないのだ。

「とりあえず先住の痕跡は無しかな……と」

その辺り一体 多少の範囲を探ってみたかぎり、好戦的な妖怪がいないということは確かなことらしい。何かがいるという気配もなければ、何かがいたという痕跡もない。

時折、小動物や虫々が鳴いているの見かけるくらいである。
平和そのものだ。

「よっこらせ……っ」と

肩に担いだ荷物を降ろし、少々辺りが開けた処で腰を下ろした。

稗田の屋敷を出てから数刻ほど、高く繁った葉々によってわかりづらいが、そろそろ太陽が真上に昇った辺り、昼時といったところだろう。

そろそろ休憩を取っておくべきだ。

一休み一休みと。

そのまま後ろにくぐつと伸びをして、疲れのたまった身体の凝りをほ

ぐす。

不測の事態は起きてないとはいえ、怪我をしている片腕を動かさないようにしている分、他の部分に負担が大きくなっている可能性があるのだ。

不足の事態に備えて、多めに休息をとっておく方がいいだろう。

あんまり無理する必要もありませんからね。

おもわぬ協力者を得て、候補先だけでも決まっているのだ。そう急ぐ必要もない。

稗田の方に迷惑をかけるわけにもいかないが………。

またしばらくは野宿といった具合でもいい。

場所の下見もかねて、辺りを巡りながら転居していくことにでもしよう。

「のんびりと、ね」

まだ、自分が必要とされる場面はきていない。

お呼びがかかるまでは、ゆっくりとしていればいい。

どうせ、何かが起こるときは回ころからやってくる。

巻き込まれるのは毎度のこと。

自分から飛び込む必要もない。

「やてやて」

お次は何がおきるやら………

自分の引きの良さ　ある意味での巡り合せの良さは身に染みている。

それは損とも得ともいえないが、『退屈しない』ということだけは確かだ。

この年にもなると、そんな突発的な事故だとしても一種の刺激だとして呑み込んでしまえるもの。生きるのに飽きてしまつよりはずつといい……そういうことにおいている。

生命の危険に曝されるのはこりこりだが、それを悪くばかり受け止めていては生きてもらえない。そういうのはもう、とつくの昔に通り過ぎているのだ。

喉もと過ぎればなんとやら、とね。

そんなふうに自問自答して

そのように適当な理論を組み立てて

騙し騙しで生きていく。

それが自分の生き方だ。

でないとやってられない人生だ。

それなりにやっていければいい。

だから、この現状も

「大丈夫………そういうことにする、と」

そう呟いて、ふっと一息。

諦め半分、樂觀半分。

ちやらんぼらんに現状を受け止めて、軽い気持ちで対抗策を考える。経験だけは人の人生の何百倍以上も積んできているのだ。きつといい方法もあるだろう。

「年寄りの知恵袋つてね」

一人呟く言葉は、辺りの閑散とした空気の中に消えていく。

辺りを囲うのは、真っ直ぐに伸びた中空の植物たち。

鮮やかに緑を照り返す竹の林は、回り全体を囲っていて、どこをどう通ってきたのかすらわからない。つけていたはずの目印や当たりをつけていたはず方向感覚もどこかしらからずれてきている。今はもう、当てにはならないだろう。

何やらおかしいとは思ってたんだが……なるほどねえ。

妖怪のいない場所。

誰の縄張りにも出来ない居場所。

つまり

そういういわくつきの場所だということ。

「感覚を狂わせ 訪れたものを迷わせる」

自然にできたものなのか。

はたまた、誰かや何かの手が加わったのか。

どちらにしても どうやら簡単には自分を逃がしてくれないらし

い。

「一度抜けれたからって樂觀しすぎましたかねえ」

昔一度訪れたはずの場所。

この土地に初めて訪れた時には抜け出せたはずの場所。

けれど、それはもう随分昔。

世界というのは、目まぐるしい速度で変化しているものだ。経験や記憶が当てにならないことだってざらにある。

そういうものに捕まった、ということなのだろう。

予想を上回るものに出会えた。

そう思い込めば悪くない。

「そういうことに………しておきましょう」

もう一度呟いて、息をつく。

目の前の竹林は、何も応えてはくれないが。

とりあえず、飯でも食いながら考えますか。

現実から逃避するようにして、置いておいた荷を探る。取り出すのは、今朝の作り置き。

腹が減っては戦は出来ぬ。

それを知っているぐらいには成長はしている。だからよし。

時の流れは残酷だが、その積み重ねは裏切ることはない
老兵迷えども、戦場に弁当は忘れず、といったところである。

いつもどおりの食事。
いつもどおりの生活。
いつもどおりの暮らし。

まるで、時が止まってしまったかのように変わらない。

それは本当に。
本当に

「
退屈ね」

ぽつりと吐き出した言葉は、そのままの形で辺りへと響き、薄く消える。

変わることはない『いつも』
私を捕らえて放さない『いつも』

退屈な日常。

それを捨てたくて
それから逃れたくて

私はそれに手を出した。

変わらぬ私を変えるために。
変わろうとしない世界から逃れるために。
ほんの僅かな希望を抱いて、罪を犯した。
微かな憧れを満たそうとした。

けれど

知ってしまえば、戻れなかった。

私は

変わるということを知ってしまった。
だから、彼女に縋ったのだ。

私の我がままに付き合い、私の願いを叶えてくれて
そのことすら、自らの罪として抱えてしまうような優しい友人を、
私は巻き込んだ。
自分の欲のために。

確かに、私は穢れているのだろう。
確かに、私は毒されているのかもしれない。

それでも、そうしたかった。

これは、そのための弊害。
罪を償うための時間なのかもしれない。

「姫、お食事の準備が……」

「ありがとう永琳。でも、今日はいらないわ」

僅かばかりの空間から採れた野菜。

数少ない食材から造られた端正な料理。

見るからに手がかかっている

見ただけでその美味しさが伝わってくるようで

それでも

それがずっと続けば、飽きてしまうのも当然のこと。
ずっと変わらないなら、何も感じなくなってしまう。

ただの愉しみにすら……ならない。

平坦な『いつも』という道。

「それよりも 永琳、あなた無理をしすぎてるんじゃない？ わざわざ、毎日食事を作る必要なんてないのよ……私たちには」

そんな言葉に、彼女は困ったような顔をしながら「大丈夫」といっ

て微笑んでみせる。

このくらいのことしかできないという自責からなのか　それとも、ずっと抱えたままの罪の意識によるものか。どちらにしても、それは私のためのものだろう。

あなたにも、ちゃんと笑っていてほしいのに。

私の好奇心から始まったもの。

その償いに、付き合いされる友人の姿。

『いつも』から逃げ出した先で見つけたのは、どうやら確かに罪人な私の姿であった。

あと、どれほどの時を待てばいいのだろう。

それはわからない。

いつ、許されるのか。

いつ、逃れられるのか。

せめて、この不器用な友人だけは……

ずっと、私の犠牲になる必要はない。

ずっと、私ばかりに構っていることはない。

離れたくないけれど、幸せにもなってほしい。

未だに抱えたままの我がままが、ゆっくりと私を締め付ける。
そんな都合のいい夢想が泡沫のように浮いては消える。

こうやって、『いつも』は過ぎて行くのだ。

変化しない退屈の中、絶えず巻き起こっては消えていく後悔と懺悔。
懐かしい思い出と過ぎていった記憶たち。

少しの幸福と諦感。

好奇心は猫をも殺す。

そして、退屈は『永遠』を色褪せさせる。

「はあ……」

踏み出したのは、僅かに含まれた庭園の中。
領域内の数少ない緑の場所の内。

やめておけばよかったのかもしれない。

そんな手前勝手な考えが浮かんだ時。

そんな諦観の思いに至ろうとした時。

停まった刻の中に、一つの風が吹き込んだ。

ふと見つめた先にあつたのは、今まで無かつたはずの道。
まるで、誘うように口を開いて待ち構える　一つの可能性。

何かの罠かもしれない。

何かに巻き込まれてしまふかもしれない。

あからさまな歓迎に、危機察知の感覚が大きく叫ぶ。

それでも・・・

この先で待っているものがある。

鬼か蛇か。

化物のような人間か。

それでも、道を示してくれていることは確かだ。

手段も思いつかず。

方法もわからない。

そんな迷い人にできることは二つだけ。

その場に留まるか。何かを見つげるために進むのか。

前者は他人頼り。寄る辺が無ければ意味が無い。

ならば、とにかく自分で進むしかない。

たとえ、その先が化物の胃袋の中でも、それを食い破るほどの覚悟

を持って　　はたまた、いつでも逃げ出せるような余裕を持って
前へと進む。

まあ、どうにかなるでしょう。

年寄り特有の楽観をもって、いつもに通りに歩く。

それが、自分なりのやり方で、ずっと続けてきた方法だ。

そのために、逃げ口上と忍び足だけはいつちよ前。

煙に巻くのは得意技。

だから

「　　おや。お久しぶりですね」

その先で見つけた憂鬱そうな少女にこういったのも必然いつものこと。

「　　」
「ご退屈なでしたら、ちょっと珍しい食べ物でもいかがですか？」

退屈を紛らわせるために。

ひいては、わけのわからない難題を思いつく前に。

誰も腹いっぱいいっぱいの時に暴れたくはない。

騙した相手との再会には、手土産の一つでも持って誤魔化すものだ。
何でもいいからうやむやにしまえ。

にやりと微笑んだ少女の笑みを、どうにかこうにか受け止めながら
必死で言い訳を考える。その時間稼ぎのための犠牲に差し出す

なら、手間暇かけた弁当も惜しくない。

その後ろから現れた人物によって、ますます窮地に追い込まれた自分を助けるために。

全く、飽きない人生だ。

厄介ごとには困らない。

日常茶飯事は変わらない。

そういう『いつも』を歩んでいる。

いつもの飯事（後書き）

上手いこと地雷を踏んで、その解除に四苦八苦する人生。それに慣れてきている自分を笑ってしまうような日常譚。

今日も今日とて彼は彼。

そんな感じということだ。

ちよつと体調不良が長引いているので本調子とはいえませんが、
— 応できましたので更新です。

もし、おかしい所があればご指摘ください。

失敗の続き（前書き）

遅く、なりすぎましたね。

発表後も日常が立て込んでおります。

言い訳でもあります、

失敗続きとしてもよし、ですかね……。

お待ちくださっていた方々、ありがとうございます。

失敗の続き

「……………それじゃ」

「おや、もう食べ納めですか？　では、舌休めの甘味などいかがでしょうか」

箸を置き、話を切り出そうとした瞬間を見計らうようにして投げられる言葉。

むぐ、と開きかけた口を閉じ、にこにここと笑う男の顔にじろりと目を向ける。

そして、一言。

「……………いただくわ」

「それでは用意します」、

あからさまな誘導。

けれど、目の前に吊り下げられたその餌の誘惑には勝てず、精一杯つくろつてのすまし顔でそれを望んだ。男はにこりと微笑んだまま、丁寧にお辞儀をし、くるりと振り向いて調理場のある奥へと消えてゆく。

残されたのは、口元に手を当てて微笑む従者と懨然とした顔で息を吐く私。

「やられましたね」

「仕方ないじゃない」

楽しそうに笑みを浮かべる永琳。

それから顔を背け、膳の上に置かれた湯呑みに手を伸ばす　これもまた、あの男が用意したものだ。それなりの味はするのだが、やはり釈然とした気はしない。

まあ、美味しいからいいんだけど・・・。

妙に手馴れた動きで料理をこなす男。

初めの誘いにどんなものかと乗ってみれば、すっかり雰囲気は有耶無耶、会話の主導権もあちらに握られてしまっている。この前の落とし前をどうつけてあげようかしら、なんて考えていたあれそれも一体どこへやら、だ。

それもこれも

「お待たせしました」

すつと襖を開けて姿を表す男。

その手に持たれているのは、一節一節に切り分けられた腕ほどの太さの竹。

「・・・・・・・・・・？」

何だろう、と首を傾げるこちらに男は悪戯気に笑い、それをぱかりと真ん中辺りで開いて見せた・・・・・・・・ぶわっと広がる湯気の中から現れたのは、竹の葉でくるまれ、いい具合に蒸された甘い餅。豊潤に香る新鮮な青竹の香りを吸い、独特の風味に仕上がっているそれに、思わず喉がなる。

甘いものは別腹とはよくいったものね……。

昔、永琳に聞いたことがあるが、実際、好物などを目にする、それを吸収しようとして胃袋が収縮し、必要な隙間を空けるといふのがあるらしい。さっきまで散々に詰め込みきつたはずのお腹に若干の余裕が出来て、舌鼓を打つための準備もいつの間にか整っている。身体の仕組みというのも現金なものだ。

必要なくても……だからこそ、快楽が必要なのだよ。

だから、流されても仕方がない。
そんな理論武装。

まずは、目の前の難敵を片付けることに全力を傾けることが大事で、逃がしさえしなければ大丈夫。

時間はまだまだ、いくらでもある。
急ぐことはない。

目の前の愉しみを味わいきってからでも、遅くはない。

「馳走だったわ」

「お粗末さまです」

綺麗に空となった器。

幾度かのお代わりを要求しながらも、上品にそれを食べきったお姫様に、多少大げさなぐらいに丁寧な礼を返す　打算も利害も誤魔化しも・・・全て込みの口手八丁煙に巻く類のものだが、その幾分かには詫びが入れられていることは確かだ。決して虚偽の態度だけではない。

なにやら、嘘つき常習犯のいい訳みたいだが。

本当に、『嘘』だけではないのだ。
そういうと、よりそうらしくなってしまうが。

まあ、こんだけ喜んでもらえりゃ、つくった甲斐もありますしねえ……………。

多少、文句あり気にしながらも、出した料理を全てたいらげていただけなのだ。舌が肥えているだろう人間に少しは認められるものだったというなら、それをつくった自分としても気分は悪くない。

「では、洗い物でも……………」

「それには及ばないわ」

そのまま流れるように調理場へと移動しようとしたところに、「ちよっと待った」と声がかけられる。

「客人にそこまでのことはさせられないわ　永琳」

「ええ」

心得ている、というばかりに素早い動きで食器を回収し、そのまま

調理場へと消えていく有能な従者。隣を抜ける際、「絶対逃がさない、そうよ」とぼそりと伝えられて　そうそうに肩を落とした。

はあ……。

ぱたり、と音を立てて閉じられた襖。

残されたのは、優雅に微笑む　とても愉しそうなお姫様と情状酌量の余地を求める罪人。

そろそろ、執行猶予の時間は終了らしい。

「判決はどうなりますかね」

「虚偽申告に無礼罪……料理は美味しかったから、多少は譲歩の余地はあり、といったところね」

そりゃ光栄です、と空笑いを返し、自分の入れたお茶を啜る　かなり長い間保存されていただろうはずのそれは、旬のものほとんど変わらない。

とても、新鮮な味がした。

停まっている……か。

変わらない。

変化しない。

不変を感じさせるそれは　あの時間を思い起こさせる。

これもまた過去の記憶……。

穢れなく、尊い。

ぞつとさせるほどに清浄な空間。

それをその身にはらんだ自分が追い出されたのも 逃げ出したのも当然のことだったのだろう。自分が、自分の身体が、どうしようもなく不純に、特異なものなのだを意識させられる。

『はずれ』なのだ、理解する。

ま、そうはいつでも

記憶の中にあるのは、そこから零れ落ちたからこそ見つけた日常。今の自分を積み上げた思い出の時間。

流れるからこそ、岩をも穿つ・・・とね。

そつという生き方を教えてくれた。
そんな生き様を示してくれた。

そんな人たちに出会えたのは、自分が『はずれ』だったから。
だから、見ようによっては、それは『当たり前』だったのだ。

全く・・・人生、生きてみなけりゃわかんないもんです
ね。

あらためて 昔の自分を改めて、そう思う。

それを強く実感するのは、また、こんな場所へと戻ってきたからな

のか。

郷愁………というのも変だが、これも一種の懐かしさつてもんなのかもしれないですねえ。

昔と違う。

過去を強く感じたからこそ、今の自分をより深く知ることができる。

そういうのも、悪くない気分だ。

「！！！」

そんなふう悦に入っているときに、ふと、耳に入るその音に気づく。

そして、今、自分が何を前にしていたかを思い出す。

「ちよっと！………話、聞いているの？」

つと………

過去に向いていた視点を慌てて現在へと揺り戻し、目の前で綺麗に微笑む少女の顔へと焦点を合わせなおした。

「ねえ………ちゃんと聞いていたのかしら？」

「いえ、あの………」

びくびくと苛立ち、震える笑顔からは　そのまま表情に出すよりも、よりそれらしい妙な圧力がにじみ出ている。嵐の前の静けさというか………拳を振り出す前のための部分というか　とても、危ない感じだ。

ああ、失敗した。

少々、昔のことを考えすぎた。

過去を思い出して、今を忘れているなんて、本当に年をとった証拠だ。

全く、惚けているにも程がある。

「情状酌量の余地無し、ね」

火に油……というよりも火薬を放り込んだようなものか。

傷口に塩を塗りこめて、さらには、竜の逆鱗を引き剥がすまでに強く引つ張った。

煙に巻くどころか……狼煙を上げて、自分の居る場所を思い切り叫んだ。

つまり、これは

「さて、どうしてくれようかしら」

大失敗……ってことですかね。

たまには、こついうこともある。

そついうのも悪くない

なんて、そんな強がりで言い訳しておこらう。

かちゃり、かちゃり……………。

そんな音を立てて、一つ一つ丁寧に食器を戸棚へと戻していく。場所をとらないよう、崩れて倒れてしまわないように、並べて、重ねて……………。

こんなことをすることになるなんてね……………。

昔は考えもしなかった。

薬品や実験器具以外を片付けることなんてほとんどなく。たまにする気分転換の料理も、後片付けは使用人任せ。それが当たり前だった。

それよりもすべきことがあると思っていた。

そう考えていた。けれど

「……………やってみると、意外と楽しいものね」

時間を無駄にするようなこと。

今までなら、やらせてもらえないようなこと。

けれど、それを体験するという初めては、なかなか嬉しいものだ。いかに自分が恵まれた場所に立っていたかを理解できる。

私も姫さまのことをいえやしないわね。

教育する側に立っていながら、まだまだ知らないことばかり。教えられるものなど、ほんの僅かにしかもっていない。

成功ばかりしていた……だからこそ、知らないことがある、か。

昔、誰かにいわれた言葉。

私は……。

そこにいる誰よりも優れた才を持っていた。

どんな実験にも成果を出して、数え切れないほどの価値あるものを生み出してきた。

その世界を担う存在としての意味を示し、並べることが出来ないような成功を収め続けてきた。

月の発展の何割かは、自分のものであると喋っていたかもしれない。

それほどの力を、私は持っていた。

だからこそ、知らない。

そんな引け目が　その恐れが、輝夜をとめられなかった理由の一つなのかもしれない。

ずっと続いてきたその成功が、全く同じ続きもの。薄っぺらな積み重ねにしか思えなくなってしまう。ただ、それを惰性で続けてきただけの、軽薄なものにしか感じられなくなる。

ずっと溜まってきた何かが　そう、思わせる。

こんなこと………考えていても、意味が無い。

答えなんてでるはずがない。

それも、理解している。

けれど、心は元には戻らない。

気持ちの切り換えに、『失敗』する。

「はあ……」

小さく息をついて、胸の内側で渦巻き続けている何かを吐き出そうとした。

心ではなく　思考でそれを塞いで、いつもの調子を取り戻さなければならぬ。

もうそろそろ、私が戻ってもいい頃。

すでに、片付けは全て終わって、後始末も済んでいる。いつまでもここにいない必要はない。

「　あちらはどうなったかしら」

ぼつりと呟いて、今の状況。

訪れている客人のことを思い起こす。

いつかの記憶。

数少ない『失敗』。

その中心にいたもの。

どれだけ騙されようと

どれだけ酷い目にあわされようと

決して、償いにはなりえない。

私が彼に行った罪は、それほどに重い。
幾度殺されようと足りないほどに。

なのに

なぜ、彼は

「おや、もう片付け終わっちゃってましたか……………」

私の前で笑っていられるのだろう。

「すみませんね……………それじゃこれだけでも」

片手に乗せた茶器の類。

二人分、残しておいてきたものだ。

それが水場へと置かれ、「さて……………」と小さく呟いた男が、袖をまくる。

そして、かちやかちやと手馴れた音。

「あなた……姫さまは？」

突然後ろから現れて、洗い物を始めた男。

客間で自分の主人と話をしているはずの男に　疑問の声を投げかける。

うまく凌いで逃げ出したのか。

何かの飛び切りの償いを用意していたのか。

どうやって輝夜の暇かんしゃくつぶしから逃れられたのか。

「ああ」

手早くそれを終えて、水気を切るように逆さまにして隣の棚の上に置いた。

そうしながら、濡れた手をふるふると振り、近くに置いたあつた布巾で拭う　妙に板についているその一定の流れは、何か男の今の性質のようなものを表しているのか。

昔の様子からはまったく想像の出来ない表情で、にこりと笑い

「食べ過ぎて眠いから……今日はもういい、だそつで」

そついった。

聞いた傍から肩の力が抜けて、小さく嘆息が漏れた。

どうやら、彼女もいい具合にこの永遠の時間に染まってきたらしい。

確かに、私たちにとって急がねばならないことなんてほとんど無いのだけれど………。

少々、彼女のこの先が心配になる有様だ。

教育係件従者としても、少し責任を感じてしまう。

「ま、のんびりしてるってのもいいことですよ
せかせかすることはない。

そういつて、からからと軽い調子で笑う男。

あまりにも気が抜けてしまう状況に、頭を抱えて再び溜め息をつく。

なんだか、おかしな気分。

狂いっばなしの調子。

狂わされっばなしの感覚。

本当に……

おかしな、調子はずれな一日だ。

「だから、わざといくつかの穴を……」
「なるほど……」

そういうことか。

ふむふむと、納得がいったというのを示すように幾度か頷いて、口元に手を当てる。

腑に落ちた　　というよりも、そういうこともありそうだ、なんて感じの感覚だが、自分たちのような存在にとっては、理由なんてそんなもので十分だろう。

なかなか危ない橋のような気もするが……まあ、そこからへんの条件付けは上手くやっているのだろう。

全てを拒絶するはずの結果。

何ものからも覆い隠して、全てを隠し通してしまふ領域。

そこに　　わざと、抜け穴を用意しておいた。

外敵にはばれぬよう。

敵意だけは通さぬよう。

目的の存在だけを引き込むように。

しかし

「そんなに恨まれるとはねえ」
「考えても見なかった。」

「まあ、半分は気まぐれというか……暇つぶしのようなものだろうけれど」

完全な拒絶よりは、ほんの僅かにでも風通しがあった方が都合がい

いのよ。

軽く苦笑いのような表情を浮かべながら、彼女は自分達が座る縁側の先、その端にある色の変わった地面を指差した。そこには、等間隔に植えられた緑の葉と　白やら黒やらの様々な色をした兎達。通常のものよりはふた周りほど大きく見えるその妖怪化した動物達が、拙く　お世辞にも上手にとはいえないほどながらも、畑を手入れしているのが見える。

時折、その境界領域の内外を出入りしている様子から、多分、あの者たちもその条件の内側に入っている存在なのだろう。

「労働源・・・ですかね」

「ええ、怪我の治療と避難所なんかを対価とした、ね」
あまりきちんと言うことは聞いてくれないけれど。

言った瞬間。

ひゅんつと鋭い音を立てて白い線が伸びた。

視線の先には、育てているはずの作物に向かって大口を開けている兎　の目の前に空いた小さな穴。はつと何かを思い出したように、その兎は身を震わせて後ろ振り向き、作業に戻る・・・多少、思考能力はあるようだが、やはり、まだまだ動物としての本能の方が強いのだろう。あまり、信頼には値しない小作人たちだ。

「やっぱり月の者たちのようにはいかないわね」
いくら注意しても次の日には忘れてしまうのよ。

ふう、と疲れたように息をつく。

やはり、その収穫量は芳しいものではないのだろう。

まあ、妖怪としての年月は薄そうだし・・・仕方ないだ

ろう。

元々飼いならされていない野生の兎。

人のいったことをきっちり守ってくれることなんてありえない。

言うことを聞くとすれば、よほどの指導力のある人物が、群れの主の命令ぐらいだろう。

「気長にやっていくしかないわね」

時間は有り余るほどにあるのだから。

気の長い言葉。

けれど、自分たちにとっては、ほんの僅かにしかすぎないかもしれない時間。

「そうですね」

時間を経るにつれて、この今は弱小妖怪にすぎない兎達も知能を発達させる。

知恵を身につけ、知識を蓄え 新たな存在へと昇華していく。

そして、それを実感して初めて、その間に流れた時間の長さを知るのだろう。

変わらない姿のままに、変わり、過ぎていったものに学ぶ。

先ほど感じた懐かしさと似たようなものだ。

昔を知りて、今を知る。

「.....」

目を細め、微かに見える空を眺めた。

周りを囲う結界によって多少見えにくくなりながらも、それは青く

遠い昔から変わらない。沈み始めた太陽によって橙染まる様も、

夜の帳の中に見える星々の僅かな瞬きたちも 変わらない。

それだけは、記憶と重なるまま。

「ごめんなさいね」

ぼうつと。

少し開いた空白の中でぼつりと声がした。

隣を見ると、同じようにその空を眺めながら、長い銀色の髪を押しさえる姿。

微かに通り抜けた風に、その特徴的な二色の衣服が靡く。

「本当は、貴方を巻き込むなんて……貴方を恨みに思う資格なんて、何処にもないのだけれど」

後悔。

追悔。

はるか昔に負った罪悪が、今の自分を苦しめる。

背負い続けた肩の荷が、その身に食い込み痛みを叫ぶ。

遠く巢食った想い。

……

恨み辛み。

零といえは嘘となる。

それが　その暗闇が残っていないわけではない。
今でも、あの日々を、あの時間を思いだせば、沸き上がる何かがある。

けれど

「　　きになるともいえないか」

「・・・？」

いえいえ、なんでもありません。

首を傾げるあちらに、片手を振って答えた。

本当に、ただの独り事だ。

もう、一人分にも満たないぐらいの、ね。

遠い昔のこと。

忘れるぐらいの　それでも忘れられないことだとしても、それを
晴らすには、もう時間が経ちすぎた。感情のままに暴れるのなら、
初めに再会したときに既にやっている。

年もとりましたしね・・・。。

老人に、そんな体力は残っていない。

あるのは、昔の出来事を思い返して微笑むだけの思い出話ぐらい。

例え、彼女がその原因の一つを担った存在なのだとしても

例え、彼女がそれを自分の罪だとして背負い続けてきたのだとしても

自分には関係がない。
他人の罪悪感に付き合っ
て復讐をするほどの優しさ
なんて持ち合わせていない。

もともと、原因たって、ただの要因の一つってだけですしね。

それをいっただら、完全な大元を辿れば、それは自分に、辿りつく。自分が生まれたとき、それは始まったのだから。

だから……

「それじゃ、碁の相手でも頼みますか」

ぽつりと一言。

ゆるく呟く。

「え……？」

隣にあるのは困惑の表情を示す月の大頭脳。

この星が始まって以来の天才の一人。

「将棋でもいいし、一緒に茶を呑むのもいいかなんかを用意してくれるのもいいですね」
それが上物なら万々歳。ま、たまには酒

つらつらと言葉を並べ立て、流れるように口ずさむ。
ますます広がる困惑顔に、にこりと意地の悪い笑みを浮かべてそれを楽しむ。

「なかなか相手がないんですよ……数千以上も年下に対

して本気を出すのも迷惑をかけるのも大人気ない」

その点、彼女ならたかが数十か数百程度……はつきりした年齢は忘れたが、多分その程度のはず。

「どうです？」

相手してくれますか。

縁側から降りて、その美しい庭に足をつける。

手入れこそあまりされていないが、辺りを囲う竹林だけでもなかなかのもの。

「えっと……」

困惑気な呟きを後ろに聞きながら、地面に手を寄せて、寄ってきた兔に食事の余りの野菜を渡した。その場で食べずに、群れの集まる巢のほうへと駆けていくのはやはり知能が発達している証拠か途中で我慢できずにつまみ食いしていたが。

「貴方は……それでいいの？」

本当にそれで。

そんなものでいいのか。

そんな感情の揺れを表すように、その瞳が揺れている。

昔にはまったく見たことのない表情だが、なんだか、昔よりも親しみが沸くような気がした。

こういうのも、新しい発見、ですかね

くくつと口元だけで笑い、彼女の方へと振り返った。
そして、緩い調子で自分らしくしゃべる。

「いえね。ちょっと姫さまの機嫌取りを失敗しまして
そう。」

こういう『失敗』も自分らしいものだ。

「その罰に定期的な調理番を任せられてね……どうせこ
こにくるのなら、何か愉しみにでもするものがあつたほうがいいで
しょう？」　ねえ、竹取の姫さま

呼びかけるのは、その従者が座る縁側よりももっと奥。
襖一枚隔てた向こう側。

「ええ、そうね」

かたりと音を立てて開かれた襖から現れる黒髪の少女。
悪びれずに微笑みながら、優雅な仕草で自らの従者の方を抱きしめ
た。

「私の大事な永琳の話相手になつてあげて頂戴……ただし、
失礼なことしたら承知しないわよ」

「ええ、畏まりました」

こちらも、出来るだけの慇懃な礼をして、その慈悲に感謝を示した。
互いの笑みは、ひどく場違いなものであつたけれど。

それが失敗かどうなのかは、生きてみないとわからない。

その企みがどうなるものなのかも。
いずれそれが破綻するのかどうかも。

先のことはわからない。

まあ……………。

それでも、彼女が浮かべた困り顔の笑みは、
なんだかとても素直な
ものに思えた。
なら、悪くない。そういうものだろう。

明日は明日。

今は、今の風が吹いている。

そういうこと。

失敗の続き（後書き）

色々と過去話。

ふわふわしすぎた過去話。

少し推敲が甘いところがあるかもしれませんが……妙な点はご指摘ください。

読了ありがとうございました。

ご批評・ご感想もお待ちしております。

手を伸ばす先（前書き）

『遅くなりました』が前口上のようになっていきます。
すみません。

手を伸ばす先

「 やつと出れた……」

時間にしては、たった半日程度のことだが、体感的には妙に久しく感じられる木葉を通さぬ強い日差し。片手を上げてそれを遮り、目を細めながらも 一応の迷い人卒業に、安堵の息を漏らす。

といっても、条件付の仮釈放だが……まあ、これくらいですんだことを良しとしよう。

定期的な労働の義務。

なにやら姫さまの戯れか遊びの一環のようにも思えるが……それくらいのものであれば、さほどの負担にもならないだろう。料理すること自体は嫌いではないし、舌の肥えた相手をどう満足するかを考えながらの調理は、腕を錆びつかせてしまったの物忘れ防止には丁度いい。

最近はや戦料理ばかりだったですしね。

そこにあるだけのものに対して臨機応変に対応する。

それが根無し草の風来人にとっては必要必須な能力であり、重要な技術であったとはいえ やはり、周到に準備を重ね、長い時間にかけての仕込を終えておかねば手を出せない領域というも存在する。特に、その材料集めや必要物資の準備などはその類たるもの。在り合わせのものではどうしても限界があるというのは当たり前のことだ。

じっくりと考えることのできる時間……そういうのも大切なもんですしね。

時間が足りない。
考える暇がない。

そのために何かを諦めなければならないのは　とても、悲しいことだ。

妥協や譲歩。

それなりの折り合いをつけねばやっていけない人生なのだとしても、だからこそ。

それに手が届くというなら、なおさらのことってね……。

努力だけで足りるといふのなら、そうしない方が損というもの。時間だけは、有り余るほどにある自分……と連中だ。多少の待ち時間というのも苦ではないだろう。

だから、腕によりをかける愉しみもある。

「　そういう機会が出来たってことにしときましょう」

他の利も自の利も、この歳になるとそれほど変わらない。
上手い具合に暇つぶしの要素ができた、己はそういう考え方ができる老人である。

「　なんてねえ……」

思いこめたら勝ちというもの。

なの、だが……

「 やつと見つけたわ」

やつと抜けた竹林の外には、手間をかけさせやがってこの野郎という表情でこちらを見つめる紫の少女。疲れたような声は、その費やされた労力の分だけの苛立ちを詰め込んだ悪意の度合い。

仕込みは万全、か……

こちらに罪はなくとも理不尽に降りかかるのが災難というもの。そしてそれは、なかなかの確率で積み重なって押し寄せる。

さてさて……

お次はどんな題目か。

その場しのぎの即興劇を披露する前に 嘆息を吐き出し、我が身を憂う。

そろそろのんびり一服とでもいきたいものである。

芳醇の夏の香。

濃い緑に覆われ、強い生命力に溢れた植物のにおいが辺りに満ち、

様々な虫たちが一斉に奏でる統一感のない合唱は、その大気の熱と共にうつとつしいほどに自らの暑さを演出する。生命に満ち溢れ、先の季節に向けての銘々精一杯の姿を主張する。

それが、この日長の季節であり、夏というもの　そのはずである。
けれど

「
」

ここには、何の音色も響かない。
静寂に沈着した空気の中、時折通り抜ける風の声だけが空しげに鳴るのみである。

「　遅いわね」

何も　誰も傍にいない場所で、ぼそりと小さく呟いた。
ほんの僅かなその声は、思う以上の質量をもって屋内に響き渡り
改めて、この世界の寂しさを知らせる。

ああ、まだだろうか。

早く。

早く来て欲しい。

ぽっかりとした胸のうちに描くのは、もはや、ただ一つしか残っていない像。

もう、飽きてしまったのだろうか。

ほんの僅かな繋がり。

ただ一つしか残っていない連なり。

妖と人。

化かす側と化かされる側。

騙す方と騙される方。

それなら、これまでの関わりもただの気紛れであったのだろうか。
それなら、今までの想い出も全て偽りであったのだろうか。

向かうからは簡単に断ち切れてしまうもの。

こちらからは縊るしかない寄る辺。

ただの哀れみで、それにもう飽きてしまったのなら　これで終わ
ってしまったのだろうか。

なら、いつそ……

終わらせてしまうのもいいかもしれない。
壊してしまうのもいいかもしれない。

これで終わり。

それで最後。

もう、嫌われることもなければ、殺してしまうこともない。

脳裏に浮かぶのは、季節外れに咲き誇る薄紅の灯り。
積み上げられたその　の香は芳しく己を誘う。

「……………」

いつの間にか、自らの首筋へと指が伸びていた。
このやせ細りきった白い指では頼りないが、同じほどに弱りきる枯れ枝のちならば、どうにか摘み取れるだろう。
多少の苦しみなど、厭わない。

これで、やっと……

あとは、力を込めるだけ。
それだけで終わ

「待たせてしまったわね。ごめんなさい」

ふつりと、意識が飛んだ。

先ほどまでのことが、まるで霧でもかかったかのように曖昧になり、その時抱えていた気持ちがどんなものだったのかすら、よくわからなくなる。覚えているし、理解しているのに、それは別人の記憶を見ているような違和感しか感じられない。
考えるのは、それよりも

「紫！ 遅いじゃないの」
随分待ったのよ。

頬を膨らまし、怒った振りをしながらも込み上げる微笑に口角を上げる。

まるで、気分が反転してしまったかのような明るい感覚だ。
さっきまでのことなんて、もうどうでもいい。

「ごめんなさいね」
ちよつとお土産の準備にとまどつちやつてね。

ばつの悪そうに微笑みを浮かべながら、私の隣に腰を下ろす紫。
どこか申し訳なさそうな雰囲気を漂わせながらも、その瞳は優しげ
にこちらを見つめている。私を想っていてくれることがわかる。そ
れで十分だ。

「お土産？」

私の親友。

たった一つの繋がり。

一緒にいても、んでしまわない相手。

「ええ」

隣に座って、隣で笑って。

私と話して、私に触れて。

当たり前のことをしてくれる相手。

「何かしら？」

たんなる会話。

それだけで、冷えた身体が、何処か暖かくなるように感じる。
陽だまりを見つけたような、柔らかな気分になる。

「それはね……」

そついいながら、彼女は自分が通ってきた襖の方を指差した。小首を傾げながらそちらを見ると、すつとそれが開く。

「どんな扱いですかねえ……………まったく」

そこにいたのは不満そつに顔を顰める男。

両手に抱えているのは、人数分の茶器ののつた盆。

「お茶と……………お茶請けはまだかしら」

「弁当代わりですかい」

はあ、と軽い溜め息をつきながらその盆を置いた。そして、こちらに向き直り、軽く頭を下げる。

「お邪魔してます すいませんがいくつか器をお借りしました」
ちゃんと洗って片付けますんで。

そついつてにこりと笑んだ後、くるりと振り向いて、再び屋敷の襖の奥へと消えていく。

それを当前のように受け止めて、お茶を配る紫。

調度いい具合に冷まされた茶は、夏の暑さに渴いた喉には調度いい具合だ。

え、ええと……………。

多少混乱しながらもそれを受け取り、一口口に含む。

茶葉の類は確か切らしていたはずなので、あの男が持ってきたものだろうか なかなかかに美味しい。良いもの使っているというよりも、何処かこなれた味がする。

それに、少し懐かしい。

「あの人は、確か……」

何処かで会ったことがある。

ほとんどあっけにとられていた状態だったので、ちゃんと確認は出来なかったが、確かに見覚えがあった。あれは、ずっと昔の……

いや、そんなことどうでもいい。

そんなことを考える必要はない。

それよりも危惧すべきことは

『こつちに いで……』

ぞつと、背筋が寒くなった。

今まで重ねてきた罪業が　今まで失わせてきたその数々が、肩へと押し掛かる。脳裏に浮かぶ数重の情景に、息が乱れ、胸が苦しい。

私、私は……！

「紫、あの人を　」

まだ、その影響を受けていない。

まだ、私の力に障っていない。

それなら、間に合うかもしれない。

ハヤク

『アナタモコチラヘキナサイ』

「はやく！」

狂ったように手を伸ばし、その細い肩へと掴みかかる。
弱りきった体を叱咤し、詰まる声を吐き出して、友人へと懇願する。

これ以上、繰り返したくない。

誘っているのは、私なのか　あの桜なのか。
それは私のせいなのか　あれのせいなのか。

もうわからない。

ただ、怖い。

近くに寄って欲しくない。

私の近くで　なないで欲しい。

ただ、それだけが頭の中に。

「大丈夫よ………幽々子」

ふっと、私の肩を抱く温かさを感じた。

「大丈夫………安心して」

ふわりと頭を撫でて、その体温を分け与えてくれる。

冷え切った身体に温もりが染みて、少しずつ呼吸が楽になる。

「でも……」

「あの人は大丈夫」

背中に置かれたふわりと置かれた手。

とんとんと、心地よい間隔で響く感触が、気分を落ち着けてくれる。

「あれには、そんなものは通じないわ」
だから、大丈夫。

そっと耳元に囁かれた言葉。

私は彼女を信じることができる。

私は彼女に縋ることができる。

だから、大丈夫なのだ。

大丈夫……

安心している。

彼女は傍ゆかりにいてくれる。

「おや、お邪魔でしたかね」

調理場で作った茶の当てを持って部屋へと戻ると、そこには、優しい表情で微笑む少女と、その膝に頭をのせて、安らかな寝息をたてる少女がいた。その存在に安堵し、とても幸福そうな様子で……温かいものに満ちた顔をしている。

「……………珍しい姿じゃないですか。八雲さん」

薄桃色に染まる少女の髪をふわりと撫でながら、同じように和らいだ表情を浮かべる少女　その光景は、今まで見たことがない。

いつも何処か暗さを背負い、後ろ手に何かを隠している。飄々と明るい表情を見せていながらも、僅かにきな臭さを感じさせる。

そんな、あまり信用ならないような印象しか持たせない妖怪としては、とても稀なもの。純粹で、真っ直ぐな姿だ。

「うるさいわねっ……………」

その膝の上の眠りを邪魔しないように声を抑えながらも、怒ったように語尾を荒げて応える紫。けれど、ふいと逸らした顔　その髪の間から見える頬や耳が僅かに赤く染まっていて、妙に子どもっぽく感じてしまう。

ほんとに珍しい。

いつもは底なし沼のような判りづらさと底知れなさを発揮する少女
その毒気は何処に行ってしまったのか 結構な長さの付き合
いの中でも、ほとんど初めて見たような姿。

面白い……。

むくむくと込み上げる悪心。

普段はからかえない相手を遊ぶそんな予感に……少し、老^わ
かものへのいたち人としての本能が疼く。

が

「んん……」

そういう状況じゃあないですよね。

紫の膝の上で、小さく呻く少女。

幸せそうな顔で眠りながらも、その姿は燦々たるものだ。

「……」

骨が透けて見えるような薄い身体。

白さを通り過ぎて、もはや死人のような青白さを称える肌の色。

ただ、眠っているだけの姿のはずが、何処か生氣のない亡霊のよう
なものを見ているような気分になってしまう。

あの時よりも……

過去にこの場所で出会ったときの姿。

それよりも、悪化して、衰弱して 進行している。

これは、もう……………

「大丈夫よ」

こちらの視線を読んだのか。
紫は、ぽつりといった。

力なく、力を込めて
信じたいと、自らに言い聞かせるように

「大丈夫……………私が、何とかして見せる」

手に入れた大切なものを愛しそうに抱きしめて、その存在を全力で
守ろうと
失えば自らを壊してしまうほどの気概を込めて、その場所を守りた
いと

願っている。

「そうか……………」

同じ時を歩めぬ友人。
異なる歩幅で離れていくしかない相手。

それでも、失くしたくない。

人間と妖怪の関係。
人と妖の友愛の絆。

そんな大仰な理屈はどうでもいい。
ただ、友だちと一緒にいたい。

そんな純粹な気持ち。

単純で簡単なその感情はとても妖怪らしい。

そのために手段を選ばずどんなものでも利用するというのもまた
彼女らしい。

「なるほどねえ……………」

だから、これはとても彼女らしい正直な行動なのだ。

「そこまでできてしまうこと、か」

目の前で頭をたれて、『手伝って欲しい』と願う姿。

自らの矜持も気にせず、ただ純粹に手を伸ばしているその姿。

そう頼まれたら、もう逃げられない。

友人としても、年長者としても 何よりも、自らの心情が許さ
ない。

外堀埋められちゃいましたね……………

もう、軽い調子ではいられない。

仮宿などと嘯いてはいられない。

そこから逃げるか。

隣へ並ぶか。

決めなければならない。

のんびり仕込みをしている暇はない。

望みを叶えるには、もう時間がないのだろう。

少女は、どんな手でも使う。

何を失ってでも進まなければ、それは守れない。

たとえ、間に合ったのだとしても、それはほんの一握りしか残らないのだから、逡巡している暇はない。

.....

既にこちらは蜘蛛の巣に囚われている。

自らの弱みさえも曝して突き進む覚悟を持って進む相手。

その手をとるならば、こちらも泥の底まで付き合う覚悟がある。そして、それは逃げて同じ。

だから、自分の中の天秤次第。

ならば

「何が必要だ？」

『それを見たい』と願う自分がある。

「こんなところにいましたか」

屋敷の入り口。

その石段へと腰を下ろし、少々ぼうつとしていた処に、男の音が響いた。

微かに聞き覚えのある声に、背を向けていた門を振り返る。

「御主は……………」

そこにいたのは、あの時の 姫があ妖怪と知り合う切っ掛けとなった日に、見かけた顔があった。

「 紫殿の仕業か」

多分、今もこの門の向こうにいるのだろうあの変わり種の妖怪の力を思い出す。

きつとあの妙な力によって、自分の目に触れぬままに、この男は屋敷の中へと誘われたのだ。

「ええ、ちよつと食事を作ってくれと頼まれまして
人使いの荒いことです。」

そういつて苦笑を浮かべ、門柱を背に空を見上げる。

眩しそうに目を細め、疲れたように息を吐き出す姿は……
どこか疲れた老人のようにも見えた。ひどく老成しているように見
える。

「何か用か」

きつと、この男も妖怪か何かなのだろう。

自分もこのなり形からは考えられないほどに歳を食っている。

そう思えば、珍しいものではない。

「いえ、怪我してるって聞いたもんでね あっちにいても邪魔に
なるだけですし、ついでの見舞いです」

お加減いかがですか、ととってつけたような軽い言葉でこちらを指
差す。

その先にあるのは 包帯で固定された右の腕。

骨が折れ、動かすことも俣ならぬ自らの腕。

「無理をせねば痛むこともない」

もう片方の腕でそれに触れ、軽く息をつきながら答えた。

鈍く疼きながらも、それはしっかりとその存在を示しており、決し
て治らない傷ではない。ただ、その原因が

「中てられた……そうですね」

低く呟くような声。

その経緯をおおよそ説明されているのだろう。

この重苦しい雰囲気は、前にあった時には感じなかったものだ。

ああ、知っておるのか。

多分、あの妖怪が説明したのだろう。

それほどの信頼を得ている相手、ということだ。

「わしもまだまだ未熟者だったということだな……無駄に姫さまを傷つけてしまった」

ならば、話しておいてもいいだろう。

自分の愚かさを

「姫さまの力に中てられて 自害しそうになるなど」

首元に僅かにのこった刀傷。

あの瞬間。

あの力に魅せられた瞬間に絶ちかけた己の命。

偶然居合わせた紫殿が、この腕をへし折ることですれを止めてくれた。

「ほんに、愚か者だ」

それを姫さまは見ていたのだ。

半分は人間ではない自分を殺してしまうほどに、自らの力が高まっていることを知ってしまった。自らの近くにいる者を殺してしまうほどののだと、知ってしまった。

自分が原因となつて。

『私のせいで』

「もつとはやくに離れるべきだった」

引き際を見誤った。
力を過信した。

そのせいで、傷つけてしまった。

死んで詫びることすらもできん。

そうすれば、さらに苦しめるだけ。

だから、どうしようもない無念さを抱えながらも、ここにいる。
これ以上誰も主君を傷つけぬようと、門を塞いでいる。

その程度のことしかできていない。

腕の痛みなど、感じるわけもない。

ただ、何もできないことが歯痒いだけだ。

自嘲の笑いを浮かべ、もはや踏み込むことすらできぬ屋敷を振り返る。
動かない腕も 刀を振るう先の見つからない自分にとっては、調度いいかもしれない。

己の情けなさに拳を握り締める。
落ちるのは、暗い沈黙 そこに。

「くくっ」

微かな笑い声が響く。

「想われてますねえ……」

視線を向けると、なぜだか満足そうな顔で、男は笑んでいた。
それを聞いて安心したというように。
それが聞いたかったのだというように。

「？」

ふざけた調子ではない。
いたって真面目な雰囲気だ。男は笑っている。

その意図がわからない。

「ああ、すみません」

こちらの戸惑っている様子に気づいたのか。
男は困ったように苦笑する。

「これだけ想っている人たちがいるんだ。こりゃあ手を抜くわけにはいかないって思いましたね」
いやいや、重たいもんです。

意味はわからない。
けれど

愉しそうに 嬉しそうに笑う。

一体………？

元々、人の機微に鋭い方ではない。
どうということなのかはわからない。

けれど、男がとても喜んでいるということだけはわかる。

「 一体なんなんだ………」
わけがわからん。

以前のことといい、今の状況といい、どうにも掴めない。
真剣に悩んでいたはずの思考が、どこへやらと吹き飛んでしまう。

流石は紫殿の友人ということが………。

その飄々とした雰囲気には共通点がある。
浮世離れというか 人間離れというような、同じようなはずの自分よりもずっと遠くにいる感覚がする。

遙か高みから見下ろしているのか………それとも、見上

げているのか。

人で遊んでいるようにも、人を羨ましがっているようにも見える。
その隣にいたいと いられないと知っている。

「御主は」

「本当に面白いつてことですよ」

いかけた所で、男が口を開いた。

何を言おうとしていたかはわからない。感じたことをそのまま喋ろうとしていただけだ。

けれど、それは

「 ねえ、そう思いませんか？そのひと」

自分にかげられたのではない。

男の目線は先ほど見ていた何も無い中空。

「 なるほど、わかっていたのか……」

ぞくりと 背筋が震えた。

なん………？

増していく圧力。

視線の先で、ずりりと空気が揺れて、何かはみ出した。

歪まされていた景色が元の姿を取り戻し、隠れていた存在が顕わとなる。

「紫様のいう通り、確かにただの人間ではないようだな」

現れるのは、光を浴びて黄色く輝く髪に、特徴的な帽子。その背に見えるのは、その存在がいかにかに力を持つかを示している九本の尾。

時折、あの妖怪と共に見かけていた従者 式である九尾の狐。

なぜ・・・？

その突然の出現に疑問の念が浮かぶ。

まるで、仇敵に相對しているような剣呑な雰囲気で、一歩間違えばこちらに襲い掛かってきそうなほどの眼光に、思わず刀を握り締めてしまう。

「ちつと目端が利くだけです。長く生きてるもんで」

それを飄々と受け止めながら、男はゆるく答えた。小妖ならば消し飛ぶような圧力をかけられながらも、平然とそれに対している。

「たかが人間が・・・よくいう」

「ええ、たかが人間ですんで、そんな警戒も必要ありませんよ」
もつとぞんざいに扱ってやってください。

けらけらと笑う。

力みも焦りもしていない平静の姿。

九尾は、それをしばらく睨みつけ

「本当に、聞いていた通りか」

その変わらない様子に毒気を抜かれたのか。「はあ」と一息嘆息し、力の抜けた表情でそっぽを向いた。

「どう聞いていたかはしりませんがね」

この通りの性格です。

にこりと微笑みながら、「宜しく願います」と軽く頭を下げる男。

張り詰めていた空気がしらけて、何処か胡乱なものになっている。

またか。

飄々と雲のような男だと思っていれば、妙に老成した雰囲気を持ち・・・自分で分からなかったような隠遁の術に気づく鋭さを見せたかと思えば、からからとふざけた調子で笑ってばかり。そのせいで、どうにもまとまな雰囲気が続けられない。この自分よりもかなり長く生きているはずの九尾の狐にとってもそれは同じだったらしい。

「どうにも掴めんな　一体何を考えている」

「何も。やりたいことをやっているだけですよ」

軽い調子で煙に撒いて、どんな相手も飄々とした態度で丸め込む。これがこの男の生き方で、処世術なのだろう。

しかし、先ほどまでの態度は……………。

「紫様が呼んでいる」

その態度に業を煮やしたのか。
疲れたように頭を抱えながら、端的にそう告げた。

どうやら、ただの使いであつたらしい　これほどの大妖をそんな
ことで使うとは、あの妖怪の下で、さぞや苦勞をしているのだろう。

「ああ、茶菓子の追加ですかね」
次はどうしますかねー」。

そんなことを呟きながら、口元に手を当てる。
やはり、その様子からは、いつか見たような力ある者の雰囲気は感
じられない。

ただの、人間だ。

「　貴様を信用したわけではない。紫様の害になるとすれば、容
赦なく切り捨てる」

そのまま屋敷の中へと戻っていきこうとするその背に向けての警告。
それに向けて

「ああ　断つたら二人掛りで無理やりにも協力させてたぐらい
真剣なもんに生半可な気持ちじゃ答えないさ」

背を向けたままの、真剣な声音。

八雲の式が一瞬息を呑んだのがわかった。

「　ああ、ついでに侍さんの分と狐さんの分も何か作つときます

んで
「よかったらどうぞ。」

振り返る顔は、先ほどと同じ緩い笑み。
毒気を抜かれて、力が抜けるもの。

「藍だ。紫様の式神、八雲藍」

「覚えときます」

ふんつと鼻を鳴らして飛んでいく。
それを見送った後、男が振り向いた。

「どうします？中に入るのが嫌なら、こっちに持ってきますが」

相変わらずの緩い会話。

ぶれない様子に、妙に感心してしまう。

「ああ」

多分、それが男の仮面なのだ。

姫さまや八雲と同じ 外れた者として生きるための。

「馳走になろう」

その気持ちができるのなら、きっと大丈夫だ。

姫さまの隣にいてくれる。

己にはできぬその温かさを与えてくれる。

同類だからこそ。

その苦しみを分け合ってくれる。
他力本願でも 自分にはできないのだから。

願うしかない、か。

情けない。

「 ああ、そついや骨折にもよく効く薬があるんですよ
知り合いの薬師に貰いましてね。」

そついつて懐から一風変わった入れ物を取り出し、こちらに渡す。
中身は塗り薬のようなだが、その器の今まで感じたことのないよう
な触り心地だ まあ、信用できるのだろう。

「 姫さんのためにも、ここに変なもんが近寄るのはよくないです
からね」

頼りにしてますよ。

そついつて片手を上げて、背を向ける。

格好つけているようで、何やら料理法をぶつぶつと呟いているさま
は、妙におかしなものだ。

真面目に考えるのが……馬鹿馬鹿しくなる。

力が抜ける。

余計なことを考えなくなる。

やれることを、やるのみか。

「 任せておけ」

それだけしかできないのなら、全力でそれをするだけ。
その方が、不器用な自分らしい。

「そのためにも上手い飯をくっておかねばな」

冗談めかして 久しぶりに笑って、そういった。

手を伸ばす先（後書き）

日常で少し余裕がないせいで急ぎすぎているような　ちよいちよ
い書きながら迷いが出る状況です。多少・・・ならまだいい
のですが、あまりもおかしいと思っっている人はいるでしょうか？
もし、そうならご指摘ください。軌道をなるべく修正します。

というか、この作品全体の評価としては一体どんな印象なのだ
ろう。更新が遅すぎるのであまり声高にいえないので。ちよっ
と気になっているこのごろです

読了ありがとうございます。

ご批評・感想お待ちしております。

縁会

暑い・・・・・・・・。

額に流れ落ちる雫を片手で拭いながら、青空の中で煌々と輝く光球を見上げた。

ゆらゆらと、辺りに満ちる水気によって歪み見えるその姿は、雲ひとつない背景の内で一際強くその存在を示し、入り込む湿気によって張り合わされた衣服と肌が余剰の暑さを伴ってこの身に染み入る。通り抜ける風は焦げつくような熱線によって温められ、ぬるい空気の流れとなって辺りに満ちて　　どうしようもなく、暑い。

家の中にいるよりはいいと思ったけど。

蒸した空気で満ちた屋中よりはましにも思えるが、その分身体を動かして歩き回る労力の分が億劫だ。何処かの店の軒先で休もうにも、このうだるような暑さに音を上げた人々が群がるそこは澱んだ空気に満ちており、結局のところ、歩き続けているのとあまり変わらない。

猫でも探してみましようか・・・。

あの動物は、人気がない涼しげな場所を好んで集まるという。それを見つければ少しの涼くらい得ることができるかもしれない。

「　　おおっ?」

そんな馬鹿げたことを半ば本気で考えていたところに、野太い声が響いた。

「こりゃあ稗田のお嬢さんじゃねえか！ どーもどーも！」
こんなところでどうしたんですかい？

人好きのする笑顔を浮かべた大柄な男。

町外れの方に住んでいる農夫……それが目の前に立っていた。

後ろには荷車を引いており、それを何処かへ運んでいる最中なのだろう。

「こんにちは」

ぺこりと頭を下げて、ただ散歩していただけたと答える。

男は「そうですかい」と笑った。

がちやんと大きな音を立てて、荷車を置き、懐から取り出した水筒をぐびぐびと煽る。

豪快な……。

ぷはぁーと、人目を気にせず大きく息をつき、滴る汗を肩にかけた手拭で拭う姿。

自分にはどうやったって真似できないような豪放さだ。

相変わらずですね。

見た目通りの大雑把の性格に、単純明快な行動基準。

裏がなく。何も考えていなさそうだからこそ、何も構えずに付き合い合
うことができる。

それがこの男の性質。

それが要因となって、人里の皆にも慕われている。

わかりやすい、というのも才能ですからね。

天の与えた才……というよりも、天の与えられたままに生きられる天然というもの。

そうやって生きられる人間というのも、案外珍しい。それに

「その荷……どこに運ぶんですか？」

男の後ろ。

その引いている荷台を指差す。

「ああ、こりゃあ大工の連中に頼まれてましてね。ちょっと里の外までとどけるんでさあ。」

後ろの荷台に乗せている荷。

それは大量の木材だ。一体、大木何本分だろうかというほどの加工材がこれでもか、というほどにうず高く積まれている。

「いやあー。やっぱり一人でいくんはきついですねえー、流石にこの量だと肩も凝りませあ」

がはは、と笑いながら、荷車を抱えなおす。それは、とても一人では運んでいけない量であるはずだ。

男は、それを軽々と引いている。

話の種のつきない人ですからね……。

一応、この人間もこの幻想郷へと流れ着いた人間。それも、迷い込

んだだけ的一般人、であつたはずなのだが　　そういつてしまふには、どうにもおかしな逸話を数々持ち合わせている。

曰く、鬼の水浴びを覗き見し、森から吹き飛ばされて帰つてきたとか。

曰く、天狗の遠見の鏡筒を奪おうと画策し（覗きのために）、谷から投げ飛ばされたとか。

、襲い掛かつてきた小妖（といっても熊ほどの大きさ）と相撲をとつて友達になつた。河童の皿を見たいといつて湖に飛び込み、半刻ほど潜つて出てこなかつた。妖怪達の酒宴に混じり、一日飲み明かしてかえつてきた　　だとか、色々と眉唾物の話ばかりだが、幾度も妖怪の縄張りに忍び込み、生きて帰つてきたことは確かなのだ。

しかも、ある程度の怪我は、次の日には治してしまふほどに生命力が高いらしい（どちらが妖怪だといいたい）。確か、里の退治屋や被師の者達が弟子とろうと画策していたが、本人にはまるでその気はない。勿体無いとは思ふのだが、幸か不幸か自分の才能には気づいていないらしい。「俺なんか修行したところでなんか意味があるのかい？」だそうだ。

実際、何の修行も行っていないのにあの状態なのだ。もし、その方向で修行していたらどうなつただろうとの興味は尽きないが、同時に怖ろしい（妖怪の山の妖怪。特に女性に同情してしまう）。

ちなみに妻帯。

奥さんであるおそとさんは外界からの幼馴染であり、良家の娘であつたが、ほとんど駆け落ちのような形でここへきたらしい。無茶ばかりする男を心配し、それを止めるために近くの道場へ通つたところ、師匠越えどころか流派の祖を完封できてしまふほどの実力をつけてしまった。現在は夫を尻に引きながら里の道場で武術を教えている。

流石に滑稽すぎる話で幻想郷縁起にも載せていない………と

いづか載せたくない。

まあ、それはどうでもいいとして、里の外か……

確かに、この男ならそういうことは適任だろう。

里の外にも詳しいし、上手く妖怪にも襲われないすべも身につけている。

しかし

「一体何のためにそんなものを？」

わざわざ里の外への届け物。

しかも、木材ということは、そこに何かを作るということだろう。

呪い師や退治屋による妖怪対策のための何かだとしても、それなら私の方にも連絡がきてもいいはずだ。

けれど、そんな話は聞いていないし、そもそも最近は何の事件も起きていない。そんな危険な場所で何かをしなければならぬような理由があるのなら、少しくらい予兆があってもいいはずだろう。

「いやあ、それがねえ」

語られた話に、僅かな驚きと納得。

そして、一緒に連れて行ってほしいという頼みの言葉だった。

夏も半ばを過ぎた日。

少しずつ熱が薄れ始める。

その前段のこと。

四角く区切り、丁寧に均された地面。

その四隅に置かれた祭具に張られた注連縄。

そして、その真中に置かれている簡易的な神台。

「よしっ、こんなもんだらう」

そう一言呟いて、腰をあげた。

手に持っているのは、今さっき仕上げたばかりの儀礼符。

それを、中にある神台を中心に、囲う注連縄や置かれた木材などに均等に貼り付けていく。

火難・水難・地鎮・風守……様々な意味の念が込められたそれは簡略化されたものであり、それほどの効果を発揮するものではないが、これは本当にお守りとしてのもの。気休めであり、そう願っておくだけ。

防ぐも、治めるも自分の行い次第。

その少しの危なげを肝に銘じながらも安心できるように暮らしを送る。

そういっ方が、本来怠け癖のある自分にとっては丁度いいものだろう。

「これで最後っ、と」

簡単な形式的な陣を組むように貼り付けた札。

このままちゃんとした形で組み立てれば、少し丈夫なぐらいの加護はあるものとなるだろう。

一応、懐から取り出した設計図を眺め、それがきちんとした状態であるかを確認する。

慣れてはいても、油断してはいけない。木登りは降りるときの方が重要だ。

そんな爺臭いことを考えてるところに、後ろから声がかかった。

「おう兄さんよ」

振り向くと、そこに立っていたのはわざわざ里の方から手伝いに来てくれた大工の棟梁。

その向こうでは追加の木材を運ぶ若い衆達が野太い声を上げているのが見える。

「ああ、どうも。おかげで思ったより手間取らなくて済みそうです」「なあに、この前急ぎの仕事を手伝ってもらった礼だ。それより、本当にいいのかい？」

気風良くそういって鼻を鳴らしてみせる棟梁。そして、こちらの後ろを指差してその建設予定地である区切られた四角の方を指差した。

「ちゃんとした儀式なら里の呪い師や被い師が知ってると思うが・
」

心配そうにそういつて、なんなら自分が紹介すると胸を叩いてみせる。かなりの高齢ながら、そのしゃんとした佇まいには頼りがいがあり、達者な口は多少悪く人にささるまでもそれだけの気合に満ちていることを示している。

きつと、この人に任せれば失敗はないだろう。
けれど

「いえ、大丈夫ですよ」

それをやんわりと断って、「ありがとうございます」と軽く頭を下げた。

「まあ、兄ちゃんが言うならそれでもいいがな」と棟梁もしぶしぶながらも納得してくれる。

本当に、責任感の強い人なのだろう。

しかし、まあ……。

自分は人とは違う。

そついう完璧さはここには必要がないのだ。

「さて、残りの木材もとつてこないといけませんね」

大工の若い衆達が運ぶ木材。それは自分が用意していた七割くらいのものだ。あとはまだ、里の作業場に預けっぱなしになっているのだろう。

今のうちにとつてきて置いたほうがいい。

「ああ、でーじょぶだ。ちゃんと手配えしてある」

その言葉に、棟梁がよいつと腰を下しながら答えた。

流石に、気力は満ちていても身体は衰えている。ずっと立ちっぱなしというのもしんどいのだろう。

「運び屋にでも頼みましたかい？棟梁んところの若いのはほとんどこっちにいるみたいですけど……」

あの時見かけた若い衆のほとんどがこちらに来てしまっている。多分、少しくらいは作業場の方にも残っているだろうが、それでも、とても手が足りないだろう。わざわざ店を空にするというのも考えづらい。

「いや、ちよつと待ち外れんとこの若いのに頼んでな　お前さん、あいつに拾われたんだらう？」

「ああ、あの人ですか」

二刀に構えた鍬を使い、怖ろしい速さで畑を耕していく中年の男の姿が思い浮かぶ……。軽く小突かれただけのはずが、傷口が開きかけて大変だった。

天然で身体強化でもしてんですかねえ……。

「お、きたか……」

でなければ、今、里の方から向かってくるあの荷車ことを説明することができない。

ものすごい速度で土埃を上げ、まっすぐにこちらへとむかってくる。あんな速さを筋力のみで行うなど考えられない　時折聞こえる「

助けてー！」だとか、「いやー！」とかいう悲鳴のようなものは何だろつか。良くみると、山盛りに詰まれた木材の端に、何かが掴まっているのが見える。

あれは……………

小さな背格好。

紫がかった髪。

「稗田の！？」

今にも吹き飛ばされそうな状態で、必死に荷車にしがみついている姿。

引いている男は走るのに夢中になっているようで気づいていないが、もうぎりぎりである、といったところ。

ちよいちよい！

とても超重量の存在だとは思えない速度で動くそれ。

目の前にまで迫り、怖ろしげな圧迫感を残しながらも、派手な土埃をたてて寸前の所での急停止に成功する。

しかし、その上に積まれた荷は当然慣性に従って、縛り付けられた隙間の分だけその身を揺し……………その上にしがみついていた搭乗者は当然

「きゃあー！！」

飛ぶ。

「おいおいおい！？」

年甲斐もない大声を出しながら、その存在と地面の間へと滑り込む。幸い、飛んだ方向は自分に近い。ギリギリ間に合

「おおっと！ あぶねえ」

そうやって手を伸ばした先に、それを引いてきたはずの男の姿。妖怪染みた反応速度で移動して、まるで猫を掴むような形で着物の先を掴み取っていた。

片手でぶら下げられた少女は、ふらふらと目を回している。

「すまねえすまねえ、お嬢さん！」

つい夢中になっちまってなあ！

そういつてがっはっはと高らかに笑う。

「……………うう」

小さく呻く稗田のお嬢さん……………心底怖かったのだろう。半分涙目になっている。

無理もない。

助けに入ろうとした不恰好な体制で固まったまま、そう思った。もう、意味がわからないなんてもんじゃない。訳がわからないというか、仰天してしまうというか……………どんな滑稽話だ。

笑い話にしても、荒唐無稽すぎる。

「がははは！ いやあーあぶねえあぶねえ！」

そのままの状態だからから笑う男の手からその小さな身体を受けとり、そつと地面に置いた。ふるふると、軽く震えているその頭に手を置いて「もう、大丈夫」だと慰める。

なんだか、小さな子どもに戻ってしまったような姿だが、あれはもう、大の大人でも軽く泣きを入れるくらいのものだった。心底、同情してしまう。

「届けてもらってありがとうございます……でいいんですかね？」

「いいんじゃないえ……か？」

少しの間、同じようにほうけたような表情をしていた棟梁は、何かから逃避するように無表情になって木材を確認し始めた。一瞬、静かになっていた周りの連中もすぐに元の喧騒を取り戻す。

慣れっこ……なのか？

もはや扱いなれているといった感じの様子に、色々なものが頭の中を錯綜し……なんかもう、どうでも良くなってきた息を吐いた。

やっぱり、こういう人種は苦手だ。

改めてそう思いなおし。

自分の苦手分野を知るのもまあ、いい経験ですね……。

そんなこと考えて無理やり納得した。うんと小さく頷いて、空を見上げる。

「ふう………」

雲ひとつない良い天気だ。

中々に、幸先にいい日となってくれるだろう。

深く息を吐き、目を瞑っての一瞬の瞑想。

意識切り換えに数秒かけて、いつもの調子を取り戻す。

「さてさて」

許しと安寧を得るための準備。

関わる皆々不幸に見舞われぬように願う。

明日のために、今日は騒ぐだけ。

ちなみに。

あとで、炊き出しの応援にきた奥さんがその話を聞いて、男を三、四度投げ飛ばし、優しい笑顔で反省させていた。いい夫婦だなと思った。

手を叩き合わせる。
深く頭を垂れる。

それを決まり通りに繰り返し、明日から安全を祈願する。
神に祈り、仏に祈り……それぞれの信仰するものへと願う。

基本的な所作は一般と同じ。

当たり前の人間がすることと変わらない。

ただ

「さてさて皆さん……」

それを終わると同時に、その主が手を叩いて全員の注目を集めた。
掲げた右手にあるのは、朱に染められた祝いの大盃。

「それじゃあ、明日への活力と幸運のために」

全員の手にある器。

注がれた透明の液体と今か今かと爆発を待つ気配。

「乾杯！」

その言葉と共に

「「「かんぱーい!!」「」」

当たりは一気に喧騒で満ちる。

「よっしや呑むぞー！」

「なんだこの料理は！？ 誰が作った！」

「うめえ！うめえぞこの酒」

「馬鹿やろう・・・瓶じゃたりねえ！樽ごともってこい！」

「んふふ」

普段の鬱憤。

久しぶりの大仕事。

とりあえず騒ぎたい。

酒。

この無礼講の席で、もう何が目的のかもわからないような騒ぎへと一気に加速する・・・この里の人々にとっては、よくあることだ。みんな、騒ぐことに飢えている。

『宴会は幻想郷の花だ』という言葉が初代の日記に残っているくらいである。

少しくらいの危険もなんのその、だ。

しかし

「さてさて・・・それじゃ、余興といきますか」

そんなことを話しながら、火の玉やら光の弾などを空中に飛ばして、花の形を描き、何本もの木の棒を投げ、地面につけないままに空中で掴み取り続け、空へと投げた空樽の中へと石を投げ入れ、それを空中に浮かせ続ける。

そんな新入りは私の長い記録の中でも初めてのことである。

これでいいんでしょうか。

一応、男がここに新居を立てるための起工式。
土地を鎮め、作業の無事を祈るための地鎮祭……のよう
なものだったはずである。

これではただの宴会と変わらない。

嬉しい、けれど……。

「がはは！見てろよー！」

「あなた、調子にのらないの……。」

いつの間にか芸事を振るう者が変わり、酒樽を一気にいくつ持てる
かなどの競争になっていた。何十もの樽を重ねもち、それを溢しそ
うになったところで奥さんの制止（いささか暴力的なもの）が入り、
地面に埋まった誰かさんを見て皆が笑っている。

向こうの方では酒の呑み比べが始まって死屍累々……あの
勝ち名乗りを上げているのは誰だろうか。背丈は低く今の私と同じ
ほどしかないのに、まるで水か何かのように酒を呑み干している。
あのでっかい髪飾りは何だろう。鬼の角のような形をしている。

「お、どうですか。楽しんでますか？」

そうやって辺りを観察していたところに、先ほどまで余興と称した
人間離れを披露していた男が隣へとやってきていた。その手には小
さな瓶と二人分の盃。

「ええ、ちよつと気後れしてしまいましたが」
「まあ、少しでも楽しんでるなら結構ですよ……さっきのあれの分もね」

男は軽く苦笑いをしながら、やっと地面から這い出したところの元凶を指差す……さらした醜態に少し頬が染まるが、忘れてくても忘れられない自分の力を思い、どうにかこうにかそれを呑みこんだ。

男は同情したように「しょうがないですよ」と笑って慰めてくれる。

ああもう……。

穴があつたら入りたい気分だ。

あとで奥さんにもつと叱つてもらつておこつ（里の記録から罪業をひっぱつてきて）。

そんな腹黒いことも浮かんでしまう。

「にしても、皆さん元気ですね」

よつ、と年寄りじみた声を出しながら、男が隣へと座った。
愉しそうに辺りを眺めながら、こちらに杯を渡す。

「良かったんですか？」

一応、これは男の新居のための祈りの行事だ。
これから先のためにも、なるべくきちんとしたものの方が良いだろう。

そういうと男は「あんまりきちんとしたものじゃないほうがいいんですよ」と意味あり気に笑って答える。

どういこと？

そう思つて眉を顰めると、男は近くの森を指差した……ち
らりとあの酒豪の少女の方を見た気もするが、気のせいだろうか？

「あの森、知つてますか？」

それには触れないまま、男は続ける。

「あの……人が狂うという森ですか？」

男が指差した先。

多少、霧か靄のようなもので覆われて先が見えにくくなつてい
るその奥は、里の者は当然、妖怪ですらあまり立ち寄らないという未踏
の森だ。

入り口付近で茸を採りにくる者達の噂よれば、奥に進めば進むほど、
わけのわからない怨霊や化生の声によつて気を狂わされ、まともな
状態では戻つてこれなくなつてしまつという。

そうだ。そもそも何でこんなところに家を……

ぎりぎりその範囲から外れているとはいえ、その入り口付近に家を
建てるというその考えがよくわからない。いくら妖怪に襲われる危
険が少ないとはいえ、他の恐怖にさらされるかもしれない。

その疑問に対して、男は軽く答えた。

「面白そうじゃないですか」

ゆるい調子で放たれた言葉。
その言葉に……頭を抱えた。

面白そうって……

「そんな理由で……！」

「ま、色々研究用とか個人的な事情とかもあるんですけどね」

怒鳴り声を上げようとしたところにすつと差し込まれた言葉に、思わず口どもる。

男は笑ってそれを流し、手に持っていた杯の片方を差し出した。

「まあ、変わり者にはこういう方が丁度良いでしょう」
形のみより心を愉しませれば、ね。

そういつて差し出された瓶。

その口からは、甘い果実の香り。

……

受け取った杯とわずかな酒香。
少しだけ残った昔の記憶。

『昔から酒には弱くて』

月明かりの下そういった自分。
果実を混ぜ度数の低い酒をちびちびと呑みながらの談笑。

「なあに……忘れられないなら、嬉しい方を多くすりゃ良

いんですよ
「
つてことで。」

注がれる酒にくすりと笑い、「ああ、そうだった」と小さく呟いた。
不思議そうに首を傾げた男へと杯を向け、互いの器を打ち鳴らす。

「歓迎します。ようこそ幻想郷へ」
「ありがとう」

乾杯。

この人は、最初からそうだった。
出会ったときから変わらない。

傾けた器から落ちる雫は、甘く懐かしい味がした。

今日は、少しぐらい酔ってもしまっても良いかもしれない。

今日は、似合いの場所に似合いの男が入った。
その祝いの席である。

縁会（後書き）

陣地決めと挨拶周りのようなもの。

里の有力者と人間、あと何処かからの飛び入り参加。

ちょっと急いでいるので、少々見直しが甘いかもしれません。

用事が終われば確認しなおりますが、良ければご指摘もお願いします

（八月二十六日少々加筆・修正しました。大筋に変更はありません）

読了ありがとうございます。

ご感想・批評共にお待ちしております。

お客様（前書き）

まだまだ閑話気味です。

お客様

ボンッ

「・・・・・・・・失敗か」

派手な音をたてて煙を吐き出す鍋。
その内にあるどす黒い液体状の何か。

「うーむ・・・・・・・・」

その液体が揺らめき、ぶくぶくと茶褐色の泡が噴出すたびに、咽る
ような悪臭が立ち込めて部屋の空気を汚染する・・・・・・・・時折鈍
く明滅し、かなり丈夫に作られているはずの鉄製の鍋が悲鳴をあげ
ている。

どう考えても、危険物だ。

「 やっぱり、食用にゃあならないか。あの茸は」

目の前に起こっている惨事。
その原因となったであろうもの。

上手く中和するかと思ったんですがねえ・・・・・・・・。

岩陰に群生していた天然のものとは思えないような青白い茸と、湿気を好むはずの菌類であるのに関わらず、陽の光をその体全体に受けて輝いていた紅色の茸。

対照的なその姿に、併せてみれば上手い具合に融和するのではないかと適当に調理してから鍋に放り込んでみたのだが……。

まあ、魚と漬物で十分か。

今日の朝食から一品削除する。

食べ物を粗末にするのはよくないが、これは、どう見ても食べられる物ではないからいいだろう。時には悪徳を積むのもまた、健康の秘訣である。

「と、いうことで」

そろそろ底が（溶けて）薄くなってきたら鍋を持ち上げて火を止めた。

「……」

まだ新しく、造りのいい扉。

それを潜れば、辺りはすっかり赤や黄色、茶に焦げ茶といった暖色に覆われて、僅かにだけ残る緑葉が季節の終わりと始まりを感じさせる。

呼吸をすれば、乾いた空気が肺腑の内を吹き流れ……涼やかさに混じる寒冷の綻びに、虫も動物も本能めいた欲求に駆り立てられているのだろう。

蓄えろ。肥え太れ。

もうすぐ

「……冬がやってくるぞってね」

里の人々も今頃は田畑の収穫と備蓄に追われている頃だろう。

稲穂は頭を垂れて、果実は熟れる。

山林では肥えた魚が産卵し、新たな芽を為すために実が落ちる。

越すために刈り入れて、肥えるために貯めこんで

越えるために枯れゆきて、越させるために実を結び
始まりのための稔りと終わりに向かうための彩り。

新たな突端と一区切りのための終端。

正しく、秋である。

人も獣も植物も心地よい忙しさに満ちている。

ま、古い先短い老人にとっちゃあ、美味しいもんが食えて嬉しい

って季節ってだけの季節だ。

涼しく、過ごしやすく。

のんびりと山を眺めているだけでも目に楽しい。

「汁物がなくなっちゃったし………何かつまみでも探してみますかね」

少し歩けば、簡単に山の実りが手に入る。

この辺りにはどういうわけか茸が多いし、すぐに何かしらのものが見つかるだろう。

樂をするにはいい季節だ。

蓄えも………まあ、一人分なら十分だろう。

足りなくなれば里に何かしらの品を持っていけばいい。
まだ外から仕入れた品がいくつか余っている。

切り離されている分の恩恵ものある、かね？

外れた土地。

外れ者達の居場所であるからこそ、そこには政の手も届かない。
作った分は作った分だけ
得た物は得た分だけ
自分達で考えたとおりに運用される。

危険を度外視すれば。よく肥えたい土地ですしね。

幸い、その里の規模からすれば十分以上の収穫が毎年得られているらしい。

外から得られる糧が少なくもあるが、その分を補って余りある余裕と力がある。

馬鹿なことさえしなければ、飢えることはない。

しかし、まあ……………。

見放された土地。

化物たちが暮らす場所。

それが、これだけの恩恵を得られる土地であるというのは面白い。誰かさんの暗躍か、世間に疲れた隠れ神の祝福か。

どちらにしても、それがこの土地が厭われながらも愛される一つの要因となっているのだろう。

訪れるものに安息を与え、懐深く受け入れる。

だからこそ……………。

人々が集まり、そこに産まれる繋がりと空間。

一際変わっているのは、その手の届く距離に神や妖怪といった幻想の存在がいること。

互いに認めている。

互いに補っている。

目に見えるもので 触れている。

「それが楽なのかもしれませんねえ」

様々な危険を内包しながらも、わかりやすい形。

堅苦しい敷居を乗り越えて、自ら達で作り上げるもの。

人々にとっても

神や妖怪にとっても

案外、世の中単純なもんですからね。

この場所だからできること。

素直に生きること。

「だからお姉ちゃん。食べてみないとわからないわよ」

「あなた……そうやってこの前お腹壊したじゃない」

だから、こんな軽い内容で会話する神さまか何かがいてもおかしくない。

祀られ縛られ、堅苦しい形式に捕らわれなくていい分、生き活きと行動できるというものだ。

「大丈夫だって……うん、美味しそうな色してるし」

心なしかその数を増やした茸と山菜。

「どこがよ……そんな極彩色の茸なんて食べたくないわ」

ますます艶やかに色付き、過ぎる季節を魅せる木々の葉。

なるほど、

ちらりと振り返るのは、あの混沌鍋を供養して埋めた先。

その後、埋めた先にある木々などに変化が訪れて、妙な罪悪感に襲

われていたが、どうやら自分のせいではなかったらしい。

豊かさと実り。

寂しさと終焉。

それが訪れたからこそ、森は変化したのだ。

「あら、こんなところに誰がいる」

「……家もあるわね。こんなところに住んでいるのかしら」

全体的に暖色であしらわれている意匠に、それぞれに特徴ある髪飾り。

芳しい香りとかもし出す雰囲気は、確かに、その季節柄のもの。

片方は裸足。

「こんにちは」

明るく。

涼やかに。

それぞれの声音で放たれた言葉。

その違いに思案しながら、姿勢を正す。

「これはこれは　穰子様に静葉様ですね？」

里で聞いた名を口にして、大仰に、うやうやしく頭を下げた。

二柱の神はうんと頷いてそれを肯定する。

「……このたびこちらに住むこととなったが、人間で

す

以後どうぞ宜しく願います。

にこりと微笑みもう一度頭を下げた。

挨拶の第一印象は大事である。

たとえ相手が神さまであっても、だ。

我ながら胡散臭い笑みを浮かべながら、そんなことを思った。

「美味しい……わね」

「うん、いけるわ」

静かにいった自分と明るく笑う妹。

対照的ながらも一致した感想に、男は笑んだ。

「そりやどうも……この辺りにはあいい素材が多くて楽な
もんですけどね」

簡単料理でも舌鼓打つのに十分です。

そついいながら、次なる一品を運んでくる男。

材料こそ私達が採ってきた山菜だが……謙遜していても、その調理法は今まで見たことがない高度なものだ。目新しく、不思議な食感をもつそれは、食べ慣れない新鮮さを感じさせながらも、素材そのままの味がはつきりと残っており、一口二口と、どんどん食が進んでしまう。

時折飾りにつけそえられた紅葉の葉なども目にとまっては、隣に置かれた焼き魚が良く映えさせている。

どこかの料理人かしら……。

慣れた様子で食事を用意し続ける男にそんなことを思う。

なぜこんなところに家を構えたのかはわからないが……まあ、変わり者が多いのはこの辺りでは常のこと。何かしら理由があるのかもしれないし、無いのかもしれない。気にすることではない。

それよりも……。

「穰子……少し食べすぎじゃない」

「ええー、いいじゃない」

天高く馬肥ゆる秋っていうし。

そういつてさらに追加の料理を要求する妹……自分もそれに向かつて手を伸ばす分、人のことは言えないが、やはり秋の訪れによって気分が上がっているのだろう。

かくいう私も、いつもなら上がりこまないだろう初めて出会った人間の家で食事などとしているのは、同じような気分だからだろう。

姉妹揃って情けないことである。

まあ、正解だったかもしれないけど……。

次に運ばれてきたのは採れたての茸を使った汁物とあっさりとした山芋の和え物。ちょこんと置かれた隣の器に入れられたタレをつけて食べてみると、シャリシャリとした心地いい食感と共にあっさりとした風味が口の中に広がる……好きな味だ。

茸汁を呑み、塩気が口に染みたくところでもそれを食べ、また口をすっきりさせる。

飽きがこず、舌が馬鹿にならなくてすむ。

「タレはいくつか用意したんでまあ適当に……あと、七輪で焼いた茸もあるんで、それをつけてもいけると思っています」

そういつて皿に盛られた茸の山。

その芳ばしい香りにまた唾が沸く。

私たちを太らせてどうするつもりかしら……。

そんなことを考えながらも手が伸びる。

本当に肥えた馬になってしまっそうだ。

「むむ……これは、アケビ？」

「ええ、鍋で炒めて軽く味付けしてるんです」

変わった食感といいながら、不思議そうに口を動かす穰子。

私もさきほど食べてみたが、悪くない味だった。

本当に……。

不思議だ。

この様々な料理に歓迎の仕方。

男は終始丁寧な物腰で私たちに接しながらも……何処か、まるで年下の子女を相手しているような気軽さをもっている。確かに八百万の神としての自分たちはまだまだ若い方だが……流石にただの人間と比べられるものではない。

けれど、時折交わす会話といい、男の知識といい……明らかに、自分たちよりも数多くのことを知っているような気もするのだ。

農耕のこと、木々の種類、作物の調理法……数々のことを自分たちと同じ以上の程度で受け答えする。たかが一介の人間が持ち合わせていられる量のものではない。

それを疑問に思っただけ聞いてみても「年の功ですよ」と適当にはぐらかされるだけだ。

食事を作ってもらっている立場として、それ以上はつつこめない、

何かしらね。

悪意は感じられない。

ただ、息をするような自然さではぐらかしの言葉を使っている。

そんな感じだ。

「へええ……あの辺りでそんなものが」

「ええ、山葡萄とか木苺なんかがわんさととれるわよ」

能天気になんな会話をする男と妹。

どうやら、料理法を教えるもらっ代わりに山の実りの多い場所を教えているらしい……あとで私も聞いておこう。色々と家の食卓に彩りをそえられそうだ。

間違っても、妹が独自に選んだ食材で改悪調理を始めないようにし

なければならぬ。

そろそろお腹も一杯ね。

穰子の方も既に箸を置き、男と言葉を交わす方が主へと変化している。

秋の果実、草花、里の人々との関わりなど……他愛無い話ばかりだが、会話の受け手として男は上々のようで、上手い具合に話が膨らんで楽しめているようだ。

相変わらずね。

自分よりも人懐っこく明るい妹。

それを微笑ましく眺め……ふと、開け放し窓から見える紅葉の色彩に目を向けた。

自らが司る秋の訪れながらも、やはりそれは見ていて心地いい。

やっぱりきれいな……。

その燃えるような赤や黄色の葉々は、緑色の木々の生命が少しずつ抜けていったもの。

けれど、枯れゆくその色は色鮮やかに山を彩り、そこにある命の輝きを示す。

終焉を意味しながら、その時に一番美しい姿を見せる。

最後の一燃え。

散り際の美しさ。

そして

「落ちた葉は土を肥ゆらせ、先の命のための礎となる」
巡り回って元通り。
周り巡って先のため。

それが秋の豊潤と終焉。

二面性を持つ繋がり。輪。

「命は燃えて、塵の内から再誕す・・・ってね」

そう呟いたのは、いつのまにか近くまで来ていた男。
その隣では穰子がなんだか目の据わった顔をして立っていた。

「お姉ちゃん・・・またそんな暗い顔して何か考えてる」
せつかくなんだからもっと楽しくいかないと。

そういつて、こちらに抱きつくように縋りつき顔を寄せる。その
息が、酒臭い。そして、手にはいつの間にか酒杯が・・・。

「さあさあ、お姉ちゃんも一杯」

「あなた、どこからお酒なんて・・・」

はっとして男の方を見ると、小さな酒瓶と器。

「いや、お土産につて渡したら・・・今呑むつて開けてしま
つて」

ばつの悪そうな顔をして笑う。

開けられた布袋が散乱していることからして、本当に持ち帰りよう
に置いてあったものだろう。嘘ではなさそうだ。

「さあさあさあ」

押し付けられる杯。

確かに、この肴たちには酒が合うだろうと考えてはいたが……
・こんな昼間から……

「まあ、ちゃんと奉納用の上物なんで悪酔いはしないと思いますけど……」
美味しさは保障します。

その言葉に、決心がぐらついて

「うん。かなりの上物よ、これ」
今までで一番かも。

穰子の言葉に、ぱたんと倒れた、

神に奉納された酒類は神聖なものである。
よって、だらしなことなど何も無い。

そういうものである。

「あらあら、お姉ちゃんもだらし無いわね」

まるで紅葉のように顔を赤くして寝息を立てる姉。
それに男は渡してくれたかけ布を被せた。

「私よりも先に潰れちゃうなんて」
くすくすと笑いながらその頭を撫でる。

いつも世話をされている方としてはちょっとした優越感だ。
軽い仕返しといった感じでその額に手をやって髪を梳いてやる。
少し身じろぎしたが……しばらく目覚めそうにない。
悪戯し放題だ。

「そりゃ、呑んだ振りして誤魔化したらそうなりますよ」
酷いことを……。

そんなことをいいながら、奥へと器を運んでいた男が帰ってきた。
その手に持たれているのは熱いお茶。酔い覚ましには丁度いい。

「知ってたの？」

それを受け取りながら、首を傾げると、男がこくりと頷きながら向かいに腰を下ろした。

そして、私たちが飲んでいた酒瓶を指差す。

「二人で飲んだしちゃああんまり減ってない」
注いだ振りでもしてたんでしょ。

そういつて、にこりと笑った。
こちら悪戯っぽい笑みで返す。

「まあ、こつでもしないとお姉ちゃんは羽目を外さないから」
里での収穫祭も自分には関係ないからって顔出さないし。

生真面目な顔で遠慮する姉の顔を思い浮かべる。

いくら司るものが秋の物悲しさの方だとはいえ、わざわざ日常ずつとそうしている必要はないだろう。たまには昼間から酔っ払って楽しくやればいい。

私と同じくらいお酒は好きなのだから。

「　　といつてもまあ、私も収穫後の里にいったって意味はないんだけどね」

ちゃんと作物の収穫前に行かなければ秋の実りは与えられない。

祝福を与えるのはそれが実る前、始まりを見守らなければならない。あくまで、あれは里の人々の感謝の気持ち。

だから、姉のことをごり押すわけにもいかなかったのだが。

「　　知らない男になら迷惑をかけてもいいと？」

そんなにいい人面してるわけじゃないと思いますけど。

冗談っぽくそういつて目を細める男。

確かに、いくら私たちの季節だからといって、いきなり目の前でお酒を呑み始めるほどにいつもは軽い調子ではない。

けれど、私は少し知っていたのだ。

「この前の宴会が会ったでしょ。あの時、遠くからだけ見てたのよ」

たまたま通りがかった場所で遠くに見えた姿。

楽しそうに笑う人々に、

世話を焼き、自分も楽しみながら周りを盛り上げていた男。

緩く構えて微笑んで　けれど、その表情は、どこか年老いた翁のようにも見える。

俯瞰し、鳥瞰し、けれど、隣で共に佇む。

長い歳を経て成った大木のような老成。

何か、感じるもの。

私たちに近い何かを持っている気がした。

「　山の方で鬼や天狗に噂も聞いて・・・・・・・・まあ、ちょっと見物してみようかしらとね」

里の者達のも少し話を聞き、その評判も悪くなかったし、話して見れば妙に馬が合った。

合わせてくれていたのかどうかはわからないが、それを感じさせない自然さや老練さも持っているのだろう。

多分、見た目どおりの人間ではない。

それは最初から感じていたことだ。

「なるほど・・・・・・・・」

あの酒鬼娘と時々遠くから見てる天狗の連中か。

そう呟いて納得したように男は頷く。

辺りを気にしているのは、酒を嗅ぎつけてあの鬼娘が来訪しないかという確認だろうか。

「今日は山の連中の宴会で鬼も天狗も全員参加してるわよ」と伝え

ると、安心したように息をついた。
流石に、あの鬼にだせるだけの酒数は用意していないのだろう。

何処か間の抜けた様子くすりと笑い、お茶を啜った。
そうして一区切りがついたところで

「それじゃあ」

今度はこちらからの疑問。

「あなたはなんで私たちを歓迎したの？」

今日は様子見のつもりでの来訪であり、男がどんな人物なのかを見るために姉を誘って訪れただけのはずだった………なんだかトントン拍子に酒を呑むところまでいってしまったが。

その切っ掛けは、男が食事でもどうかと私たちを誘ったところにある。

なぜ、男は私たちを歓迎したのか。

「ああ」

それに対して、男は悪戯っぽく笑った。

「丁度料理に失敗したところでしてね」

男は家の隅の方にある竈に目をやって、その焦げついた壁を示す。

「朝食が物足りなくなっただんで食材を分けてもらおうかとね」
そちらも調理する手間が省けて楽でしょう。一挙両得ですよ。」

そういつて笑う。

.....

確かに、あの時私たちは山や森で採ってきた食材を大量に所持していた。後で家で食べようと思っていたものだったが.....それならと快く男に渡したのだ。まさか、それが狙いだっただろうか。

「ほんとにそれだけ？」

食べ物狙い。

なんだか即物的な理由である。心情的に受け入れたくはないものだ。

それを読み取ったのか。

男は口元に手を当てて「ふーむ」と何やら考える。そして

「ああ、そういや家の裏に空き地があるんですよ」

いかにも今思いつきましたというように口を開いた。

「そこに.....畑か何かを作ろうかなと思いつき.....考えてましてね」

白々しい直しながらつらつらと適当な理由を語る。

秋の神様達が訪れてくれたんなら縁起がいいでしょう。神様に奉納した分、豊作は約束されたもんです。

なんならご利益を与えていつてくれてもいいですよ。

そんなとことを嘘臭く付け加えて
もっともらしく仕立て上げる。

そちらの方が理にかなっている。
その方が理由として形になる。

そんな気がするだけ。

ふふ。

男の口八丁手八丁に語る様子に、なんだか笑いが込み上げてきた。
多分、男は何も考えていなかったのだ。

本当に。

ただ、美味しいものを食べたかったとか。
一人の食事よりも誰かと一緒食べた方が美味しいだろうとか。
たまたま出会ったご近所さんに挨拶しておこうとか。

そんなことしか考えていなかった。

「あざといわね」

これは本当にさっき思いついただけの提案。
けれど、それに乗ってあげるのが神の度量というものだろう。
堅苦しく形式ばって………中身はほんの軽いものでいい。

「人間ですから」

神様に祈るだけですよ

軽い調子で返された言葉に、互いに目を合わせて笑いあった。

あの鬼がいていたのはこういうこと。

あの小さな鬼娘の言っていた通り。

その空気に呑まれ、すっかり巻き込まれてしまっている。

相手の調子に引き込まれ、嘘か真かわからない言葉で騙されて
どうでもよくなる。

悪くない……気分だけ。

人間にいいようにされる神。

時折神話にもあれど、その相手は英雄ばかり。

なのに、私たちはこんな胡散臭い男に上手くのせられてしまっている。

「まったく、畏れを知らない人間ね」

負けてもいないのに、やられてしまった気分で呟いた。

なんだか少し納得がいかない。

「なあに、年の功ですよ」

折角面と向かって感謝できるんです。

ご利益のためにも頑張らないと。

愉しそうにいつて、空になった器に茶を注ぐ。

隣にもう一つ置かれているのは、きつと姉が目を覚ましたとき用の
分だろっ

本当に、神様扱いが上手い。

もう参ったという気分で受け取って、その心地よい温かさを喉に通した。

姉が目を覚ますまで、少しのんびりしておこう。

立秋を過ぎたある日の事。

時折一服に立ち寄るためのお茶所を見つけた日。

お客様（後書き）

お客様は〇〇です、な話。

酒を呑んで食ってばかりですが、年をとってからの愉しみというのはそんなもののような気がします。

たまに読書。たまに喧嘩。

そんな感じで

……今回の新登場は原作でもほとんど台詞がないためオリキャラ気味ですかね。ほとんど掴む所というか掴むほど紹介されていないというか。難しいです。

ご感想・批評お待ちしております。

枯れ桜花（前書き）

日常を経て

枯れ桜花

日常を続けていた。
日常が続いていた。

一つの場所へと腰を下ろし
一つの場所で他者と繋がり
安らぎを得て
平穩に身を落としていた。

久方ぶりの居場所に
酔っていたのかもしれない。
緩んでいたのかもしれない。

それくらい
その樂園は心地よかった。

たとえ
かりそめ
幻想のものだったとしても

けれど

世界は優しさだけでは出来ていない。
温かさだけの世界は存在しない。

どんな場所でも

現実というのは残酷だ。

いつも

そう思い出す。

いつかの邂逅は春のことだっただろうか。

薄紅色が舞い落ちる美しさの中での諍いを経て、彼女と彼女は出会った。

その始まりはあまりにお粗末なもので、お世辞にも素晴らしいものだったとはいえない。目の前でそれを見ていたのにも関わらず、それがこんな未来に繋がるなど夢にも考えない。それほどに、そうまでいってしまえるほどに、酷い切っ掛けだった。

それが、ここまでの実をつけるのだから、やはり未来とは、予想つかない不条理に満ちたものなのだと感じてしまう。

考え及ばず、そのどんでん返しが小気味いいと思ってしまうほどだ。

己を巻き込むほどに、大きくなるなんて、ね。

考えもしなかった事象に、自分もその渦に巻き込まれてしまいたくなかった。

その手を伸ばしたのはあちらだが、同じほどに、自分も手を出さなくなった。

だから、掴んだ。

そして

夏を越え

秋が過ぎ

冬が来て

「もう、時間が無いわね」

再び巡りくる春はすぐそこ。

多分、それが刻限となるだろう。

「完成度はどれくらい？」

冷静に 己の内の焦りを押し殺しながら彼女は問う。

「七・八割……まだまだ、実験段階ってところかね」

そういつて指したのは、家の周りに植わっている桜の木。

辺りが雪で埋もれているにも関わらず、桃色の花をその身に宿して、ひらひらと宙に舞わせている様は、明らかに自然の摂理からは外れたものだ。

「いくつかの変化も見られたが、それが妖力を宿したものに通じるかはわからない」

投げ渡すのは、自らが考案した封印の式と陣が描かれた筆記帳。

今まで生きてきた全ての知識を動員して作り上げる緻密な設計図。

「そう」
それを受け取り、ぱらぱらと軽く目を通す。
それだけで、全てを理解してしまったのだろう。
投げ返される帳面。

「まだまだ出力が足りないわね」
「元々、俺の専門は低燃費での最大活用……地力がない分の埋め合わせ」
並外れた力を前提とする大規模発動など考えることがない。

そういつて、その帳面の中にある一つの図式。
それを描いた札を表の桜の方へと投げつけた。

「複雑になればなるほど扱いが難しくなる」
小さな力なら、その分扱いは易い。

木の幹の中端。
丁度真ん中辺りにそれが張り付いた瞬間　　ばちっという小さな音がして、花が一斉に散った。

「それでも、これじゃああれには通じないでしょう?」

残された丸裸の木に対して、その大妖怪はすつと、空中に線を引くような動作をした。

それだけで　張り付いていた札は塵となり、瞬きの間に、元の花の咲き誇る状態へと戻る。

境界……大妖怪としての力と能力。

季節外れの桜を満開に芽吹かせて、その力によって簡単な封印程度、指一本で無効化してしまう。

大妖怪。

力あるものとしての能力。

小さな力をいくら組み合わせようとも、支えきらないような巨大なものに押し潰されてしまうのは道理。力尽く、力任せで大体のことは出来てしまう。

けれど

「その力を完璧に受け止められる術式………どういう難題だ」

しかも、それを行使すべき対象は脆弱な肉体しか持たない人間。ほんの僅かに力の矛先がずれるだけで、それは粉微塵に砕け散る。

下手すりゃ竹取の姫さんのよりも難しい………。

時折自分が料理しに訪れている家の主。

それが出したという無理難題にも及ぶほどに困難な題目だ。

しかも制限時間付き。

「 やっぱり、無理かしらね」

柄にもなく沈んだ声で、彼女は言う。

その手をすり抜けていくだろう 失ってしまうだろう未来を想像し、強く拳を握りこむ。

自らの未熟さに。
力の及ばぬ齒がゆさに。

変わった、のかね……

昔からは考えられない姿で、彼女は頭を垂れた。
自分の力だけで何もかもを通してきた気概を捨てて、寄る辺を望んだ。

欲のままに赴く妖怪。

ならば、それは本当に正直な感情なのだ。

「ま、経験だけは積んでますからね」

ぱらりぱらりと帳面を捲った。

「今までの記憶全部ひっくり返せば、ちったあ、ましなもんも出来るかもしれない」

無駄に生きた年月の発掘。
年寄りの知恵袋の使い時。

「どっかの仙人も、人生を振り返るのが長生きの秘訣だっていつてたし」
健康のためにも踏ん張るさ。

そう冗談っぽく笑う。

そうさね。

法力や陰陽術の併用。
靈術や仙法の利用や西洋の魔術媒介の使用。

まだまだ試していないことが腐るほどにある。

どうせ、暇つぶしに学んできた器用貧乏な知識でしかないのだから、そのまま腐らせてしまうよりも何かに活用した方が面白いというものだろう。

「たまにや、老骨にも鞭打たないってね」

その言葉に顔を挙げ、くすくすと笑う表情。

それは既に、いつも通りのものへと変わっている。

そう、いつも通り。

「そうね。甘え癖がついたら駄目なもの」

胡散臭く笑いあい、適当に今の事態を乗り切るのだ。

それが長く生きたものの生活の知恵であり

思考を止めないためにも樂觀して。

たとえどんなに追い詰められようとも思考に余裕をもつ。
精神だけは殺さない。

そついう生き汚さを 往生際悪く。

妖怪として

人間として

欲深く。

だから

それを話したのが、ほんの数日前。

つい昨日の話か、一昨日ほどのものだったろうか。

私の体感としても数秒に過ぎず。

彼の歴史からすれば一秒にも満たない。

ほんの僅かな時間。

けれど

それは、突然始まった。

いや、目を覚ましたのだろうか。

「なに、これは？」

突然、辺りが真っ暗になったような
何もかもがなくなってしま
ったような気がした。

この世界を支えていた糸がぷつりと切れて、
足もつかないような暗
い空間の中に沈んでいく。

ずぶずぶと
ぶくぶくと

「ゆっ
」

叫ぼうとした瞬間、引き込まれた。

あれ……………？

どうしようもない空虚が
堪えようのない絶望が

ああ、ああ……………！？

私の中を侵していく。

「
」

声にもならない声が喉から漏れて、苦しくて仕方がないのに呼吸が
できない。

暗い何処かに沈んでいくのに、辺りが眩しくて仕方がない。

喉を切り裂きたい。

目玉を取り出してしまいたい。

「うあ、あああ……………」

壊して

失くして

んでしまいたい。

「紫様っ!!」

何を考えているかもわからない混乱の中。

そのわずかな隙間から、叫ぶような呼び声が届いた。

「つぐ……!!?」

いきなり息が詰まった。

現れた誰かの腕が私の首根っこを捕まえて後ろに引いたのだ。
後ろ襟を取られ、急激な負荷と共に気管が塞がり息ができない。

「紫!!」

遠ざかっていく声と姿。

倒れ伏す友人と　あまりにも美しい蝶の姿が見えた。

「げほっげほっ……！」

喉の痛みと呼吸困難。

直接的な刺激によって先ほどまでの混乱が薄れ、冷静な意識が浮かび上がってくる。

「いったい何が……」

辺りはいつも自分が扱っている空間。私の能力によって開かれた隙間の中。

「ご無事ですか？」

私の背中を抱え、隣で呼びかけているのは藍。私の式である八雲藍だ。

先ほど私を引いた腕は彼女のものだろう。

式としての力。命じられた通りに動いたのなら主と同程度の力を発揮できる。

それを利用し、私の能力を借りて、私自身をこの空間へと引き込んだのだ。

つまり

それは私の命令どおりに行動したということ。

『主を守れ』という命に忠実に従ったということだ。

「藍……状況は？」

自分が置かれている現状を理解した共に、すぐに立ち上がる。喉の痛みは一瞬のもの。多少、頭が重い気もするが気にするほどのことではない。

それよりも……

意識を飛ばしていたのは一瞬のこと。それが始まったのもついさっきのことだ。

けれど、既に何かが起こっていてもおかしくない。

「お待ちください」

私が落ちていたのがわかったのだろう。ほっと胸を撫で下ろし、すぐさま私の力を利用した情報収集へと取り掛かる藍。

こちらは任せておいてもいいだろう。

私は今のうちに……

宙に手を翳し、様々な空間に意識を巡らせながら、それが何処にいるのかを突き止める。目印は渡してあるため、相当の力や場に紛れ込んでいなければ判るはずだ。

「見つけた！」

らしくもない声を上げながら、空間に線を引く。開かれた空間はそれがある場所へと真っ直ぐに隙間を開く。

そこにあるのは、人間の男の後姿。

「つ……………!?!」

呼びかける名がないことに、僅かに逡巡した。

この急いでいる中での余分な手間に、思わず唇を噛み
づいて振り返った男に理不尽な怒りが込み上げる。

気配に気

だが、そんなこと気にしている暇はない。

「緊急事態よ！ 幽々子が」

言葉足らずの呼びかけに

「すぐ準備する」

男はすぐさま答えた。

そう。

予想の範囲内なのだ。

最悪の、想定内。

不幸中の幸いで、男がいたのは自宅の部屋。
それほど準備に時間もかからないだろう。

次は……………

「紫様」

そうやってとるべき行動を考えている間に、情報の収集を終えた藍が報告に来た。

片側で必要物の手配を行いながら耳を傾ける。

「遠目からですが、西行妖が七分……八分程が開花しているのが確認できました。辺りには、妙な力場が発生していて、辺り中の生物に影響を与えています　おそらく、幽々子様の方によつてのものです」

このままでは数日中に……。

そこで言葉を濁した藍を制して、さらに詳細な情報を集めるように命じて下がらせた。

言われるまでもなく、その先は、容易に想像つくものであったから。

はやく……。

状況は刻々と悪くなるだろう。
急がなければならぬ。

「西行妖……幽々子の力……妖忌は？　いや、
それよりも……」

今できること。

今しておかねばならないこと。

可能性。

危険性。

あらゆることを思考し、取るべき行動を探る。

見落として一つないように
髪の毛一本の希望も見逃さぬように

お願い……………。

願いのために
望みのために

私にできることの全てをする。

その最悪から逃れるために

随分と時間が経った気がした。

「……………」

沈みかけていた夕日が完全に姿を消したからそう思うのか。
久しぶりに自分の脚で歩いた疲労感によってそう思うのか。
本当は一刻ほどの時が過ぎたのみでしかないだろう。

けれど、そう思う。

「 貴方はきれいなね」

呟いた言葉が白く凍えて、その静けさの中に染み入ってしまうように消えていく。

舞い落ちた薄紅は雪白の地面に彩りという化粧を与え、降り積もった二層の色が咲き誇る花のような偶像の形を描き出した。

在り得ぬ景色。

成らざる光景。

当たり前ではない。

「雪月花………」

日常を越えた風景。

「」

深く吸った息が胸中に冷たく満ちて、自らが透き通っていくような感覚がする。

冷えた身体はすでに寒さの域を抜け、震えもせずとその世界をそのままに享受している。

空に月。

地には雪氷。

舞い落ちる桜花。

その美麗さに身を委ねる 委ねられるのは、自らが人の身をはみ出したという証だろうか。すでに、考える力すら失い始めた思考がそんなことを告げている気がした。

そう、人間ごっこは、もう終わり。

そんな思考。

それでも、一つ想った。

「きれい・・・・・・・・・・」

その残酷さも。

その空虚さも。

全てを含めてきれいだと思える。

それほどに

「美しいと思わない？」

空に響く声。

自分の声しか響かない空間。

その後ろを振り返ると

まだ、少しだけの温かさが残っていた。

「きれい、だとは思いますがね」

答えたのは、緩い男の声。

いつも通りの気の抜けた様子で

細く引き絞った目をしていた。

「でしょう。ねえ、紫」

その隣で顔を伏せていた少女　自分の親友へと向けて呼びかける。
自分でも驚くほどに穏やかな気持ちで、静かな声がでた。

「そう、ね……………」

僅かに笑んで、こちらを見つめる。

目尻を下げたまま、何かを必死に押し込めた目で

「妖忌も……………ここにきて大丈夫なの？」

既に暇を与えたはずの従者。

唇を噛み締め、鋭い眼光のままに耐える老公。

「……………」

黙したままで、真っ直ぐにこちらを見る
睨む。

私の背後にある老木を

刀に手をかけて……………それを抜けぬ自分を恨みながら。

「大丈夫ですよ」

特製のお守りで、しばらくの間ぐらいは。

問いに答えたのは男。

黙り込んだ二人の代わりに、一人で語る。

「それにしても寒いですね……さつさと帰って鍋にでもしましようか」

あくまで飄々と 日常いじょう通りに話す。
緩く笑み、軽い調子で。

「それもいいわね」

込み上げる笑い。

こんなに穏やかな気分になったのはとても久しぶりのことで、こんなに自然に笑えているのは不思議なことなのだと思う。

愉しくて
嬉しくて

哀しい。

「でも、遠慮しておくわ」

きつと温かい。

きつと心地よい。

けれど、駄目なのだ。

「幽々子……!!」

伸ばされかけた手。

それは広げられる前に萎み、止まった。

辺りに舞う蝶の群れによって。

「これは……………」

半人半霊。

その身体半分が霊である妖忌にとって、それは余計に敏感に感じてしまうものなのだろう。

隣に浮かぶ半身がその危険に身を竦ませ、警戒に身を震わせる。

そう……………」

これは、死を誘う存在だ。

ここにいれば、例外なく枯れ落ちる。

その身も。

その魂も。

「私はこの子達と用事があるの」

だから、またの機会に。

そういつて微笑んだ。

自分でも信じていない先の話に笑った。

それを

「ふざけないで!!」

糾弾する声。

「まだ間に合う……………まだ何とかできるわ!」

能力を使って蝶を遠ざけ、掻き分けるようにして進む。
私に向けて伸ばされる腕。

「私たちが……私がかたして見せる！」
だから

触れかけた指先が、ゆらりと揺れる。

落ちた花びらが彼女に振り落ちて 蝶へと変わった力が、その身に罹る。

「っ！」

それが障る前に、男が紫を無理やり引いた。

一瞬間に合わず、僅かに触れた力によってその身体が傾ぐ。
顔が歪み、額に汗が落ちて それでも。

「放して！」

それを無視してでも、前に進もうとする。
男の腕を振り払い、力の元凶へと近づく。

大妖怪。

力ある妖怪でさえ誘う力。

それを判っていないながら

紫……………。

「ありがとう」

胸に満ちるのは、温かい空気。
ずっと一緒にいてくれた友が与えてくれる最後の温度。

「でも、いかないといけないの」
一緒に。

もたれた桜の木。
背中を合わせた桜花に触れた。

それだけで、力が満ちていく。

「つ……………」

彼女たちを遠ざけるために振った腕。

向かうべき先を決められた力が彼女らに降り注ぎ、その動きを阻害する。

「そんなもの……………そんなもののために」
あなたが犠牲になる必要はない。

二刀の剣を掲げ、それに耐えながら忠老が叫ぶ。

吞まれてしまわぬよう、必死に掻き集めた意志によって
刃を向ける。

私の後ろの存在に。

「妖忌……………」
ありがとう。

小さく呟いた。

「　　がつ・・・・・・・・・・!?!?」

さらに増す力。

その手から刃が滑り落ちかけて、ぎりぎりのところで掴みとめた。けれど、一度抜けてしまった力は戻らず、剣を支えにして無理やりにこちらに目を向けている。

なぜだ、と。

「　　この子は、決して悪いことはしていないのだと思うの」

舞い落ちる薄紅の花片。

それを手に平にそつと受け止める。

「　　そう生まれてしまっただけ」

風に舞うそれは美しい。

その身に何を内包しようとも、それは変わらない。

「　　そして　私がそばにいた」

その場に伏して死んだ父　それに憧れた死んだ人間。

私が得た能力　私によって強められた力。

「　　ここで　」

父が死ななければ

それを誰かが真似なければ

「　　私が傍にいなければ　」

この子は、ただの美しい花だったのだ。
春の訪れと共に咲き散り、世界を彩るただの桜の花であれたのだ。

たまたま

父はここで死ぬことを望んだ。

偶然

誰かがそれと同じ事を繰り返した。

「そこにいたのが私でなければ」

力の素養を持っていなければ
この桜のことを知らなければ
父の娘でなければ

ただの人間であつたなら

「こんなことにはならなかった」

たまたま。

偶然。

歯車が合ってしまった。

私も

この桜の木も

「「じつじつのを、運命というのかしらね」

噛みあって、繋がってしまった。
合わさって、繋いでしまった。

必然に巻き込まれた。

「そうなるように生まれてしまった」

笑う。

晒う。

その滑稽な考えに
その安易な考察に

「
けれど」

『だから、こんなに大切な友だちと出会えた』

そんな陳腐な宝物を想って 微笑んだ。

出会わせてくれた幸運に。

出会えたという幸福に。

「私は独りじゃないと死んでいける」

誰かのために

友だちのために

幸福に終わりを告げられる。

だから

最後は、笑顔を見せて逝きたいと
幸せに生きていたことを知らせたいと

締めくくる。

そうやって
悟りきった存在に
語りきった彼女に

「ふざけんな……………」

静かにいった。

いつもの調子を忘れ
いつもの『らしさ』を崩し

「何を笑ってる」

強く言葉を使う。

「そんなに　　幸せだったとか想って終わりたいのか」

ふらつく足を地面に叩きつけた。
伝わる痛みに意識を繋ぎとめ、無理やりに進む。

「そういう運命だったからしかたない。そういうめぐり合わせだから仕方ない　そう生まれたから……諦めろ、ってか」

前には、伏したまま動けずにいる紫。
その前へと進む。

「潔いねえ……まだまだ若い奴が」
袖に仕込んだ札が我先にと散り尽きていく。
加護も守りも関係なく、力に中てられて。

それでも、無理をして進む。

「そんなに世の中に未練がないんですかね」
こっちはこんだけ年を食っても欲しいものがあるのに。

意識が遠くなる。
意志が薄れていく。

叱咤し、激励しても、まったく足りない。
だから

「まだまだ死にたくない」

自分を騙す。
自分に嘘をつく。

能力ちからじつくを使つてで押し通す。

「そうは思わないのかねえ……………」

辿りついたのは、手を伸ばせば届く距離。

「無理よ」

初めてその表情が歪んだ。

作り上げた笑みが崩れて、今にも泣き出しそうな少女の顔だけが残る。

「私だつて……………私だつて一緒にいたいけど」

伏せた顔に、震える肩。

それに反応するように膨れ上がる気配。

「でも 駄目なのよ」

増した圧力。

縋りついていた命綱が大きく揺れて振り落とされそうになる。

「あなたたちを……………大切なものを殺してしまうのは嫌」

簡単に思い至ってしまう未来。

確実に訪れる破局。

「そう分かりきっているのに、続けることなんてできない」

すでに引鉄は引かれている。
時間の問題だ。

ぐっ………。

意志を反して足が下がる。

これ以上近寄りたくない、本能が叫ぶ。

回避して 生きたいという。

「もう、決めたの」

強い意志。

守るため、叶えるため。

絶対に譲れないという想い。

それほど。

瞳から色が抜けていき、残る意志は一つのみ。
その終わりへと至るため、力が収束させる。

もう………。

何も聞こえないだろう。

言葉では届かないだろう。

彼女は一人で終わらせるつもりだ。
その身と力ごと沈んでいくつもりだ。

「決めた……ね」

前に進むのをとめて、その場に棒立ちとなった。
その想いを見届けて、深く息をつき

「なら、勝手にしろよ」

荒れ狂う蝶の群れの中、そう呟いた。

そうだ。

死にたいなら死ねばいい。
生きたくないなら生きなければいい。

それが願いなら
それが想いなら

否定はしない。

それも自由……人の意志だ。

過ぎるのは今までの見てきた死の数々。
理不尽に、意味もなく逝ってしまった友人や知人。

そういうことには既に慣れきった身だ。
別れなどいくらでも経験している。

けれど

「そっちが勝手にするなら」

その手を放すのは向こうの意志だというなら、どれだけ固い意志だろうと　こちらには関係がない。

「こっちも勝手にするだけだ」

応援もしない。

付き合ってやる義理もない。

「いくら逃げようとしても」

子どものような屁理屈で勝手なことを常識では考えられないようなわがままを

「　離してやらないわよ」

ふらりと立ち上がった大妖怪。

迷いなく睨みつけるのは　その獲物^{しんゆう}。

「老人も、妖怪も　」

刀を握った姿。

自らの迷いを断ち切り、自らの恐れを振り払い、二刀を持って立つ

のは半人半霊。

「しつこいことじゃあ変わりない」

死の暴風を防ぐ盾となる姿に　笑う。

「女もね」

背に当てられた腕。
身体に通される力。

「　　つがああああ！」

大妖怪の全力の力が身体を駆け巡る。

男は笑っていた。

「なあに」

懐に仕込んだ取り出した数種の札。
数ヶ月かけて作り上げた未成品。

「簡単にはいかないなら」

上着の裏地に仕込んだ方陣に力を流し、札に刻んだ術式と連結させる。
足りない部分、欠けた部分を補うように力を込めて、自らをその一部とする。

そんな無茶なまねをして

「無理をすればいいんです」

そう笑っていた。

強大な力に堰が切れて、押し寄せる水によって溺れ死ぬ。
押し寄せる嵐に操舵を誤り、波に飲まれて沈む。

そんな可能性を秘めながらも

「帳尻合わせは得意ですから」

飄々と

枯れ桜花（後書き）

一つの事件。

一つの終わり。

日常転じて先へと進む。

雪ノ下

嘘をつく。

理屈に合わず。
理に乘らず。

騙しきる。

常識に外れ。
道理を無視し。

そう思い込む。

周りの人間を
辺りのすべてを
自他共に

「信じるも信じぬも八卦」
そうやって作り上げる世界。
そうして創りだす形象。

「描かれた幻想を、現実に」
説明できぬ力。
理解できぬ現象。

夢も現も・・・

そこにいるのが妖怪。
そこにあるのが不可思議。

自分という存在も

「 どう生まれようが」

現を夢に
夢を現に

己の意志でねじ曲げる。
その遺志を否定する。

「 そう生きる必要はない」

道を外れ
日常を越えて
誰とも違い
何者にもなれず

非日常に生きている。
道理外れて生きている。

「 そうでしょう」

そう嘯いて

失う可能性。
得られる可能性。

よくある話だ。

ぎりぎりの状態も
絶体絶命の状況も

どうかかこうにか乗り越えてきたもんですよねえ。

煙に撒いての有耶無耶な誤魔化し。
あるもの全部を使つての猫だまし。

つまりは

「はったり」

保証も何もありません。

嘘でも本当でもないただの幻想。

運次第の神様任せ。

引き分け狙いの泥沼頼り。

「それでも」

『勝手に世話をやいてやる。それが年寄りの役目だ』
生かされた記憶が叫ぶ。

『生きてほしいと願う。それが友達っていったる』
届かなかった想い出が笑う。

こっちこそ嫌だ。

独りでいくのは辛いから
独りぼつちは悲しいから

「不幸も幸福も等分に　一緒に……」

あの時届かなかった手を伸ばす。

あの日の後悔を振りきるために叫ぶ。

「背負わせてやる」

盛大な嫌がらせ。

老人の理不尽な我が儘。

手前勝手な八つ当たり。

「……！！」

声にならない叫び声をあげ

「幽々子！」

「ごうつくばりな妖怪隣に並べ

「幽々子さま！」

主の意志を無視した侍を前に置き

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

望みを果たそうとする少女の邪魔をする。

どういつ話だ。

とんだ滑稽話に笑みが浮かんだ。

この世の中にはこんな勝手なやつらしかないのかと愉快になった。

そして

「もう少し、今世を楽しんだっていいだろう」
「どんな形でも。」

心からそう思えた。

だから

そういつ、夢を見た。

「むっ………?」

上品に整えられた調度が飾られた一室。
風通しに開けられた襖より吹き込む一陣の音響に目が覚めた。

ああと………?

少々、錆びついている頭。

どうやら自分は布団でぐっすりといった具合に眠りこけていたようだが………その前後の経緯が中々浮かび上がってこない。寝ぼけているのか………とうとう惚けてしまったのか。どちらにしても、今の状況が掴めていないのは確かだ。

とりあえず………。

動き出そう、そう思って

「うぐがあっ」

胸の上に押し掛かる掛け布団をのけ、上半身を持ち上げようとしたところに 鋭い痛み。

痛っ…………おもっ…………

まるで電流のように身体中に広がる刺激。
筋繊維全てに鉛を仕込んだかのような重量感。

「ぬぐ…………あ、が…………」

その感覚に身じろぐ反射の動きにさえも連鎖的に襲い掛かる蜂の群いたみれに思わずうめき声を上げる。

な…………に、したんだっけかな。俺は？

一夜にして壊れた人形のように成り下がった身体。

一体どんな状態になっているのだと、そのえげつい感覚に耐え、必死に意識を集中して、どうにかこうにかと身体を起こした。

そして

改めて自分の身体を見直してみると

「うわ…………」

傷だらけ　というよりもすでに、傷んでいないところがないといったぐらいに燦々たる者だった。

こりやまた…………

切り傷、骨折、擦過傷…………そういつた外傷はほとんどない。
血は滲んでおらず、関節などの具合も大体のところは無事なもの。

ただ、その内側が酷い。

内出血に筋肉痛・・・・・・・・霊力枯渇による疲労と栄養不足・
.....

身体全体を何かが通り抜けたような 膨大な嵐が身体の内側だけ
を通り過ぎていったような状態だ。内々にあつた調度品があらかた
壊れ、部屋全体にガラクタが散乱し・・・・・・・・主人はその災害の
中でもむにもまれて憔悴しきっている。

立て直すにしても片付けるにしても、これはかなりの日数をかけな
いとだめだろう。

そのくらいは回復に充てないとまともには動けない。

骨組みが残ってる分まだましつてもんだが・・・・・・・・

屋根ごと全部張り替えのようなものである。

回復するための準備を整えることの方に時間がかかるくらいだ。
すっかり乱れてしまった身体の波長から治さねばならない。

どんな無茶を・・・・・・・・

そう考えていたところに、がらりという音。

「 あら、起きたの? 」

部屋の内側。

奥へと続いている方の襖が開き、そこから良く知った顔が覗いてい
た・・・・・・・・それをみると同時に、少しだけ浮き上がる泡きおく。

「 ああ 」

薄紅に染まる雪。

月の灯りと舞い飛ぶ蝶。

死に向かう少女。

「おはようさん」

合点がいつて、目を細めた。

疼く腕を持ち上げて、何故だか握りこんだままだった拳を広げてみると、くずくずになった紙片と乾いた花片が塵となって飛んでいく……封印に使った札の切れ端と思わず握りこんだ花の欠片だろう。

「……何日寝てた？」

その時から、それが終わってからずっと起きていただろう妖怪の少女に問う。

そりゃそうだ……。

あの時行った無茶な所業、現在の疲労具合……それを鑑みれば、今この時があ夜の翌朝でしかないなんてことはありえない。そんなものですむはずがない。

少なくとも

「三日よ……」

そのくらいは経っているだろう。

むしろ、そんなもんですむなら御の字というものだ。

あゝのときと比べりゃ・・・・・・・・・・屁でもない。

寝ている間に多少は回復できている。

ずっと眠りこけたまま、衰えきつた身体で動けなくなるよりは、ましというものだ。あれは一度体験しただけでも地獄めいたものだった。

それに比べれば・・・・・・・・大丈夫。

まだまだ眠り足りないという身体から漏れ出る欠伸。それを噛み殺して笑みを浮かべる。

「どつりで・・・・・・・・身体が重いわけだ」

寝すぎたんですね、と無理やりに伸びをして　同時に打ちつけられた痛みという電流によって、「ぐぎゃう」という妙な奇声と共に崩れ落ちた。

・・・・・・・・どうやら、このくらいの運動も今の自分には無茶なものだったらしい。強がるうとしたところに食らった予想以上の刺激に思わず悶絶。

「ぐぎぎ・・・・・・・・・・が・・・・・・・・」

痛みに耐えながら再び上体を戻し、なるべく身体に負担がかからない体勢に移行する。

それだけでもかなりの労力を要し、精神力が削られる。

あゝ・・・・・・・・・・年寄りにゃ、きついもんだこりゃあ。

昔に経験したものよりもずっと軽いもの。

けれど、かなりの久しぶりの体験にもなると妙に辛いものとなる。これも年かね……。なんてことを考えながら相手の方を見ると……。思いつき笑いこけている少女の姿があった。

しかも、二人も

「ねえ、面白いでしょう？」

こちらを指差していやらしく顔を歪ませる金髪の少女と

「ほんとうね」

くすくすと上品に微笑む桃色の髪をした少女。

愉しそうに……。嬉しそうに笑っている。

とても人間とは思えないような白い肌をして、空気のように軽い身体を揺らし、辺りには漂う死霊を従えて　　それでも、楽しく笑っている。

。。。。。。。

一瞬。

笑えばいいのか……。悲しめばいいのかわからなくなった。

今ここにいる彼女は　　決して、そのままの彼女ではない。全てを掴み取れたわけでも、掬い取れたわけでもなく……。ただ、己勝手な言い分に周りを惑わせ、無理やりにもつなぎとめたただけだ。

その遺志に反して

「おかしな人」

逝くべきところに逝かせなかった。

もう、彼女の中に想い出は残っていない。
その宝物すら、一緒に奪ってしまったのだ。

「 まったく」

それは恥じるべきことなのかもしれない。

それでも

ここまでできて泣き言はいつてられない。

「年寄りには労わるもんですよ。それを笑いものになんて……」

片手で頭を抱え、片側の表情を隠すようにして、もう片方で口端を持ち上げた。

気持ちを半分。後は、おどけ調子の道化を織り込んで、精一杯の笑みを送る。

その罪に手を貸したものとして、その罪業の共犯者として　　ここ
で笑わないわけにはいかないと、途中まではそう考えて……

「ひどいお嬢さん方もいたもんだ」

その少女が笑っていることを喜ばずにはいられないという素直な感
覚に　　笑う。

嘘をつく必要もない。

痛む身体を揺らし
引きつる腹に耐え

それでも、笑わずにはいられない。

「失礼なことをいうわね」

口元に笑みを浮かべたまま頬を膨らます妖怪と

「あらあら、ごめんなさい」

同じく笑んだままに謝る少女　その亡霊。

「まったく……」

それに困り顔を浮かべながらも、口元は緩んでいる自分。

とても歪で　それでも全員が心から笑えている滑稽な空間。

どれだけ理に反していようと、常識からはみ出していようと、今の瞬間を楽しめている自分たちに、きつと間違いはない。たとえ間違っていていようと、自分たちには正解だ。

今この瞬間だけは、正解なのだ。

それでいい。

歳よりは後のことなんて考えず……。

残り少ない時間をどう楽しく生きれるか試行錯誤するのみ。

そう思う。

葉もなく。

花もなく。

その茶色の肌をそのままに晒す姿。

あるべき、冬の姿……。

その木を見て思う。

やはり、あれは偶然にして起きた不幸な出来事であり、悪いときに悪いものが重なってしまった不運なめぐり合わせにすぎないのだと。

「しかし」

それでも、その不運を乗り越えて生きなければならぬのが人生である。

それでも、その不幸を呑み込んで進んでいけるのが人生である。

「お主にはすまぬかも知れぬが」

どのみち、あのままの状態が続けばゆがみが出ていた。いずれは、外的にしる内的にしるその存在を脅かす何かに呑みこまれていたに違いない。

遅かれ速かれどうにかになっていた。

だから、それを自分たちの勝手な形に歪めた。

それだけの話だ。

悪いことをしたというなら、お互い様というものだろう。

あちらはその美しき本性を奪われ　こちらは大事なものを一つ持
つていかれた。

お互いに失うものがあり、得たものもある。

等分に傷ついて、互いに少しだけ譲ったという形。
落とし所としては上々のもの。

「　　といつても」

結局自分は何もできていない。

出来たのは、その時間を作ること・・・・・・引き伸ばしているこ
としか出来なかった。

情けない・・・・・・。

その少しの利をもぎ取ったのは、ずっとその隣にいた親友の少女と
その身を投げ出してでも約束を果たそうとした男。

血を流し、身を削っていたその者たちの盾となることぐらいしか出
来なかった。

その程度しか、出来なかった。

あの時・・・・・・。

自分の剣は、蝶を斬った。

死の権化、死の写し身であるその蝶の群れを、確かに切り払ったの
だ。

その二刀を持って、少しでも……ほんのわずかな間でも確かに。

その時、思った。

「未熟だったのは、儂自身。この老いぼれの心根の方だったということだな」

全てを切る。

そんなこと、本当はいつでも出来たのだ。

「ただ……迷っていただけ。刀を振る理由を見つけれなかっただけ」

主の想いに。

主の哀しみに。

その腕を振るっていいのかを、心が迷っていただけ。

覚悟があれば、死に惑わされることなどなかった。

己の魂は剣に写る。

その迷いは己を鈍らせる。

「それを斬って……初めて自らを思い知らされた気分だ」

呟く言葉はほとんど己自身に向けたもの。

剣を振ってきた己の年月に向けた悔いの言葉。

応えなど求めていない。
けれど

「なかなか深いことってますねえ…………お待さん」

背中側から聞こえた声。

「何か掴みましたか」

ゆるりと…………少し疲れたような声で、男が現れる。

足取りこそしつかりとはしているが、やはり、無理をしているのだ
ろう。何処か覚束ない雰囲気がある。声も、動きも…………い
つもの余裕がない。

無理をしているのがありありと判る。

「もう動いて大丈夫なのか？」

それもそうだろう。

自分があの屋敷を出たときには、まだ目覚めてすらいなかった。
あの後すぐに起きたのだとしても半日も経っていない。

「ええ、歩ける程度には……………」
特性の秘薬をちよつとね。

そういつて笑む。

その表情に影はない。

「まだまだ寝ていればいいだろうに…………わざわざこんなと
ころまで」

足労させたことへの詫びと労い……加えて、ここにくる必要もなかっただろうという意味を込めての言葉に、男は軽く欠伸をしながら答えた。

「 そうしたいのは山々なんですけどねえ 」

うーんと呻き声をあげながら伸びをして、ばきばきと関節を鳴らす。年寄り臭い仕草で、年寄り染みた物言いだ。

それで、何かを覆うようにして

「 若いのが元気な手前……いい大人が寝たきりじゃあ格好つかないでしょう 」

ふざけた調子に笑う。

変わらぬ……。

釣られて少し笑みが浮かんだ わずかに気分が安らいだ。

こんな時でもこの男は変わらぬ調子なのだと、少しだけ、安心したような気分に……相変わらずだと、息をつくことが出来る。

「 それで……こんなところでどうしました? 」

隣を通り抜けるようにして、その桜の木に近づく男。

時折、何かを考え込むように目を細めながらその木に触れている。

何かの確認か……自分が行ったことに対しての責任を考えているのか。

この調子で、なかなか義理堅く、気のつく男なのだ そう、今は素直に考えられる自分がある。

云う通りかも知れんな。

失いはしたが、それで理解できたことがある。
何も出来ずではあったが、自らの腕の程を知った。

これも一つの悟りというものか……………。

己の分を理解した。
そういうことだろう。

「いやなに」

既に花びら一枚すら残らぬ雪の下。
その下に眠る一つの身体。

「少し、己の身の上を考えていた」

先代から仕え続けた主。
長命な時間を捧げ続けてきた年月。
報いようとし続けてきた自分。

「未熟だな」

肝心な時。
極限の状況が迫ってからでなければ、その腕を振るいきることすら
できない。
死におびえ、意義に迷い、若者のようなりの者たちに説教されて・
……………やつと動けた。

「迷ってばかりだ」

誰かの手を借り、自らの力を使いきり 主の命に逆らっても掴もうとした。

それでも

全てを守りきることは出来なかった。

与えられた役を果たせなかった。

「情けない……………情けなくて涙が出るほどだ」

悔しさ。

後悔。

違うか……………。

悔恨か。追憶か。

どんなものかも判らぬものが胸に溜まっている。
意味のわからぬものに囚われている。

笑えばいいのか……………泣けばいいのか。

ただ、重い。

それを正面で受け止められるのか 逃げてしまわないだろうか。
それが怖い。

まったく……………。

出会うこと。

『再会』を恐れているなど、この歳になって滑稽で仕方がない。

「・・・・・・・・」

地面に手を置き、その冷たさに浸る。
この下に埋めた記憶を想う。

弔いとして　そうやって迷いを誤魔化しているのだ。
時間を稼いでいるのだ。

「　　ふむ」

頷いた男。

呆れたのか。

納得したのは判らない。

「　　それでも」

雪を掻いて、何かを置いた。

何か微かに呟いたようだが、こちらまでは聞こえない。

「　　なんだ？」

ぼんぼんと柔らかくそれを埋め、よつとと爺臭く男は立ち上がる。

「　　昔の誰かがいってたんですけどね」

昔を思い起こすように目を細め、遠くを見るようにしながら　こ

ちらを振り向き、口を開く。

「どんなに苦しくても」

その表情を隠すように、その片側だけを見せないように、片手で髪をかきあげるようにして。年寄り臭く……。説教臭い口調で、言葉を造った。

「大人が先に泣いてちゃ、子どもが安心して泣けないでしょう」

何かを真似るようにして何かを想い出すようにして

強く
静かに

「笑えないでしょう」

深く言い放たれた言葉。

らしくなく……。いい終わったところで息を吐く。

。。。。。。。

少しの沈黙が落ち、その寒さの中に溶けていく。

さくりさくりと、男が歩くたびに立てる音が辺りに響く。

一瞬の静けさ。

それを経て

「まあ、ここにいるのは大年寄……。ここで、我慢す

る必要もないっちゃんないですがね」

その姿はいつも通りのもの。

冗談めかした雰囲気も今までどおり。

先ほどまでの雰囲気など吹き飛ばして、男は笑う。

ああ、そうか……。

一瞬だけ奪われていた思考。

その言葉の意味を少しだけ受けてとめて、やっと動き出す感情。

「なあに」

思い至ると同時に、言葉が出ていた。

考え込む自分の柄ではない姿に恥じ入って

「まだまだ、わしも格好をつけたい歳だよ」

強がりの言葉を使う。

虚勢を張った笑いを使う。

「どつせ泣くなら……」

拳を握り、背筋を伸ばし……刀を抱えなおして、しゃんと、自然に、無理をして

儂だけが甘えているわけにはいかんか。

年寄りらしく、侍らしく高楊枝。

男を睨みつける様に鋭く目を向けてから

「若者に全てを託して 何もすることの無くなった余暇に、ほりところぼすことにするよ」「
そうできるようにしよう」と。

不敵に笑う。

まだまだ隠居は出来ないのだと、厚顔無恥に。

「 ああ、それもいいですよ」

くくく、と含み笑いながら、同じ年寄りが笑う。
自分よりもずっと若作りの老人が笑う。

「なかなか、感慨深くてね」

ずっと、

歳をとれぬままに。
変われぬままに。

諦めきれぬままに……。

その重さは自分には量りきれない。
ただ一つでも、潰れてしまいそうに苦しいのだ。

「ああ、そういえば」

ならば、自分の重さぐらいは背負うわねばならない。
自らの矜持として

「あのお嬢さんがね」

全てを失ったわけではないのだから。

続く男の言葉に思わず笑い声を上げながら、そう思った。

「ねえ、幽々子」

白く染まった美しい庭園。

それを見下ろしながら、隣に座る少女に呼びかけた。

「なあに？」

屈託なく………歳相応の笑顔を浮かべて笑う。
影もなく、闇もなく。

ただの一人の少女として

「………本当に、覚えていないのね」

それだけで

それだけで理解できてしまう。

その悲しみを忘れられたのだと
その哀しみを忘れてしまったのだと

「紫と私が友達だったってこと？」

一緒にいた時間。

一緒にいたという思い出。

悲しみと一緒に流れてしまったもの。

「ごめんなさい」

少し申し訳なさそうな声。

でも、彼女に罪はないのだ。

これは

「いいの。確認したかっただけだから」

私たちの罪。

私たちの勝手にやったこと。

そう、我がまま。

その遺志を無視したのだ。

このくらいのこと……これくらいの悲しみなど、喜んで受け入れよう。

「こちらこそ、ごめんなさいね」

この寒い中、月を見ようなんていって。

息が白く染まる縁のふち。
二人並んで座る場所。

それを得られただけでも……。

「いいわよ」

こんなに綺麗なんだから。

失うはずだった時間。

終わるはずだった場所。

姿を変えて残ったもの。

「それより」

ほんと可愛らしく手を叩く。

こんな姿も、あの時には見られなかった。

そんな余裕はなかった。

知らないものを知っていく。

きつと内にはあったのだろう部分。

そのままでは埋められたままだったろうものの綻び。

きつと、こつというのも悪くない。

少しの寂しさと悦び。

そんな複雑の感情。

それを噛み締めて

「お腹が空いたわ」

「え・・・・・・・・？」

いたところへの不意の言葉。

「だから、お腹が空いたのよ」

念を押すように強くなる声。

こちらに人差し指を向け、その冷たくなった肌を寄せる。

「お腹・・・・・・・・？」

「ええ」

重さのない身体。

周りには幾つかの亡霊を従わせたの笑み。

それで「お腹が空いた」。

「お腹・・・・・・・・空くの？」

混乱に少し片言になってしまった。

当然だろう。まさか、生身を持たない亡霊が食事を取るだなんて思わない。

「うーん・・・・・・・・どうしてかしら？」

その疑問に少女は首を傾げる、

自分でも不思議だと感じながら、それでも何だかそれが正しいとい

うように。

「さっき、あの男の人にあっただでしょう？」

布団の中で再び眠りにについているだろう男。
そちらの方を指しながら

「なんだか 何か食べたいなって、思ったのよ」

そういった。

理由にもなっておらず。
理屈にも合わない。

「だって、私、元気でしょう」

それでも、当然のようにいう。

「
」

僅かに残る何か告げているのかもしれない。
微かに望む何かが囁いているのかもしれない。

そう思うのは

「一緒に御飯にしましょう」

私の勝手だろう。

目を細め、あの最初のを思い出す。

あの『仲間外れ』を、実はずっと根に持っていたのかと思うと、何だか笑ってしまう。

そして、ずっとそうしたかったのだと思うと、少し寂しくなる。

「　　そうですね」

がらりと後ろの襖が開き、温められた空気が流れ出した。

「誰も料理なんてしないだろうし………ちょっと時間をくださいよ」

まるで呑みすぎた次の日のような顔をして、男が立っていた。

頭を抱え、少しでも動くのが億劫だというように顔ゆがめながら確かに微笑んで。

「あら、楽しみだわー」

ふわりと笑う少女を見下ろして、心底楽しそうに。

「　　疲れているからって手抜き料理は駄目よ」

それにさらに笑いが込み上げる。

それでも、その空気に加わりたくて声を出す。

「はいはい、わがままな娘さんだ」

呆れたように顔をゆがめて笑う男。

それを見て、少女は楽しそうに微笑む。

「それじゃ、私もついでに頼んじゃおうかしらー」

今度は彼女もそこに加わっているのだ。
二人だけでも、一人と二人でもなく

「大丈夫よ」

自分の欲しいものを望む。
そんな簡単なことが簡単に出来る。

ただの三人として。

「今日は一緒に楽しみましょう」

触れられなかった部分。
失わなかった部分。

もう、届かないことは数あれど、今幸せにはいけない理由には
ならない。
それで見捨ててしまつては、そっちの方がどれだけ勝手だといつも
のだ。

「ありがとう」

あの時間いた言葉。
あの時とは違う言葉。

この先に何が起ころうとも、その二つを忘れない。
その一つを忘れない。

それでいいのだと思う。
それだけで、いいのだと思う。

きつと

それは歪な生き方だ。

多分

それは歪んだ生だ。

正常でも、清浄でもない。
無理やりに引き伸ばした型外れの幻想譚。

幸せにもなりきれない。

『めでたしめでたし』とは締めくくることができない。

そんなお話。

けれど

「少しも笑えないわけじゃない」

そう思う者もいる。

その程度の理由がある。

それで、十分だ。

雪ノ下（後書き）

それぞれの着地点。

それぞれに芽吹くもの。

終点始点。

続き物だから一日二日で上げようと思っ
ていましたが、風邪を引き
ました。

中途半端になってしまいました。

後始末（前書き）

遅れました。

後始末

とある道を辿れば、生きたままに地獄に辿りつくのだという。
とある道を進めば、活きたままに黄泉の道を見物できるのだという。

けれど、忘れてはいけない。

そこは地獄。

そこは冥土へと続く道。

踏み越えれば戻れない。
進みすぎれば帰れない。

橋を渡れば

川を越えれば

船に乗ってしまえば

ほら、もう遅い。

貴方も死人の仲間入り。

もう、帰る場所なんてありませんよ。

「なんてことにはあならないように………ってことだったんですけどね」

香ばしい焼き団子の香りに面や小物を売る屋台。

演者が意気揚々と出し物を繰り広げ、威勢のいい客引きの声が所中に響き渡る。

そんな明るい………まるで、祭事でも行っているかのような空間。

けれど、そこは

「いいじゃない楽しいんだから………あら、向こうの出店は何かしら?」

明るい空気に誘われ、次々と夜店をはしごしていく亡霊少女。

「そうよね あ、あっちも面白そうよ」

買った狐の面を頭に斜めに被り、一緒になって笑う妖怪少女。

「………」

姿だけを見れば、仲のいい少女二人が祭りを楽しんでいるようにしかみえない。

けれど、本来、ここにあるのはそれとはほとんど正反対のはずのもの 死に向かう寂しさと侘しさを感じながら、少しずつ沈んでいくという………生者が最期に訪れるはずの道。

それが、なぜこんなにも明るいのだろう。

「らっしゃい!どうだい焼き立てだよ!」

焼き菓子に

「やあやあ、南蛮で十年の間暮らした我輩の妙技……とくにご覧あれ！」

見世物に

「どれにしようかしら……」

「これなんていいんじゃない？」

楽しそうに色とりどりの飴細工を選ぶ少女たち。本当に、ただのお祭りの光景。

しかし、まあ……

少しだけ違うのは、辺りに漂う人魂の群れ。

白いふよふよとした存在がそこら中を飛び回り、屋台を冷やかしては通り過ぎていく。

「はい林檎飴だね……ありがとうよ、お嬢ちゃん」

そして、それぞれの露天の店主たちにも……足がなかったり、とても生者とは思えない真っ青な顔色をしていたり 人型ですらなかったりする。

つまりは

「さーてさて！ 今生に別れを告げる人々よ……今限りの身銭を切り捨てきって軽い身体で来世を迎えようじゃないか。さあ

さあ、よってつけよってけ!!」

死人。

既に死んでしまった者達によって、この店々は営まれている。

「どういふことですかねえ……こりゃあ」

数十年前。

訳あってこの場所　正確には似たような場所なのかもしれないが、ここに訪れた時にはこんな訳のわからない状況にはなっていないかった。

もっと暗く　隠微な陰のある場所であつたはずだ。

何かあつたのかねえ………？

『中有の道』。

生と死の狭間に存在する………いわば最後の選択においての似つかわしくない雰囲気。

これから死ぬ、または死んだ者たちにとっての場としてはあまりに滑稽な状況だろう。

まあ、嫌いじゃないが………。

走り回る子ども。

酒を酌み交す大人。

人生の最後の花にとはしゃぎまわる人々。

「　　終わりは派手に、一際愉しいものに………か」

自分たちの状況を理解していない者。

ここが何処だかわかっていない者。

わかっていて 精一杯に楽しもうとしている者。

そこには翳りこそあれど、決して悪いものではない感情がある。

自棄糞なのだとしても、捨て鉢になっっているのだとしても、何かを吐き出し、何かを捨て去り 少なくとも、感情が回っていることは確かだ。

無気力なまま

無感動なまま

ただ、運ばれていくだけというよりも、ずっと救いがある。

風が吹かなきゃ、風車は回らないですしね。

何かしらの刺激を受けなければ、なかなか踏ん切りというのはつかないものだ。

これからどうなるのだとしても、ここで、少しだけの涼を得てから進むというのも悪くない。

「 どうせ最後は自業自得の銭次第」

己の生き様の清算。

白も黒も行い次第。

「天国地獄の裁判所………終わりと始まり裁く場所ってね」

すぐさま生まれ変わることのできるものもあれば、ずっと罪に縛られたままの者もいる。救いも呪いも自分の罪業。自らを省みなけれ

ば、ここでは何も進めはしない。
死してなお……死んで尚更思い知るこの世の常、というも
のだ。

と、そんな感じでまあ……。

予定外の状況に対する気具合の建て直し。
現実逃避の徒然思考を受け止めて、それらしく着地させ。

考えてみたところで。

連れの妖怪も亡霊も 自らの身の上も、その理から少し外れてし
まった所。

それをそのままに受け止められぬ身の上ゆえに、色々と自由も不自
由も都合をつけなければならない。

「さてさて」

そのための目的を果たすためにわざわざこんな辺鄙な所まで訪れた
のだ。
変わり果てた有様であったとはいえ、ずっと混乱しているわけには
いかない。

「見てみて、二匹も掬えたわよ」

「あら、やるじゃない……私も負けないわよ」

……それを都合してやる張本人とその親友が遊び呆けてい
ようとも、自分はやるべきことをやっておかねばならない。何だか
少し悲しい気持ちが入り込み上げようとも、若者に囲まれた老人とはえ
てしてそういうものだ。

まあ・・・・・・・・

少し息をつき、そこ明るい光景に目を向ける。

「あら、紫・・・・・・・・ずるいわよ！」

能力を使って自らよりも多くの人魂を掬ったことに対して眉を顰めて、笑う、

自らを封じていた戒めから、やっと解き放たれた少女。

「ふふふ　どうやったって勝てば官軍よ」

大人気なく口端を吊り上げながら、愉しそうにそれに応えて、笑う。いつか失うはずだった絆を、繋ぎなおせた少女。

少しくらい羽目を外したとして、悪いことではない。

こんな具合に祭りを楽しむというのも、あの亡霊少女にとっては初めてのことだろう。

それを、徹底的に楽しんでおけばいい。

際限なく遊び、際限なく笑える。

初めて得て・・・・・・・・初めて放たれた世界で、精々愉しく過ごすこと。

たとえ、いつか終わるのだとしても、今を楽しむことを見逃すことはない。

「そのためにも・・・・・・・・」

働くときは働く。

それが今は自分の役目。

侍さんも頑張ってるでしょうしね……こっちは頑張らないと。

鼻を鳴らして、威勢良く微笑んだ。

自らの目的のため。

この賑やかで騒がしい雑踏で、見つけなければならぬものを見つけるために気合を入れ直し、力強く足を踏み出す。

「よし、行きま……」「てめえっ舐めてんのか!」「

水を差した粗暴な罵声。

その張り切った声を出そうとした所に、割り込むように挟まれた柄の悪い掛け声に　　がくりと足がつんのめる。

「何よ……ちゃんとお金は払ったわよ」

見れば、先ほど荒らしまわっていた屋台の近くで絡まれている紫たちがいちがいた。

「おいおいおい。金を払えば反則してもいいとでも思ってたのかい?」

「困るねえ……こっちは商売してんだ」

そういつて、全く客商売には向いていない表情でにやつく男たち。

そこらの店で特に呼び込みも行わず、やる気なくうつろっていた者たちだ。

一応、自らの屋台なども持っているようだが、特に営業している様子ではない。

だが

「なあご主人！困ってんだよなあ」

「いや……………私は別に……………」

気の弱そうな主人の肩を掴み、紫が行っていた能力を使った裏技について言及している。多分後ろで覗いていたのだろう……………何をしていたのかはよく判ってはいないようだが、何かしらの細工があったのだろうとは理解しているようだ。

その行為に対しての損害やら訴訟やら、何処かで聞きかじっただけのような言葉で紫たちを責めている。言い分自体は、ある程度正しい。

しかし、まあ……………

そうはいっても、そもそもその店でやっていた人魂掬いなどその場だけで愉しむだけのもの。どうせ持って帰れない存在で遊ぶのだから、結局は店に銭を落としていくのみでしかない。主人さえ承知してしまえば、何の問題もないはずだ。

……………
他の店でも似たようなこととして遊んでいる者がいるしね……………

楽しめればいい。

そういう立ち位置である商い屋が並ぶこの場所では、男たちの言葉の方が的を外したものだ。ただの言いがかりで……………絡んで脅して奪い漁るための都合のいい理屈付けに過ぎない。

「面倒ねえ……………紫、もう向ここの店にいきましょう」

そのいちやもんにも面倒になったのだろう。
紫の袖を引き、幽々子が別の店へと促そうとする。

けれど

「おいおい……………ただで済むと思ってんのかい？」

その行く先を塞ぐようにして立つ大柄の男。

「迷惑料……………払ってくれんだろうなあ」

下卑た笑いを浮かべて少女たちを囲む男たち。

震えていた店主は既に後ろへと突き飛ばされて、もはや関与もしていない。

「やれやれ……………」

ずっと　その妖怪少女の目が細まったのがわかった。

多分、道を塞いだ男が幽々子の肩を乱暴に掴んだことに反応してのことだろう　そして、その亡霊少女自体も、にこりと冷え冷えするような笑みを浮かべて片手を挙げている。

大事になる前にとめた方がいいか。

絡む相手を間違えた男たち。

同情する余地もないが、そのために起こした騒ぎで面倒ごとになるのも御免である。

………
精々、右手左手が半月ほど動かない程度に留めてやらないと……

自分が出て穩便に、そのくらいで終わらせる。
その方がずっといいだろう。

あの少女たちに任せておけば……どうにもならない惨状
が残るだけになってしまう。

そう考えて声を上げようとした所に

「おっおっおっ！」

再びの大声。

またもつんのめる自分。

「何してやがんだ小僧ども！」

威勢のいい気風と共に現れる大男。

集まっていた野次馬を掻き分けて、鋭い視線で男たちをにらみつけ、
少女たちを庇うようにして前に立つ。

「……………あーもう」

その掻き分けられた野次馬の中にいた自分。

少々押し流されてふらついて、その他大勢の中に落ち着いた。

お次は何だ……………？

まるで演劇か何かの観客になってしまったような気分。

もはや、自分の出番ではないだろうとなんとなく納得してしまった。
そういつ展開だ。

まあ………楽な分にはいいです。

そのままぼうつとそのやり取りを眺めることとして、外していた視線を元に戻す。

出遅れた自分を見ていたのだろう少女二人の笑みが見えて………
・すこしやるせない。

「てめえら、折角の最後のお勤めで………何をやらかすつもりだい？」

ねじり鉢巻を斜めに締め、肩に羽織を引つ掛けて………片手を懐に遊ばせながら男たちに言い放つ。様になった姿での、啖呵を切つての仁王立ち。

余りの迫力に周りの者達も息を呑むほど。

あれは………

「く、くそつ、てめー………邪魔すんじゃねえよ！」

男たちは震えながらもそれに言い返そうとする。

自分たちは大勢で相手は一人なのだ。これで負けるはずがないだろう。

そんな考えで恐怖を打ち消しての日と睨み。

けれど

「あん？」

男の気合いと一睨み。

まるで石にでもなってしまったかのように固まってしまつ男たち。完全な迫力負けで 胆力がまるで違つのが一目瞭然。

「う……うあ……うあ……」

震え上がる足をどうにか押し殺し、合わない歯の根を打ち合わせながら、男たちは一步下がる 本当は、すぐにでも逃げ出したいのだらう。けれど、そんな小物な男たちにも一応の矜持があるよう

「ぎぎぎぎ……」

歯を食いしばり、精一杯の根性を見せて男の正面に立ち、顔色こそ悪いが、どうにか憤怒の表情を取り繕つての一言。

「つく……くそ！ 覚えてやがれ！」

そんな捨て台詞。

とても判りやすい小物染みた物言いで男たちは逃げていく。なかなか堂に入った悪役どもである。

「つは……つまらん輩だ」

こちらの大物もそう一言呟いて息を吐いた。

こつちも堂に入ったものだねえ……。

役者が違つということだらう。

周りの人々皆が手を叩き、喝采の中に立つその男の姿は実に様となつている。

あの野暮ったい男たちでは決して敵わぬ器の違いというものだ。

ただ

「あ！ 見つけたぞー！」

響く声。

集まる視線。

「大将！ 何してんです！ 仕事はまだ終わってませんよ」

それも後からぞろぞろと現れた男の部下と思しき人間たちの非難の声をのぞけばだが。

「あーあー」

「あ、やべっ」なんて顔をして慌てて逃げようとする男とそれを取り囲む部下たち。

一瞬何が起きたかわからなくなり、次の瞬間には盛り下がって台無しになっていく雰囲気。

「まったく……………」

先ほどまでの威厳など何処にも見当たらない姿で近くの屋台の裏へと逃げ込もうとする大男を部下達がんやわんやと騒ぎながら追い詰めていく。

周りは何が何だかわからない。

ただだんに、なんだか可笑しくなってしまう。

「なにかしらねえあれは？」
ふふふ、と面白そうに亡霊が笑っている。

「本当にね」
呆れたように妖怪が笑っている。

ほんとに………変わりない。

乾いた笑みを浮かべてそう思う自分。

「逃がすな………辺りを囲んでじっくり追い詰める！」

「右いったぞー！ 後ろから飛び掛れ！」

部下たちの手馴れた動きに大男のいつもの日常が透けてみえる。
それは昔自分に降りかかった災難な出会いの時と変わらない姿だ。

「これが冥土の渡し守 死神つてのには笑っちゃいますねえ」

折角見つけた探し人であったが………何だか微妙な気分にもなってしまった。

世の中、思い通りになっても釈然としないということは、間々あることである。

「こんなものか……」

主のいなくなった屋敷。

その役目を終えただろう空虚な残骸の掃除を終えて、息をついた。

こうして見ると……寂しいものだな。

十人以上は暮らすことの出来るだろう広い館において、自分一人がポツンと立ち尽くすのみ。

誰一人として他の人間は居らず、また、帰ってくることもない。

一人がいなくなっただけで、こんなにもがらんどんなものなのか。

既に数年前から尋ねてくるのは一匹の妖怪のみだった。

主と自分の二人のみで生活していた屋敷と、その気配はそれほどの変わりはないはずである。

けれど、やはり静かに感じてしまうものだ。

「主をなくした家……儂も似たようなものか」

あの時。

主人の最後の願いを踏みにじり、無理にでもその生を引き伸ばそうとした自分は、すでに従者としては失格であっただろう。

自らの手でその糸を断ち切って、望みを叶えたのだから、後悔はない。

とはいえ……

それでも、もう、そのままの形でそこにいることは出来ない。
裏切り……己の本分からは外れた行為であったのだ。
その責任は取らねばならない。

「これも我俣か……」

あの妖怪はお堅いことだとか何とかいっていたが、これも自分の生き方なのだ。
譲ることは出来ない。

あの男……。

『好きにしてください』

そう言っていた男。

あれに任せておけば、安心だろう。

その緩やかな雰囲気にして、あの男は自分よりもずっと深い心根を持っている。

「己の出来ることを……か」

後始末。

ここで起こったことの全てを片付けて、『姫』さまの禍根を除く。
理から外れたその身に……もはやなにも降りかからないようにする。

未熟な己といえど、長年この場所へと仕えてきたからこそできること。

『そついつのが年寄りの役目でしょう』

あの男の言葉を思い出し、少しだけ笑いが込み上げる。

そつだ。

やるべきこと。

やらねばならないこと。

自分は任せてしまったのだ。

あの妖怪と男に。

自らの主を。

だからこそ、その背中側ぐらいの始末はせねばならない。

西行寺家に対する始末……事の顛末の報告に隠蔽……

せねばならぬことはいくらでもある。

残った柵を払い清めておくのが、元従者としての最後のお役目だ。

「さて……」

何から始めるか。

久方ぶりの門番以外の仕事に腕がなる。

生来不器用な自分といえど、そのくらいのことではできるべいらしいと長く生きているのだ。

まずはその知識を掘り返さねばならない。

そして

それが終わってしまえば、どうするのか。

吹きぬけていく風に、少しだけ未来のことを思う。

その最後の片づけさえ終えてしまえば、自分は本当にその役目から外れてしまうことになるのだ。

「・・・・・・・・」

考えてみれば、随分と何もしてこなかっただけのようにも感じる。
勿論、主に仕え、その身を捧げてきたことに対しての後悔はないが
・・・・・・・・。

他には何も無い、ということだな。

己の器を広げるための努力など、とうの昔に忘れてしまっていたよ
うな気がする。

旅でもしてみるか・・・・・・・・。

刀を振り続けるだけではなく。

世界を見て周り、その広さを知る。

己の知らぬことへと目を向ける。

今更ながらに思い知った自分の矮小さを克服するためにも、それは
必要なことだろう。

「うつむ・・・・・・・・」

それでは、このずっと放っておいた外見もどうにかしなければなら
ないだろうか。

同じ人間が一所で長年を生きているという雰囲気を出すには丁度良
かったとはいえ、やはり心機一転………髭をそり、髪を整え
て、少しはしゃんとした格好で出立する方がいい。

その方が自分だと気づかれての面倒ごとにも巻き込まれずにもすむ
だろう。

そんな

色々なことを考えている自分。
変化しようとする己。

そしていつかは………。

再び、主に頭を垂れることにしよう。

今度こそ、その従者としての役割を終えられるように。

いつの間にか止まっていた針が動き出し、昔の血気逸った自分を思
い出す。

それほどまでの若さはないが、そのまま老け込んでしまうよう老翁
ではなかったことを思い起こす。

あれほど生きていて、未だにあれほどの馬鹿な男がいるのだ。

自分も変われぬはずがない。

成長できないわけがない。

『今度こそ、その居場所を守れるように』

腰に挿した刀を撫でて、そう誓う。

再び見えた主人とその友人が、そのほとんど若返ったような姿の自分を見て「どちらさま？」と本気で首を傾げる未来があるとは露知らず。

そうなれる未来を、夢想した。

「まったく……紫様も少しは私の苦勞も判ってほしいものだ」

灰色の空と一面の雪景色。

少しずつ温かくなる日差しは厚い雲でその表情を隠し、暗く冷えた空気が辺りに満ちて、もうすぐ春が来るはずだというのに寂寥感が増すばかり。

それはここが終わってしまった場所だから 墓標のようなものであるからだろうか。

「・・・・・・・・」

花一つないすっかりと地味な色合いへと変わってしまった妖木。それを見つめながら深く息をつく。

最悪ではないが・・・・・・・・全て思い通りにはいかないものだな。

自らの主。

大妖の中でも特に力ある者である自分を式として縛ってしまえるような最高位の存在。

そんな紫様であってさえしても・・・・・・・・。

全てが思い通りにいくことはない。
自らの時間を削り、精一杯の努力をもってして その万能で全能力を最大限に利用しても届かなかった。

「・・・・・・・・せめて時間があれば」

予想以上に速く訪れてしまった破局。
間に合わなかった準備と手立て。

何を言っても詮無きことだが、この世界はやはり残酷なのだ、そう思ってしまう。

適応できなかったもの……運の無かった者には容赦なくその切っ先が振り下ろされる。

弱肉強食。
適者生存。

弱きものは強きものに駆逐され、その強きものはさらに格上のものに蹂躪される。

適応できなかったものは容赦なくその世界から蹴落とされ、二度と上がることの出来ない奈落の底へと落とされる。

自分の居場所をつくるだけ……守るのだけでも、どれほど難しいことなのか。

紫様と出会う前。

自らの好き勝手に生きていた頃の自分。

「……くっくっ」

あれだけの権勢を誇っていた己がその位を追われてすっかりと落ちぶれた。

その自分を追った人間たちも既にこの世には無く、それが作り上げた栄華も寂れて時代遅れの産物へと成り果てている。

どうにもおかしな話だ。

そんなものに意味など無いということか。

とてもちっぽけなもの。

この世界の理からすれば、ほとんど目にも見えないような小さなもので、それが何をしようとも変わることはない流れが全てを押し流

す。

どれほど積み上げようが、崩れるときは一瞬だ。

「ふう………」

深く吐いた息は白く染まる。

通り抜ける風が少しだけその身に染みて、ぶるりと尻尾を振るわせた。

ああ、身体が冷えてしまった。

長く生きた上での感慨。

長く生きたからこそその感傷。

あるのか何のないのかすらわからない古傷の疼きに少し囚われていた。

そんなことをしている間に、仕事を終えてしまえただろうに。

「私も歳かな？」

妖怪のあり方は精神のあり方。

心が老いればその身も老いる。

姿かたちは変わらないとはいえ………。

その生き方には如実に表れるもの。

だからこそ、年老いた妖怪はその活動を緩めて一所に留まることが多くなっていく。

土地に巣食うものとして

場所に居着く存在として

そのあり方を固定する。

忘れられてしまわぬように……自らの姿を忘れてしまわぬように。

忘れられてしまえば、失くしてしまえば終わりなのだ。伝承にも逸話にも 記憶からすらも消えてしまえば、私たちは最初からいなかったことになってしまふ。何も無かったことになってしまふ。

それは 悲しいものだ。

「 幽々子様、か」

この雪ノ下。

その固い地面の下に眠る楔。

苦しみと想い出を合わせて沈めてしまったもの。

「 封印ごと印をつけておかなければな」

この妖木は繋がっている。

その封印が弱まれば、本体である幽々子様にも被害がいくことになる。

それを防ぐための一仕事だ。

「いつでも転移できるように」と

まだその居場所は決まっていない。
けれど、その準備と隠蔽だけは行っておかねばならない。
下手な者に手出しでもされたらどうなってしまうかもわからないの
だ。

「ご自身でやればすぐに終わるだろうに。」

式である自分。

命令どおりに行動すれば主の力を借用して使用できるのだとはいえ、
後々の担当は自らが行わなければならないほどに高度なものとなる。
それなら最初から自分の手で準備しておいた方が安心した作業が行
えるだろうに。

信頼されているのか。面倒くさがっているのか……。

その両方が理由ということもあるだろう。

今頃遊び呆けているのかもしれない主は頭が切れる物臭者だ。

天才肌とでもいうのだろうか。

「はあ……。」

込み上げたやるせない想いを吐き出しながらも、固定と転換の計算
を続ける。

やっていること自体は単純な演算ではあるが、手を止めてはい
つまでも終わらない類のものなのだ。

やる気と根気の問題……その分飽きが来るものではある。

ん……？

その作業をつづけている所に、少しだけ目に付いたものがあった。

札を固定するために掘り返した地面から何やら変わったものが出てきたのだ。

「これは……………?」

竹の筒。

雪の下に埋められていたまだ新しめの品である。

中身は……………

何か封印の術式を妨げる類のものであつてはならない。

確認のため、軽く固定されていた蓋を取ると、その内側が簡単に露出した。

「……………」

表れた品々に 少しでも目を細め、丁寧に蓋を閉めなおした。

そして、この先ずつと見つからぬようにと己の妖力を使って軽い封印と隠蔽をほどこして再び地面の中へと埋めた。

まったく。

いつかの村の露店。

そこで主が買っていた美しい髪飾り。

そんな記憶が頭を過ぎり……………少しでも笑みがこみ上げた。今までもすっかり忘れてしまっていた記憶だが、案外、こつやっつて頭の片隅に残っているものだな、と可笑しさが込み上げる。

もう片方はあの男のものか……………。

死人にくちなし。

意味こそ違えど、物を食すことなどできぬ身の上だ。

けれど、あそこにあったのは

「ご苦労なことだ」

丁寧に削られた二つの棒。

簡素ではあるが、使いやすそうな良い形をしていた。

ならされた地面は、冷たい雪で覆われたまま。

けれど、先程よりも少しだけ色がついたようにも思えた。

「世界は残酷だが……悪くないところもある、か」

くすりと込み上げる笑み。

少しだけ沸いてきた気力を振り絞り、残りの作業に意識を向ける。

今の居場所もなかなか悪くない。

そんなことを思う。

強いていえば、少しだけ話し相手がほしいというところだが、それはおいおい考えることにしよう。

まだまだ、自分も　少しのことで心の底から笑ってしまえるほどには若いのだから。

そんなことを思った。

後始末（後書き）

立つ鳥の後始末。

先の算段をつけるための行動中。

あと、渡し役のオリキャラです。

地獄の沙汰（前書き）

今回は少々別の手法で

地獄の沙汰

『兄さん……こんな山の頂上でどうかしたのかい』

『……いや、ただたんの物見遊山ですよ。山があったから登ったって感じですよ』

『それにしちゃあ、ちよつと難所だと思つがね　そんな軽装でこんな冠雪した山の天辺まで登るなんて、並の人間じゃない』

『何かいいたいことでも？』

『いやなに。こつちも仕事上見過ごせねえんだ』

『何を？』

『与えられた寿命以上に生きるってんなら、それ相應の力を示せてことだ』

『……何か勘違いしてませんか？』

『まだ惚ける気かい？』

『惚けるも何も俺は……』

『はんつ！　何といおうとネタは上がってんだ。寿命も何もがぼやけて見える人間が一般人なわけがない』

『いや、だから……』

『御託はいい　　出会うちまったからにやあ力を示せてな』

『ちよつ……ちよつと待　　』

『さあ、人生の大博打を見事勝ち上がってみな！』

「久しぶりだな。大将」
なかなか懐かしい面じゃねえか。

三途の河のすぐ近く。
屋台が並ぶ列を抜けてしばらく進み、少しだけ道を外れた辺りに作られていた簡素な家屋。

少しの生活器具と囲炉裏以外は何も置かれていない様子からみると、多分、ここは簡易的な詰め所か何かだろう。囚人たちに営ませている露店などを見回ったり、その報告書を製作するための場所として作られた中継地点　　端に置かれた碁盤や花札などの優遇から見るに、もしかしたら休憩所か何かという役割も担っているのかもしれない。

勝手に持ち込んでるだけって線もあるが。

目の前に座る大男。

胡坐に肩肘ついた格好で話す男に目を向ける。

「いやいや、大将つてのはそっちの方でしょうよ……. なかなか出世したもんですね」

そして、その後ろ。

その背中の方こうで恨めしそうにこちらを睨みながらも、忙しそうに筆を走らせ続けているその部下たちの姿を見る。

さてさて…….

まったく後ろの様子も気にしない大男。

何やら怨嗟の声が聞こえてきそうな視線が向けられていても微動だにしないその肝の太さには感心するが……. こちらにとってはいささか居心地が悪い。

というか、空気が重い。

「忙しいってんなら出直しますよ」

急ぎのようではない。

今日は約束だけを取り付けてまた今度に出直せばいいのだ。

頼むのはこっち……. 礼を払うべきはこっちですね。

そっぴいながら男の後ろにいる者たちに目を向けた。
うんうんと頷いている。

「いやいや、こんな辺鄙なところまで来てもらったんだ。ちゃんと歓迎しねえとな」

それを無視して何やら「そそそとやっているかと思えば 取り出したのは酒の杯。

こちらに見せ付けるように持ち上げて、その蓋を少し開けている。

まったく………

相変わらずである。

たとえどんな状況だとしても、上司が勤務中に席を空けるなどもつてのほかのことだろう。

少し溜め息を吐いて、目を瞑った。

「いやいや………そっちも仕事か」
「そうしたところでふと気付く。」

これは………

香る芳醇な匂い。

酒壺に描かれた古びた文字。

「何年ものだ？」

「ざっと四、五十年以上」

頭を過ぎる幾つもの考え。

後ろに立つ働き人たちの表情。

やらなければならぬ使命。

.....

少しの沈黙。

そして

「いただきましようか」

差し出された杯を受け取る。

向こうで嘆き声を上げている者たちもいるが.....まあ、我慢してもらおう。

頼みのためにも旧交を温めておかねばならない。

それに

久方ぶりに再会した友人。

ただ事務的に頼みを聞いてもらうというのは心情的にも良くはない。

数少ない友人は大事にしませんとね。

「よし。そうこねえと」

絶好の言い訳を見つけての酒盛りに目を輝かせる大男。

「まったくしょうがないですねえ」なんて言葉を言い放ち、何かツマミでも作ろうかなと考える自分。

駄目な大人そのものである。

『さて、上手くいったのかしら』

『どうしたの、紫っ？』

『なんでもないわ。ちょっと考え事』

『そう………あ、それよりこの焼き魚美味しいわよ』

『………あなた、なんだか食べ物のことばかりね』

『だって美味しいのよー』

『………あら、本当』

きつと侍さんは真面目にやっているだろう。

自分もそれに応えて真剣に取り組みたいものである。

そんな決意。

「かー！ やっぱ人と呑む酒はうまいねえ……そう思わないかい？」

それが胡散霧消と消えてしまうような雰囲気だ。

「ま、確かに」

それが古いダチとの酒ならなおさらね。

そんな軽口を交わしながら空いた杯に酒を注ぎ合う　流石に気ま
ずかったので場所は移動し、三途の川の川縁で胡坐をかいての直座
りだ。

多少石でございとしているとはいえ、気に障るほどではない。

「全くだねえ」

くくつと口元で笑い、高く上げた杯を振る。

それは今岸を渡っていた船に向けてのものだろう。
小さな小船から見える人魂がゆらりと揺れていた。

「疫病神のやろうと一緒に呑んで以来だ……ざつと数十、
百年振りってどこか」

「そんなになりますか……長い付き合いになったもんです
ねえ」

随分前。

その時も確か何処かの川辺だったか……そこで酒を酌み交
わした。

あの時知り合った疫病神はいつたい今頃何をしているだろう。

まあ、仕事柄ろくなことはしてないだろうが。

真面目に作業をこなす人物であったため、色んな意味で心配ではある。

こっちのとは大違いだ。

昼間っから呑んだくれ。しかも、それが気忙しい仕事を放り出してのどくれば……。そのご相伴に預かっている身としては何もいえないが、別の意味で心配になる。

しかし、まあ……………

それを口に出すのは無粋だろう。

今を楽しむだけ楽しまなければせつかくのお酒に失礼だ。

「うん。美味しい」

そんな色々な感情を押し込めての一息。

言い訳にもなっていないが

それでも後悔はない。

酒に罪はない。

「いやー美味しい」

だんだんと駄目な方向へと進んでいっている気もするが……………
気にするものか。

歳よりは我儂なもの。

酒は百薬の長つていいますし。

いい天気なのだ。

いい酒があるのだ。

それで十分な理由になる。

人間抑圧されてばかりでは駄目になるのだから。

それに……………

「それで」

酒の席は無礼講。

酔いと酸いの間での無礼や失言は何もなかったことにするが礼儀。

「今日はどんな悪巧みに訪れたんだい？」

此方に視線は向けず。

そつばを向いての軽い問い　何も無かったことにもなっても不思議じゃないくらいに、薄い問い。

「……………ま、一つ頼みがありましたね」

どんなものでも冗談に……………嘘にも本当にも出来る中でのやり取り。

これも大人のこずるい処世術というものだ。

正面向いて出来ぬなら、互いにそつば向いて向かい合う。

自分のために　互いのために。

面倒ではあるが、面倒事になるよりはずつといい。それが組織に所属する側への儀礼。

「ちよつと取り引きしませんか？」

嘘にも本当にも、利害があれば裏返る。

事實は酒臭い空気に溶け込ませてしまえばいい。

『ああ、酒が上手い。ツマミも最高だし、兄さんいい人間だな……
……長生きするよ』

『 出会い頭に命奪おうと襲い掛かってきた死神のいうこつちやねえっ………て感じですがね』

『そりゃあ………あんなどこにあんな格好でいちゃあ、さては天人か仙人かなつて思つたつてしかたねえやね。寿命だつてはつきり見えやしねえんだから』

『だからつて………話ぐらいはね』

『いやいや、こつちはちよつと仕事を抜けだし………休憩に出ってきたんでね。こんな遠くまで来ちまつたんだから手土産でも持つていかない』

『・・・・・・・・』

『ま、いいじゃないか。汗を掻いて運動でもした後の酒は最高だ』

『否定はしませんかね』

「なるほど、ねえ」

亡霊の姫。

力に囚われた少女。

「そりゃ、ただ転生させるだけなら元の木阿弥だ」
変わらないし、繰り返し返す。

人には過ぎたもの。
持たせるには重すぎる。

「しかし」

ただ、それでもそれは

「こっちは別に放って置いても構わない」

人間にとつてだけ。

人として生きていくのが辛いだけ。

天から見れば・・・・・・・・理からすれば些細な違いでしかない。

「ええ・・・・・・・・だから」

相手にとつてはわざわざ手を出す必要もないもの。

ならば、手を出した方が得なことにしてしまえばいい。

あんまり扱いたくはない知識なんだが・・・・・・・・。

こういうときに使わねば意味がない。

「人手不足に費用不足・・・・・・・・わざわざ罪人の手まで借りなきやならないほどに困ってるんでしょう？」

置かれた屋台連。

それを営む者達の様子。

その他色々を咀嚼した結果の推論。

「・・・・・・・・ま、お見通しか
ばればれだしなあ。」

酒を一杯煽つての一言。

隠してはいないが、公言されてもいない裏事情に対しての答え。

進めば迷うってことかね……………。

昔と変わらない

人の歴史が進めば進むほど歪みが生まれ、それに巻き込まれた者はねじ曲がる。

時間をかけて……………重くなる。

生きるためだけに必死になれず。

欲もあれば迷もある。

それだけでは足りず、さらに多くを求める。

「三途の川すら渡れないほどに得を積めない者達が増えている

生きているだけ積み重ねるはずの身銭まで使い切っちゃうような馬鹿が多くてね」

世知辛い世の中だ。

冴えない表情で男は笑う。

え。
深くなつた欲の溝に足が挟まって抜けなくなる、って感じかね

増えれば増えるほど……………進めば進むほど、無為な隙間が増えていく。それを埋めるために必死になればなるほど泥沼に嵌ることも多くなる。

撓んで崩れて

霞んで混ざり

道に迷って恨み節。

長く生きれば　長く続けばその分見失うもの多くある。

「で、それがどうかしたのかい？」

その呼びかけに、少し微睡んでいた意識が持ち上がる。
考えすぎていた頭が覚醒し、今の状況へと照準があった。

おっと・・・・・・・・。。。

考える必要のない　今は思う必要のない思考に囚われていた。
こつこつ思考癖は面倒ごとを片付けたあとでゆっくり発揮させれば
いいのだ。誰かを待たせてまでするほどのことじゃない。

今思い出すべきは別のもの、だ。

首を振って意識を建て直し、するべき交渉を続ける。

「そして、銭は入らないのに死人は増える・・・・・・・・人は増え続
けて留まる気配もない」

うんうんと頷く男。

どうやら間違っていないらしいと核心を強めながら言葉を回す。

「今までの作業効率じゃあとても間に合わないところまできている。
・・・・・・・・書類が間に合わなくて最前の死神の手が空いてしまうほ
ど」

浮かぶのは、重ねられていた薄い巻物いくつか。

態度は悪くとも、仕事では有能なはずのこの大男にとってはそれほどの時間もかからずに終えてしまえるほどの量だ。

仕事はあるのにすることがない。

かみ合っていたはずの歯車の速さが狂ってしまうほどに、場は混乱しているのだ。

それが届くまでの方に時間がかかりすぎている。

だからこそ、手の空いた時間に見回りなんて下っ端の仕事を手伝っている、と。

いささか持ち上げすぎているところもあるだろうが、大体はこんなところだろう。

仕事は増えたのに技術が進んでないことからくる歪みといったようなものだ。

「んで、何がいたいんだ？」

少し鋭くなった死神の目がこちらを見つめる。

探るように、見透かすように 幾多の死人を見極めてきた眼。

「つたく……真面目にしてりゃあらしい《……》の
ねえ。」

差し出された盃。

その杯になみなみと酒を注ぐ。

水面に映るのは、夜空に浮かぶ月の影。

「 買いませんか？」

「 あん？」

それを受け取り、一息に飲み干した。

映った像ごと食らってしまつようにして

「 先の力……作業を短縮するための技術を」

こちらが差し出す利の形。

今はまだ発明されていないだらう技術。

原作者にやあ悪いですがね。

今はもう遠い所。

ここにはもう戻ってこないだらうから 精々、利用させてもらおう。

「 今なら安くしときますよ」

積み上げた知識。

過去から掠め取った技術。

みんな忘れちまつたなら……それはなかったとも同じことだ。

地獄の沙汰も銭次第。

死後の世界でくらい……古びた文明の技術が残っていたっ
ていいだらう。

だって、終わった後の始末なのだから。

『あなたは幸せになれないよ』

『あん？』

『どうしてですかね？』

『だって』

『』

あの時。

あの不幸収集が趣味の悪徳疫病神が言っていたのは何だったんだろうか。

酒に酔っていたせいもあってかうまく思い出せない。

「あら……」

そんなことを考えながら歩いていった先に見える人影。
すっかり屋台を満喫したのである。う愉しそうな二人の姿が見えた。

「用事は終わったのかしら？」

何やらほくほく顔で話す亡霊のお姫様。

両手に抱えているのは土産だろうか……団子やらの甘味の紙包みをいくつか抱えている。

「ええ……うまい具合にきました」

そういえば酒以外に何も食べていないことをそこで思い出した。
少しの空腹が込み上げて自分も何処かで何かを買おうかと考える。

「なんだかお酒臭いわね」

目……鼻聴くそれをかぎつける妖怪少女。
何やらじとりとした目でこちらを見つめている。

やれやれ……

くくつと込み上げる笑い。

そこはかかない可笑しさに、妙に気持ち軽くなる。

「はいはい」

先ほどまで考えていた言葉。

『変わったな。昔はもっと遠くにいる感じだったが』

昔馴染みが言うからには確かなのだろう。
今まで自覚はなかったが、そういわれてみると何だか気にとまるこ
とがある。

なんだかねえ……………。

「ちゃんと用意してますよ」

背中に背負った布袋から土産に貰った古酒を取り出す。
目を輝かせる少女たちの姿は本当に現金なものだ。

地獄の沙汰も……………現世だって愉しみ次第、か。

どんなに長く生きていても変化は訪れる。
人間、楽しいという方向には特に流されやすいというものだ。

悪くない……………ですがね。

どうせ使えるかどうか不明な死後の銭を貯めるよりもそれで遊
ぶ方に力を使う。
我慢をし続けて爆発してしまうよりはずっといい。

「さて、どっかで飯にでもしますかね」

ということ、食欲に任せて金を使うことにする。
腹が減っては何にも出来ない。

「あら、私もうお腹一杯よ」

そういつてお腹を擦る紫。

余程の露店を巡ったのだらう　人が働いている間に（酒は呑んでいたが）

「そう？私はまだまだいけるわよ」

片手で団子の串を齧りながら幽々子がいう。

「あなたは私よりも食べてたじゃない」という紫の焦り顔が面白い。

本当に、面白い。

遠くには………近くにはいなければ味わえないもの。
懐に入れて初めて感じられるもの。

ずっと

忘れかけていたもの。

「………」

少女たちの話す姿。
今の日常。

「それじゃ、材料だけ買い込んでうちで食べますか」
酒もありますしね。

取り出した酒を袋にしまいこむ。

「よし、そうしましょ」

「今夜は鍋がいいわー」

途端にきびきびと動き出す少女たち。
真に自らの欲望に忠実である。

「あ、忘れてた」

そうした歩き出そうとしたところに、幽々子が声を上げた。
両手にぶら下げていた包みの一つを開けてその中身を取り出す。

「はい。あなたの分よ」

差し出されたのは屋台で売られていた焼き串の一つ。
団子を焼いて醤油で味をつけたもの。

「それが一番美味しかったの」
にこりと笑う。

.....

込み上げた何かを呑み込んで、こちらもゆっくりと笑んだ。
作り上げる必要もなく、自然な姿で

「ありがとう」

そういった。

地獄の沙汰（後書き）

ちよつとしばらく忙しかったので遅くなりました。

クオリティも十分なのかどうか・・・何か妙なところがあればご指摘ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9957/>

東方幻創録 永人行雲譚

2011年11月1日03時19分発行